

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (1) 沿岸地区（新浜町、東前町、魚河岸・浜町）

[A. 新浜町]

1) 補足調査における証言

（中村信子さん、大木戸順子さん、原由美子さん、近藤利明さん、藤佐昌明さん、藤佐隆史さん、岩間恒子さん、阿部妙子さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼びかけを行ったのか）

- ・消防車が浜町方面から地域を巡回して、避難を呼びかけていた。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・自宅に留まり、避難が遅れて流された。呼びかけても避難しない方もいた。
- ・一度高台に避難したが、再度自宅に戻って、流された。
- ・体の不自由な方が避難できずに流された。また、避難させようと戻った救助者も流された。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・2丁目の沢（岬林道側）、1丁目の沢（滝の沢）の住民は、概ね近隣の1次避難所へ避難した。カメイ石油から東前町寄りの住民の中には、東前町の不動沢等の避難場所や、浜町方面の実家等に車で移動する方もいた。避難場所の稲荷神社付近は浸水し、階段付近で数名の高齢者が亡くなった。
- ・海岸に下がり、海の様子を観察している方もいた。津波が襲来する数分前まで海の近くにおり、急いで近くの高台へ一気に駆け上がった方もいた。
- ・堤防に遮られて、海の様子がよく分からなかった。海岸沿いにある事業所の関係者も、津波が襲来する直前まで仕事をしており、急いで避難した方が多かった。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決めなど）

- ・昭和63年11月に自主防災組織を設置した。
- ・震災前に、婦人消防では地域の避難道路の通行状況を調査していた。また、各家庭の家族構成の把握や、要介護者に関するアンケート調査を行っていた。
- ・3月3日の避難訓練に参加していたが、それ以外での独自の取り組みはなかった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題など）

- ・今後、新たな避難場所や標識の整備が必要である。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・津波の波高に関する情報は聞こえたが、すぐに切れてしまった。以前から無線が聞こえない状況にあった。

(2) その他

（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など）

- ・最初、津波は徐々に水位を上げ、底から湧き上がるように満ちてきたが、第2波で高さのある波が一気に襲来した。湾口防波堤のケーソンも倒壊し、瞬く間に津波が襲来してきた。
- ・道路の渋滞はなく、行き交う車両自体も少なかった。
- ・対岸の平田オイルターミナルのタンクの上まで湾内の水位が上昇した。
- ・水門は町内会が市の委託を受けて管理していた。数か月に1度の割合で、水門の清掃、油差しなどの整備をしていた。水門や陸閘（りくこう）は通常どおり閉鎖することができたが、数が多いため時間のかかる作業であった。

2) 地域懇談会における証言

原由美子 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。揺れている最中に貴重品を2階に上げて、車に乗って浜町の尾崎神社付近の親戚宅に避難した。そのとき、途中で水門を閉めたり、避難の呼び掛けをしたりした。避難場所に着いたが、近隣の住民の様子を見に下りて行った。そのとき「津波が来た」と耳に入りすぐに避難した。
- ・震災前は、自主防災組織はなかったけれど婦人消防団があった。震災の前年（2010年）の11月にあった片田先生の講演を受けて、婦人消防団が中心となって、12月にアンケートをとって災害時要援護者の把握をしたり、緊急避難できる建物として使うことの交渉を行っているところだった。
- ・新浜町には水門が多いため、津波が来そうなときは近場の水門を自分が閉めなきゃ、という意識がみんなにあった。いつも油を引くなどの手入れをしているため、女性でも閉めることができた。

佐藤ヤヲ子 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。揺れている最中に貴重品を集めて、家がつぶれると思って非常持ち出し袋を持って外に出た。
- ・避難訓練時に非常持出袋を持ち出すことも大事。周りには非常持出袋を抱えている姿を不思議な目で見える人もいるが、持ち出す癖をつけるという意味と詰め込むべき必要な物資の確認もできるという意味もある。

久保正子 さん

- ・地震が発生したときは、大渡町あたりを車で移動中だった。そのとき、川の水が引いていったのが見えたので、津波を想起した。自宅方面に行く道が通行止めになり、家に母がいたが、近くのシープラザに一人で避難した。その後2日間はせいてつ記念病院にいた。

中村信子 さん

- ・地震が発生したときは、働いているときだった。すぐに高台に逃げるべきだったのに、みんな自宅に帰った。支度をしていたら、すぐ後ろに津波が来て、結局何も持たずに避難した。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

2975-02 新浜町 女性 40歳代

- ・避難時の様子（自宅、水門閉鎖、避難呼び掛け、帰宅、避難）
- ・被災後の様子（避難生活）

3月11日、私は自宅でいつもとは違う地震を感じていました。とても長く、しかし落下物は置時計だけ。地震がおさまるのを待って、水門を閉めに行きましたが、すでに消防団の方が来ていたので、近所のお年寄りに逃げるよう伝えながら、自宅へ戻りました。そしてカバンに貴重品を持ち、不思議と長期戦になると思い、ベンチコートを着て、先程のお年寄りの家に避難したのを確認しながら、自転車避難場所へ逃げました。外出している84歳の父親は、どこかへ避難しているのを信じて……。避難場所に指定されている所は、ちょっと小高い場所で、建物もない手すりだけがある8畳ぐらいの斜面でしたが、誰もいなかったので、「近所の人はどこへ行ったのだろう」と思っていました。

振り向くと、津波が水門を越え、足元まできたので、あわてて山の斜面を登りました。私の逃げた場所は道路から奥に入るもので、左右が木々でかくれていて見えないので、まさか近所のお年寄りがちょっと離れた避難場所ではない所にいたとは、その時はわかりませんでした。ただ、そこは通常なら私のいた所まではつながっているはずの場所で、皆が流されていたとは知らずに…。

広報の放送は流れていたとは思いますが、余り記憶がありません。

それから一人でいるのが恐くなったので、山の上を見ると男性が一人いたのでそこまで上がり、船や家が流されているのを見ていました。まるで映画でも見ているようでした。下を見ると、北日本石油の事務所裏でしたので、タンクローリーやドラム缶、車が流れてきていました。煙が見えたので、二人で暗くなる前に町の方へ逃げようと、山を越えました。東前の集落に着いた時には、手からは血が出ていて、はじめて痛みを感じました。その後、知人宅に父親がいることを聞いて、会いに行き、ホッとしたのですが、そこにも大勢の方がいました。ストーブのある車庫にいと、そのお宅の方が、

自宅に招き入れて下さいました。そこで3日間お世話になり、4日目に父親を平田の兄の家へ送ってもらい、私は探しにきた親せき宅（野田）へ身を寄せました。

東前から市役所方面、大町、駅を過ぎ、橋を渡ると、ガレキの中を歩いていた時のショックとは別の「何事もなかったような、中妻の町。この違いは何？」というやり場のない気持ちがありました。その後、兄たち家族が無事であること、近所の方々の訃報を知り、「あの時、一緒に逃げていれば」という思いが、今もなおあります。

一週間後、自宅に行くと、家屋はなく、以前に亡くなった母親の日傘と父親のゲートボールの道具、山の上には、私の昔使っていた旅行バック、母親の嫁入り道具のタンスのみがありました。

それからは親せき宅で、約1ヶ月お世話になり、父親を連れ、花巻の台温泉へ内陸避難しました。父親の身体の事や親せき宅で世話になっていることが申し訳なく思う事、現実を見るための時間がほしかった事の3点があったからです。今考えると、台温泉に来るまで思いっきり泣くことはありませんでした。それは現実逃避していた部分があったからだと思います。家をなくしても涙することはありませんでした。ただ、テレビや写真集などで、自分と同じ状況の人を見ると泣けてくるのです。今は全国の皆さんに感謝、感謝です。自衛隊、警察、ボランティア、お世話になった台温泉の方々、花巻市役所の方々、物資や義援金を送ってくださった全国の人々、インターネットや電話で私の安否を探していた友人、住所だけを頼りに探しにきてくれた内陸の友人、避難所を一つ一つ探してくれた親せきや友人、見ず知らずの私を家に泊めてくれたり、車に載せてくれた人、通りすがりにおにぎりをくれた人達、自分も被災者なのに働き続けた役所の方々、本当にありがとうございました。疲れてもここまでこれたのは、この人達がいたからだと思っています。これからは人との繋がりを大事にいつか全国の皆さんにお返しができるよう「がんばるぞ東北、がんばるぞ釜石」でゆっくり一步一步進んでいきたいと思っています。

0200-11 新浜町 女性 70歳代

・避難時の様子（自宅、避難呼び掛け、要援護者支援、流された）

津波に流されてから全く字を書けない、漢字が一つも。子どもや孫達の名前が書けなかった。今も手が震えて、力もなく沢山書きたいが今少し書けている自分です。もともと手紙を書くのが嫌いなこともあるけれど……

海の目の前に自宅があったので、遠野の友達が遊びにくると「なんでこんな所に」と心配してくれていました。しかし、55年間生活して津波の被害は免れてきました。あの日、地震発生後、家の中の物にも被害がなくて安心していたら、隣の息子さんがきて、「裏口から早く逃げない」と。「危ない、時間がない、すぐ後ろの山へ逃げよう」と、私の手を引っ張って山へ10メートル以上登ったところで、私たちは津波に飲みこまれてしまいました。しかし、息子さんが細い木につかまって、私の手をしっかりつかんで放さなかったので、助かることができました。S家族の息子さんのおかげです。ありがとうございます。

たくさんの方々への支援にたくさん皆様のお心に毎日励まされ今日も懸命に生きています。ありがとうございます。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (1) 沿岸地区（新浜町、東前町、魚河岸・浜町）

[B. 東前町]

1) 補足調査における証言

（佐藤和夫さん、舘澤昇さん、佐野修二さん、佐野牧子さん、玉木淳子さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・地震直後、高齢者に対し「家の中に入るな。玄関先に座ってろ」と呼びかけて回り、避難を促した住民がいた。
- ・市の広報巡回車等が地域を回り、高台へ避難するよう呼びかけた。
- ・はまっこ児童公園の約2m下まで津波が迫ったため、住民や消防団が300mほど高いアスレチック公園に避難誘導した。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・一度は避難したが、自宅にまで津波が来ないと判断して、車や貴重品等を取りに自宅に戻るなどして、流された。
- ・自宅に戻り休息していて流された。
- ・避難を数回にわたり呼びかけたが、自宅に留まり流された。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・地震後、多くの住民は、外に出て周りの様子を見ていた。防災無線を通じた避難の呼びかけなどにより、住民の多くは、はまっこ児童公園、樋ヶ沢下の駐車場等に集まった。
- ・尾崎アスレチック公園、不動沢、樋ヶ沢下の住民の多くは高台に住んでいることから、特に避難はしなかった。海の様子を見るため下がってくる住民もいた。
- ・地域の道路が狭いため、徒歩で避難した住民が多かった。一方、海岸部の市場、工事関係者の一部は車で地域、地域外に移動した。
- ・津波が目前に迫り、裏山へ避難した住民や従業員もいた。急傾斜地に設置されたフェンスをよじ登って難を逃れた高齢者もいた。
- ・浜町の幸楼で避難者の受け入れをしているという情報があり、避難した方もいた。
- ・室内で作業をしていたため、目前まで津波の襲来を知ることができなかった住民もいた。
- ・ペットを連れて逃げた。
- ・自宅の階上に避難をした。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・平成8年10月に自主防災組織を設置したが、地域単独で津波避難に関する訓練は行っていなかった。消防団の呼びかけで初めて訓練に参加する方も多く、津波避難への関心度は比較的薄かった。
- ・過去に経験したチリ地震津波等では大きな被害もなく、危機意識も薄れており、避難訓練への積極的な参加は少なかった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

- ・ふだんから防災訓練に参加している方は、今回の震災でも無事に避難した方が多かった。
- ・消火器やテントを備えていたが、活用されなかった。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・3mの大津波警報は聞いたが、その他は余り記憶にない。サイレンが鳴りっぱなしだった。
- ・地域に沢が多く、高台に多数設置しても山に反射して聞こえにくいため、海岸から山側へ向けての設置が必要。高台から大音量で放送するとかえって、音が混信し、内容が把握できない。
- ・東前町内でも、特に不動沢は無線が聞こえなかった。

(2) その他

(避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関する地域の主な施設など)

- ・海岸近くの住民は、「地震＝津波」ということが常に頭に入っている。
- ・水門や陸閘(りくこう)は消防団のほか、その他の地域の方と協力して閉鎖した。水門内側に駐車している車が次々と移動するため、最後に閉鎖した水門では5分から10分くらいの時間を要し、消防団の避難が遅れた。
- ・今後の水門の閉鎖については遠隔操作で行うようにしたい。常時点検及び作動状況の確認が重要である。
- ・地域の避難場所は、全て屋外にあるため、これまでも悪天候、夜間時の避難行動が遅れがちになった。寒さや風雨をしのげる避難場所、焚き火ができる場所、夜間のためのライトなどの設置が必要である。
- ・尾崎神社に上る道路には、避難させた車が多数並んでいた。

2) 地域懇談会における証言

藤澤敏 さん(浜町3丁目第1町内会長)

- ・地震が発生したときは、新日鉄構内で仕事だった。尋常な揺れではなかったので、集まる決まりになっていた薬師公園に避難した。その後、避難道路を通して歩いて帰宅した。そのとき津波がギリギリまで来ていた。高台に来ていた町場の人は少なかった。
- ・東前町には、指定避難場所はなかった。避難訓練をするときは、はまっこ児童公園や尾崎アスレチック公園等の高台に逃げることでしていた。
- ・防波堤があるから絶対に防げるなんて考えにならないようにしたい。

洞口洋子 さん

- ・昭和三陸津波の跡が土壁にあったのを小さい頃から見たり、父や祖父母から津波のことを聞いていたりしていた。昨今は家族の形態が変わってきているので、そういったやりとりが難しい。

赤崎光男 さん

- ・地震が発生したときは市役所で議会中だった。議員は待機するように言われて、しばらく待機していた。その後、自分の車で浜町まで帰ってきた。
- ・津波が来ていないけれど、マイクで「津波が来ました」と放送して避難の呼びかけをしていた。消防団として門扉を閉めに行った。その後、消防屯所に移動したとき(地震発生から20分後ぐらい)に湾口防波堤を越えたと聞いた。

佐藤和夫 さん(東前町内会長)

- ・地震が発生したときは自宅にいた。その後、尾崎アスレチック公園へ避難した。海拔12mの場所の高台に自宅があったので、結果的に浸水はしていないけれど、津波が押し寄せてきているときは不安になったので、避難をした。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

3626-01 東前町 女性 60歳代

- ・被災前の意識(ここまで来ない)
- ・避難時の様子(自宅、避難の呼び掛け、避難)
- ・被災の感想(今後の生活不安)

私は仙台から移り住んできたので、宮城県沖地震は知っています。でも家は壊れなかったし、辛く悲しい思いもしなかった。釜石に来て、過去の津波のときに「東前の家の玄関までは水は入った」と聞いていましたが、津波の怖さなんて知らなかった。一人暮らしであんな恐ろしい思いを体験するとは思ってもみなかった。ご近所の人の声掛けがなければ、ずっと家にいたと思う。人とのつながりが、とてもありがたいと思ったことはない。人間は一人で生きていけないと思い知らされたことです。この年になって家をなくして、これからどうなるのか不安でしょうがありません。地震に強く、津波がこない所に住めるように、国・県・市・市民でよく考えて新しい町づくりをして欲しいです。一日も

早く。仮設で暮らせて幸せです。でも、仮設です。安心できる自分の家が一日も早く欲しいと思っています。やっぱり津波が来た所には絶対住まないような町づくりをして欲しいと思います、絶対に！

0327-01 東前町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（自宅、ここまで来ない、片付け、流された）
- ・被災の感想（家族の犠牲、反省）

津波の話はいろいろ聞いてはいても、一度も体験したことがなく、我が家までは今まで一度も津波が来たことがありませんでした。あの日も、「来ない」との夫の言葉に、2階で片付けをしていました。異様な音と共に津波が襲い、1階の夫は飲み込まれました。自分に都合の良いように考えてはいけません。あれだけ強い地震であったのに、悔っていたことへの反省。戻って来ない命を思いながら、「第一に避難！」だったのだと、あの日を振り返る日々です。

1680-02 東前町 女性 50歳代

- ・避難時の様子（外出先、車、家族の様子見、帰宅）
- ・被災の感想（避難足進でせず、後悔）

車を運転中に地震に遭い、走ることができなくて停車しました。実家に寄って、戸締りをするように伝えて、東前の自宅に帰りました。実家は浜町1丁目で父が亡くなりました。「もっと強く避難するように言っていたら」と悔やまれます。翌日、道路はガレキの山で、東前から駅までの道がなくなってしまったので、避難道路の整備をしてほしい。停電で放送ができなかったと思いますが、消防車も走ったのですが、サイレンを鳴らした方がよかったのでは。

1680-01 東前町 男性 60歳代

- ・避難時の様子（自宅、津波確認後避難、九死一生）
- ・被災の感想（湾口防安心）

「津波が来る」ということを広報でも言わなかったし、サイレンも鳴らさなかったので分からなかった。津波が目の前まで来たので、すぐ逃げた。非常用の電源を使って、皆に伝えてほしかった。

湾口防波堤があったので、ほとんどの人が逃げなかったと思います。何せ何十年もかけて造ったのですから。壊れることはないと思っていました。15mくらいの防波堤を早く造って欲しいです。次の津波が来たら困るので。

2712-02 東前町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（仕事、帰宅、屋内避難、流される）
- ・被災の感想（反省）

3月11日、地震発生後すぐ、孫たちを心配し、職場から自転車で海岸沿いにある自宅へ向かった。信号機も止まり、道路の半分は避難する車でごった返していた。子供たちは既に避難しており、大事なものを取り出し家から出ようとしたが、もう壁のような波が目の前の道路にまっすぐ上がってきた。どうしようもなく、2階に逃げるのが精一杯だった。助かってはみたものの、海岸沿いにある家に戻ったことを反省している。「高台の安全な所にいれば、いつか家族で会うことができるから、まず高い所に逃げることを」を話しあっている。

0103-11 東前町 男性 70歳代

- ・避難時の様子（自宅、家族の様子見、屋内避難、流された）

3月11日、私は家の2階にいました。妻はシーブラザに税金の申告に行っていました。地震はすごい揺れでした。妻のことが心配で、家を飛び出し、自転車で迎えに行きました。只越方面まで行きましたが、姿が見えないので、すぐに引き返して家に戻りました。妻の弟の奥さんが寝たきりなので、様子を見に行きました。そこで津波に巻き込まれましたが、弟と二人で奥さんを3階まで上げ、どうにか無事でした。3人とも水に浸かり、ずぶ濡れでした。よく助かったと思います。弟の家は1、2階は全壊で、私の家も全壊です。しかし、私の妻も無事でした。

◆もし、あの日の一日前に戻れるなら。

私は10歳のとき、あの釜石の艦砲射撃にあいました。また、火事で2回も家をなくしております。そして、今度の津波で家を流されました。こういう災害の一日前に戻れるなら、それぞれ考えがあると思いますが、私はこのような災害がない世の中でありたいと思います。被災した今だからこそ伝えたい。多くの被災者がいることを考え、一日も早い釜石市の復興、そして家を流され、やむなく仮設住宅で生活している収入の少ない人たちのために、一日も早い公営住宅の建設を望みます。

2627-02 東前町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（自宅、避難、流された）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）

私は海岸から25m ぐらいの所に住んでいました。私は少々の地震は怖いと思ったことはありません、むしろ強風の方が怖いです。でも今度の地震は今までにはないような揺れでした。怖かったです。さすがに私も避難の用意をしました。そのうちに近所の人たちもきました。まだ来ていない人を呼びに行き、戻る時には防波堤から波が越えて来ました。高台への避難途中で首まで水に浸かり、波に流されました。でも運良く流された所は急傾斜地のフェンスの所でした。そこで助かりました。

その後、皆で安否の確認をしました。私たちより先に逃げた2人、呼びに行った30代の長男、長女、声掛けしても逃げない隣の夫婦2人、あっという間に私たちの周りで6人も亡くなりました。その晩は12人で焚き火をして過ごしました。長い長い夜でした。夜が明けるのがあんなにも長く感じたことはありませんでした。夜が明けてからは、そこから東前の避難所までどうしようかと迷いました。そのうちに男の人たちは、自分の家に帰るとガレキの中に行ってしまうました。私はすぐ横を向けば、自分の家が見えるのに見ることができませんでした。隣の家は壊れていました。そのうちに一緒の人が体調が悪くかわいそうでしたが、どうすることもできませんでした。私たちも友達の所に行くことになり、仲間4人でガレキの中、あの大きな船の下をくぐり、ガレキの残ったような所をすべりながら歩きました。今に思えば、どのように行動したのかも分かりません。体調の悪い人を残して来たので、消防の人達に頼み、安心しました。でも残念なことにその方も病院に運ばれ、12日の夜に低体温で亡くなったそうです。せっかく津波から助かったのに残念です。

私の遺言「地震があったらすぐ高台に逃げろ」です。

0392-01 東前町 男性 50歳代

- ・避難時の様子（仕事中、水門閉鎖、避難誘導、避難、九死一生）
- ・被災の感想（てんでんこ）

会社にいるときに地震に遭った。消防団なので、水門を閉めにポンプ車で駒木町まで行き、屯所へ戻ってきた。消防署からの次の活動指示を受け、避難誘導したけれど、余り逃げる人がいなかった。新華園のじいさんを3階から下ろし、また避難誘導。広報しながら駒木町へ向かう時、大渡川が逆流しているのを見て、ポンプ車を方向転換した。誘導中、ポンプ車がタイヤ半分まで水没しながらも脱出し、避難場所の釜石小学校へ避難。

そのあとは津波が引いた後、3人の遺体を小学校へ運びました。暗くなり何も出来なくなりポンプ車で仮眠。次の日は交通整理等をした。あの日、自分も死ぬかもしれなかった。こんな地震・津波の時ではてんでんこ。これしかない。消防団はやってられない。

9025-11 東前町 男性 80歳代

- ・被災前の意識（先人からの伝承、備えていた、避難していた）
- ・避難時の様子（自宅、すぐ避難、家族の迎え、車避難、渋滞）

小さい頃から両親に「地震が来たらすぐ津波が来るから、高い所、高い所へと逃げろ。忘れ物があっても絶対に取りに戻るな!」と教えられていたから、そのようにした。3日前に大きい地震があった際、近くの方々とお茶飲みをして「今に大きいのが来るぞ」と話をしていた。そして手元に薬や貴重品（通帳、印鑑等）を用意し、いつでも逃げる準備をしていた。

そして、当日。3.11の地震はいつものと違っていた。直感的に用意していた物を持ち、揺れていた最中に家を出た。ちょうどその時、孫が車で迎えに来たので車に乗った。大通りは大渋滞だったため、山側の裏道（駒木）を通ったのが正解だった。

2806-02 東前町 女性 50歳代

- ・避難時の様子（仕事中、車帰宅、避難、家族様子見）
- ・被災の感想（避難生活）

地震が発生した時間、魚市場作業所で仕事をしていました。非常に強い揺れで、天井の屋根が大きく揺れ、鉄錆が雪のように降ってきました。「このまま鉄の屋根が落ちて、下敷きになって死んでしまうのではないかと一瞬思いました。その後、魚のトレイをトラックに積み、門扉を開けてもらい、自宅まで行きました。自宅倉庫前に他の車が置いてあり、魚とトレイを中に入れることができず、そのまま少し高台に車を置きに行きました。

その後、自宅に戻り、バック（いつも持って歩く物）と銀行行きの袋、実印等を持ち、高台に歩いて行きました。途中の道路から、市場の門扉の上の方に青いタンクが見えていました。「波が来ている」と思い、急いで台村公園に行きました。第1波が門扉を越えて流れ出していました。その時、一緒に

いた母親の姿が見えないことに気付き、近くの親類の家に訪ねに行きました。ちょっとした時間だったのに、親類の家に津波が押し寄せて来ていました。母親は、夫の車で逃げたことを市場で仕事を手伝ってもらっていた人に知らされました。自分でもその姿を見ていたのに分からなくなっていた様です。かなり動揺していたと思います。母と夫が一緒に安心し、台村公園に戻りました。自宅付近は流されて、家がなくなっていました。自宅は建物の陰で見えませんでした。一波で流れたと思います。倉庫はコンクリート3階建てだったので残っていましたが、3階の半分開くらいに浸水の跡らしき線がついていて、その辺まで波が行ったのだと思いました。

その後、台村公園も危ないということで、尾崎公園まで避難するようと言われ、上に上がって行きました。尾崎公園で夫と行き会うことができ、母も無事で近くにおりました。尾崎公園からの眺めはパノラマのようで、ただただ海を見ていました。大きな船が見える範囲から消えて、また戻って来て……と、ただただ見ていました。

私たち家族が一番近い所で仕事をし、市場の門扉が閉まっても一番最後に出たように思います。それでもこうして波に浸からないで走って逃げることもなく生きています。時間は充分ありました。ただ、油断が危険だと思います。地震から津波が来るまで油断することなく、一生懸命動いて逃げることを考えていました。

◆被災して思う事

今年の正月に夫に話をしていたことがあります。”宮城県沖地震が、寒い雪の降る日の夜に発生したら、私たちは尾崎公園でどうやって夜を明かすのだろう”と、とても心配になったことを覚えています。今回の震災は時間的にも季節的にも恵まれていたと思います。時間は午後。3月、明るく日もあります。天気も良かったと思ってます。3月中旬。これから日々、暖かくなる季節です。その事に非常に感謝しております。寒いとはいえ、真冬の寒さではありません。3月という希望がありそうな月です。神様に感謝です。家は跡形もなくなりました。自分の物は着ている物と手に持った物だけ。夫も母も何一つ持たずに逃げました。ありがたいことに幸樓さんに身を寄せ、二晩お世話になりました。その後、旧一中に行き、親類の家を頼りに、知り合いから借りた毛布を背中に背負い、七福神のような姿で夫と母の手を取り合って向かいました。親類の家に今日までおります。親類の家は家族が関東に住んでおり、年2回帰ってくるので快く貸してくれております。賃貸契約を県にしてもらい、2年間は家の心配もなく暮らせることに感謝しております。

ただ、あの当時のことを思うと、いろいろ思うことがあります。それは、公的な避難所の方々との違いです。物資は何もというくらいありませんでした。幸い遠野方面の知人からの援助で食料品は頂きました。公的所に行っても断られました。市議会議員から思わぬことを言われたこともあります。とても残念でした。実際、被災している者は余裕がありません。情報もなければ心配です。食べることも心配です。ましてや他の地域で暮らすのですから、不便極まりないのです。いろいろな配布があってもいろいろなイベントがあっても知ることができない。また行くこともできないのです。私は自宅が流されました。何か自分の家の物を、と何回も自宅に通いましたが、見つけることはできませんでした。そんな状況の中、イベントなど行ける元気もありませんでした。もう少し避難所以外の被災にも暖かい援助を心掛けていただけたらと心から思います。80歳を過ぎた母親は暗く不安な毎日を送っていました。保健師さんが一度、貸家を訪ねて来ただけです。仮設には温かい援助があります。私どもにも、そのような援助を少しでも目を向けていただければと思います。国、県、市はこの市外において十分協力をしていただきました。ありがたいと心より思っております。ただ、その一点だけ不満に思います。

3478-01 東前町 女性 70歳代

・避難時の様子(自宅、車避難)

私はあの地震の5～6分前まで近所で四人でお茶飲みをしていた。私は「二、三日したら津波が来るかもしれないよ、大切な物をバッグに入れ、自分のそばに置いておくといいよ」と話をしていると、珍しく孫が遊びに来たので、家へ戻った。帰宅後、あの地震。いつもとは家の揺れ方が違ったので、孫はすぐ玄関に出て、私は自分の持ち物を手にしました。孫は私がおどおどしているのに気付いたのか、「バナー、薬、水、食物」とか言ってくれたので、それもバッグに入れました。もう一人の孫は町で遊んでいるというので、その孫を気遣い、早いうちに家を出た。車で避難すると自分で決めていたので、とにかく人より早く避難した。道路も混みあわずに、二回目の大きな地震の時はもう避難場所の旧中学校そば近くでした。もう一人の孫も避難場所にいたので、ほっとしました。その先は、津波も見えない所にいましたので、どんな大きな津波かも知らないまま、仙寿院に行きました。市内がどんな様子か知ることでもできず、一夜過ごしました。翌朝、外に出て見た市内の様子に言葉にならず、

皆、「わあー」という声だけだったように思います。私たち家族は皆それぞれ早い時に避難したことが最高に良かったと思いました。これからも孫たちに早く、高台に避難することを教えて行きたいです。

9045-11 東前町 男性 50 歳代**・避難時の様子（仕事中、社員の様子見、車避難、九死一生）**

地震が発生したときは、東前にある会社にいた。大きな地震のため、家の中がかなり壊れ、停電し、携帯も電話も全ての通信手段が遮断された。すぐに津波の情報が「高さ 6 m」として入手され、重要な物を車に積みこみ、「時間的に両石にある工場まで辿りつける」と判断し、人々が動く方向とは逆の方向に走り出した。

トンネルは真暗で一台の車も走っていないので、スピード違反をして走り抜いた。もちろん信号も動いてなかったと思います。トンネルを抜けると、映画でも見ているような巨大な津波が追いかけてくる光景が目に入りました。まるで現実の世界ではない空間にいるようでした。周りには一台の車もなく、ただひたすら両石の工場を目指し走った。そして逃げることを伝えに行った。工場で瓶詰めと中国人を乗せ、車で避難。九死に一生を得た。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (1) 沿岸地区（新浜町、東前町、魚河岸・浜町）

[C. 魚河岸・浜町]

1) 補足調査における証言

（浜町1丁目町内会自主防災会：丸木宏之さん、

尾崎町町内会自主防災会（浜町2丁目）：岩間久一さん、西村征勝さん、三浦正文さん、近野勝吉さん、

浜町3丁目自主防災会：高橋松一さん、村上良一さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

【浜町1丁目】

・声をかけあいながら、各自で避難した。

【浜町2丁目（尾崎町）】

・消防団、地域全体で避難を呼びかけあった。津波直前には、魚市場方面から津波襲来を知らせる叫び声があがった。

【浜町3丁目】

・周囲の高齢者等に「アスレチック公園に上がれ」などと呼びかけた方もいた。（浜町3丁目）

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

・避難の呼びかけがあったにもかかわらず、自宅や事業所に留まって流された。

・地震後、自宅に帰宅して休憩中に流された。

・一旦避難するものの、人を助けるために戻って流された。

・体の不自由な方が避難に間に合わず亡くなった。

・過去の津波で被害のなかった民家等に避難した方が流された。

・常日頃から避難訓練に参加していない高齢者も亡くなった。

・車で移動中に流された。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

【浜町1丁目】

・建物の階上、屋上等に避難する方がいた。指定避難所より、建物の階上に避難すればよいという認識があった。

【浜町2丁目（尾崎町）】

・多くの住民は、津波襲来直後、各自の判断で「はまっこ児童公園」に緊急避難した。津波の襲来は、ある程度予測できたが、まさかここまで大きな津波だとは思わなかった。高齢者等を背負って避難する住民もいた。津波が避難所付近まで押し寄せてきたので、更に高台の尾崎アスレチック公園に移動避難した。

・避難の途中で、体調を崩した住民もいた。看護師がいたため、一命を取りとめた。

【浜町3丁目】

・地震後、消防団等の呼びかけにより、浜町の住民の多くは尾崎アスレチック公園、尾崎神社方面、避難道路浜町東側口等の高台に移動した。その後、尾崎神社、幸楼等に集まった。避難道路を通じて、市役所や旧一中に避難する住民もいた。尾崎神社の高台方面の道路に車で避難する方も多くいた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

【浜町1丁目】

・平成21年5月に設置した。町内役員で、避難を呼びかける担当ゾーンをあらかじめ決めていたが、今回の震災では機能する暇がなかった。

【浜町2丁目（尾崎町）】

・震災後の平成24年12月に設置した。3月3日の防災訓練には、地域で20～30名参加していた。避難訓練に際して地元青年会も協力していた。

【浜町3丁目】

- ・平成19年11月に設置した。主な災害想定は、土砂崩れ、台風被害であった。町内会、消防団では、釜石漁協まで怪我人を担架で搬送する訓練を過去に行ったことがある。
- ・避難場所のアスレチック公園は高台にあり、3月3日の避難訓練は時期的にも寒いことから、高齢者には訓練参加が負担と感じていた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

【浜町1丁目】

- ・高い確率で津波が来るチラシを配布するなどして、防災意識を高めることができたが、更に避難する方を増やさなければ駄目だと感じていた。その意識が芽生えた矢先に今回の震災となった。
- ・拡声器、リアカーなどを備蓄していたが、流出した。

【浜町2丁目（尾崎町）】

- ・震災後、住民同士が協力しあい、更に地域の絆が深まった。日常から継続した避難訓練は、大切だと感じた。

【浜町3丁目】

- ・地域で防災に取り組むためには、常日頃の声掛け、お茶っこ飲みなどのコミュニケーションが大切だと感じた。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・サイレンは聞こえたが、放送内容は聞き取れなかった。避難することで精一杯だった。
- ・3mという大津波警報の情報を聞いて、大した津波でないと判断して自宅に戻った方もいた。
- ・震災前にスピーカーの位置を高くしたため、スピーカー下の住家では聞こえづらくなったと感じる。(尾崎町)

(2) その他

(避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関する地域の主な施設など)

- ・消防団員は会社勤めが多く、震災時には約7割が不在であった。(浜町3丁目)
- ・海岸部に住んでいた方の中には、明治、昭和の津波被害を受けて、比較的高台の尾崎町に移り住む方がいた。このような方は、津波に対する危機意識を常に持っていた。しかし、時間の経過とともに、再び下の海岸部に移住した方もいた。(尾崎町)
- ・過去の津波では、引き波時にアワビを獲ったと聞いていた。
- ・避難先には、寒さや風雨をしのげるような屋内施設の設置が必要である。

2) 地域懇談会における証言

高橋松一 さん

- ・震災以前の指定避難場所は、尾崎アスレチック公園とはまっこ児童公園、尾崎神社の3か所。
- ・寒い時期の早朝に、暖を取れない屋外の避難場所に集まる避難訓練には、高齢者はほとんど参加していなかった。
- ・震災以前には、クロスロードゲーム（※カードを用いたゲーム形式による防災教育教材）に取り組む機会があったり、岩手県が整備した避難経路看板を設置したりしていた。

加藤裕二 さん

- ・避難訓練では、寒くて大変だから集まりやすい正規の場所ではない場所にしようと住民からの要望があって変更していた。

三浦正文 さん

- ・地震が発生したときは、3階建ての自宅隣の会社にいた。そして、外に出て自宅に帰った。自宅2階に上って片付けをしていたりして、逃げる気にならなかった。ここまで津波は来ないだろうと思っていたが、家の前に津波（黒い水）が迫って来たときに知って、3階に駆け上がった。3階建てでなければ助かっていなかった。

- ・ 3 mの津波警報を聞いていたが、ここまで来ないと思ったら、先人の話では、三陸津波がここまで来ない話だった。

寺田恵美子 さん

- ・ 子どもが小さい頃（15～16 年前）に、家族3人別々の場所にいるときに津波があったときは避難道路に集合することを決めていた。そして、今回の震災で決めていた場所で会うことができた。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

3212-01 浜町 男性 30 歳代

・避難時の様子（外出先、車帰宅、屋内避難）

車を運転中に地震が発生しました。その後、妻と娘がアパートにいたので「早急に帰らねば」と思い、車で戻りました。信号機は既に止まっており、国道は渋滞すると思い、国道以外の裏道を通って、急いでアパートまで戻りました。部屋に入り、妻と娘に会い、ほっとしました。それから避難のため、バッグに避難用具を入れ、3人で外に出ると（アパート4階）、近所の人「津波が来ました」と大声で叫んでいました。海を見ると徐々に海があふれてくる感じに……。危険を感じ、8階まで上がり、様子を見ていました。

その後は知人の部屋で家族一緒に過ごしました。

3212-02 浜町 女性 30 歳代

・避難時の様子（自宅、津波想起せず、家族の様子見）

地震が起きた時は生後2か月の娘とアパートにおりました。津波が来るとはまったく考えておらず、近くに住んでいる祖母の安否が気になり、娘と2人でアパートを出て、祖母の元へ向かおうとしていました。そこへ外出していた夫が帰って来て、まもなく大津波が押し寄せてきました。あのまま祖母の所へ向かっていたら命はなかったでしょう。

その後、ライフラインは途絶え、水も電気もない生活が長く続き、幼い娘の健康状態が心配でしたが、幸い母乳が出たので、何とか乗り越えることができました。たくさんの人たちの助けのおかげで今現在があります。

3502-01 浜町 女性 70 歳代

・避難時の様子（工作中、帰宅、帰社、避難）

・被災後の様子（避難生活）

地震発生時、仕事場にて、すごい揺れで外に出ました。外壁がバラバラ剥がれ落ちていました。家が近いので、すぐ自転車で帰ってみたら、仏壇が前に落ちていました。1階の物置からお米を2階の玄関まで上げました。その後、自転車で仕事場に帰ってみると、誰もいないので、すぐ避難道路に逃げました。家を下に見ていたら、税関の前に黒い壁が迫っていました。上に自動車がおもちゃのようにプカプカ浮いて、高い壁が進んできます。ビルの後ろ側からは、家をバリバリとものすごい音をたてて飲みこんでいく様、あのものすごい音は、今思い出しても身体が震えます（耳を塞ぎたい思いになります）。3階の孫たちのことも心配でした。仙寿院の外で犬と一緒にいて、寒さで夜中に気を失ってしまい、皆様にお世話になりました。本当にありがとうございます。

12日の朝、また山を越えて、我が家の見える避難道路に行き、家の周りを見て、腰を下ろしてました。どれくらい経ったでしょう？ 本当は犬を連れては大変だし、やむなくそこで首ひもを離しましたが、犬もなかなか私から離れません。犬もそれなりに感じていたようで、やがて、犬がその辺を歩き始めたので、隙をみて泣く泣く犬を置き去りにしました。仙寿院に着いたらすぐまた山を回って一中に行き、バスに乗って水海を回って釜石中学校で降りました。それから、5月末まで釜中でお世話になりました。釜中の生徒さんたちに感謝の気持ちでいっぱいです。トイレで用が済むと、バケツで水を持って来て流してくれ、びしょびしょになると、きれいに拭いてくれて、夜中まで何日か続けてくれて、頭が下がりました。

6月から野田の中央仮設に入ったものの、知っている人もなく、部屋にいるも胸が息苦しくなり、夜は夜で眠れなくて、今でも時々身体の調子が思うようでないです。家族は皆無事でしたが、ご家族がお亡くなりになられた方は、一瞬の出来事で、受け入れられない想いだったと思います。

後で聞いた事ですが、五の橋から西方の方々は、2～3日、あの状況を知らなかった人たちが多かったと聞きました。何かの方法で知らせ、炊き出しなどあっていいと思います。連絡網を考えて欲しい

い。犬は保護されて、岩手動物愛護団体をお願いしました。一緒に仮設に住めないのが、時折思い出して泣いています。

2288-02 浜町 女性 60 歳代

- ・避難時の様子（自宅、ここまで来ない、とりあえず避難）
- ・被災の感想（後世に伝えるべき、すぐに避難すべき、訓練のおかげ）

私は、子どもの頃から内陸で育ったせいもあり、津波の経験がありませんでした。結婚して嫁いだのが海の近くでしたが、そこで 36 年間暮らし、経験した津波は 50cm～2m。岸壁を越えてくる津波はなかったのが、今回も 3m と聞いたので、「ここまで来るはずがない」と裏山にとりあえず避難しました。今回のことを経験して、最低でも子や孫に、私が生きている限り、伝えていかなくてはと思っています。でも「災難は忘れた頃にやってくる」と言うように、時間が経つごとに津波の恐ろしさが薄れていくのが、一番の心配であり、課題ではないでしょうか？大きな地震が来たら、大きな津波が来ることを肝に銘じたいと考えています。

88 歳になる私のおばあちゃんは、家に一人で留守番をしていました。家族は仕事でいつもいないのですが、一人で避難をして無事でした。いつも避難訓練に参加し、どこに避難しなければいけないのか知ってたからです。おばあちゃんは津波のことは頭になかったが、地震が怖くて逃げたと言っています。平日頃の訓練のおかげと思っています。

2844-01 浜町 男性 60 歳代

- ・避難時の様子（仕事中、津波想起、避難誘導、社員の様子見、九死一生）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき）

大地震があり、すぐに表に出た。向かいの建物のタイル看板が落下しているのを見て、「津波が来る」と確信し、従業員と住人に山へ避難をするように指示をした。電気、通信手段が途絶え、中妻方面に行ったらトラック 2 台と連絡がとれなかった。皆で避難道路に上がって、海の様子を見ていたら、1 台目のトラックが帰ってきたので、すぐに下へ行って、尾崎神社の方へと誘導した。ところが、その後 2 台目も帰ってきた。再び下りていって、「旧一中に」と言った途端、路地から乗用車が流れこんできました。「すぐ逃げろ！！」と 2 人で走り、無事でした。

大津波警報が出ているのだから、駅前以前でストップさせてほしかった。水門も大事だが、安全確保を第一にしたい。本人とすれば、会社に戻るという信念が出たものと思うが、命あっての体である。自分のことは他人が心配してもどうにもならないのだから、自分の身は自分で守るしかない。

0792-01 浜町 男性 50 歳代

- ・被災前の意識（訓練参加）
- ・避難時の様子（自宅、水門閉鎖、帰宅、家族の様子見、渋滞、九死一生）
- ・被災後の様子（避難生活）

私は町内会副会長で、何度も避難訓練を行い、防潮堤の水門 5 箇所を担当しておりました。地震直後、すぐに水門を閉めに向かいました。仲間と 5 箇所を閉め、「これで津波は防げる」と思っていました。妻はすぐ上にある避難道路に上がりました。私は次男と一緒に、ジャンパーとリュックを取りに自宅に戻り、更に大渡支店の姉が心配で車で向かったのです。途中、北銀あたりで渋滞しており、やむなく引き返してきました。自宅横の避難道路入口に差し掛かった時に、背後に 5 メートル程の真黒い津波が迫っていました。まさに間一髪でした。

その後の避難道路から見る光景は現実のものとは思えず、向かいの丸屋商店があっという間に流れ、他の木造家屋も全て流されてしまいました。あの大きな「アジアシンフォニー」が 3 度、4 度建物に突っこむ光景は、まるで映画を見ているようでした。余り現実味がなく、それほど精神的ショックも感じなかったのは、幸いです。

その後、町内で 12 人が亡くなったことを知りました。中には親しい人もいて、残念な気持ち強く、「なぜ、地震から 30 分余りの時間があつたのに逃げなかったのか？」、調査の結果が待たれます。

日も暮れてきた頃、市役所の職員の誘導で仙寿院に避難し、二晩を過ごしました。真っ暗な中をロウソクの灯りだけで、毛布も足らず、寒さと周りの喧噪で眠れず、ウトウトしながら一夜を明かしました。朝食は炊き出しのおにぎりが 2 人に 1 個という有様でした。非常用のリュックが役立ち、水と乾パン、カロリーメイト、チョコレートを家族 3 人と従業員 1 人で分けて食べたものです。翌日は別室で持ってきたキャンプ用コンロでお湯を沸かし、アルファ米を皆で食べました。その味は決して忘れられないものでした（美味だった）。従業員がバスで小川町の自宅に辿り着き、息子の車で迎えに来てくれたときは地獄に仏でした。旧一中から旧道を通り、大渡、駒木、中妻から洞泉にある妻の実家

に送ってもらい、停電の中、薪でお湯を沸かし、お風呂を入れてもらったのは、まさに天国でした！
6月中旬の仮設住宅入居までの3か月間、お世話になりました。

0792-03 浜町 男性 10 歳代

- ・避難時の様子（自宅、すぐ避難、避難先から家族の様子見、渋滞、九死一生）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき）

浜町の自宅にいたときに地震が来た。一度すぐに近くの避難道路に避難したが、両親の経営する店の大渡支店の様子と、そこにいる父の姉の様子が気になり、父と一緒に車で大渡に行こうとしたのは、今から考えれば自分でも駄目だと思う。渋滞で進めず、途中で引き返して避難道路に戻ったおかげで九死に一生を得た。今でも、車で避難道路を上がる後ろから、津波に追いかけられたのを思い出せる。

今後、大地震のことで他人に伝えることがあるのならば、「自分のことだけ考えて避難しろ」と伝えたい。

2693-01 浜町 女性 50 歳代

- ・避難時の様子（外出先、帰宅、水門閉鎖、帰宅、避難、九死一生）
- ・被災後の様子（当日の避難所の様子）

あの日、私は行きつけの床屋さんに行って整髪が終了し、ご主人に「近いうちに温泉に行きましょう」と声をかけ、店から出た瞬間、地震を感じました。自宅に走って戻り、妻に、向かいのおばちゃんと隣のおばちゃんを連れて、高台に避難するよう叫びました。その後、町内に割り当てられている防潮堤の水門を閉めに行きました。閉め終わった後、自宅の鍵をできるだけ閉めようと思い、帰宅。外へ出て、水門の方へ目をやると、既に水門下から水が湧き出していた。避難途中の坂道で振り返ると、シャッターを上げ、車を出そうとしている人、足が不自由な方がブロック塀を越えようとしている姿、必死に駆け上がってくる人、車で走り出す人もいた。どれくらいの時間差だったのか定かでないが、津波が防潮堤を越えた。まずはトラ公園に、そしてアスレチック公園へ避難した。その間の余震の凄まじさ、電柱は唸りを立てて大きく揺れ、しゃがみ込む人、悲鳴を上げる人々もいた。公園から眼下に見える光景は、まさにこの世のものでなく、どう表現していいものか、あえて言うならば（不謹慎かとは思いますが）、スペクタクル映像を見せ付けられているかのごとくであった。

震災当日、私と妻は町内の避難した方々とともに、ぎりぎり津波被害を免れた料亭幸楼のご厚意により、お世話になることとなりました。女将さんは小学生の息子さんの安否も不明の中、200 人前後の老若男女を献身的に、されど幸楼の女将としての振舞いは失わず、よくそこまで気丈でいられるものだと感心しました。「俺たちもできる限りのことはしよう！」ということで、沢水バケツリレー、トイレ掃除、食器洗い、支援物資の山越え配給などを行いました。支援物資もごく僅かしかなく、冷え切った数個のおにぎりをお粥に、子どもたちが1個のカップ麺を数人で分け合いました。

恐怖が蘇り、夜中に叫び声を上げる人、ロウソクだけの薄暗い廊下を這うようにしてトイレに行く足の不自由なおばあちゃん、ずぶ濡れなり運びこまれ残念ながら亡くなられた方、震災に遭わなければ、おそらく感じ得なかった様々な人々の優しさ、ひた向きさ、たくましさ、非常さ、醜さを目の当たりにしました。床屋のご主人、水門と一緒に閉めた町内の先輩は、残念ながら津波にさらわれて帰らぬ人となってしまった。震災から3日後、女将さんの息子さんが無事との一報、でもまだ会っていない。女将は、まさに泣き崩れていました。その場に居合わせた自分も命の尊さに涙した。

0336-01 浜町 男性 80 歳代

- ・被災前の意識（ここまで来ない）
- ・避難時の様子（自宅、周辺の様子見、九死一生）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき）

平成23年3月11日14時46分頃、地震が発生。次第に激しい揺れを感じ、津波が来ることを予感して、避難態勢をとりました。玄関や部屋の戸を開いて屋外に出ました。身体障害（歩行困難）者の家内を玄関前の石段に座らせて、小型ラジオを側に置いて、放送を聞いているように話し、坂の下まで津波の様子を見に、下って行きました。明治29年、昭和8年などの津波は坂の下までしか来ていないので安心感がありましたが、第一波、第二波、第三波の津波は予想をはるかに超えた大津波でした。津波を甘く見ていたことが災いし、家内を引きずるようにして避難しました。あと数秒遅れていれば、流されていたのではないかと恐怖を感じました。

三陸沖地震。津波は何時起きても不思議ではないと思います。激しい地震と思ったら「早めに高台に避難する」ことが大事であると思います。

日頃の心得としては

- ①避難場所の確認
- ②非常持出袋を準備
- ③地震発生時の消火の確認
- ④いったん避難したら家などに戻らない

などではないかと思います。30年～50年～1,000年に一度地震津波が来るということを考えず、いつ来ても不思議ではないと日頃、肝に銘じておくことが大事ではないかと思います。

2009-01 浜町 男性 60歳代

- ・避難時の様子（自宅、避難呼び掛け）
- ・被災の感想（要援護者対策すべき）

地震が止んだ直後、町内会役員として担当地区の安否確認と避難を促すため、声を掛けて回った。しかし、声掛けに行った家庭の一軒で、家族3名全員が亡くなった。後で知ったが、老夫婦の他に病弱で寝たきりの娘さんも同居していたようだ。避難困難な娘さんを一人にしたくなかったのだろうか。プライバシーや個人情報の保護の観点や他人に知られたくない事情があるにしても、町内会役員として、家族構成くらいは知っていれば救えたのではと悔いている。

2703-02 浜町 女性 50歳代

- ・避難時の様子（外出先、家族の様子見、ここまで来ない、避難せず）

一人暮らしの母の所へ向かって、浜町の道路を歩いているときに地震が起きました。揺れがおさまってから、母の所へ行くと、近所の人たちと外で集まって恐がっていました。「津波警報が鳴ったけど、ここまで来ないだろう」とそこにいた誰もが思っていました。やがて、消防のサイレンの音が聞こえ、ザーザーと地を這う音と、土煙で辺りが茶色になり、表の道路を人々が走っていくのが見えました。静かになったとき、表の道路に出たら、30m先に流されてきた家やガレキが道路を塞いでいたのが見え、初めて津波がそこまで来ていたことに気付いたのです。

後に、「湾口防波堤がなかったら、あと3mは高い波が来ていただろう」と聞いて、恐くなりました。「ここは大丈夫だろう」と、逃げずに亡くなった人が多いと聞きます。他人事じゃないと思いました。

3406-01 浜町 男性 60歳代

- ・被災前の意識（先人からの伝承、津波経験あり）
- ・避難時の様子（工作中、屋内避難、流された）
- ・被災後の様子（救出）

祖父、父から、幼少時から津波に対する準備、行動を具体的に教えこまれ、地震発生のに準備、避難をしていました。特にチリ津波を経験し、腰高までの浸水経験もしていました。しかし、今回の大震災の際は、日頃から考えていた避難シミュレーションどおりの行動を取ることができない部分が多かった。特に、従業員が「車で帰してほしい」と帰宅を望んだ。危機一髪、命を救われたが…。従業員を帰した後、びしょ濡れの下着と防寒具を取りに家に戻ったため、逃げ遅れた。3階まで津波の来襲を受けたが、4階に逃げ、助かる。

唯一の救いは、近隣の婦人が津波を受け、ずぶ濡れ状態でしたが、微かな動きを感じ取り、声をかけ続け、翌日やっとの思いで救助でき、一緒に避難所まで連れて行けたことです。

当日は津波警報が耳に入っておらず、自分自身のゆとりのなさを感じますし、もう少し時間があるものと考えていた甘さがあります。

0926-02 浜町 女性 80歳代

- ・被災前の意識（津波経験あり、ここまで来ない）
- ・避難時の様子（自宅、津波想起せず、避難呼び掛け）
- ・被災時の様子（警報聞き取れず）

昭和8年3月3日の津波の時は、満6歳、4月には小学校入学の用意もできて、おひな様も床の間に飾られていました。津波の被害はさほどではなかったのですが、近所から出火したため家は全焼、近所も20世帯くらいは全焼だったと記憶しています。今回の津波の前にも、5回ほど地震があり、家中の押し入れの中の物は倒れたり、もちろん形もないくらいの痛みようでした。一日中かかって片付けたりしてきましたが、昔から「この辺りには津波は来ない」との話を聞かされていたので、その話を信じていました。

今回の地震は、今まで以上に大きくて、テレビ等も横斜めに動いたり、本棚の上の人形ケースも落ちてきました。そのうち、茶の間の上などからも物が落下するので、「戸外に出た方が安全かもね」と外に出ました。すると、ご近所の皆さんも、外に出て「こわいねー、こわいねー」と話したり、あるいは

は抱き合ったりしていました。その中を「6mだってよ」と言って通り抜けていった友がおりました。しかし、その6mが何のことか理解できませんでした。警報は出てましたが、これもガアガアーとか聞こえず（耳も遠くなっているから）、「津波が大きいから逃げなさい」との警報だったことは後で聞いたことでした。

町内でも、親しい友が5、6人は亡くなっています。町内会長さんに後から聞いたら、120世帯のうち20人は津波に飲まれたそうで、水門からどんどん出てくる海水がどの辺りで返るのかか思いながら、消防団の人たちに叱られて、山の方に逃げた自分たちは馬鹿ながら助かったと感謝のほかございません。

以前、市役所の方々のお声がけで、市営ビルまでお話を聞きに行った時には、何でも「雨が降ると、山から水が出るから気をつけなさい」とのお話で、「そんな時はどこに逃げたらよろしいのですか」とお聞きしたら、「海岸に行きなさい」とのことでした。津波のことは一言もお話にならないで、「時間がこれまでです」と閉会になったことがありました。あれは一体何だったの。山から水など一度くらいはあったけれど、「その時の逃げ道はどこですか」と聞いても「海」。おかしいお話でしたね。「子供を連れて、そんな時にはどこに逃げたらいいか」と若いお母さんたちが一生懸命聞いても、答えはノーですから。死人も多かった今度の津波でも、そんな行政の在り方が問われるのは当たり前だと私は思っています。

自衛隊やら他県の方々、赤十字の方々には頭を上げられないくらいのお世話になりました。もちろん市役所さんにも一方ならぬお世話になってありがとうございます。ハザードマップとやらはその時見せられた航空写真のことですか。ただ見せられただけで、何の指示もなかったです。

1531-01 浜町 男性70歳代

・避難時の様子（外出先、家族の迎え、車避難）

私（70歳）は、妻（66歳）と釜石市浜町3丁目の自宅に2人で住んでいました。嫁いだ娘が働いていましたので、孫3人を仕事が終わるまで私たちが預かっているのが日常でした。孫たちは鶴住居小学校に通っていました。大きいのは長男で4年生。下は男と女の双子で2年生でした。学校へ迎えに行くのは私の日課でした。迎えに行くときはいつも下校1時間くらい前に行って、自分の健康を兼ねて運動のため、根浜海岸を歩いて足の衰えを防いでおりました。

あの日、3月11日。孫たち3人の下校時は午後3時でしたので、いつもどおり下校1時間前に根浜海岸に行って、防潮堤の散歩道を1時間近く歩いていました。「そろそろ午後3時に15分前になるな」と時計を見ながら車に向かっていくときに、地震に遭いました。今までに経験したことのない物凄い地震で、防潮堤のコンクリートの角に捕まって揺れに耐えるのが精一杯でした。揺れがおさまって、急いで鶴住居小学校に車で向かいました。途中、崖崩れで道路の片側が塞がれた箇所もあって、なかなか車の擦れ違いができなかつたりして、小学校に着いた時はずいぶん時間がかかったように思いました。ふだん、何もなしのときは根浜の駐車場から小学校まで2～3分で着いていたのに、このときは5分以上10分近くかかったように思いました。学校に着いたときは、校庭は静まり返っていて、「皆、避難したんだな」と思っていると、校舎の中から生徒たちが走って出てくるのが見えました。その生徒たちは校庭に止まることなく、一目散に高台の恋の岬の方に走って避難するのが見えました。生徒全員の避難するのを見届けてから、私も生徒たちの後を追って、車で恋の岬に向かいました。途中、多少の渋滞はありましたが、無事に避難することができました。

今思うと、鶴住居小学校の先生方の地震の後の見極め（判断力）が良かったことと、生徒達の行動力の素早さによって私の命も助けられたと思っております。その後、暗闇の中、命の道路と言われてる新しくできた道を、生徒たちと一緒に釜石の旧一中に向かって歩きました。途中、生徒たちは通りがかったトラックに乗せてもらい、本当に良かったと思いました。外靴でなく、上履きで避難していましたので、冷たさを我慢して歩いたことと思います。トラックも数台、旧一中をピストン走行してくれて、全員無事に旧一中に辿り着くことができました。皆さんに助けていただいたことを感謝しながら、避難生活を送り、6月上旬から仮設住宅での生活が始まりました。

2741-01 浜町 男性60歳代

・被災前の意識（湾口防安心）

・避難時の様子（中だし）

最初の地震で、津波が来るとは思いましたが、「釜石防波堤がある」と過信し、舟（0.6t）を沖出ししました。結果的には助かりましたが、まさかこれほどの津波が来ようとは。家にいたら、この過信がもとで助からなかったと思います。湾口防波堤は、第二波だと思いますが、波が覆いかぶさり、見えなくなりました。波がなくなると、今の姿になっており、津波の破壊力のすごさに驚きました。

また、湾内の潮の流れはとても速く、養殖施設のガレキも流れ、逃げ回るので精一杯でした。無線も飲み物もなく、一晚僚船で曳航してもらい過ごしました。

私の教訓は、過信してはいけない。どんなに立派な建造物と言えど、自然の力には勝てないということです。

0523-02 浜町 女性 50 歳代

- ・避難時の様子（自宅、ここまで来ない、屋内避難、九死一生）
- ・被災の感想（家族が犠牲）

まさかあんなに大きな津波が来るとは思いませんでした。自宅は3階建てなので、大丈夫だと思っていました。でも3階ギリギリまで津波が入り、私と孫は助かりましたが、舅と姑は亡くなりました。舅は体が不自由だったので外にも出れず、3階への階段も上がれず一緒にいたのに助けることができず、とても残念です。

もし一日前に戻れるのなら、大事な物は一つにまとめておきたいです。懐中電灯は電池が切れていて使えず、真っ暗な中で夜を過ごしました。次の日、ガレキが玄関の真ん中まであって外に出られず、自衛隊の人たちに助けていただきました。玄関が2階だったので靴も流されてしまい、ベランダにあったサンダルで出ましたが、外はドロドロ、ガレキだらけで不便しました。なので、電池のチェックもしていて、靴もそばにあればと思いました。

避難道路はすぐ近くにありましたが、体の不自由な人を置いて自分だけ出れませんでした。

その夜は食べ物もなく、お菓子が少しあったので孫に食べさせました。次の日は市役所に避難しましたが、食べ物は何もありませんでした。大人は我慢できますが、小さい子には辛いことだと思います。家族がそろったのは3日目です。連絡も取れず、とても心配でした。ふだんから、そういう時はどこに避難するか話し合っていることも大事だと思います。非常食も用意してあればと思いました。トイレは3階にもありましたが、水が出ないので不便でした。保存水もあればと思います。市役所の次は釜石中学校の体育館に家族全員で避難し、3か月後に仮設住宅に入りましたが、自分の家とは違い、不便なことが多いです。しかし、助かったので頑張って生活していきたいと思います。一日も早く自分の家が建てられればと思っています。

0241-01 浜町 男性 60 歳代

- ・被災前の意識（危機意識あった）
- ・避難時の様子（工作中、すぐ避難）

製鉄所桟橋での船の仕事なので、地震イコール津波はいつも頭には入っている。あの日も地震後、防潮堤（7ヶ）の門扉を閉め、潮位の変化を見ていたら、引き始めたので、「津波が来るぞ」と、急いで指定避難場所の市営ビル3階に全員で避難した。湾防の海を見ていたら、白く泡立つように見えたので、「いつもの津波とはチョット違うぞ、大きいぞ」とより高い避難道路に全員で避難した。その後はテレビの映像を見ているような光景で、「何だこりゃ」と血の気が引く思いで、事の重大さがひしひしと伝わってきた。

家族には、いつ災害が起きるかわからないので災害に対する話し合い（対応）を話しておくべきと痛感する。

3320-03 浜町 男性 40 歳代

- ・被災前の意識（ここまで来ない）
- ・被災の感想（反省、後世に伝えたくない）

3月11日、地震発生直後はすぐに避難せずに、所有の集合住宅の状況を見守っていました。あれだけの巨大な地震にもかかわらず津波の意識が薄かったのは、親からの津波の話も少なかったし、過去に津波警報が発表されたときの津波の状況から、勝手に「ここまで津波はやって来ないだろう」という自己判断の何ものでもありませんでした。自分が生きているのは本当に紙一重だったんだと思います。何か余裕で助かったように勝手に思っていますが、紙一重でたまたま生き残ったんだと思います。そして一瞬のうちにこれまで何があっても永遠に続くと思われていた日常が、目の前から消え去っていく現実と呆然としました。身内の津波体験にしても、全て自己判断で自己責任と言えそうかもしれませんが、今回の自己判断の代償は本当に危機一髪でした。

今回被災して感じることは、余り体験したことを非体験者に話す気にはならないということです。本当に死ぬほどの体験を話しても、当然他人事として聞き流されるのも耐え難く思い、そうであれば、あえて自分からは他人に話すのはやめようと思ってしまいます。戦争体験を後世に話さない人たちの気持ちもこんなものかと思ったりもします。被災して今思うようにしていることは、自分の人生にお

いてこの震災は起こるべくして起きたことではないかと思えるようにしています。自分のこれまでの人生を顧みて、そう考えるようになってきました。この震災を人生の分岐点として、前向きに考えて行こうと思います。被害を免れるためにできることは、「世の中に起きていることは、自分にもやってくることもある」ということと、生きたければ、生き残るために自己判断は棄てて、素直に行動することのみだと思っています。

2481-11 浜町 40 歳代

- ・被災前の意識（ここまで来ない）
- ・避難時の様子（自宅、津波想起せず、とりあえず避難）
- ・被災の感想（家族で相談すべき）

過去の津波来襲の周期から「近いうちに津波がくる」と去年辺りから家族で話をしていました。でも住んでいたアパートが津波避難所になっていたことや、巨大津波が来ることなど予想もしていなかったもので、「ここにいれば大丈夫」と思っていました。今回も津波のことより、「建物が倒壊するのでは」という恐怖から、地震直後に着の身着のまま、サンダル履きで家を出ました。「すぐ戻れるだろう、とりあえず」という気持ちで避難道路に上がりましたが、恥ずかしながらこの時も津波が来るとは思っていませんでした。一中の体育館へ移動するように言われ、役所前の通りに下りようとしたときに上から「波が来てるから戻って」と声を掛けられて、慌てて役所の屋上へ駆け上がりました。屋上から下を見るとガレキの海で、ここで初めて自分が危ない状況だったんだと気が付きました。

今、大津波警報を聞いてから避難したのであれば、もう少し違っていたかと思うことがあります。非常持出袋や貴重品を持ったかもしれないし、防寒着を着たかもしれません。逆にもっと慌てたかもしれないませんが……。現在は津波の心配がない所で生活しているので、少しは安心していてもありますが、何かあったらまずは、情報をきちんと聞いてから行動しようと思います。それと家族でもう一度、何をどうするか話し合いをしなければと思います。

ご自身が被災しながら、市民のために働いてくださった市役所の方々には大変感謝しております。どうもありがとうございました。

2437-01 浜町 女性 60 歳代

- ・避難時の様子（外出先、車帰宅、九死一生）
- ・被災の感想（家族が被災）

あの日は、仕事で甲子にいて、そこで大地震に遭いました。地震の後、15 時少し前に、主人の携帯に電話したのですが、つながりませんでした。そのため「今から向かう」とメールしました。これまで主人は、サイレンが鳴るとすぐにお決まりのジャンパーを着て、いつも水門を閉めに行っていました。なので、「今頃、水門を閉めに行っている最中なんだなあ。水門を閉めてから家に帰り、戸締りして貴重品を持って、いつもの所（私といつも 2 人で逃げる場所）に逃げているだろう」と思って、70% くらいは安心していました。主人と只越のレジデンスにいる母が心配で、車でそっち方面に向かったのですが、私は駒木町の道路で大渡川から来る津波に遭いました。水が 5 m の所まで来たので、すぐに U ターンしてお不動さんに車ごと上りました。そして、川を車やら家が流されていくのを目の当たりにして、「主人は大丈夫かな、母は大丈夫かな、弟夫婦は」と、身内のことが心配になりました。

眠れぬ夜を二晩過ごして、3/13 のことです。「おそらく〇さんだと思う」と声をかけてくれた人がいたので、旧二中の遺体安置所に行って確認すると、やはり主人でした。発見されたのは自宅の近くの金物屋さんの前だったそうです。顔には無数の傷があり、水を飲んでいるせいか少しおぐんでいました。泣けて泣けてしょうがありませんでした。最近の主人は人の喜ぶことが好きで、魚市場開発プロジェクトチームの一員として、それはそれは頑張っていて、よくエネルギーあるんだなあと感心していました。まだまだ釜石のためにすることがあるはずと、毎日パソコンと向かい、アイデアを練っていたので、志半ばの他界は、私もすぐには納得できませんでした。水門を閉めに行ったので、私としては殉職だと思い、「〇さん、よく頑張ったね、ありがとう、ありがとう」としか言いようがなかったです。「早く見つかってよかった」と言ってくれる人もいました。3/18 に火葬、5/28 に葬儀と順調に進みましたが、私の心は空っぽです。空元気です。メディアで「惜しい人を亡くした」とか言ってくれる人がおりました。せめてもの救いです。

市長さんはじめ、行政に携わる方も一生懸命しておられる様子はテレビ、新聞等などでよくわかります。でも、国と県と釜石の温度差はかなりあるように私には見受けられます。法律の壁があったり、少し遅いんではないかと思うこともあります。例えば「国がやってくれないなら、自分たちでする」と言って、自分で仮設住民を励ますプロジェクトを立ち上げた知人がおられます。本当に仮設住民に笑顔が戻ってきました。行政の人たちもたくさんの仕事を抱えて、大変なことをご苦労様です。近

い将来、ガレキ撤去が完了すると広大な土地もできてくるはずです。そこの利用には民間の経営者（スペシャリスト）の導入はいかがでしょうか。高田ではワタミの会長が入りましたね。高田と釜石ではいろいろな角度が違いますが、釜石にもビッグな人を引っ張ってきてほしいです。雇用問題、経済波及効果。市民のためになるのであれば、何でもやってほしいのです。おこがましいですが、主人が生きていれば、少しは釜石のために役立てたかと思う今日この頃です。

1415-01 浜町 男性 50 歳代

・避難時の様子（工作中、車帰社、避難、九死一生）

お客様の車を納車しようと会社（両石）を出た途端、大きな揺れが発生し、車のタイヤがパンクでもしたかのような感じがした。走行するのも容易でない状態のため、車を停車したら、次から次へと後ろから車が追いついてきました（隣のパチンコ店のお客様の避難車両です）。

揺れの続く中、会社に戻り、お客様の車を高台へと避難させ、国道へ避難した途端、水海の防波堤を波が越え、一瞬にうちに会社、隣のパチンコ店を飲み込み、国道沿いに避難した従業員の車、私の車を飲みこんでしまいました。溜息で見ているしかありませんでした。

その後は、家族のことが心配になり、鳥谷坂トンネルを歩いて行くと、旧釜石一中体育館の前がガレキの山になっていてビックリした。山を渡り、やっと家族の無事が確認できました。

3119-01 浜町 女性 60 歳代

・避難時の様子（自宅、ここまで来ない、避難呼び掛け、避難）

解体が進む街中を通る度に、あの日が思い出される。「せいぜい、魚市場付近が冠水するくらい」にしか考えていなかった。

地震後、海の方に茶色のような物が見えて、下の方から、「津波だ」との声がして、すぐに尾崎神社の境内に逃げました。あの大津波を実際には目にしていなかったけれど、次の日、高台の公園からの光景を見て、怖ろしくなりました。いまだに映画の場面のような……眠れぬ日々です。

ガス、水道、電気のない生活を体験し、4、5日間、近所の人達とともに過ごしました。その後、妹夫婦の世話になり、とにかく誰かと一緒にいることで、多少は安心した気持ちになれたような気がします。避難生活は2か月くらいで自宅に戻りました。家の一部破損と買物など、不自由な生活は続いています。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (2) 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）

[A. 港町]

1) 補足調査における証言

（磯田喜一さん、磯田ヤホ子さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・避難時、周りの住民に自主的に声がけをする方がいた。このことにより、数名の方が行動をともし、避難した。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・亡くなった方は身体の不自由な方ではなく健常者であった。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・多くの住民は釜石港湾事務所等、高層階の建物や屋上へ避難した。
- ・2丁目の住民の多くは、釜石港湾事務所へ避難した。1丁目の住民のうち数名は陸中海岸グランドホテルへ、その他はグリーンセンターや中番庫内の石炭山等に避難した方もいた。
- ・地震後、いち早く車で他地区に避難する方もいた。
- ・チリ地震津波の際には防波堤を波が越える程度であったため、住民内で津波に対する警戒心が薄れていたと考えられる。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・今回の震災以前のシミュレーションでは、中番庫は浸水想定外とされていたため、避難所にするように市に依頼していたが、認められなかった。
- ・2丁目住宅街とグリーンセンター側の境界には段差があり、上に上がるための通路が両端に2か所あった。避難訓練時にはその通路を使って逃げるようにと町内会長が呼びかけていた。
- ・地形上周囲に高台がなく、矢の浦橋方面へ行くのも棧橋方面へ行くのも川があり危ないことから、避難訓練の際にはバス停前のゲートボール場を避難場所としていた。
- ・町内会では陸中海岸グランドホテル、グリーンセンターに対して一次避難場所の協力を口頭でお願いしていた。
- ・釜石港湾事務所では避難のための外付階段を設置する予定があり、そのことを震災直前の津波避難訓練時に住民に周知していた。そのことが、今回の震災時において同所に住民が集まる契機になった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

C. その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など）

- ・防災無線は、通常どおり聞こえた。
- ・釜石港湾事務所では非常食を備蓄しており、水や食糧を配給していた。
- ・港町2丁目に流れこんだ津波により、町は左右に分かれて流れた。
- ・津波は汐立川を遡り、渦を巻いた。
- ・1丁目はほとんど事業関係者である。
- ・水門の閉鎖は、3分団（松原）が担当した。

2) 地域懇談会における証言

高山永秋 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。その後、釜石港湾事務所に避難誘導をし、最後に車で逃げこんだ。

- ・避難訓練では、釜石港湾事務所横の広場に集まる訓練をしていた。リアカーを買って避難支援に使うかという話もあったり、土日や夜間は閉館となるので、外階段を設置して上に上がることができるように交渉をしていたり（工事未着工）、長い塀に囲まれている場所で避難経路がより短くなるように非常口を複数設置したりするなど取り組みを行っていた。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

3376-01 港町 男性 50 歳代

・被災の感想（3m 安心、湾口防安心）

湾口防波堤と防潮堤が完成していたので、まさかあんなに大きな津波が来るとは思っていませんでした。余りに湾口防波堤を過大に評価し過ぎていたと思います。また防災無線も冷静に3mを越える津波と情報を流していたため、やはり「湾口防波堤と防潮堤が私たちを守ってくれる」ものと思い、のんびり構えていました。ところが実際は10m近い高さの大津波が来て、たくさんの方が犠牲になってしまい、無念でなりません。浸水域には、多くの避難タワーを建設していただいて、すぐ徒歩でも避難できるように、町づくりを急いでいただきたいと考えております。

1084-02 港町 女性 40 歳代

・避難時の様子（外出先、車帰宅、片付け、避難）

・被災後の様子（当日から翌日の様子）

前日も午後2時には、学校が短縮授業だったため、娘2人は浅橋付近まで帰って来ていました。当日（11日）も短縮授業だったため、午後2時には、前日と同じ場所まで来てと思っていた。またま、姉の方が中耳炎で病院通いしていたので、その日も病院に行こうと、浅橋まで車で行くと、まだ来ていませんでした。「何しているのか」と、病院前で車から降り、北銀の前で待っていました。その時、「今日は霨がかかっていて、変な日差しがあって気持ち悪い」と思っていました。やっと娘がきて、病院で診察してもらい、会計を待っていました。その時です。今まで経験したことない揺れ、大きな地震。ガラス張りの建物の所にいたので、娘2人を守ろうと大きな体でかぶさっていました。揺れもおさまり、「これは津波がくる」と思いました。

「会計はまた今度」と言って、2人の手を引いて車まで走り、車を大きく回し、私の父と母と一緒に逃げようと思い、自宅まで戻りました。途中、地面はひび割れ、グランドホテル前は水道管が破裂し、水が吹き出し、家の前では液状化していたため、車がはまらないように避けるので精一杯でした。自宅のまだ大丈夫な所に車を止め、父と母を乗せようと帰宅すると、その時、父はお風呂に入っていたらしく、やっと下着をつけて、割れたガラスを拾っていました。母は貴重品をもって、私に「車に積むように」と、その母も父の衣服を持ってくるのにやっとでした。そのまま家に鍵をかけ、旧釜石小まで急ぎました。私たちの向かう旧釜石小方面は車がいなく、すんなりと駐車スペースに止められました。

津波が来たのは、しばらく経ってからでした。歩道橋の上で市役所の人が、「津波が来るぞ」「上に登れ」と叫びました。母は上手く歩けません。皆でおぶって上がろうと思って、手をかけましたが、体重が重く、上手くいきません。這って手も足も汚しながら、少し上の高台にようやく逃げました。私と父は母の面倒を見ていたため、娘2人は別々に逃げました。第一波の後、娘を探していると、山の上から声が聞こえてきました。友人たちと逃げていました。その後は、また「ここも危ない」と言われ、仙寿院まで山を登り、避難しました。案の定、母は1時間かけて父と市の職員さん3人とともに、どうにか避難しました。

その日の夜は大人3人は不安でした。市の中心からの火災、松原方面でのガス爆発、ロウソクでの一夜、そんな中で子供2人は寝ていました。友人たちもたくさんいるということで少しは安心していただいでしょう。次の日の午後、子供とその親は甲子小に移動することになりました。家族全員でと思ったのに、母はもう足が動かせず、父は「母に連れ添う」と言って、移動しませんでした。私は子供たちが「どうしても友達といたい」ということで甲子小へ。私は42年間、父母と離れたことがなく、初めての決断であり、「私が子供たちを守るんだ」という思いでした。その反面、不安で心がつぶされそうでした。無事に甲子小につきましたが、夜になるにつれ、上の子が熱を出しました。「じいちゃんとはあちゃんを置いてきてしまった」という不安からなのでしょう。その後は熱もおさまりましたが、鶴住居小、東中の子たちと一緒に、感染症が発症し、病院へ行きました。避難していた所は3階で、上り下りの毎日、その中でやっと仕事で離れて暮らす主人と一緒に、安堵しました。

約一週間後、下の娘が熱と嘔吐のため、病院に行った時、自分も子供より悪化していると思い、診てもらいました。私は血圧が260以上、下が120以上、死ぬ一步前でした。そのため入院。子供たちは主人に任せて、絶対安静で一週間、とても不安でした。子供たちも、父や母も、病気や血圧の心配ばかり。そのとき、県の人がきて「内陸に避難しませんか」と。「出発は明日です。お父さんお母さんはOKです。あとは娘に聞いて下さい。」と。すぐ主人に電話してもらい、皆で行くと決め、今度こそ家族一緒だと幸せでした。旧釜石小中に集合し、バスで盛岡の愛真館まで移動しました。途中、御所湖が凍っていて寂しく思いましたが、到着すると盛岡市長さんらと私の妹夫婦と甥っ子が来ていて、とても嬉しかったです。その後、私がいろいろな手続の一切を行いました。父は一気に精神面がくずれていき、私の不安の分もあるせいで、皆が一つになれなくなりました。でも、盛岡の保健師さん、ホテルの従業員さん、その他、たくさんの人たちに助けてもらいました。

子供たちは学校に通うようになり、父は病院に行き、混合型の認知症と判明し、3か月入院後、施設に入りました。釜石に連れて帰りたいけど、家が2年で移らなければならないので、病院の師長さんにはOKをもらえませんでした。子供たちもあっちの小学校にもなれましたが、釜石の元の小学校に戻ってきて、大変嬉しいようです。母は、隣の部屋にいますが、「いろいろな所から音が聞こえて怖い」といいます。1か月だけ主人の社宅に住んでいましたが、その時の方がよかったと言っています。この震災でひどい人もいましたが、助けられた人の方が多かったです。知らない人でも優しくしてもらい、話を聞いてもらい、心が温かく思った方が多かったです。この人たちにお返しするのは自分たちが前向きに進み、歩んでゆくことだと思います。その時、また別のやり方でお返しを2倍3倍できたらと思います。

2449-01 港町 女性 70歳代

- ・被災前の意識（避難していた、訓練参加）
- ・避難時の様子（自宅、津波想起、すぐ避難、避難誘導）

私は長年、津波浸水域に居住しておりました。今まで地震が発生する度に、津波情報に従い、何度も避難を繰り返してきました。また地域の避難訓練にも参加しておりました。

3月11日も今まで経験したことのない大きな揺れに、津波が来ることを直感し、行動しました。我が家は2階建てで、貴重品や非常用持ち出しリュックは2階の寝室にありました。しかし、高齢の私は大きな揺れで2階に上がることができませんでした。

着の身着のまま外に出て、ご近所の方々と港町の公園付近を歩いていると、釜石港湾事務所の職員の方から「津波が来ます。そこにいと流れるよ。上に上がって来てください」と叫ぶ声が聞こえました。港湾事務所の3階に上り、避難することができました。港湾事務所には翌日、昼すぎまでお世話になりました。感謝しております。

0847-02 港町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（外出先、車帰宅）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）

あの日、夫と二人で、遠野市内のスーパーで買い物していました。突然地震が起き、しばしおさまるのを待っていましたが、揺れが強く長くて、驚いて外へ飛び出しました。周りの建物の揺れが見たこともない光景でした。おさまってからは家が心配になり、急いで帰りましたが、車で30分ほど走った所で、津波が来たために橋を渡れず、足止めを食いました。川を見てびっくり、材木がゴロゴロ、車も数え切れないくらい流されてきて、一瞬「何これ？」と思いました。周りの人に話を聞くと、材木は家の壊れた物、車は逃げようとして車ごと流された人たちや駐車場から流された物と聞き、津波の大きさに唖然としました。

当日は近くのセンターに泊まり、翌日、歩いて町へ向かいました。一目、町を見た途端、言葉が出なかった。大通りはガレキの山でした。歩く所がなく、ガレキを越え、ズルズル滑りながら家の近くまで行った時、目を見張りました。80軒近くの町内は見渡す限り空地になっており、残っているのはビル、ホテル、工場の一部、それと避難場所になっていた湾港事務所だけでした。町内の人たちを案じながら、避難所に向かいました。そこには近所の町内の人たちが無事であり、再会を喜びあいました。

2日目はバスで高台の避難所に送られ、そこで300人ほどの避難民と3か月半暮らしました。毛布一枚ずつ渡され、ダンボールを敷いた上で着の身着のまま寒さに震えながら、寝起きしたんです。7月始め、仮設住宅が当たり、親子3人やっと人並みの生活が出てきました。今は落ち着きましたが、先が不安で時々考え込んだり、気力がなくなり、家族に心配をかけることもあります。

1148-01 港町 女性 70 歳代

- ・避難時の様子（外出先、帰宅、避難呼び掛け、車避難）
- ・被災後の様子（当日の避難所の様子）

私が港町1丁目の金野魚店にお茶飲みに行っていたときに、大きな地震が発生しました。地震がおさまるのを待って、帰って来ると、途中で信号機が止まってしまう、横断歩道は車で一杯で渡れませんでした。やっと車の流れが止まって、渡れたと思ったら、サワケンの前が地割れしていました。

やっとの思いで家に帰り、2階に行って、預金通帳、保険証、現金、下着類やカシパンなどを入れておいたリュックサックを背負って、2階から下りてきました。すると、隣のだんなさんが「逃げっぺ」と声をかけてくれましたが、その時はのんびりしていました。「先に行ってて」と言って、薬などを探してありましたら、K夫婦が来て、「そんなことをしている暇はないので、早く車に乗って」と言われましたが、その時、私は腰が抜けて立てませんでした。Kご夫婦に手伝っていただいて、車に乗ることが出来ました。車は裁判所まで行くのに、裏通りを行きましたので、何事もなく行くことができました。表通りは車で一杯でした。私たちの後を追うようにして来た人たちは大きな声で何やら叫んでおりましたが、私たちには届きませんでした。裁判所の近所の人に「裁判所に入りなさい」と言われたので、言われるがままに裁判所で二晩暮らしました。

津波の晩は、とても寒くて電気もないし暗くて、隣のお寺から大きなろうそくをいただいてきて、灯りを付けました。ラジオを持ってるおじさんが時折ニュースを聞かせにきてくれました。「港町は全部流されたようだ」と聞かされましたが、自分の目で確かめるまでは信じられませんでした。時間が経つにつれ、お腹が空いてきたので、持ってきた菓子パンなど皆で分けて食べました。ようやく朝になり、男の人たちが裁判所から下りて行きました。様子を見てきて話す言葉は、「もう釜石は駄目だ」と言うことばかりでした。

私たちが港町に行くことができたのは二日目ぐらいだと思います。その時、一番感じたことは、自衛隊の人たちでした。足場が悪いのに、一生懸命ガレキを取り除いて、私たちを通してくれました。何度頭を下げても下げてもありがたいと思いました。本当に自衛隊の人たち、ご苦労様です。本当に人は一人では生きていくことができないと心に染みしました。絆ですね。家の前に行ってみて、家がないので、ただただ果然と佇むことだけ。頭の中は真っ白でした。

0295-11 港町 男性 70 歳代

- ・避難時の様子（外出先、車帰宅、渋滞、家族の迎え、避難先から帰宅、避難）

3月11日午後1時30分頃、車で競馬場（両石）に行った。その日は大井競馬が最後の日でした。たくさん的人が入っていた。私が行ったときは、7Rが終わるところでした。8Rの馬券を買おうと思っていた矢先、最初の大きな揺れがきて、電気が消えた。私は急いで外に出て、車で45号線トンネルを通り、町を通ると危険と思って、バイパスを走った。すると、家の前の下り坂で渋滞していた。そこで2、3分待っていると、上りの車が来なくなったので、反対の線を走り、家に着いた。家の中を見ても妻がいないので、大声で叫んだ。

それから避難訓練の場所に行った。妻はボケッと立っていた。それから二人で自宅2階に上り、非常持出物を持って、釜石湾港事務所に逃げた。事務所の2階に上って、海の方を見ると、目の前に白波が押し寄せてきた。事務所からは、嬉石・松原町内の家が倒れ、流されていく様子を見ていて、自分たちが避難している所が心配で、息が詰まるようでした。事務所の人たちに「大丈夫」と何回も声をかけられ、一夜を明かした。

1208-01 港町 女性 50 歳代

- ・被災前の意識（訓練参加）
- ・避難時の様子（自宅、とりあえず避難）
- ・被災の感想（ここまで来ない）

海の目前に住んでいました。私は地域の役割で、3月3日の避難訓練にも参加していました。地震発生時は、町内の半分ぐらいの方々と避難しましたが、これほどの大きさの津波が来るとは思わず、軽い気持ちで避難していました。しかし、波は3重4重に重なって襲ってきました。川の中を流されていく家の2階のベランダにいたご夫婦が水の中に沈んでいく様子は、今でも鮮明に覚えています。でも自分ではきれいごととは言えません。助けることはできませんでした。自分の事で精一杯でした。

私たちの地域は昨年暮れまでは、地震が発生したら、只越町にある市役所か松原の公園に避難することになっていました。しばらく前から町内の役員たちには、別の場所も避難所として使わせてもらえるようお願いしていました。そして、3月3日の避難訓練の時には湾港事務所に決まり、そして、3月11日に大津波に遭いました。振り返ると、私たちの町内の半分以上は危ない状態でありました。

これからはもっと注意して自分たちを自分たちで守っていこうと思います。

2686-01 港町 男性 60 歳代

- ・避難時の様子（仕事中、避難の呼び掛け、水門閉鎖、避難）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）

3月11日、私は地震発生時に、新日鉄棧橋に着機中のアジアシンフォニー号の船艙で線機積付作業をしていた。作業の一区切りついたので、5名で話している時、足に異常な震動を感じ(十勝沖地震、津波を今回と同じく船艙で体験している)、「これは大変なことだ」と思い、直ちに船艙から上るよう、大声で仲間に声をかけた。また本船から降りる際には、タラップの所で3名いた船員にも声をかけた。棧橋に降りて休息所に向かうとき、防波堤の門扉が開いていたので、仲間と手分けして4ヶ所閉鎖し、まずは市営ビル4階に逃げた。その後、ここも危険だとの話が入り、避難道路へ走った。高台から津波が防波堤を越え、船や建物が流され、街並みが消えるのをただ見ているしかなかった。その後、旧一中方面に向かい、仲間が歩けなくなった人を背負ったりした。

夜は一中の体育館の中に入り、ストーブで暖を取っていたとき、避難してきた鵜住居小の子ども3名が寒さに震えていました。聞いたらその子どもは声も出せないらしく、震えながら、指で2と示しているようです。自分の孫と同じように見えました。ただただ愛おしくなって、膝に抱き一晩抱いて過ごしました。

12日9時頃、全員解散となった。車は流されてしまったので、国道45号、線路、三陸道を通して昼頃、鵜住居の自宅に帰った。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (2) 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）

[B. 只越町]

1) 補足調査における証言

（只越町内会：長柴政義さん、山崎幹雄さん、小田島凌一さん、矢浦サトさん、湊健治さん

只越中央通町内会：久保義治さん、菊池新之助さん、川端博さん、田中昭司さん、内金崎富美子さん、磯田幸代さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

【只越町内会】

- ・消防車が巡回して避難を呼びかけた。
- ・数名に声かけをした住民もいたが、大部分の住民は、各自の判断で避難した。
- ・高台に避難した一部の住民が、早急に高台に上るよう、呼びかけをした。
- ・危険を察知した住民の一部が「津波だ」と周囲に呼びかけたが、直ちに誰も逃げない場面もあった。
- ・足下に素早く忍び寄る津波に気づかない住民に対して、車のクラクションで注意を促す住民もいた。

【只越中央通町内会】

- ・津波の襲来を直感したので、近隣の体の不自由な高齢者を早めに避難所まで移動させた。
- ・建物等の高所にいた住民が、目前に迫る津波を見て、津波襲来の叫び声を上げた。
- ・まさかここまで来ると思わず自宅付近で避難すべきか迷っていたが、市役所方向から「逃げろ」という叫び声が聞こえ、我に返って避難した。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

【只越町内会】

- ・自宅に留まって流された。
- ・一時自宅の階上に避難するものの、階下に移動して流された。
- ・逃げ遅れた方を救助しようとして流された。
- ・地震後の後片付けに手間取り流された。
- ・体の不自由な方が、避難に遅れて流された。
- ・恐怖等のため、体が身動き出来ずに流された。

【只越中央通町内会】

- ・片付けなどの作業に手間取るなど避難が遅れて、避難の途中で流された。
- ・一旦避難したが、自宅に引き返して流された。
- ・地震後、外出先や職場から自宅に戻り、避難が遅れて流された。
- ・勤務明けで自宅休息中に流された。
- ・病人、要介護者がその家族、介助者とともに流された。
- ・避難するように声かけをしたが、自宅から出てこなかった。避難に応じなかった。
- ・買い物等の用足しにいった家族の帰りを待っていた。
- ・高齢の家族を高台に避難させた後、自宅に戻って流された。津波襲来まで時間があった。
- ・予想される津波の高さが3mであるという無線放送を聞き、避難しなかった。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

【只越町内会】

- ・多くの住民は、目前に迫る津波を確認するまで、避難行動を取らなかった。
- ・避難する意識より、海の様子を確認することが目的で、高台に集まってきた住民もいた。
- ・津波が音もなく足下に素早く広がる場所もあり、避難行動が遅れた住民もいた。一方、海岸方向からの叫び、異常音、土煙等から危険を察知して避難を開始する住民もいた。
- ・大通りが車で渋滞していることから、裏通りを選び、そこを通過して避難する住民もいた。
- ・自宅等の階上に避難する住民もいた。
- ・野外の避難場所を避けて、屋内施設に避難を求める住民もいた。

【只越中央通町内会】

- ・地震後、近隣同士の住民が集まって、周りの様子を伺っていた。地下水の異変、液状化現象等を目撃した一部の住民の中には、津波の襲来を確信した方もいた。ただし、大規模な津波の襲来を予想できず、大部分の住民は、迅速に高台への避難をしなかった。自宅の階上に避難した住民もいた。津波が目前に迫った瞬間に初めて気づき、各自の判断で避難した。
- ・町内会 100 世帯中、約 20 名が死亡した。津波襲来の直前まで避難行動を取らない、あるいは取れなかった住民がいた。
- ・主な避難先は、避難道路方向（天王山口、高架橋口）、市役所第 1 庁舎、旧一中方向（宝樹寺、仙寿院）であった。逃げる途中、後ろを振り返ったら、津波が来ていた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

【只越町内会】

- ・3月3日の津波避難訓練に参加するほか、特に町内で取り組んでいることはなかった。地域のかさ上げ、河川の浚せつなどハード施設の充実を要望してきた。

【只越中央通町内会】

- ・町内会として、これまで避難訓練に取り組んだことはなかった。
- ・3月3日の訓練参加を回覧版により呼びかけていた。訓練は、避難場所の人数を確認する程度で、避難の途中で笑ったりするなど緊張感に欠けていた。参加さえすればよいと思う程度だった。
- ・3月3日に実施された市の防災訓練に参加してきた。旧釜石小学校跡地、只越避難道路、市役所本庁舎が避難場所であった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

【只越町内会】

- ・今後の課題として、屈曲している水路を真直ぐにすること、自然排水への切替え、浸水高さの標示、高台へ上る階段等、ハード面での設備が必要である。

【只越中央通町内会】

- ・避難訓練は、大切なことだと改めて感じた。日頃から訓練に参加すべきだった。
- ・今後の課題として、寒さや風雨をしのげるような、屋内の避難場所が必要である。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

【只越町内会】

- ・無線の音は聞こえたが、内容は理解できなかった。気が動転していた。

【只越中央通町内会】

- ・無線の音は聞こえたが、耳に入らなかった。内容が聞き取れなかった。
- ・今後の課題として、緊急時の放送はまず第一に重要内容、次にそれに対応の仕方、そして個々人の対応が必要である。例えば、単純に「早く逃げろ」と放送した方がよい場合もある。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など）

【只越町内会】

- ・大通りなどは渋滞していた。
- ・津波は最初に、障害の少ない広い道路を勢いよく突き進んで行った。その後、脇の道路に流れこんできた。
- ・呑ん兵衛横丁の建物が、蛇のようにうねり、流された。
- ・市営ビル前の広い道路を津波が一気に突き進み、突き当りの麓で二手に分かれた。さながらナイヤガラ滝の滝状態となった。
- ・建物の2階より高いガレキが津波とともに迫ってきた。
- ・大渡川方面も、津波が入ってきた。
- ・最初の津波は、ヘドロで黒かったが、波を重ねるごとに透明感が増してきた。
- ・引き波の時、ヘドロの匂いがすごかった。
- ・どこからともなく、茶色い煙が発生していた。

【只越中央通町内会】

- ・井戸の水が上がってきたので、津波が来ることを確認した。津波の前兆として昔から聞いていた。
- ・昭和8年の津波は、地域周辺まで来なかったと聞いていた。ここまで来るとは思わなかった。チリ地震、十勝沖地震津波被害は、海岸周辺だけだった。津波を甘く見ていた。
- ・白いものが見えたので最初、火事だと思った。それは襲ってくる津波の水飛沫だった。
- ・湾口防波堤も完成して、3mの津波と聞いたので、津波が来たとしても、せいぜい膝まで程度だと思った。
- ・過去の津波では、家族が多数亡くなったこと、家族を背負って逃げたことを伝え聞いている。
- ・昭和8年の津波震災後、震災復旧事業の一環として、宮沢薬局から魚ていに至る道路が舗装された。地域では、「モダン道路、セメント道路、コンクリ道路」などと呼んでいた。
- ・3時過ぎに信号が消えたが、それ以前は国道の信号は作動していた。
- ・只越町全域には屋内避難施設がない。今後の課題としては、風雨や寒さをしのげるような屋内避難施設の設置が必要である。

2) 地域懇談会における証言

菊池新之助 さん

- ・液状化しているのを見て、自転車で宝樹寺に避難した。そのとき、第1波を見た。そのあと釜石バイパスに出て、自動車で雨風をしのぐことのできる避難場所へ移動した。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

2310-02 只越町 女性 50歳代

- ・避難時の様子（外出先、津波想起、車帰宅）
- ・被災の感想（反省、ここまで来ない）

3月10日、義母が危篤とのことで、実母と娘を残して、夫婦で福島にある夫の実家に出かけました。不気味な地震（体感する結構大きな物）が何回かあったにもかかわらず、2人には「何かあったら2階にいた方が安心かもしれない」と言って、三陸縦貫道を車で福島に向かいました。

3月11日、福島で地震にあいました。地面が大きく上下するほどの揺れを感じ、咄嗟に「釜石に津波が来る!!」と慌てました。携帯が通じないため、危篤の義母を義父と義兄に頼んで、真っ暗闇の中、国道4号線をひたすら車を走らせて釜石へ向かいました。12時間かかって遠野に着きましたが、そこで足止めをくらい、釜石に着いたのは翌日の午後でした。家は全流出しましたが、実母はたまたま遠野から来ていた2人の姪にギリギリで救い出され、娘も友達と海岸から離れた所にいたため無事でした。

今、思うのは何故、地震が来ていたのに気付かなかったか。津波避難指定区域なのに、年老いた母に「2階にいて」と言ってしまったのは、自分の判断の大きな誤りです。「津波や地震に慣れてしまったり、後で悔いることはしてはいけない」とつくづく思います。例えば危篤で呼ばれたときであろうと、家族への配慮は怠ってはならないと思っています。家だけで済んで本当に良かったと感謝しています。

0671-01 只越町 女性 50歳代

- ・避難時の様子（工作中、帰宅、屋内避難）
- ・被災の感想（家族が犠牲）

地震のすぐ後、私は危険を感じて、自宅から近くにある仕事場所（ここは埋立地だったので）から帰宅しました。家に帰ると、家の者たちは驚きはしているものの、普通どおりに仕事をしていました。弟は私の顔を見るなり、「車で高台にあるお寺に（千寿院）行きなさい」と指示しました。自分たちは「4階建てのビル（自宅兼仕事場）が津波で流されたら釜石中が潰れる」と言った。まさしく、弟も兄もこの言葉どおり、自宅の4階に逃げていたら助かったのかもしれない。この時から、この弟と兄の二人にはもう会うことができなくなったのだが……。

釜石は昔から港湾の栄えた街で、被災を受けた場所は鉄骨ビルの多い所なので、他の町と違って虫食いのようにビルの残骸がいまだに残っているのです。最後にビルの撤去をするらしいので、この土地をどのように処分するのか……国が代買してくれるか。それとも、そのまま流されるようにこの土

地でまた、商売をするか。曖昧のまま8か月が過ぎていきます。命を失った弟たちも2、3軒先には15、6mもある波が迫ってきていると見えても逃れられなかったと思う。振り向けば2階の屋根ほどの波が時速80kmくらいで襲ってきたのだから。地震イコール高台に逃げる、しかない。

0264-01 只越町 女性 60 歳代

- 避難時の様子（自宅、避難呼び掛け、とりあえず避難）
- 被災時の様子（周辺住民の様子）
- 被災の感想（てんでんこ）

3月11日14時46分、激しい地震に遭遇し、大きな耐火金庫に身を委ねた。揺れがおさまってから、店内（酒屋小売業）を見ると、大きい冷蔵庫のドアが開いて、中にあった4号瓶入りの4本と1.8リットル清酒が壊れただけと、被害が少なかった。サイレンを鳴らしながらパトカーと消防自動車が回っていたので、軽い気持ちで避難場所に指定してある所に向かった。その途中、避難場所から降りてきた方にお会いし、「○○ちゃん、この時間にどこへ」「ガスの元栓の確認に」「早く帰って来てね」…この言葉が最後に交わした言葉でした。

避難場所で耳にした体験談です。「津波に遭い、実母の手を引いて泳いでいたら、流されてきた車を見つけ、車の上に乗れば僕たちは助かる。その瞬間、母の手を離してしまった。『母ちゃんゴメンナ』という言葉が、母との最後の別れだった。死ぬことも不幸だけれど、一生この気持ちを持って生きていかなければならないことも不幸だよ」この言葉を聞いて、私は嫁に来て波乱万丈の生活でしたが、このような経験はしていなかったと気付きました。この避難所に来てよかったなと思いました。

9036-12 只越町 女性 60 歳代

- 被災前の意識（経験から油断）
- 避難時の様子（自宅、避難せず）
- 被災の感想（てんでんこ）

3月11日の地震発生時、自宅の2階にいたが、テレビを付けていなかったし、地震後すぐ電気が止まったので津波警報を知らなかったし、釜石の避難指示が出たことも知らなかった。日頃から防災無線が聞き取りにくく、山びこのようにダブって聞こえていたので、役所に何とかできないものかと話そうと思っていた。家族は3名だが、弟は1階から2階へ上がってきたので無事だったものの、母は外出していたので、地震で外出先から母が帰ってくるのを待っていた。幸い10～15分ほどで3名とも2階で無事そろったのでラジオを付けると、「10mの津波が来る」と言っているのが分かり、「えー」と聞いていたら、出窓からアーケードの高さくらいの津波がこちらへ迫ってくるのが見えて、ビックリして見ていた。幸い自宅は建てて7年くらいと新しかったので、2階のロフトに上がり、流されず一夜を過ごした。水は2階まですぐ来たが、3名とも濡れなくて済んだ。

津波警報は昨年2月頃も出たが、実際には来なかったのが甘く見ていたと思う。今回は昼間の出来事だったので幸いだったが、夜間や夜中だったらもっと大変だったと思う。また地震から大津波まで30分以上あったのも幸いした。「津波てんでんこ」の謂れのとおり、「大津波が来たら家族を待たずに避難しなくては」とつくづく思った。日頃から家族と申し合わせて避難所を決めておき、後日落ち合えばいいのだから。またラジオ、長靴、軍手、水などちょっとした食料などをすぐ持ち出せるように身近な場所に置いておくよう心掛けたい。せっかく長らえた命なので、本当に大切に大切に生きて行きたいと思う。「家族の絆」を今回ほど感じたことはない。親、兄弟とも仲良く過ごしていきたい。

3442-01 只越町 男性 80 歳代

- 被災前の意識（危機意識低かった）
- 避難時の様子（自宅、すぐ避難）
- 被災の感想（後世に伝えるべき）

私の家族(妻と二人)は平成21年10月21日に、千葉県市川市より釜石市に転居してきました。極力、地域に馴染もうと努めていたところでした。当地が過去災害にあったこと、その折々、話に聞いていました。しかし実際に体験していないため、それほど深くは想定していませんでした。

3月11日に突然地震発生、取る物も持ち物もなく、指定の避難場所に急ぎました。警報のサイレンも、マイクの呼び掛けも耳に入りません。(今後このような場合、家の中にいても、聞こえる情報など、考えてほしく思います。ポリスオフィスは、街の中心地に建設しないと、情報も流れず時間が経ち、生命を落とす人の数は多大だと思えます。釜石市の場合、港の方に位置していたため、何の役にも立っていないようです。ダイレクトに大津波に遭って機能が果たせなかったと思う)

私はこのような大きな津波が来るとは、予想だにせず、全く考えてもいなかった。「もう一度、我が家に帰ることができるのでは」と思っていました。避難場所も五度ほど移りました。五度目が今

の我が家、仮設です。二度目の避難、釜石一中でも、津波が来るとの情報で校舎上階に。津波と聞いただけで恐ろしさに震え、恐い体験です。

地震の時、再度家に帰り、命を亡くされた方々が数多く、聞くだけで身のすくむ思いです。「これからの人々に十分にこの実態を伝達しておかないと」と痛感いたします。

2733-01 只越町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（仕事中、帰宅、避難呼び掛け、車避難、避難先から帰宅）
- ・被災時の様子（家族が被災した様子）

あの時は会社（只越町）にいました。2時にレストランを閉め、それから昼食、3時から休憩でした。地震の揺れる中、厨房に6人でいました。外から専務が「外に出ろ」と大声で叫びました。そこで皆外に出たら、壁が崩れ、周りが散らかっていました。すぐ家に帰ったら、夫から「何やってるんだ、早く避難しろ」と言われ、車で犬と孫を連れて、一中へ避難しました。夫は後で行くと言っていたのに、なかなか来ないので、孫が家に戻りました。家を出るときは膝下くらいの水になっており、孫は柱にしがみつき、（夫は釜石生まれで津波のことは分かっていたと思うが）夫は流されました。

3140-01 只越町 男性 50歳代

- ・被災前の意識（危機意識低かった）
- ・避難時の様子（自宅、水門閉鎖、避難誘導）
- ・被災後の様子（消火活動）
- ・被災の感想（避難促せず、後悔）

地震発生と同時に消防屯所へ駆け付け、水門閉鎖確認へ出動しました。全ての水門閉鎖を確認し、その後、管轄区域の啓発及び避難誘導をしました。自分自身、津波への認識が甘く、避難指示も誘導も全て甘くて、住民への指示が上手くできません。「家は2階があるから大丈夫」と言われれば、無理に誘導もできず、想定外、未曾有と言われるような想像を超えた津波が、まさか起こるなんて自分自身の津波への認識の甘さに落胆しました。もっと津波の脅威をしっかりと認識していれば、一人でも多く避難してもらえたのではないかと残念でなりません。本当に申し訳なく思っています。

しばらくは呆然として動くこともできず、その場にしゃがみこんでいました。数分が長く感じました。目の前の惨状を現実と理解することができず呆然としており、他の仲間（団員）の安否も分かりませんでした。避難場所へ仲間の元へと走りました。数名の団員が流された人たちを救出していましたが、その後、只越平野医院付近にて火災が起き、消火活動を全員で行いました。鎮火まで1時間ほどかかったと思います。

その後、全員の安否を確認したと思います。自分は避難誘導の際、避難場所を旧第一中学校、千寿院、青葉ビル、市民文化会館と伝えたことを思い出し、青葉ビルへ避難した人がいるかを、ガレキを越えて確認しに行きました。その時、付近の駐車場にボンネットから煙が出ている車輛を発見し、火災に発生すると思い、その旨を部長に報告しましたが、「今は対応することができない状況だ」と言われましたので、現場を放置しました。次に避難所にて怪我人や病人の確認を夜7時近くまでやりました。暗くなり、「明かりがほしい」といわれ、ロウソクなどを近所に集めに回りました。日付が変わる頃に青葉ビル付近の車輛火災が民家に移り、その消火に朝の5時30分頃までかかり、消防士、消防団、十数名で鎮火しました。ホース延長30本。約600mです。ホース一線だけの消火でした。

3月12日の午後、母の死を知りました。22時間不眠不休で頑張っていた自分が壊れて、その後の記憶はありません。

1131-01 只越町 男性 70歳代

- ・避難時の様子（自宅、避難呼び掛け、避難）
- ・被災時の様子（津波襲来時の様子）

あの日、私は家でテレビを見ておりました。ものすごい揺れを感じ、地震にびっくりして、外では「津波が来るぞ、逃げてください」の声でまたびっくりして、何から手を付けたらよいか、何を持ち出したらよいか、戸惑いました。避難する時に大事な物を持っていけるようにと、以前から用意しておいたザックを背負って飛び出しました。自宅のそばにある仙寿院に逃げました。その5分後、ものすごい高さで津波が怒とうのごとく押し寄せてきました。汚れ混じりの黒煙、すごい波の音、大津波、高さにすれば海拔15mくらいはあったかと思いました。2階か3階の家が津波で見えなくなり、また碎かれ、ガレキになる様を見ました。恐ろしい光景でした。皆様もそうだと思いますが、私も仙寿院の高台から、津波によって私の家がよその家々にぶつかり、ガレキになっていく様を目の前で見ました。その時の心境たるや、何とも言えない気持ちでした。向かい側のオカムラ工場の長さが350mくらいある建物の屋根が、70mくらい波の力で破壊されていくの目で見ました。

幸い知人がそばにおりましたので、30 日余りお世話になりました。その後、また別の方に 20 日ばかりお世話になり、寝泊まりさせてもらいました。支援物資、毛布やその他食事など諸々のことをやっていただき、本当に助かりました。避難されている皆様と一緒に食事し、特に若い奥様方、また消防団員の方たちがリードして頑張ってくれました。本当に有難うございました。その後、5 月 11 日前後だと思いますが、市から仮設住宅が当たりましたとの連絡があり、現在に至っております。ありがとうございます。

1796-01 只越町 女性 50 歳代

- ・避難時の様子（自宅、帰社、避難）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）

3 月 11 日、あの日は早めに仕事を終え、自宅にいたときに、強い揺れがありました。慌てて部屋を飛び出し、近くの勤め先に行くと、従業員が真っ暗の店内の中で不安そうにしていました。皆を連れてまたすぐ戻ってくることを疑いもせず、店に鍵をかけ避難しました。まっすぐ市役所に行ったが、「ここは危ない」と言われ、旧一中のグラウンドへ行き、その夜は店の仲間と体育館で新聞紙にくるまって一夜を過ごしました。

次の日、仲間は家族が迎えに来たりしましたが、私は一人だったので、バスで甲子中に行き、そこで 1 か月お世話になりました。親も親戚も釜石にいないので、たった一人でものすごく心細かったけど、同じ思いをした人たちや友達に支えられ、何とか挫けず頑張って今日までできました（いろんな人たちのおかげです）。今でもあのサイレンの音を聞くと、心臓がドキドキして落ち着かなくなったり、津波の映像を見る度胸が痛くなりますが、焦らず……ゆっくり……せっかく助かった命。少しずつ前に進みたいと思っています。

0645-01 只越町 女性 80 歳代

- ・被災前の意識（津波経験あり、先人からの伝承）
- ・避難時の様子（自宅、津波想起、すぐ避難、避難呼び掛け）

1 回目の地震の揺れはさほどではなかったので安心していった。しかし、2 回目の地震で、これまで経験したことのない大きな揺れに、「これはただごとではない、津波が来る」と思った。腰が抜けてしまい、歩行困難になりながら玄関まで這っていった。持ち出す手筈の物も何にもすることなく、玄関に座っていた。ご近所の方たちが「早く逃げて」と声をかけてくれた。まさかあのような大きな津波だとは思っても及ばなかった。

これまで津波を 4 回経験したが、今回は予想だにしない大津波。全財産を失った。しかし、負けてはいられないと思った。戦時中、艦砲射撃で二度焼き出されても生きた自分である。負けてたまるか。この意気込みで 84 歳まで命あった自分。津波の心得は「地震が揺れて足が地に着かなかったら、学校の山に逃げなさい」と祖母から言い聞かされていた。「物に執着しては命を落とす。必ず身一つで逃げなさい。命あれば物は何時でも買える」と言っていた祖母の言葉が忘れられない。祖母は明治 29 年の大津波の経験者であった。次の世代の方たちに語り聞かせる必要あり。

0085-01 只越町 男性 50 歳代

- ・避難時の様子（仕事中、帰宅指示、車帰宅）
- ・被災の感想（職員が犠牲、後悔）

激しい揺れに襲われ、ただならぬことと思い、職員に帰宅するように指示し、自分も自宅（甲子町 10）に帰宅しました。今にして思えば「自宅へ」というよりは、「より高台に逃げる」と指示すべきだったのか。職員 7 人のうち、大槌町の職員が死亡しました。一度は避難所に行ったようですが、自宅を見に行ったら津波に飲みこまれてしまったそうです。私は幸い自宅が海から遠方であったため、難を逃れた形になりましたが、車での避難も後で考えた場合、適切だったかどうか？ やはり、常日頃から避難すべき場所を確認しておくこと。また、津波だけとは限らないので、市内における避難場所を市民誰もが認識できるよう、広報なり標識なりで周知してもらえれば幸いです。

1402-02 只越町 女性 60 歳代

- ・避難時の様子（自宅、3m 安心、避難呼び掛け、屋内避難、流された）
- ・被災後の様子（救出）

あの日は昼食後、鈴子町のスーパーに買い物に出かけ、帰宅後、食品等を冷蔵庫に入れてる時に地震に遭いました。地鳴りとともに激しい揺れで、床にしゃがみこみ、揺れがおさまるのを待ちました。茶の間の主人が「動くなよー」と言いましたが、動けません。「どうしよう、どうしよう」次から次へと起こる地震にただごとではないと思ったが、地震の大きさに驚き、オロオロするばかり。自分に「し

っかりしろ」と言い聞かせ、外に出ると、防災放送から“大津波警報”を聞きました。近所の方々も外に集まり、「避難しよう、逃げよう」と旧一中方向へ移動していきました。道路は車が渋滞していました。主人は「高さ3mくらいの波であれば、ここまでは大丈夫」と言っていました。息子は避難道路へ避難していきました。

そのうち、主人が「古井戸の管から水が吹き出ているから必ず津波が来るぞ」と言い、旧一中の方へ避難することになり、持ち出し袋を取りに家の中へ戻りました。すると、外にいる主人が「お前達は2階へ行け」とドアを閉め、逃げていきました。私たちは急いで2階へ。その時、役所から「津浪が来た、逃げろ」の声と、波のゴオーッという音も聞こえてきました。2階の窓を開けたら、前の駐車場入口から山のような黒い水がやってきました（木材等も一緒に）。窓を閉めると同時に勝手口がガチャーンと壊れ、一気に階段から水が。部屋の引き戸が外れ、2階にいた私たちの膝上まであったという間に水が入ってきたので、娘と二人で押入れ上段へ上がりました。「さあどうしよう、外には出られないし」と考えていると、第二波が止まり、2階から滝のように水が落ちる、その音のすごいこと。部屋の水が引いたように思い、水の中を歩き窓を開けて、びっくり。窓枠すれすれの水と家々からの漂流物が引き波でどんどん東方向に。「あっ、近所の木造の家々がない、道路西側の家もない、見えるはずない遠くの鉄骨3階建ての家が見える、あーあー、大変なことになった」と思っていると、また水が来た。娘を天袋の段に押し上げたが、私は上がれない。押入れ上段に座って水が止まるのを待った。部屋のタンス、ベッドが浮き、倒れたりした。波が来るたびに、窓を開けたり閉めたりを繰り返して、外の様子を見ていた。

西側の窓を開けたら、逃げた主人の声が。「あー、助かって良かった」、「宝樹寺にいるから」と。夕方薄暗く人々の顔が見えないけど、手で大きな丸を作り、無事を伝えた。そのうち、近所の奥さんから「今助けが行くから頑張って」との声が。

その後、娘が、窓の手すりに掴まり、1階のスラブ上に幅1mくらいの所に下り、流れ着いていた冷蔵庫を足で下に落とし、私たちの下りるスペースを確保し、そこで救助を待った。先ほどの奥さんが救助の方と一緒に来てくれた。ガレキの上を這うようにして、分庁舎近くの駐車場まで移動した。そこに役所の方々、近所の方、主人もいてほっとした。私は分からなかったが、救助してくれた方は自衛隊さんだったそうです。「何で自衛隊さんが？ 早い」と思いましたが、その方は当日役所に用事で来ていた方だと、後で分かりました。その方は庁舎前で津浪で流された人々を助け、もう一人を助けようとして一緒に流され、近所の家の2階に押し上げられ、その2階で下で流されていた二人をシートをつないで救助し、その奥さん方を避難させてから、私たちとお隣の若夫婦を救助したそうです。その自衛隊さんは滝沢の駐屯基地の隊員の方と聞きました。本当にありがたく感謝しております。

この震災でたくさんのことを思いました。そして地震、津波の恐ろしさを今、痛感しました。危機感がなく、余りにのんびりしすぎ、津波を侮っていました。「ここまでは」と、昔の津波が来た所には必ず来ると実感しました。防災放送も大津波警報の連呼じゃなく、大津波来襲の連呼でお願いしたいと思いました。全国の皆様、ご支援くださった方々、本当にありがとうございました。

2121-01 只越町 男性 70歳代

・避難時の様子（自宅、片付け、避難呼び掛け、ここまで来ない、避難せず、屋内避難、流された）

大津波により、鉄骨3階建ての自宅は全壊（3階の部屋一部残存）した。

当日は、午前中に大槌のスーパー（マスト）に妻と二人で買物に行き、11時半頃自宅に帰る途中、両石の堤防の脇を通るときに、「もしも津波が来ても、堤防の嵩上げをしているので大丈夫かな」と二人で話しながら、我が家に帰宅。昼食をしながら二人でテレビを見て雑談していると、2時半過ぎに、突然今まで想像もつかないほどの大地震が発生した。すぐに家内と二人で外に飛び出す。隣近所の人たちも不安そうな顔で道路に立って話しあっていた。自分たちは洗濯物を物干しから外し、家の中に入り、畳み終わると間もなく、海の方から消防自動車が通りながら、「大津波が来るから早く避難をしろ」と大声で叫んで西の方面に走っていった。

「まさか3階までは津波が来ない」と思って油断したのが間違いだった。3階の窓から東の海の方を見ると、約7～8mくらいの大津波が道路沿いに来るのが見えた。「これは大変なことになる」と思い、2階の茶の間にいた妻に、「大津波が来るから早く3階に上がってこい」と叫んだ。妻が階段を駆け上ってくると、津波が後ろから追いかけるように迫ってきた。「ここには危険だな」と思い、3階の窓から鉄梯子に上り、妻の尻を押し上げ屋根に上げ、自分も後から屋根に上がり、二人でガレキの栈にしがみついた。我が家から下の方を見ると、一度目の津波で隣近所の家が、次から次に流されていくのが見えた。とても見るに忍びない光景に、ただ呆然と眺めていた。何気なしに我が家の裏山の避難道路の方を見ると、隣近所の大勢の人が皆並んでこちらを見ていて、「誰かが頑張って」と声を

かけてくれた。今思うと命が良く助かったものだと思う。

3623-02 只越町 女性 40歳代

・避難時の様子（工作中、帰宅、避難呼び掛け、片付け、避難、九死一生）

パニックで大津波警報が発令されたことも知らず、職場から家に戻ったとき、小学4年生の娘に「津波が来るから、早く逃げよう！」と言われても、家の中の様子を見に行ってしまった。ペットの無事を確認し、すぐ高台に避難すればいいのに、ゆっくり片付けをし、娘、夫から何度も災害用メールで催促され、やっと避難し、その2分後に津波が来た。自宅は全壊でしたが、ペットは無事でした。これからは小さな地震も甘く見ないで、体を守ったり、避難します。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (2) 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）

[C. 天神町]

1) 補足調査における証言

（天神町第3町内会：藤沢裕子さん、菊池林一さん、菊池廣子さん、佐藤順子さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・高台の避難した住民の中には、目の届いた住民に対して避難を呼びかけた方、津波の襲来を叫んで伝える方もいた。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・避難を呼びかけたが、自宅に留まり流された。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・地震後、一部の住民は、近隣の天神児童公園に集まり、周囲の様子を見ていた。その後、公園に留まった方、家の片づけをするため自宅に戻った方もいた。地震直後から、旧一中、仙寿院に避難する方もいた。高台に避難していた家族が見えたので、合流するため移動した方もいた。
- ・公園に留まった方の中には、高台の仙寿院からの「津波だ。逃げろ」の声を聞いて、旧一中に避難した方もいた。
- ・自宅に留まった方は、2階に避難して、後に救助された。
- ・概ね地域の方は、仙寿院に避難した。地域外の方も大勢避難していた。
- ・ここまで津波は来ないと思っていたので、避難する緊迫感、危機意識が薄かった。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・避難についての取決めは、特になかった。
- ・3月3日の訓練は、各自の都合で参加した。通年7、8人程度の参加であった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・放送の内容が分からなかった。聞いた記憶がない。響いて聞こえづらかった。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など）

- ・津波が来たとしても、ここまで来ると思わなかった。幼稚園に避難する程度で大丈夫と思った。すぐ自宅に戻れると思った。
- ・親から、過去の津波は、家の前の通り（天神町と只越町の境界）まで来たと聞いたことがある。自宅はそこから数件分、高台側にあるので大丈夫だと思った。
- ・震災後、地域の見通しがよくなり、改めて海が近くにあることが分かった。

2) 地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

1787-02 天神町 女性 60歳代

- ・避難時の様子(仕事中、すぐ避難)
- ・被災時の様子(周辺住民の様子)

経験したことのない地震のため、建物の倒壊を恐れ、職場から出た。その際、通行人から3m～4mの大津波が来ることを知らされ、その大きさに驚き、急いで高台にある仙寿院に向かいました。その間、消防車が避難指示をしながら目の前を通るのを見て、これはただごとではないと思いました。同僚3人と避難していましたが、仙寿院の入口で、1人が「松倉の自宅に戻る」と言って別れてしまいました。彼はそのまま帰らぬ人となってしまい、なぜあの時、もっと強く引き止めなかったか悔やむばかりです。とても残念に思います。今後はこの経験を生かし、地震が起きたらすぐ逃げる、また戻ろうとする人がいたら必ず引きとめなければならないと思いました。

2748-02 天神町 女性 60歳代

- ・避難時の様子(外出先、帰宅、避難、避難先から帰宅、九死一生)
- ・被災の感想(家族で相談すべき)

主人と私は駒木の山へのウォーキング帰りでした。ちょうど展望台を下ったところで、強い揺れが襲ってきました。立っていることができず、ガードレールにしがみつき、電線が左右に大きく揺れ、ただごとではないと感じました。妊婦の娘が家で留守番をしていたので、携帯で避難連絡しようにもつながらず、焦っていました。知らない人から「大津波が来るから戻らない方がいい」と言われましたが、頭の中は「家に帰らなければ……」としか考えませんでした。津波が来るまで時間があつたので、家に帰ることができました。娘は仙寿院に避難していたので、私たちもそのまま仙寿院に避難しました。その日はとても寒く、主人にオーバーを家に取りに行ってもらいました。そして、7,8分後だったと思います。自宅に津波が押し寄せたのは……もし、家に服を取りに行った時、津波が来たら……それを思うと、身震いがし、今でもとんでもないことをお願いしてしまったんだと、とても反省しています。

この大津波をきっかけに、どこにいても、どのように避難するか、家族で話し合うきっかけになったと思います。今、93歳の母とも一緒に暮らしています。耳がほとんど聞こえないので、私たちが外出している時が一番心配です。今回は、デイサービスに行っていましたので、職員の方の誘導で6日目に再会でき、とても嬉しかった。誰もがここまで津波は来ないと思ったことでしょう。「絶対大丈夫ということはないんだ」とつくづく思い知らされました。これからも、家族で地震、津波について、何度も話し合っていきたいと思っています。

2251-02 天神町 女性 50歳代

- ・避難時の様子(自宅、3m安心、とりあえず避難)

いつものように11時から2時まで、近くのお蕎麦屋でバイトをしていて、2時から犬の散歩を日課としていました。散歩コースは港町からオカムラの辺りを一周りして帰るのが日常でしたが、犬が途中で走り散歩を止めて、すぐ犬に走り着きました。それからの大地震でした。もう家が壊れ、「最後なんだ」とその時思いました。携帯も通じず、市から「大津波が来る」と知らされても、3mと聞いたので、しばらく家にいました。それでも一応逃げようとして外に出たけれど、まさか家まで来るとは思わず、犬は置いて出ましたが、誰もいないし余震も不安でまた戻り、犬と逃げました。

一中の上で轟音と土煙が上がっているのが見えただけで、何が起きているか全く知ることもありませんでした。家に帰ろうと思い、坂を降りようとしたら「水が来ているから行くな」と言われました。不安で少し坂を降りたら、自宅が半分以上水に埋まっていました。涙も出ませんでした。寒い中、犬と一緒に寒い外にいました。寒いし雪も降ってくるし、とても現実とは思えませんでした。それでもせっかく助かった命と思いましたが、便利な生活に慣れっこになっていたため、生活は苦でした。真っ黒な闇の世界で、音もなく、水もなく、着の身着のままで逃げたので、寒くて不安な夜を過ごしました。自衛隊の方々を見た時は、とても頼もしく、助かったと思いました。私の家の中を自衛隊の方が見に来たとき、何も言わず、肩をポンと叩かれました。

言いようのない破壊力で家は外と思うほどでした。それでも友人宅に犬と一緒に世話になり、幸せな避難生活だったと思います。私の家の近所の方々も亡くなった人たちがいます。今は家も直し、生活も落ち着きましたが、のびのびだらだらすることのできる自宅がありがたく、幸せに思います。ほんのちょっとの時間で布団から衣服、写真、家電、家具と皆のこれまでの宝物が全てなくなりました。こんな思いはもう二度と起きてほしくありません。そして全国からの助けをいただき、これから

は自分たちが少しずつ返していこうと思います。

3134-02 天神町 女性 30 歳代

- ・被災前の意識（危機意識低かった、教育受けていない）
- ・避難時の様子（仕事中、津波想起せず、家族の迎え）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）

地震発生時は職場にいた。15 時 20 分頃、市街地の保育園に通う子供のことが気がかりで、市街地へ向かった。津波は全く頭になかった。私は市内の小中学校を卒業しているが、当時の教育では津波は考えられなかったように思う。危険性の少ない地域だからか？ 地震イコール津波の意識は全くなかった。

鈴子マイヤ付近で浸水により通行止めになった。誰に聞いても何が起こったのか分からなかった。市役所勤務の知り合いに会い、何が起こったのか聞いたが、「防災無線を待て」とのことだった。無線はならなかった。職場に戻り、どうするか考えたが、少しでも子供たちの近くにいる、水が引いたら歩いて市街地に入ろうと、駒木付近の邪魔にならない場所に車を停めて待機した。3/11 に入れようと思っていたので、ガソリンはほんの少ししかなかった。ものすごく寒かった。時々、車のラジオをつけた。それでも津波とは思わなかった。

誘導員の方が「昭和園のクラブハウスに移動しなさい」と教えてくれた。この人が保育園の子供たちが無事であることを知っていた。移動しながら泣いた。クラブハウスのラジオで、「大槌は死者が何万人で釜石は 6 人」と言った。それしか被害がなかったかと思う反面、有り得ないと思った。そのラジオのニュースを聞いても津波は頭になかった。

翌日の早朝、駒木を通して市街地に入った。川の中に転々と車が落ちていた。大渡に入るとガレキの山で地獄のような風景の中、人がポツポツ歩いていた。子供と主人に再会してホッとした。

避難した子供がお昼寝時間でパジャマに裸足だったので、翌日、天神町の自宅に一人で向かった。小山のようなガレキの山を越えて、やっと郵便局付近に着くと、うつ伏せで亡くなっている人がいて、これ以上は進めないと思い、引き返した。何もできなかった自分の無力さを感じた。

私の父母は、実家からの避難中、大町で波に飲まれ、父は死に、母は九死に一生を得た。実家の飲食店はめちゃくちゃになった。定内町の親戚が子供たちを案じて家に寄せてくれた。ガソリンも食料も不足している中、皆で協力して何とかやった。福島原発のことも新聞が読めるようになって初めて知った。1 か月ほどは混乱しており、当時あった事はおぼろげにしか思い出せない。とにかく必死で生活していた。1 か月ほどして自宅に戻った。4/7 にあの大きな余震があり、停電したことでもものすごく怖くなった。自分でどこに逃げたら良いか考え、その場所へ何度も行って見ている。沿岸に住んでいる限り、災害は明日かもしれないと思って生きるしかない。

3017-01 天神町 50 歳代

- ・避難時の様子（外出先、車帰宅）
- ・被災の感想（後世に伝えるべき）

- ・この地域のプレートによる津波来襲は約 30 分後と知っていたが、地震直後、大通りに出て空を見上げる人は多かった。既に信号は消え、まだ電線は揺れていた。大渡から津波を避けるように裏通りを走って、天神町の自宅に着いた。近所の人も遠くにいたが、すぐ行動したため車だったが帰れた。
- ・すぐに逃げれば間に合う信号のない裏を行け。
- ・外出先での避難場所、経路を家族で知っておくこと。通信が途絶えることも頭に。
- ・電気の無い生活を伝えよ。
- ・防波堤を過信するな。人の作りし物には想定や安全率、手抜きが付き物。自然の破壊力を伝えよ。
- ・今回は昼間だったが、夜だったらどうか。家を修理する前に二度と被災せぬよう熟慮し、英断してほしい。残念ではあるが、町はますます高齢化し、人口減少が続くだろう。安全でコンパクトな町作りをしていくことを望む。

※片田先生他のおかげで釜石の子供たちの被害が最少に済んだことに感謝致します。ありがとうございました。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (2) 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）

[D. 大只越町]

1) 補足調査における証言

（山崎倫昭さん、菊池玲次さん、菊池節子さん、口川房之さん、後藤時夫さん、廣田昭仁さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

・地震発生後、すぐに危険を感じて避難を呼びかける住民は少なかった。ただし、公衆浴場等では来客者に迅速な避難を呼びかける場合もあった。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

・人的被害はなかった。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・大部分の住民は、「大只越町は避難先である」という認識を持っていた。そのため、地震後も自宅に留まった方が多く、速やかな避難行動に結びつきにくかった。
- ・玄関戸の隙間から水が上がって来るのを見ても、すぐに津波であることが分からない方もいた。
- ・津波到達の波打ち際は勢いが弱かったことから、津波が目前に迫ってから避難した方もいた。一時退避したものの再び戻り、津波の様子を見ていた方もいた。
- ・市街地に近いこともあり、地域外の住民も、数多く町内の指定避難場所に避難してきた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

・自主防災組織は設置していなかった。地域では津波防災はほとんど考えられてこなかった。これまで主に火災や大雨等の災害が懸念されていた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

・聞き取りなし

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

・「高さ3m」という情報、サイレンの音は聞こえた。放送内容は余り理解できなかった。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関する地域の主な施設など）

- ・地震発生後、只越町方面で土煙が上がっているのが見えた。
- ・トラックが流れて来て、クラクションが1時間ほど鳴りっぱなしになっていた。
- ・昭和の津波は児玉商店まで到達したと聞いたことがある。ただし、湾口防波堤の完成により、津波エネルギーも減じることから、まさかここまで来るとは考えなかった。
- ・震災後、地域の見通しが良くなり、改めて海が間近にあると気付かされた。

2) 地域懇談会における証言

口川房之さん

- ・震災以前の指定避難所は、青葉公園と薬師公園。大只越集会所は指定ではなかったが、そこに避難訓練では使っていた。
- ・地震が発生したときは、上のほうにある貸家で作業をしていた。我が家が心配になり下がってしまった。そのとき、第1波が来て自宅まで来なかったが、波の寄せ方がゆっくりだったため安全に逃げきる時間があると思って第2波以降のことを考えて避難するか近隣住民と様子を見ていた。

多田彰一 さん(大町町内会長)

- ・青葉ビルが避難場所なのだけれど、訓練のときは寒さをしのぐために建物の中に入っていた。今回の震災のときも同じように行動していて、高い階に移動がすぐにできない建物であったため、逃げ遅れて犠牲になった方がいた。

山崎倫昭 さん(大只越町町内会長)

- ・地震が発生したときは自宅にいた。自宅1階にいた母を連れて、釜石簡易裁判所あたりで待機した様子を見ていた。高台にいたので、津波のことは考えておらず地震のことだけを考慮して避難した。
- ・市が配布する防災マップに従った避難すると、自宅より低い場所に避難することに疑問を持っていた。

合澤ミサ子 さん

- ・地震が発生したときは、釜石市民文化会館近くを自転車で移動中だった。あれだけ大きな地震だったり、大津波警報を聞いたりしていたけれど、もともと釜石出身ではなく、そのとき親戚が近くにいなかったため、津波避難のことを考えずに、そのまま買い物に行った。買い物を済ませたあと、薬師公園の前を通っているときに避難している方を見て、「もう避難するのか」と関心をしながら自宅に帰った。そして、青葉公園に避難しようとしたが、ほかの方たちがもっと上に真剣に走っているのを見て、自分も釣られて駆け上がった。そのとき振り返らず走ったため、津波は見えていない。

石田滋子 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。その後様子を見ていたら、近所の方が避難してきて、その方が怪我をしていたので、切り傷の手当てをしていた。そのとき、ホテルサンルート釜石に家屋が流されてきたのが見えたので、急いで避難させた。
- ・自身は避難したが、津波で流されて来て自宅2階に流れ着き、窓が開いていたため助かったという話を聞いた。
- ・避難訓練で使用していた青葉ビルに一度は避難していたが、津波が来たから高台へ移動した方もいた。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

1518-02 大只越町 女性 40歳代

- ・避難時の様子(仕事中、車帰宅、車乗捨て)
- ・被災の感想(家族が犠牲)

職場(定内国立釜石病院)で揺れを感じ、停電。ラジオからの情報を頼りに車で中妻まで走ったものの、信号もなく、ときどき車ごと揺れを感じながら、「自宅まで車で行くのは不可能だ」と思い、サンパルクに駐車後、徒歩で大只越の自宅を目指しました。しかし、五の橋を渡る途中、甲子川を見ると逆流していました。「息子は？ お父さんは？ 実家(桑の浜)の両親は？」、大渡橋の向こうに見える釜石小学校にいるであろう息子や主人のことを思いました。鈴子のマイヤから見える釜石駅前には浸水し、車が浮かび上がって揺れていました。消防、警官の方々が「お母さん、行けないよ。行っちゃ行けないよ。無理だよ」と言われ、「津波だよ！ 3波目だよ。まだ来るよ」と言うのです。理解できないまま、教育センターで1泊しました。長い長い夜でした。星のきれいな夜でした。駒木の旧道を走る車のライトだけが異様に光っていました。「もう朝は来ないのか」とも思いました。

東の空がオレンジ色に輝き始めた12日の朝、車を取りに中妻まで歩き、信号のない町を走り、自宅のある大只越を目指したものの、またしても消防の方に足止めされ、車を釜石付近に駐車。徒歩で千鳥町、駒木を歩き大渡までの道すがら見た光景は……涙、涙「一体何が起こったの？」という感じでした。息子は釜小にはいなくて、次はのぞみ病院。涙、涙、涙。次は大只集会所。ふだんどおり歩けるはずもなく、爆撃でもあったかのようでした。息子と主人は簡易裁判所にいました。安心したのは安心でしたが、ラジオから聞こえる避難者名簿の名に実家の両親を確認できないまま1日、2日……

これらの体験は語り継ぐべきものでしょうか？ 思い返すたびに背中から頭から肩からゾクゾク鈍感がして、「こんな辛い思いをするくらいならいっそ自分も……」と考えるのは自分だけでしょうか？

防災無線は「大津波警報3m、6m、海岸近隣の方々は直ちに高台に避難してください」といつもの調子で冷静に言うんです。半鐘を叩きながら、釜石弁で「逃げろ、逃げろ、津波だァー、皆、早く

逃げろ」と言ってもらった方が本気で逃げる気になると思う。そうしたら実家の両親も逃げていただろう……逃げて助かって生きていてほしかったです。

1783-01 大只越町 女性 50歳代

- ・避難時の様子(工作中、家族の迎え、避難)
- ・被災後の様子(当日の避難所の様子)

会社で強い揺れを感じ、家族のことが心配になった。特に保育園に行った孫が気になり、ジャンパーを着て迎えに行くと、薬師公園に避難したとのこと。そちらへ行くと、昼寝の最中だったので、孫たちはパジャマに素足という状態で、先生方が持参した布にくるまれていました。何度となく揺れが続き、ようやく少し落ち着いたところで先生に話し、孫を抱いて階段を下りようとしたとき、「上に上がれ」と言われ、ふと外を見ると津波がこちらの方へ向かってきていた。呆然としていたら、近くの消防車、救急車などが人を乗せたまま、洗濯機に放りこまれたミニカーのように渦のなかに巻き込まれていました。それはまるで映画の1シーンのようで、なかなか現実として捉えることができませんでした。何も持たず、迎えにきたことを後悔していました。

のぞみ病院へ保育園の皆と避難したのは、それから間もなくのことです。家族にも連絡がつかず、このまま2人だけになったらどうしようと思っていましたが、幸いなことに皆、無事。病院で会うことができ、ほっとしたものです。病院の皆さんや役所の方、保育園の先生方のおかげで、少ない食べ物を分けあって食べたり、毛布の提供を受けて、寝床を作ったりと、感謝しきれないほどでした。ただ停電のため、暗い階段の登り降りやトイレに困りました。また保育園としての避難から個人別になった途端、役所の女性職員から「広い場所の使いすぎ」と言われ、「のぞみ病院の9階にもかかわらず、下の階の方々は狭い所で、こんなに広く使っている」と罵倒されたことが、今も心に残っています。先生方の尽力でこのまま使用してもよいと言われ、子供たちもまだ10人以上もおり、どこにも出られず、その部屋での遊びだけが子供たちのストレスの発散場所でしたので、困惑してしまいました。その後、縮小して他の方々が入ってもよいようにしましたが、誰も9階まで上がってくる方はありませんでした。「もう少し子供たちに配慮があっても」と思わずにはいられませんでした。もちろんこんな時だから仕方ありませんが、子供たちは3度も部屋を替え、どんどん上の階に押しやられました。役所の方も大変だったとは思いますが、もう少し優しい口調で言っていれば、と今でもやっぱり思っています。その後、ここにはいられないと出ました。ボランティアの皆様や自衛隊の方々、近所の皆様、もちろん役所の方にも助けられ、今はアパートを借りて生活しています。本当にありがとうございます。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (2) 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）

[E. 大町]

1) 補足調査における証言

（合澤洋子さん、佐々木清明さん、藤田政司さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・地震発生後、消防団員は消防車で地域を巡回中、甲子川が溢れると判断したため、住民に避難を呼びかけた。体が不自由な高齢者の避難を手助けた。
- ・一度避難したものの、ガスの元栓等が気になり自宅に戻った住民に対して、注意又は制止した住民もいた。
- ・家に取り残されていた子どもに対して、屋根へ上がるように指示した方もいた。
- ・目前にガレキが流れてくるのを見て、高所にいた住民の一部は、下の通行人に注意を促したが、ガレキが押し寄せる轟音にかき消されて聞こえなかった。
- ・ハンドマイク、消防車のスピーカーなどから避難を呼びかける切迫した声を聞いた方がいた。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・一度避難するものの、家族を心配し、自宅に戻り流された。
- ・自宅の階上に一時避難するものの、階下に下がり流された。
- ・避難所への移動中に流された。自宅は堅牢な2階建て以上の建物であった。
- ・湾口防波堤の完成により、津波は来ないと日頃から言っていた肩もいた。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・地震発生後、一部の住民は、比較的早めに青葉児童公園、薬師公園などの避難場所に避難した。地震から30分余り経過したことから、家の戸締まりなどが気になり自宅に引き返した方もいた。
- ・ガレキが目前に迫っているのに、振り向くことなく、通常の歩行スピードで避難している方がいた。呆然と立ちすくんでいる方もいた。
- ・渋滞中、ガレキが迫るのを見て、急いで車を乗り捨てて、高台に避難する方もいた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・地域として、自主的な避難訓練を実施したことはなかった。3月3日の避難訓練に参加する程度であった。
- ・釜石小学校では、群馬大の協力により防災教育を行っており、防災講演会に参加していた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

- ・民生委員の会議では、高齢者の一人暮らしに関わるテーマが多く、日頃から関心を寄せていた。
- ・小学校の防災教育の成果により、子供に避難を促されて行動した住民もいた。湾口防波堤への過信や津波は来ないという思い込みから、避難することを羞恥する大人もいた。子供が受けた防災教育を通じて、家族で津波避難の重要性に改めて気付かされた。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・途中から無線の呼びかけ方が変わったため、危機感を持って避難した。
- ・消防団のポンプ車は3台のうち1台しか無線が使えない状況にあったため、市の防災無線が広範囲に聞こえるように、対策を講じるべきである。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など）

- ・チリ地震津波等の様子を伝え聞いていて、町内の被害が余りなく、津波とはこんなものと思い込んでしまった。今回その予想をはるかに超えた。
- ・初め、津波は見えなかった。大通りのアーケードの高さ一杯まで、ガレキがバリバリといった異常な音を立てながら迫ってきた。

2) 地域懇談会における証言

小池三郎 さん

- ・防潮堤があるということで安心しきってはだめだと思った。津波の危険性があつたら、それが越えるかもしれないと考えて避難しなければならない。

中川カヨ子 さん

- ・地震が発生したときは買い物中で、地震がおさまったあと自宅に帰った。その後、徒歩で避難を開始したが、途中で津波に飲まれた。流されてしまったが、木に掴まっているところをアーケードに引き上げて助けてもらった。

合澤洋子 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。家族を先に避難させて、民生委員としての職務として町内の見回りをしてから車の乗らずに走って避難した。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

0450-2 大町 女性 30 歳代

・避難時の様子（外出先、車帰宅、屋内避難、流された）

あの日、私は大槌町の歯科医院で治療中でした。大きな揺れが何度も長く続き、院内は停電、周りの棚など倒れてきました。院内には 10 分くらいいたと思います。院長先生や助手さんたちが、私は釜石だからということで（通行止めになったら帰れない）、「気をつけて」と言われ、帰してもらいました。

外にでると皆慌ただしく、帰ろうとしていました。信号は止まり、マストの駐車場の出口付近は出られない車で渋滞していましたが、私は運良く何とか片岸の三陸道路を通りながら釜石のアパートまで帰ることができました。その間、車内のラジオではずっと津波警報が流れていて、何度も変わる津波の高さに不安を感じ、とにかくアパート（家）に帰ることを一番に考えました。車を降りアパートへ入ろうとすると、仕事終わりの母と会い、何年かぶりに話をすることができました。1～2 分だったと思いますが、最後の会話となりました。

アパートに入り、3～4 分経った頃、ものすごい地響き。私の夫はワンセグで港の映像を観ていましたが、「あっ、トラックが流されている、津波だ……」と言って、窓の外を見ると、ものすごい勢いで黒い波と一緒に車やいろんな物が流れてきました。余りの光景に動くことができず、気付くと窓の隙間から黒い水がものすごい勢いで入ってきました。逃げようとした時にはドアが水圧で開かず怖かった。引き波の時に 3 階へ上り何とか助かりましたが、下半身は濡れ、一晩中ブルブルと震え、とても寒く怖くて不安な夜を過ごしました。

0450-01 大町 男性 50 歳代

・避難時の様子（自宅、家族の様子見、帰宅、流された）

3.11 は消そうとしても、全く消えてくれない止まった時です。

あの日、アパートの 2 階の部屋で地震を体験し、床に伏せて揺れがおさまった頃、表に飛び出しました。人々が道路上で話をしていました、まだ避難する人はいませんでした。

実家に戻ると、2 階の食堂と 3 階の日本間のあらゆる物が落ち、天井の電気も落ちていましたが、母は無事でした。停電してしまったので、携帯用のワンセグテレビでニュースを見てみると、トラックが波に流される場面が映し出されました。消防車が避難するように通過していく横をアパートへ戻ると、大槌町へ外出していた妻が運良く（本当に奇跡です）帰ってきました。アパートの部屋に入り、5 分後に信じられない津波の来襲です。何か外で音がするので窓を開けると、只越方面から波の壁が押し寄せてくるではありませんか。激しい音とともに車から木材から全て飲みこんでいきました。木造の飲食店が多いのですが、全て巻きこんですごい勢いでした。私の部屋も膝まで水が入ってきて、もちろんドアも開きません。何とか第一波を過ごし、第二波がくる前に 2 階の廊下へ逃げ、様子を伺っていると、近くの屋上などへ逃げた人たちの声が聞こえてきました。それも第二波に消され、第三波そして暗闇、2 階の部屋に戻り、寒さに震え、死を覚悟しました。

水が引いたのは翌朝。泥の中を釜石ベイシティホテルまで逃げ、生きることができました。

7100-01 大町 女性 60 歳代**・避難時の様子（避難、流された、救助）**

あの時、私はちょっと甘かった。逃げ遅れた隣人の方とともに胸まで海水に浸かり、目の前が渦になり、渦に足を取られ流されそうになった。管理人さんを引っ張り上げ、50 日目の子どもを抱っこした親子を背中壁に押し付けての戦いだった。その後、海水は引いたが、体は濡れ、寒いし、朝まで心の戦いだった。ともに話しあったり、足を動かしたり、手を上げたりして、朝方 5:30 まで 15 時間の戦いだった。2 階にいてもこのような状態で、「よく助かった」と鳥肌が出る。

本当に自然を甘く見てはいけない。地震となったらまず逃げることも考えるが、火元、ガス栓なども考えなければならない。今回釜石は大きな火災がなかった。でも安堵感がある。自然には大雨もある、大風もある、何かにつけ懐中電灯が必要と思った。常に容易しておく必要があることを感じた。

3399-03 大町 女性 50 歳代**・被災前の意識（先人からの伝承）****・避難時の様子（自宅、津波想起、家族の様子見、帰宅、車、家族の迎え、渋滞）**

あの日、私は交通安全の見守り隊の当番で、大町 3 丁目の山陰ランドリーの交差点で 13:40 から 14:10 頃まで子供たちの下校を見守っていました。ほとんどの子供たちは帰宅し、遊びに出かける子、自転車に乗り、友達の家に向かうのか急いで通りすぎる子。私は 15 時から写真の仕事をする夫の手伝いをするため家へ戻り、14 時 45 分に出発しようと思っていました。場所は自宅から近い新華園で、釜石ラーメンの撮影でした。

テレビの横に立ち、出発しようというときに、揺れがきました。テレビを見たら地震速報が流れ、東北地方の地図が映し出されていました。「これは大変、ついに来た」と思い、次第に強くなる揺れのなかで、とっさにバラバラの家族の居場所を思い出そうとしていました。「息子は釜石に居るかな」、「次女は近くのスーパーで勤務中」、「長女と 2 人の孫は朝のメールで大渡の歯科医院にいるはず」、家には足腰の悪い義母と夫と私。以前から娘の働く建物が古く、地震のときには崩壊するのではないかと心配していたことと、大津波が必ず来ると思い、娘がそういう認識を持っているか、とても不安になりました。「今伝えておかなければ後悔する」と思い、義母を夫に任せ、揺れている中、サンダル履きで走ってスーパーまで行きました。まるで船底を走っているように身体が斜めになりながら必死で走りました。娘はお客さんのおばあさんと店の外に出ていました。「絶対に大津波が来るから、とにかく高い所に避難して」とだけ伝え、自宅へ戻りました。

夫は車を出し、義母を乗せていてくれました。私はこのとき“ほっと”しました。以前、津波の話になったとき、夫と私は意見が合わず、津波が来ても「自宅の 2 階へ避難する」と言っていたからです。家には鍵をかけないというので小さいカバンに通帳だけ入れて、ジャンパーも着ないまま車に飛び乗り、娘と孫がいる歯科医院へと向かいました。途中、釜石保育園の子供達が薬師公園へ向う姿が見えました。信号は止まり、車は既に渋滞していました。歯科医院に着き「早く車に乗って」、「先生、大津波が来るそうです」と告げ、私たちは大渡の旧国道へ避難しました。息子は下校中、鈴子の辺りで地震に遭い、一旦帰宅し薬師公園に避難し、そこで次女と会い一緒に行動したそうです。

私は家にあった釜石の昔話（題名は忘れてしまいましたが）を郷土史で読んだことがありました。その本には薬師公園の下の辺りまで船が流されてきたこと、両石の松の木に流された人が引っかかっていたことなど、まさかと思うことが書いてありました。また私の義母から津波の話を聞いていました。だから、私の体には「津波は怖い」と染みついていたと思います。

0155-01 大町 男性 60 歳代**・避難時の様子（自宅、ここまで来ない、片付け、津波確認後避難、九死一生）**

私は地震発生時に自宅にいました。津波が来るとしても自宅の床下くらいと思い、2 階の後片づけをしていました。それから 20 分くらい経った頃です。バリバリと音が聞こえまして、2 階の窓から見ると近くの家（500m くらい先）が流されてくるのが見えました。慌てて、非常持出品も持たずに素足で薬師山に走りました。近所への声掛けもできず、まず山に向かって走りました。薬師山へ向かっている途中で、左側から里に水が流れてくるし、右側から家、車等が流されてくるし、もう駄目かと思いました。何とか薬師山に着きまして、それから 30 秒くらいして津波が来ました。

「地震の時は高台へ」、その時にようやく分かりました。

2558-02 大町 女性 60 歳代

- ・避難時の様子（外出先、帰宅、津波想起せず、避難者確認後避難、流された、救助）
- ・被災の感想（家族が被災）

地震が起きた時は、近所の魚店にいた。急いで自分の店に戻り、少しおさまってから再び魚店に。買物をして家に帰り、夜宴会の予約が入っていたが、地震の後、連絡が取れず。何事もなければ時間には来るだろうと思い、夫と二人で仕込みを続けた。

外を見ると近所の人たちが逃げるのが見えたので、「やはり逃げた方がよいだろう」ということになり、外に走り出た。先に逃げた人と5分くらいしか違わなかったと思う。地震がおさまった後、夫が3階を見に行き、落ちた物が散乱していたので、津波のことは思い浮かばず、建物が倒壊することを心配した。そのタイミングは津波がそこまで来ているギリギリの時間だったようだ。

無意識というか、相談した訳ではないが、いつも避難訓練している薬師公園に行こうとしていたと思う。信号が止まっており、車が一杯で、向かいの通りに渡れないでいる時、後ろの方から「水が来た」と声がした。旧ニチイの跡地の方を振り返ると、土の上を転がるように水が見えたので、流されないようにとアーケードの柱に掴まり、夫にも掴まるように叫んだと同時に、左側から背の高さの水と救急車や消防自動車、乗用車などが流れて来た。一瞬にして水の中だった。後日、映像を見せてもらったら、左右から来た水が自分たちのいた辺りで合流して、あの高さになったようだ。車が自分の方に流れてくるのが見えたので、手を離れた途端、頭から飲まれた。死ぬかと思っていたとき、とにかく苦しいので「息を吸わなくてはい」と思い、上に向かって泳いだ。流木らしき物に掴まり、息をしていると、上から「今助けっから」と声がした。自らも消防自動車で流された消防士が、やはり泳いでアーケードの上にあった。背中を掴んで引き上げてもらい助かった。鶴ヶ旅館に吸い込まれた3人と、4人で窓の鍵が開いていた東北電力に入り、会議室で一晩過ごした。

夫は翌日、佐々木薬局の中で遺体で発見された。合流した水に一気に吸い込まれたようだ。防災無線もはっきり聞こえなかったこともあるが、自分たちの判断の誤りが悔いられる。自宅3階が最短距離で1番安全な場所だったこと。人間の心理というか、多くの人たちが走っている方向へ逃げてしまったこと。悔やみきれない。これからは、その時いる場所にもよるが、自宅にいた場合、建物が倒壊しない限り動かないでいること。とにかく高い所に逃げること。津波を想定すること。夫の命と引き換えに痛感している。

1975-01 大町 女性 60 歳代

- ・避難時の様子（自宅、家族の迎え、避難、九死一生）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）

当日は公休で自宅にいました。日頃、非常持出し品は用意しておりましたので、地震の後はずぐに玄関に置きました。仏壇から落ちてきた位牌を袋に入れ、避難する準備をしておりましたら、娘が会社から車を置いて走って迎えに来てくれました。自宅を出た時は浜町の方は既に砂煙が立っており、自宅前のマンホールからは下水が高く吹き上がっていました。娘に引っ張られ、自宅近くの薬師寺に避難し、階段三段くらい上がったところで、津波がざーと来ました。そして、さらに上に登って目の前の自宅を見たときには、既に自宅はありませんでした。娘が来てくれなかったら、私の足ではこうして生きていなかったと思っています。階段を上った瞬間、「あ、助かった」と思い、足が震えました。この光景は実際なのか、スクリーンの中の映像なのか、現実を受けとめることができず、娘は「お母さん、家がない」と立っていました。本当に現実なのか、月日は流れても頭の中は3月11日で止まっています。

薬師寺から、のぞみ病院の中に入り、食べ物はなく、ザックの中に入れておいたチョコレートをしずつつ分けあい、一夜を過ごしました。翌日、水が引いていたので、娘と2人でガレキを越えて、大渡橋を渡り、線路上に上がりました。足の痛いのも忘れ、必死になって線路を歩き、会社に辿り着きました。その後、娘の嫁ぎ先に行き、3か月間お世話になり、現在は仮設に入居させていただいております。大勢の方々、自衛隊、警察官の方々のご支援をいただき、本当に頭の下がる思いがいたします。心から感謝申し上げます。

あの日の1日前に戻れるなら、いつものように近所の方々とお会いし、お話がしたい。自宅の前にたくさんのお花を咲かせたい。2年前に亡くなった夫のために買った大きな仏壇に手を合わせたい。今は仮設ですので、小さな仏壇の中に入っております。悔しいです。これからは、孫たちの時代にこのような被災に遭わないように、すぐに避難することのできる場所を多く作り、避難しやすい道路、暗い道でも明るさを辿って行けば避難場所に行ける目印など、安心できる町作りをしていただきたいです。また、安心に住める所に1日も早くアパートなど造っていただきたいと思います。この年では土地があっても家を建てることはできません。日頃から家族と話しあい、自分の命は自分で守るため

に、このような時はどのような対応をするかを考えておく。そして、津波で亡くなった方々のためにも、家族が幸福に暮らせる町、人々が幸福に暮らせる町作りをしていき、頑張って生きて行かなくてはならないのではないのでしょうか。力を合わせて災害前以上の釜石を作り、市民が楽しく暮らせる釜石ができるはずです。

3760-01 大町 男性 80 歳代

- ・被災前の意識（先人からの伝承、ここまで来ない）
- ・避難時の様子（外出先、津波想起、帰宅）
- ・被災の感想（後世に伝えるべき）

私の家は大町 2 丁目にあり、建坪 46 坪の鉄骨 3 階建てです。以前に父から、「昭和 8 年の津波は道路にビシャビシャ水が来た程度であった」と聞いており、チリ地震のときは私は現在地に住んでおり、下水の蓋の間からぽこぽこ水が出た程度であったので、「大きな津波が来ても 1 m くらいかな」と思っていました。釜石市でも、いつ津波が来てもよい時期となっているということで、度々防災会議を開き、各地区の避難経路、避難場所を地図上で検討したりしていましたが、参加者は団体関係の役員が大手であり、一般の参加者は余りなかったようです。

地震発生時は、近くのベイシティホテルの 1 階にあるローソン（コンビニ）にコピーをとりに行っており、コピー機に原稿を入れた時、地震が発生。そのまますぐ外に出たが、歩くことができず、出口にあったアーケードの支柱に立ったまま掴まっていた。その時、心配だったのは、「この高いベイシティホテルの外壁や窓が破損し、落下してきたら、私は最後だな」と考えたが、揺れのため、行動することはできなかった。店内からは店員や来客が地べたを這って出てきて、頭から血を流していた人もいた。揺れがおさまったので店に入り、コピー機から原稿を取り出した。この揺れで「必ず津波が来る」と感じ、急いでガラスの破片が散らばっている歩道を家へ向った。

自宅 3 階には 87 歳の妻がおり、仏壇の物や茶だんすの物が落下し、一面に散乱し歩くこともできない状態だった。私はビデオカメラの趣味があり、カメラを持っていたので、津波が来たら撮影しようと思い、散らかった物を片付けながら時々窓より顔を出し、サンルートとベイシティの十字路を見ている。地震発生から 27 分経った頃、十字路に津波が這うように押し寄せたのが見えたので、カメラを取りに別室に行き、撮影を始めた頃には大河となり、家や車が多数流れて来た。裏側を見たら、裏隣の木造平屋建ての家は流されてなく、道路には家が 2 軒流された状態で道路の真ん中で止まっていた。隣の人が「あそこに人がいる、助けて」と叫んでいたもので、よく見ると流れたガレキの上に肩より上を出した女の人があり、首と手は動かしていたが声は出せない状態であったが、どうしても助けようがなく、断腸の思いであった。（翌日、自衛隊が来て、ガレキを掘り出し、担架に寄せ連れて行った。津波が来たとき、近所で自宅にいたのは 6 軒くらいで、鉄筋 2 階建（屋上あり）や鉄骨 3 階建て以上の家でした。私の家の左隣 1 軒目は 2 名、2 軒目は 2 名、3 軒目は 1 名の計 5 名が亡くなっており、残念です）

夜になってから、裏側 10 軒くらい離れた所から火災が発生。付近は建物が残っている所が多く、私の家の方に燃えてくると思った。出口がガレキで塞がってしまったため、ロープでアーケード上に降りる準備をしたが、火災が消えたのでホッとしました。町内会で避難場所としていた青葉ビル 1 階交流ホールに避難して亡くなった人もあり、火災のことも考えると高台にある薬師公園に避難すべきだったと思います。

大津波被害を後世に伝えることは防災に大きな役割を果たしているが、明治の大津波は釜石ではどのようなだったか、余り聞いたことがない。後世に伝える方法は、言い伝えやここまで津波が来た標識や記念碑などもあるが、一番効果があるのはあの猛烈な勢いで押し寄せる津波の映像を後世に伝えることが最大の防災効果があるものと考えます。百聞は一見にしかず。

7024-11 大町 男性 80 歳代

- ・避難時の様子（自宅、津波想起、避難せず、九死一生）

あの地震はちょうど私が昭和 8 年に体験した揺れと、略々同程度の揺れであった。隣の子どもが「驚いて泣き止まない」と外に出て来た。「大丈夫、すぐ止むから」と話してやり、「この揺れは昭和 8 年の時と同じ位だから、津波は必ず来るよ」と話し、家に戻った。それから遅い昼食に入ったが、しばらくして、孫が「白い車が動いているよ」と言うので、「誰か運転しているでしょう」と話すと、「誰もいない」とのこと。「もしや」と思い、外へ出て見ると、津波が車庫に入っていた。「津波だー！」と家に戻ったら、娘が孫たちの勉強道具やゲーム機などを 2 階に運び上げていた。もしもの時は 2 階にのぼらなきゃと思った。第二波が来て、1 m ほど車庫に入り、車のエンジンルームが水をかぶっていた。ガレキが四方の通路を埋め尽くし、避難のできる状態ではなく、電気は止まり、水も止まり、

夜中に電灯、ラジオ、ストーブで暖をとり、余震に震えながら、毛布を膝に2日ほど抱えて過ごした。

以後は朝食を済ませた後、電池、灯油、食料、ロウソクや水を求めて、やみくもに上中島や桜木町まで毎日通うことが日課であった。惜しむことは、鈴子の被災者支援物資配給所で電池、ロウソク、水などを個人(住所、氏名、年齢など記入しても良い)にも支給してくれたらと思います。そのために何日も買出しに歩くのは、本当に侘しく悲しいものです。

1244-01 大町 男性 70歳代

- ・被災前の意識(避難していた)
- ・避難時の様子(自宅、避難呼び掛け、九死一生)

子どもの頃から、明治の津波のときには、石応寺の境内に死体がたくさん流れ着いて、現在の青葉ビル裏山に埋葬したとのことを聞いておりました。平成22年2月28日9時30分頃、チリ地震大津波警報発令の時には、近所の高齢者などに声をかけ、避難先は青葉ビル1階交流フロアにと指示。寒かったので、もし青葉通り下水路に津波が寄せた場合、青葉ビル住居地域裏階段より2階、3階と上の通路に誘導することを考えておりました。湾港防や防潮堤、大きな建造物、津波が街中までくるとは予想したでしょうか？

そして、平成23年3月11日金曜日晴午後2時46分頃の揺れ、大地震を初めて経験した。ものすごい揺れで、妻と二人で抱きあい柱にすがり付き、合間を見て入口のガラス戸を開ける。昔から「地震の時には戸を開けろ」と言われていた。避難のため、地震がおさまり、消防団のはんてん、ヘルメットを着用し、ハンドマイクを持って町内の高齢者宅2、3箇所呼び掛けるために、青葉通りへ向かった。そのとき、大勢の人たちが青葉通り下水路の上に立っていた。そこは汐立川の上流なので危険と感じ、「今の場所は津波が来ると危険な場所です。すぐに石応寺の上の方に逃げてください」とマイクで叫ぶ。しかし、皆「3mくらいの津波、ここまで来ない」と考えているのか、避難しない。昭和のチリ地震津波の時、私は青葉通り下水路の上のコンクリート製の蓋が津波の力で飛び上がったのを見ていたので、「当時下水路に駐車場があった」と更に叫んだ。私の呼び掛けでお寺の方へ大勢、避難を始めた。

近所の高齢者にも避難を勧める。「大きな津波が来るから、すぐ戸を閉めて逃げて」と呼び掛けると、「大丈夫だ、逃げなくても」と言って、家の中に入り出てこない。家に入り、「早く出てきて」と手を引っ張り、連れ出した後は近所の人に渡す。今度は、その先で若い男性が「うちのじいちゃんが見あたらない、いない」と言う。じいちゃんがいなくても1人で、車で自分の近くの駐車場に行くように指示。車は流され、自分は助かり、じいちゃんも逃げており無事。「命でんでんこ」とはこういうことを言うのでしょうか！

私は3月11日、見浦駐車場の裏山より薬師山に登り、のぞみ病院5階に避難しました。子どものころ、お寺側より見浦駐車場の所から薬師山へ登れたものです。現在も登り口に残っており細い道もありますが、一部未整理で危険箇所が見られます。しかし、今度の津波では大勢の人がそこを登り、のぞみ病院とか大渡方面に行っております。整備の必要があると思います。最後に大町町内会では自主防災訓練はなく高齢者世帯の町でした。私自身、平成15年3月末まで釜石消防団に関わっておりましたので、少々は避難誘導などの呼び掛けができたのかなと考えております。何か足のあたりに冷たい水が来る、ホテルサンルート前交差点アーケード以上の高い黒い水の上に家がのり、車が流れ迫って来る。「皆逃げろ、津波だ、大きな津波が来そうぞぞ!!」波に飲まれる人、人、車、ものすごい車と車がぶつかる音、壊れる音、命からがら石応寺境内に走りこみ助かった。たくさんの人、人、大勢いる。

1244-02 大町 女性 70歳代

- ・避難時の様子(自宅、津波確認後避難、救助、九死一生)
- ・被災後の様子(当日の避難所の様子)

あの日、突然の揺れに、夫と二人で家の柱にしがみつき、今にも潰れるかと思って、恐怖で声も出なかったです。「大変だ、大きな津波が来るぞ」と言って、地震がおさまると同時に夫は消防の半纏を着て、ヘルメット、ハンドマイクを持って、「近所に高齢者の独り暮らしの方が何人もいるので、声をかけて避難させてくる」と言って、出ていきました。

私も避難しようと思い、高台の駐車場を見ると、大勢の人たちが避難しているのが見えました。また児童公園の方を見ると、道路側より大勢の人々が走っていくのが見えていました。その直後、天にも届きそうな波、黒い水にピアノ、タンス、ドラム缶や車などが流れこんでくると、みるみるうちに青葉ビルの下にある駐車場がたくさんのガレキと車で渦を巻いていました。私も逃げようと思い、高台に走っていくと、後の方から誰かが「人が流れてきた」と叫ぶ声が聞こえてきました。後ろを振り

返ると、私の家の前に男の若い人が立って、うろうろしていました。「どこにいるか」と聞いたら、ガレキの中に顔だけ浮いているのが見えたので、「大変だ、助けなければ」と思ったが、水が2 m以上の深さで手の届かない所にいました。その時、いつも外にロープがあるのを思い出し、そのロープを男の方にまわめて投げてやり、通路まで引き寄せました。寄せてはみたものの、水から引き上げることができなくて、その男の人も水に落ちて、ずぶ濡れになって座りこんでしまいました。そこへ夫が帰ってきたので、すぐに引き上げて助けてあげました。高齢の女性でした。「よく溺れず頑張った」と思わず涙が出ました。

それから高台の駐車場に行き、駐車場の管理人さんから布団や毛布などを借りて、何人かに着せたり、管理人さんの2階にもおばあちゃんたちを避難させましたが、消防署員の方が来て、のぞみ病院に避難するよう指示がありました。のぞみ病院に行くには、急な山道を登らなければ、行くことができません。お年寄りや、消防署員の方々に手を引かれ、抱えられたり、おんぶされている人もいました。私たち高齢者も坂道を這うようにして登り、避難所で一夜を明かしました。翌朝、早く自宅へ帰ってみると、玄関までガレキで、家に入ることができなかったです。昨夜遅くに近所で火災があったので、駐車場のガレキがくすぶっていました。

その後、助けられた女性は元気に仮設で暮らしていると聞き安心しています。助けようとして、水に濡れた男性は今どうしているか気になっています。

3545-02 大町 女性 50歳代

- ・避難時の様子（工作中、屋内避難）
- ・被災の感想（当日の避難所の様子）

その時、私はのぞみ病院2階の職場にいました。市役所の方や患者さんたちと皆でとりあえず屋外へと避難しました。道路の向こう側にも、建物から心配そうに出てきた人々がたくさんいました。誰かが下校中の小学生を上へ避難誘導していました。その時、娘からメールで「津波が来るから逃げて」との連絡あり。それっきり、メールもできなくなりました。そして、「もっと上へ」と言われ、皆で3階駐車場へ移動しました。外はとても寒く、9階更衣室まで行って、コートを着て、自分の持ち物を持って、窓の外を見た時、海に真白い波が一直線になっているのが見えました。「あー、これが津波なんだ」「これは大変」と思い、急いで下へ降りて、皆と合流しました。あっという間に病院の下に車、水、いろんなものが流れ込んでくるのが見えました。「もう降りられない」、そう思いながら、皆でもっと上へ上へと4階、5階、6階と移動しました。

明るいうちはよかったのですが、日が暮れて建物の中も暗くなり、トイレも使えなくなり、紙オムツ使用を言われ、「なるべくトイレに行きたくない」、「でも、水分はとらなくちゃ」などと皆で話し合いながら、外の情報が来ないので、市役所の方を頼るしかありませんでした。

まだまだありますが、とりあえずは高い所に避難、皆と協力し合って乗り切っていくこと、助け合いは大事です。皆のおかげでこうして生活することができています。あの時、一人だったらと思うと恐いです。ごはんを食べて、お風呂に入ったり、トイレに行ったり、料理をしたり、こんな当たり前と思っていたことができなくなり、今、普通に生活できるようになったことに感謝します。その分、ふと寂しさも感じる事がありますが（前の生活とはちがうと）、1日1日を大事に、皆とのつながりを大事にしたいと思います。

2744-02 大町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（〇保育園児の避難）
- ・被災の感想（てんでんこ）

「いつか来るだろう、大地震、大津波」と思いながら、十数年。以前、釜石市主催で盛岡大学教授の津波の講演を聞き、地震から20分後に釜石湾に津波。30分後に釜石の商店街が水に浸かる……と記憶にあった。

保育園で〇として働いている私は、尋常じゃない大地震で「津波が来る」と思い、地震の中、園児たちを外に避難させた。0～1才児は避難車に乗せ、園児が残っていないかを確認した後、高台に避難するように言うけど、園長の指示がない。モタモタしていると津波が来る。私は園児が乗っている一台の避難車を引いて走った。それを見ていた若い保育士さんたちが園児たちと一緒に後についてきた。避難場所は保育園から5分くらいの高台の薬師公園。近くに9階建ののぞみ病院がある。耐震性の高い病院と公園から病院の5階へ避難通路があることも知っていたので何とかかなと思っていた。私たちが避難している姿を見て、商店街の人たち、オカムラ（会社）の人たち、100人以上の方に園児たちを抱っこしてもらい、80人くらいの子供たちは無事に高台に避難することができた。夕方、消防署の方から指示があり、避難通路を経て、のぞみ病院へ移動した。

「命てんでんこ」、そのとおりだと思います。もし私が最初に逃げなかったら、どうなっていたでしょうか？ 点呼を取っていたら？ 私は小6の時にチリ津波も経験していました。「いつか来るだろう、大地震、大津波」と思いながら、家も耐震工事、屋根瓦の補強も済ませていたため、被害は食器のみでした。

この度の津波では鉄筋の建物が残ったので、高台まで遠い場所には3階以上の鉄筋の避難所を造ってほしいです。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (2) 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）

[F. 大渡町]

1) 補足調査における証言

（荻野哲郎さん、千田節夫さん、松坂まりやさん、平野よね子さん、荻野陽子さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・地震直後から、民生委員等地域の方がそれぞれ近隣の高齢者等に声掛けをして、釜石小学校や高台への避難を誘導した。
- ・差し迫った津波の危険を感じとれなかった一部の高齢者は、地域の方が避難するのを見て、その流れに合流して避難することもあった。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・地震後も自宅や店舗に留まり、流された。商店街関係者が多かった。
- ・甲子川の様子を確認して、自宅に戻り、流された。
- ・自宅の2階へ避難したが、物を取りに1階へ下がったため、流された。
- ・避難するように町内会で声掛けをしたが、自宅に留まり流された。
- ・バスなどに乗車していた数名が流された。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・地震の揺れがある程度収まった後、多数の住民が家の外に出てお互いの無事を確認した。甲子川が近接していることから、遡上する津波の襲来を直感し、多くの住民は、比較的速やかに高台の避難所に避難した。自宅の階上に避難する方もいた。
- ・市街地のため、地域外を含む車で通行者等も多数おり、津波襲来直前、大通りでは車が渋滞した。車から離れて高台、近隣建物の階上へ移動した方、バスの屋根に避難して一命を取り留めた方もいた。車の中からは、地域外の身元の遺体が多数確認された。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・平成6年3月に自主防災組織を設置して、日頃から地域一体となって防災活動に取り組んできた。群馬大学の講演や、ハザードマップにおける自然災害に関するシミュレーションなどを通じて、河川を遡上する津波の危険性、率先避難の重要性を地域で共有していた。
- ・3月3日の避難訓練では、町内会で参加を呼びかけていた。また、釜石小学校が津波避難訓練を実施する際には地域で協力していた。
- ・自主防災組織では事前に災害を想定し、食料、外部環境衛生、燃料、救援物資、防災担当等、各班の具体的な役割分担を決めていた。また、分かりやすい組織図を作成し、関係者で情報を共有していた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

- ・地域、学校が一体となった防災教育の積み重ねが、迅速な避難行動に結びついた。祭事等を通じた地域交流が、避難所運営等その後の復旧活動を円滑なものにした。
- ・講演会等を通じて防災の知識が事前にあり、大きな津波の襲来を予測できた。避難訓練に参加していた方の多くは、発災初期の段階で避難していた。
- ・釜石小学校敷地内に備蓄していた防災用品は、被災せず十分活用された。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など）

- ・物の倒壊でほこりが発生し、町が少し暗くなっていた。
- ・湾口防波堤があるため、まさかあれほど大きな津波が襲来し、防波堤が壊れるとは思わなかった。

2) 地域懇談会における証言

道又光子 さん

- ・地震が発生したときは自身の経営するお店にいた。店内にお客さんもいるときで、建物が倒壊する危険を感じたので、まずお客さんを外に避難させた。そのときは津波が来るとは一切思っていなかった。そのあと、2階に上がって片付けをしたり、近隣住民と外で立ち話をしたりしていた。「逃げて！」という声を聞いて、遠目に津波が来ているのが見えたが、それが津波と思わなかった。大渡町の坂を上りながら町の様子を見ながら、釜石小学校まで逃げた。避難訓練に毎年参加していたが、地震があつたら津波を想起できるようになっていなかった。

佐野和子 さん

- ・地震が発生したときは職場にいた。そのとき津波のことは想起しておらず、地震の揺れで自宅が心配になって帰宅した。その途中、近所のおばあちゃんがいたので、話しかけたら自宅に帰りがっていたので、帰宅させた。自身も帰ってからすぐに避難しようとしたとき、その近所のおばあちゃんを置いていけないから説得した。しかし、「ここまで津波は来ないから」「大丈夫」と言い張るもので、断られてしまい置いて逃げてきてしまった。
- ・「大雨のときに限らず、津波のときにも川から水が来るから危ない」と祖母から聞いていた。信じていなかったけれど、今回の震災でそれが本当だと思った。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

2699-03 大渡町 女性 80歳代

- ・避難時の様子（自宅、津波想起、すぐ避難）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき）

地震が発生した時、私は長く強い揺れでしたので、「これはただごとではない」、「すぐに避難した方がよい」と思いました。大津波の情報は聞こえませんでした。直感で津波が来るのではないかと思います。すぐ長男と弟嫁さんに声をかけ、戸締りもそこそこに、大渡の釜石小学校へ避難しました。私はリュックを背負って、息子と嫁もそれぞれ持っていました。しかし食料や水は持っていませんでした。それだけ私は動転していたのだと思います。常に非常の必要なものは、準備しておくべきだったと思います。

松倉の現場に働きに行っていた次男も、2日目に訪ねてきたので、ほっとしました。次の日から次男と嫁とで、家の片付け掃除をして、3階に泊りがけをしていました。水、電気、ガスもなかったので、大変だったと思います。1階の作業所の機械類、道具、材料、トラック、そして事務所のコンピュータ、書類は全部流されました。人が皆、何ともありがたいと思いました。作業所の天井はすっかり穴が開き、脇に大きな穴が開いていました。まだ直せていませんが、冬の寒さが思いやられます。

大きな地震のときはすぐ逃げるべきだと思います。ふだんも災害に備えて用意しておくべきだと思います。倒れるものや棚から物が落ちないようにしておくべきです。たくさんの人が悲しい思いをしています。早く皆が笑顔になるように頑張っていくことが大切です。

3630-02 大渡町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（自宅、避難の呼び掛け、屋内避難、流された）
- ・被災後の様子（救出）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき）

地震の時、私は息子と孫2人の4人で、自宅の2階にいました。息子たちは3階から降りてきて、私は玄関のドアを開けて、ドアが閉まらないように押さえ掴まっていました。孫2人は茶の間の炬燵の中に入っていました。揺れがおさまってから電気が切れたので、情報を得ようと外に出たら、主人が仕事から帰ってきました。車のラジオを聞いていたら、近所の人たちが避難を始めており、息子たち3人も、とりあえず学校に避難しました。近所の人たちが、向かいの一人住まいのおばあさん連れて行こうと何度も声をかけていましたが、「足が悪いから」と言って行きませんでした。そのうち私と主人も、「近所の人誰もいなくなったので避難した方がいいかな」と思い、家に戻り、孫たちが寒いと可哀想だと思い、毛布を詰め、玄関を出たら、家の前をもう水が流れており、中にいる主人に「津波がもう来てるから、外に出れないよ」と叫びました。ちょっとの間に水が増し、ガリガリ、バリバ

り、すごい音がして、車もすごいスピードで流されていきました。外に出る階段の上から2段目くらいまで、水が走るのを茫然として水の流れを見てました。主人は私が叫んだ後、中階段から店に降りようとしたが、戸を開けたら「もう水で降りれない」と叫んでいました。

その後、ずっと2階で2人でうろうろしてました。気がついたら車が2台とも流され、向かいのおばあさんも、家もなくなっていました。自宅は大渡川から塀が壊れ、製鉄所からも水がきていました。塀側から流れてきた家にとり残された人の「助けて」と叫ぶ声が聞こえましたが、主人が「助けたくても水で助けに行けない」と叫んでいました。そのうち二度目の津波が来て、その家が私の家と道路を挟んだ斜め向かいの家に挟まって止まり、家のペランダと流れて来た家のペランダがくっつきました。先ほど助けを求めていた人は目が不自由な人でしたが、声をかけながら、家にあった長い棒で引き寄せ、ペランダから引き上げることができました。二人いたから出来たけど、一人だったら無理だったかもと、今でも話しています。その後、その家は次の波で離れ沈みました。私たちが避難に遅れたことでその方を助けることが出来て本当に良かったです。その夜は3人でソファにうずくまって余震におびえながら、朝が来るのを待ちました。

夜が明けると、主人は嫁いだ嫁、家族が心配で見に行き、私一人では助けた人を連れて行けずどうしようかと思っているところに、裏の夫婦が戻ってきたので手伝ってもらい、学校に避難しました。

教訓。大きな地震の時は絶対すぐに避難すること。

1004-02 大渡町 男性・女性 30歳代

- ・避難時の様子(自宅、津波想起せず、とりあえず避難)
- ・被災の感想(被災経験から油断、すぐに避難すべき)

私たちは被災し、家が全壊、車も一台流されました。幸い家族が皆無事であったことだけが不幸中の幸いです。

正直、毎回の津波警報のことだと思い、今回、逃げるとか避難なんてことは、頭にありませんでした。たまたま、当日、長男が外へ遊びに出ていたので、長男を探しに行くついでに高台へ行っただけでした。やはり、津波は高台へ避難すれば助かる。その認識がようやく今回の震災で理解することができました。多くの市民は、おそらく、“タカをくくる”というか、そんな人々もたくさんおられたかと思います。懸命な判断、逃げる。その行動で生死が大きく左右されるのかと感じました。被災には、とり戻せるものと一生とり戻すことの出来ない物があります。一概に、被災地として、市内、県内をまとめることに疑問すら感じることもあります。私たちは家、思い出をたくさん失いました。かたや、停電のみの被災者、波を被った私たちと同等の被災地に住む被災者……。復興が進むにつれ、“被災者格差”にたまに泣きねいりをしている自分がいます。復興への支援、本当にありがたい思いと同時に、被災者が今、何を必要としているのか……をよく汲み取っていただきたい部分もあります。生き延びることのできた被災者(家を失ったなど)はこれから、再生しなければなりません。家がある方々はこれ以上、何の支援を望むのでしょうか……。今後、こういった被災者格差に悩む被災者のケアなどが課題かと思います。

私たちはこの目で津波により、いろいろなものが流されている光景を見ました。人、建物、車……。こんなにもあっけないものなのか……。そんな印象でした。見たからこそ語れます。絶対逃げろ！！と。その場での判断！！ とくに大切、家族離ればなれでも自分の身を自分で守ろうということ。生きていれば必ず再会できるのだから！！

3459-02 大渡町 女性 60歳代

- ・避難時の様子(自宅、避難せず、救助)

当日、私は夫と二人で食卓テーブルで、明日出発する旅行の予定の確認をしておりました。「朝が早い出発だから、夕食を早めに済まして早く寝ようね!」、「湯タンポ2つにお湯を入れて、布団の中に入れておいたから!」などと話をしていました。

間もなく、あの恐ろしい長い長い地震が発生、「これは今までにない! 異常だ。気をしっかり持って、何をどのようにしたら良いか考えよう!」と思いながら、私は震える足を掴みました。「まずは戸締り!」と思って、「日本間の障子を閉めよう!」と外を見たとき、「助けてー!」と言う声と、隣の屋根の上に男の人がいました。夫と私は、何が何だか分からず呆然と立ち尽くす自分を打ち消して、隣の屋根の80歳くらいの男の人を自分の家の窓へ引っ張り、担いで中に入れました。「寒い!」と言って震える男の人は、青ざめて血の色がない状態でした。急いで、湯タンポを2つ持ってきて、布団の中に入れて休ませました。元気になるように、温かい飲み物でもとガスをつけたら、もうガスの火は消えておりました。ひしひしと寒さが身にしみてきました。我に返って、初めて玄関のドアを開けてみたら、自分の目を疑いました。今まで見たこともない光景。車が山のように集まって、ダンゴ状態。

どこからか流れて来たのか、見たことのない家が……そこから私はうずくまっていました。

7012-01 大渡町 女性 80歳代

- ・被災前の意識（訓練参加、先人からの伝承）
- ・避難時の様子（自宅、津波想起、すぐ避難）

感じたこともない地震だったので、「きっと津波は来る」と思い、そばにいる娘とすぐに避難した。「まずは高い所に逃げること」、町内会で実施している避難訓練に毎年参加していた。子どもの頃から、津波は恐ろしいものと話に聞いていた。また、命てんでんこの言葉はすぐに思い出した。

2573-2 大渡町 女性 60歳代

- ・被災前の意識（備えていなかった）
- ・避難時の様子（自宅、川の様子見、帰宅、片付け、流された）
- ・被災の感想（反省）

あの日、地震発生から何分揺れていたか分かりませんが、私は店の机の下にもぐり、どうにか早くおさまってくれるように祈るばかりでした。地震がおさまった後、すぐ千葉県にいる娘から電話があり「こっちは大丈夫。家も私も何ともないよ」と話し、向こうの方は液状化現象が起きているとのことだったので「気を付けなさい」と電話を切りました。私はというと、停電になっていたので「ラジオで情報を」と思い、ラジオに電池を入れてみたり、余震があるので、その度に外に出てみたり、ただウロウロするばかりでした。

夫は仕事先の釜石ビルの8階にいましたが、用事を思い出し、1階に降りるためエレベーターに乗ったところで揺れが始まり、最初故障したのかと思ったようです。とにかく1階で扉が開いたので降りたら、まだ揺れていたもので、「これはただごとではない」と思い、すぐ自動車で家に戻ってきました。そして家の中の被害状況を見て回っていました。

ようやくラジオで「どこかで3m～6m」と津波の高さを言っているのので、「どこの話なんだろう」と思い、川を見るために隣の店の前まで来たとき、大渡川がものすごい勢いで逆流しているのが見え、「これは大変だ」とその時、初めて気が付きました。家に帰り、避難しなければ思いましたが、ふと店の中に泥水が入るのを心配して長座布団を2階から持ってきて、店のガラス戸に敷きました。もうその時には、水はチョロチョロ入ってきていました。夫に「何をしているんだ」と声をかけられ、「泥水が入るのが嫌だから敷いているの」と答えていたら、ガラス戸に水が勢いよく流れていくのが見え、7、80cm くらいまで来た時、「ボンボンボン」と大きな音を立てガラス戸は壊れました。気が付くと、私は店の中で渦巻いた水の中をグルグル回っていました。2、3回と回り、店の壁に取り付けられていた棚の中心の支え棒が目に入り、そこに掴まれたらと思いました（ちなみに、私は泳げません）。そして、更に2回くらい回った後ようやく手を伸ばし掴まることができました。水は天井まであと3、40cm くらいの所まで来ていました。夫は店と茶の間の鴨居に掴まり、私がグルグル回るのを見ていましたが、水も増えてきたので、どうにか2階に上がりました。

水が少し引き始めた頃、夫は「おーい、いるか」と声をかけてくれ、私は「いるよ」と叫んでいました。そして、夫に茶の間の境の所から「次の波が来ると駄目だから早くこっちに来い」と言われ、店の中の水をどうにか渡り、二人で2階に上がりました。

「一体、今何が起きているんだろう」と不思議で、まさかこんな経験をするとは思っていません。いえ、でも頭の中では「いつかは大きな地震・津波が来るかもしれない」と考えたことはあります。でも備えが全然なかったと反省しきりです。近所で犠牲になられた方が何人もいます。声をかけられなかったことを今でも悔やんでいます。今思い出してみると、防災無線がどのように聞えていたのかよく覚えていません。ただ、地震の後の警報のサイレンが今までの津波警報のサイレンと違っていたので、「あれ、何のサイレンかな」と不思議に思ったことを思い出します。大渡に住んでいたときも千鳥町に引っ越してきても、防災無線はなかなかはっきり聞こえることはありません。

1226-02 大渡町 女性 40歳代

- ・避難時の様子（自宅、津波想起、すぐ避難）

あの日は母の82才の誕生日でした、それがこんなことになるなんて……

3月9日のお昼頃、結構大きな地震がありました。あれが予震だったのでしょう。キッチンの流しの中のボールの水が渦を巻いて動きました。母は「海の中もこんな風に動いているんだね」と言っているのを覚えています。そして当日、足元がバランスボールにでも乗っているような感覚でした。母が「これはただごとではない、とにかく避難しよう」と着の身着のまま、手元にあったいつものカバンと上着、靴を履き、釜石小学校へと行きました。もうその時点で5分ほど経っていたと思います。裏通り

は車が数珠つなぎで、動いていませんでした。その間を縫うように横切り、学校へ上がる坂へと逃れました。

三鉄の鉄橋の下を黒い大きなへびが鎌首を上げて襲ってきたのを避難先で見ました。まるで真っ黒なスライムみたいでした。周りにいた人たちと「本当の事なの?」「夢じゃないんだよね」と嘆きながら、自分の町が襲われていくのをただ、黙って見ていることしかできませんでした。

2393-01 大渡町 女性 70歳代

・被災の感想（訓練不参加者が被災）

私は3月3日の町内会の避難訓練には毎年参加していました。訓練で顔を見る方は毎年同じ顔ぶれでした。今度の震災で何人かの知り合い、顔見知りの方が亡くなりました。その中には訓練で顔を見たことのない方が2、3人おりましたので、訓練が大切だとつくづく感じました。私の他に「あの人も、この人も訓練に来たことがなかったな～」と言っていましたので、私ばかりでなく、そう思っている人がいるんだと、訓練の大切さを実感しました。今は腰が悪くてスムーズに歩けないのですが、これからも参加したいと思います。

この度の津波では、高台の避難場所が我が家の近くだったので、素早く避難することができました。また、いろいろな方たちのお世話になり、生活しております。皆さん有難うございました。

2731-11 大渡町 女性 40歳代

・避難時の様子（自宅、津波想起せず、避難呼び掛け、屋内避難、流された）

・被災後の様子（救助）

まさかこの場所まで津波が来るとは思わず、自宅にいと、車で通り抜けた人の「津波が来たぞー！」の声にびっくりして、戸を開けて外を見た時には川の土手を乗り越えて黒い水がさざ波のように押し寄せて来ていた。あっという間に、玄関、窓ガラスをバリバリと破り、家の中へ。たちまち水に浸ってしまい、「このままでは駄目だ」、「少しでも高い所へ」と思い、「階段は上がれない」と言う高齢の父の手を引いて、必死で2階へ上がった。水が押し寄せてきた時には「ここで私たち死んでしまうんだよ」と何度も言った。そう思った、あの時は。

2階の窓から屋根伝いに別棟の2階へ移動し、窓から民生委員の人に助けを求めた。津波の三波が引いた後に手伝ってもらった。高齢のため、高台の避難所へ歩くことができず、途中からは車に乗せてもらい、避難所へ連れて行ってもらった。また、避難所に着いた途端にも体調を崩し、見ず知らずの人たちにもお世話になりました。本当にいろんな人たちに助けられました。

1200-02 大渡町 女性 60歳代

・被災の感想（先人からの伝承、すぐに避難すべき、湾口防安心）

3月11日午後2時46分、東日本巨大地震そして津波発生。私の住んでいる釜石も大きな被害と被災となりました。私の家までには津波が届かなかったことが幸いでした。その下から両側の家の1階には、波が強くぶつかり、戸やガラス戸が割れていました。それより下の方の家では2階、それより下へ行くと3階までと大きな被害を受けました。そして、家ばかりか逃げ遅れた人々が流されました。「まさか」とか「こんなに早く来るものか」とか、自分だけの思いで行動してはいけないと思いました。

やはり、今言えることは、「津波の恐ろしさの意識を持つべきだ」と自分にも言い聞かせました。そして、高台へ一目散に逃げるべきです。私は子供の頃に母に言われていました。「高い所へ登って行くんだよ」と。水深60mという30年間かけての工事、世界最大の防潮堤は、釜石を巨大津波から防いでくれると思っています。しかし、それが倒壊してしまいました。そうしたことで守られて生きている私たちです。助けられた分だけ前を向いて生きなければと思います。多大な励まし、復興に手を差し延べて下さり、釜石の地まで足を運んでくださった皆様感謝とともにありがとうございました。

9088-12 大渡町 女性 40歳代

・被災前の意識（先人からの伝承、避難していた）

・被災の感想（伝承のおかげ）

私は子供の頃、漁師をしていた祖父から津波の恐ろしさを聞かされて育ち、大きな地震（津波注意報）の度に必ず避難していました。その経験が体に染みついていたのだと思います。祖父は私に「大きくなって、お嫁にいき、その嫁ぎ先が海のそばでなくても川の近くだったら、必ず津波に気をつけて避難するんだよ。海の近くの人には津波に気を付けるけど、川のそばの人は川津波の本当の恐ろしさを知らないかもしれない。本当に恐ろしいのは油断している川のそばの人たちなんだよ。誰が何と言

っても絶対避難すると、おじいちゃんと約束しよう」と何度も言い聞かせてくれました。今回の地震の時もこのことを思い出し、迷わず避難したから難を逃れることができました。そして、祖父からはこうも聞かされていました。「避難することで大袈裟なことではない。もし本当に大袈裟だったら、笑ってよかったと喜ばばいい」、「笑われるくらいがいい。お前が笑い者になっても、いつか必ずその嫁ぎ先の家族は皆助かるはずだよ。幸せのためだよ。」、この言葉を何度も自分に言い聞かせました。それがなければ、避難しなかったかもしれない、迷っていたかもしれないと思います。私は祖父のおかげで助かったと心から感謝しています。先人の教えを大切に心に刻んでほしいと思います。

今回、法律の整備がきちんとされていなかったため、県や市の見解によって、支援金の配布にばらつきがありました。問合せると、県も市もお互いに責任のなすりつけ合いと無責任な回答にやるせなくなります。そして支援の方法も偏ったものです。利便の良い所での支援のイベントばかりが目につき、利便の悪いところはそのまま悪いばかりになっているように感じます。平等に支援の手が届くように、市町村によって法律の捉え方が違わないように、きちんと災害に対する体制を整えることも大切だと思います。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (2) 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）

[G 鈴子町]

1) 補足調査における証言

（澤田政男さん、高橋忠さん、松本眞弓さん、佐々木久司さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・地域住民の多くが、お互い声をかけあって、避難場所のシープラザ遊に移動した。
- ・教育センター、シープラザ職員等が、高齢者や体の不自由な方の避難を誘導した。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・死亡者なし。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・地震直後、多くの住民は家屋の外に出て、比較的早い時期にお互い声をかけあいながら、避難場所のシープラザ遊に移動した。一部の高齢者のみの世帯等では、自宅に留まっていた方もいた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・震災直後の4月に自主防災組織を設立する予定であった。主に集中豪雨等の水害を想定していた。駅前 JR 陸橋付近では、度々増水被害が発生しており、ふだんから水害に対する関心が高かった。
- ・3月3日の避難訓練では、一世帯から一人は参加することが慣習となっていた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

- ・居住地域が限られ、世帯も少ないことから、日頃から住民同士の連絡が行き届く環境にあり、避難時の安否確認ができた。
- ・国道に「浸水想定区域」の標識が設置されていたことから、津波襲来の可能性があるとは思っていた。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・無線は聞こえていたが、内容は記憶にない。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など）

- ・チリ地震では、津波が川を遡上したと聞いていた。多くの住民がその危険性を認識していた。
- ・湾口防波堤があったことから、津波の被害が鈴子地区で留まったと感じている。
- ・地震直前、国道は渋滞していた。
- ・駅前付近の国道には、10数台の車が水没していた。駅前ロータリー付近にも車が流されて集まっていた。

2) 地域懇談会における証言

松本眞弓さん

- ・地震が発生したときは、町内会長や市の防災担当職員らと釜石ステーションホテルで会議中だった。そのあと自宅に帰って、津波が家の前に来た頃に避難した。避難訓練をしていたため、避難がスムーズにできていた。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

2628-01 鈴子町 男性 60歳代

- ・避難時の様子（外出先、津波想起、車避難）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）

地震発生時、私は即座に宮城県沖地震と直感しました。激しい揺れの中、すぐ津波が来ると確信しました。町の中心部にいた私は、「すぐ車を高台に」と思い、渋滞に巻き込まれる前に高台へと逃げました。余震が続く中、信号は止まり、電柱は波打っておりまして。市内の高台に上って、30分～40分くらいすると、市内中心部の人々がお寺(石応寺)を目指して上ってきました。町の様子を聞くと、「市内中心部にある2つのホテル前で、家が泳いでいる」とのことでした。お寺の山まで車が流されており、歩ける状態ではありませんでした。それほど大きな津波が来たということを、その時初めて知りました。知った顔の人、名前も知らない顔の人、どの顔も恐ろしさを浮かべて、不安そうに立ちつくすだけでした。

私は何とか歩いてでも自宅までと思いましたが、町の中心部はもう既にガレキに埋もれ、通れる状態ではありませんでした。少し余震が落ち着いた時、友達4人と会い、その中の1人の方にお世話になりました。車の中で夜を過ごすのかと思ひ不安でしたが、何とか6人で友人の家で一晩過ごしました。小さな石油ストーブで暖を取りましたが、一晩中余震のため眠れませんでした。翌日早朝、石応寺の山を越えて、のぞみ病院に下りてから、やっとのことで鈴子の自宅に帰れましたが、それから12日間、電気が通るまで裏の市の教育センターに家族5人避難しました。幸運だと思っています。

0964-01 鈴子町 男性 60歳代

- ・被災前の意識（先人からの伝承、津波経験あり）
- ・避難時の様子（外出先、帰宅、周辺の様子見、津波確認後避難）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）
- ・被災の感想（被災経験から油断）

当日、自転車で買い物に行く途中でした。車体がグラグラ、電柱が揺れ、地震だと気付き、すぐ自転車から降りたら、とても立ってられないくらいの揺れで、しばらくしゃがんでいました。経験のない地震だったので、置いた母と犬がいる家にすぐに帰りました。しばらく家の前で状況を見ていました。その後、市のスピーカーで「大津波が来るので避難して下さい」とハッキリ聞こえました。そのうち、釜石駅方面から津波が来るのを確認し、すぐ隣のホテルに母に声をかけ、犬を連れて避難しました。やがて水が押し寄せ、家の中へ入っていくのを見ていました。来ては帰るの繰り返し（3回くらいかな？）。波が来なくなった頃、家に入ってみると1mくらいの冠水で、ヘドロなどで1階はダメでした。しかし、2階があったので、ロウソクの火のもと、一夜過ごしました。

鈴子町地区は大きな被害がなかった（電気・ガス・電話はダメ）、指定の避難所に行ったのですが、朝と夜だけおにぎり1個、パンとかそんな感じで家はありましたけど、食べ物に困りました。そのうち、釜石ガス会社のおかげでコンロ（ガスボンベ用）が配給になり、何とかしのいでいました。

これまで自分が経験した津波は、チリ地震津波です（小学5年頃かな？）。近くの大渡川が何度も逆流するのを覚えています。その後、何十年生きてきて何度となく地震を経験していますが、警報が出ても、いつも大したことがありませんでした。今回亡くなられた方々は、大丈夫だと認識が甘かったのではないのでしょうか。自分は小さい頃、明治生まれのおばあちゃんから当時の三陸津波の恐ろしさを聞いていました。

3762-01 鈴子町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（自宅、屋内避難、九死一生）

余りに大きな地震で慌てて孫に声をかけ、「落ちてくる物がなければ」と思い、屋上に上がりました。地震が少しおさまってから1階に下がると津波でびっくりしました。早く避難場所へと何とか外へ。家の前の道路には津波で車がブカブカ浮き、おまわりさんが「早く車を置いて逃げろ」と大きな声で叫びました。

本当に生まれて初めてこんな恐ろしいことを経験しました。天災はいつやってくるか分らないと、子や孫には言い聞かせておきたいです。

2998-01 鈴子町 女性 60 歳代

・避難時の様子（外出先、帰宅、片付け、避難呼び掛け、避難、九死一生）

あの日あの時間、私は町内会の事務、会計担当として町内会長と釜石ステーションホテルのロビーで打合せ中でした。それも防災組織とそれに関連して防災グッズの準備のため、市役所の担当者を待っているところでした。地震がおさまってからは周りも大変でしたが、家の母親が心配で一目散に帰宅。母は部屋の片付けを始めたので動こうとせず、外の「津波が来たぞー！」という声で大変な状況ということを知ったのです。すぐ息子と同僚の方が迎えに来てくれて、避難先が近いので何も持たずに家を出てしまいました。

声がした時、向かいの事務所の人たちがヘルメット姿で窓の下を見ていたし、我が家も2階にいたので少し安心していました。ベランダから駅前方面の波の壁をみた時はウソーッ！ と思いました。出る時は足首までの水でした。結局入っては来ないで済みました。防災無線は気がつきませんでした。ふだんも家の中にいると聞こえないのです（耳も遠くなっているせいかな？）。町内会として防災組織はH23年度から活動予定でした。高齢者が多いので、早く逃げるためにはどうしたらいいか、などなど。少人数の町内でまとまりがいいので、皆で意見を出しあっていけたらいいと思いました。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (2) 市街地区（港町、只越町、天神町、大只越町、大町、大渡町、鈴子町、駒木町）

[H. 駒木町]

1) 補足調査における証言

（和田秋穂さん、佐々木律子さん、高橋勝子さん、及川伊織さん、三沢光子さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

・地域でお互いに呼びかけながら避難した。一人暮らしの高齢者等に声をかけた方もいた。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

・仕事先、外出先で亡くなった。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

・地震後、近隣の住家同士、駐車場等の広場に集まり、甲子川の様子を見ていた。川沿いの住家では、比較的早い時間に指定避難場所や高台に移動する方もいた。ただし、津波到達まで時間があつたことから、再び自宅に物を取りに戻った方や、川沿い付近まで下がり、津波が遡上する様子を見ていた方もいた。

・地震後、指定避難場所ではなく、高台にある知人の家へ避難した方もいた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

・3月3日の避難訓練には、積極的に地域で参加していた。特に川沿いの住家では、大部分の方が参加していた。比較的世帯数が少ない町内会なので、お互いの連絡が行き届いていた。避難に関して、町内会で特別な取り決めはなかった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

・少数世帯の町内会のため、日頃から住民同士の緊密な交流があり、震災後もお互いの安否を確認できた。

・地域に若年層がいなかったため、今後、一人暮らしの高齢者等の避難方法について考える必要がある。

・現在、屋外避難場所しかなく、地域に集会施設もないため、避難時に暖をとる場所がない。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

・最初、無線の音は聞こえたが、後は全く機能しなかった。サイレンも聞こえなかった。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など）

・真黒い波が河川を遡上し大渡橋を越えた。まもなく堤防を乗り越えて一気に襲来した。同時に、車、ガレキも流れて来た。

・過去のチリ津波地震では、津波が河川を遡上して、魚や船も流れて来たと言っていた。

・川沿いにある地域なので、津波の遡上はある程度予想していた。しかし、湾口防波堤も出来たことから、まさかここまで来るとは思わなかった。

2) ②地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

3510-01 駒木町 女性 60歳代

- ・被災前の意識（備えていなかった）
- ・避難時の様子（自宅、避難呼び掛け、避難せず、九死一生）

大きな地震が起きた時、「これはただごとではない」と感じました。しかし、現住所へ移ってから半年くらいしか経っていなかったため、地域のことも避難場所も分かりませんでした。そのため、「避難してください」と叫んで走っている方がいらっしゃいましたが、家の中にいました。窓を開けて、大渡橋を見たら、橋の三倍くらいの高さの黒い波が見えました。「今から逃げても間にあわない」と思いました。8か月前に息子を亡くして、気力のない時でしたから、死ぬことになっても諦めの境地でした。すぐに波が押し寄せて、川からガードレール上から溢れるように流れ、大きい波が寄せたり引いたりを二回繰り返し、その後、少しずつ波が低くなっていきました。幸い、家が石段の上の地盤がしっかりしていたせいか、あと5cmくらいの所で波が止まり、家の中には水が入りませんでした。でも、次の日まで波が寄せたり引いたり、川の中は車が十数台、丸太やいろんなものがどんどん流れてきました。夜は地下鉄の下にいるようなゴーゴーという音を立てており、電気・水道・ガスは止まり、一睡もできませんでした。

夜が明けたら、青ざめた顔の人たちが泥だらけの道を歩いています。携帯ラジオがあったことを思い出し、探し出してやっと情報が入ってきました。近所を見たら1階は水で壊れ、また大きい車が流されていて、自宅が無事だったことが奇跡的に思えました。家の中に2リットルの水が3本、石油ストーブはありました。冷蔵庫の残り物を少しずつ食べました。しかし、どこからも食べ物が来ません。避難所へは一度も行けませんでした。石油もなくなり、布団の中にカイロを入れ、暖を取りましたが、食べ物もなくなり、やっと中妻のスーパーの表で一時間並び、一人5点までなので、カップラーメンと卵、水を買いましたが、大渡小学校、市民病院の避難所へは行くことができず、町内会からも何も配られません。二回目の買い出しに鈴子の薬王堂へ行き、並んでいたら、教育会館の前におにぎりが段ボールの中に入っていて、「自由に持っていいです」とあり、ビックリしました。そこで二個もらいましたが、家を失い、家族を失っている避難所の人を思い、遠慮している人の所へは何もこないのです。大変な事態はわかりますが、行政のひずみはありました。

1か月くらい経った頃、商工会議所の方が、「駒木神社の前で、少しいろいろ配布しますので来てください」と回ってこられました。場所を探してやっと着いたら、「もう帰る準備で、もう終わりです」とそっけなく、無愛想で面倒くさい感じでした。とても何のために来てくださったのかわかりませんでした。不快感を覚えました。7か月経っても、避難所の人だけ何でも優先、家があっても数日、水、食べ物、風呂はない。五の橋の沿岸側の町は地獄でしたので、特に一人暮らしの老人などはつらかったと思います。町内会の会費は納めているのですからもう少し何とかしてほしかったです。7か月が経った頃、ラジオが配られてきました。今頃何だと思い、私は「要らないです」と言いましたが、怒る気持ちです。

またいつ起こるか分からない天災、人災、最小限の防災準備と入院の準備はしておきたい気持ちでいます。

3241-01 駒木町 男性 50歳代

- ・避難時の様子（仕事、ここまで来ない、避難せず、屋内避難、九死一生）

これほどの大津波が来るとは考えず、会社（松原町）の事務所（2階）にいた。第一波がきたが、小さかったので、そのまま見ていた。次に第二波が来て1階の全てが流された。更に三波も同様の大きさで1階全てが空洞になった。鉄骨の建物なので倒れるとは思わなかった。駐車場の車は全部流出。国道に渋滞していた車も全て流された。もう少し水量が多ければ、2階まで津波が来たと思う。回りの人たちからは「よく無事でいた」と言われた。

これからは「地震イコール津波」と思い、まず避難する。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (3) 嬉石・松原・大平地区

[A. 嬉石町]

1) 補足調査における証言

（成澤幹雄さん、澤田憲章子さん、平野孔明さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・地震発生後、消防団、町内会、民生委員等は、それぞれ避難を呼びかけた。津波が来るぞという住民の声を聞き、近隣の要援護者の在宅高齢者宅等を巡回した。通りがかりの車を呼び止め、要援護者を同乗させて高台へ避難するように依頼する場面もあった。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・自宅に留まり、避難せずに流された。
- ・地震後、地域外の職場から車で帰宅中、渋滞に巻き込まれ流された。
- ・一度避難したものの、貴重品等を取りに自宅に戻り、流された。第1波と第2波間に戻り、流された方もいた。
- ・体が不自由な方が、自宅から避難を呼びかけたが、間に合わずに流された。寝たきりの方を救出するため流された方もいた。
- ・地域外の勤務先等で流された。津波を見て、それから逃げた方が流された。
- ・避難後、低体温症で亡くなった方もいた。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・地震発生後、一部の住民は、自宅前の道路に出て周りの様子を伺っていた。東日本大震災の2日前にも地震があったが大きな被害もなく、住民の緊迫感は余り感じられなかった。そのため、11日の地震後、急いで避難する様子も見られなかった。
- ・市民交流センターなど指定避難所に直接避難した方のほか、町内で取り決めていた一時避難場所に集まった後、指定避難場所に移動する方もいた。
- ・交流センターでは、地域の高齢者又は地域外の方、白山小学校では、児童又は保護者が主な避難者であった。
- ・高台にある親類又は友人宅に避難する方もいた。
- ・一部には地震後、海岸に下がって海の様子を見ていた住民もいた。
- ・各自が避難することで精一杯だった。
- ・渋滞時、いち早く車から離れる判断した方が、一命を取り留める場合があった。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・市指定避難場所のほか、町内会単独で、住家周辺の高台3箇所（公園、嬉石地区集会所、コミュニティ住宅5号棟前）を一時避難場所としていた。3月3日の避難訓練時にも、この避難場所に集合していた。町内会報を通じて参加の呼びかけをしていた。参加者は固定する傾向にあった。
- ・震災の年の4月から、自主防災組織の設立を予定して、準備をしていた。
- ・警察、消防、医療関係者、町内会等のほか市が協力して、トリアージなどの防災訓練を過去に実施したことがある。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

- ・東日本大震災の数年前、地域内で台風、土砂崩れなどがあり、人的被害もあったことから、住民の防災に関する意識が高まっていた。
- ・トリアージ訓練等を通じて、避難後も地域としてどのような「動き」をすればいいのか、把握することができた。
- ・町内会等を中心として、地域の交流が日頃からあり、安否の確認ができた。

- ・要援護者の名簿を町内で作成するにあたり、要援護者の対象が独居高齢者等に限られることから、対象者・希望者が少なかった。個人情報の守秘義務が厳しくなっていることから、具体的な状況を認知できていないというジレンマがあった。個々の状況、時間帯により、要援護の対象となる場合もあった。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・3mという波高の情報は聞こえていたが、記憶にない。パニック状態であった。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関する地域の主な施設など）

（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関する地域の主な施設など）

- ・消防団員は水門を訓練どおりに閉鎖した。
- ・白い飛沫を上げながら、津波が襲来してきた。道路が川のようになった。
- ・過去の津波により町内が浸水したことは伝え聞いていたが、アパートなどの居住者で認知している者は少ないと思われる。
- ・ここまで大きな津波が来るとは思わなかった。
- ・避難後、各避難所では、町内会、民生委員等が協力して名簿を作成して状況把握に努めた。
- ・日中、地域は高齢者のみの世帯が多くなる。多数の家族等が町外の勤務地から自宅に戻って来て、家族の安否を確認した。

2) 地域懇談会における証言

平野富男 さん

- ・長い時間揺れたので、これは津波が来ると思った。そのあとすぐに高い所に逃げた。高い所から様子を見ていたが、第1波から第2波までは5分程度で、絶対に戻ってはダメだと改めて分かった。
- ・記念碑を建てることも大事だけれど、どこまでどれほどの津波が襲来したのか分かるような記録に触れる機会を、毎年1回ある総合防災訓練と併せて作るべき。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

0249-01 嬉石町 女性 30歳代

・避難時の様子（自宅、避難せず、流された、救助）

平成23年3月11日、何気ないふだんどおりの日常が一変し、住んでいた場所及び町並みが一瞬に消し去りました。

あの時、私は自宅で父さんと二人で穏やかな日々を過ごしていました。私は津波に流され、渦の巻かれた中でもがき、気絶してガレキの中で出口を深く探し、やっとの思いで外に出ました。しかし、目まいがして立つことができずにいたとき、また津波が来ました。「もう駄目だ」と思ったとき、水が引きました。女坂の方から男性3人が声を上げて、私を背負って助けてくれました。

運ばれた先は、電気がつかない寒い福祉センターで、何百人の方が身を寄せあっていました。一人でいたので寂しかったという思いよりも、大家族の中に私がいるといった感じなので、泣きはしませんでした。3か月の間、ともに過ごした大切な仲間とともに強く生きていきます。

2956-01 嬉石町 男性 70歳代

・避難時の様子（仕事中、水門閉鎖、車避難、避難呼び掛け、流された）

あの日、団体職員（市老人クラブ事務局長）として、魚河岸町の事務所2階にいました。地震が静まった後、1階に下り、水門を閉めるのを手伝って、自宅に帰ろうとしました。しかし、異常なゆれで心配になり、避難所を目指し、自家用車を走らせました。

松原交差点で自宅とお隣を見たとき、お隣のご主人が障がい者であることを思いだし、「民生委員として一声かけてから」と考えて、自宅車庫に車を入れ、家に入ることなく、行ってみたら娘さんが「助けてください」の連呼でした。救急車も全然駄目。どうにもならないから応援を頼むため別れ、自家用で助けを呼びに行こうとしました。

しかし、5、6歩行った所で「早く逃げて」との声で、見たら近くまで水が来ていたので、家に入り、戸を閉めました。玄関の方を見たら、少し戸が開いていたので、閉めようとしたがダメでした。その時、裏戸のガラスが割れて、一気に水が入ってきました。その水の勢いで玄関から外に流され、気が付いたら水の中でした。急いでもがき、水面に上ったら、2階の床より高い所を流されておりました。そのまま流されて国道に行くと、掴まる物がないので危ないと考えて、山の方に行きました。そこで倒れた電柱に上り、助かりました。

電柱から降りて妻を探しに自宅に行き、妻が2階にいることを確認しました。すると、向かいの家の奥さんが助けてくれとのこと。電柱が倒れていたもので、それを利用して上ろうとしたら体が重く上れません。そのとき3波が来ました。電柱にガレキが迫り、右手が挟まり、取れなくなりました。波が引いて奥さんを助けに降りて見たら、右手が腫れております。釘が6本刺さった痕があり、2か月間腫れが引きませんでした。

事務所が流され、全てなくなりました。事務所には紙2、3枚だけでした。ゼロからのスタートです。事務所も7か月間ありませんでしたので、避難所には行けず、親戚宅を渡り歩き、迷惑をかけながら、与えられた職務に努力しました。退くわけにもいかず、辛い日々でした。今後も努力します。

被災地からの報告として、東京、山形、花巻、岩手町と体験談を話してきました。全国の皆さんに、津波に遭わないようにと願って、話をしました。特に内陸の方々に聞いていただきました。

2956-2 嬉石町 女性 70歳代

- ・避難時の様子（自宅、片付け、避難呼び掛け、屋内避難、流された）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき、反省）

地震発生時、私は外にいました。家や大地は大きく揺れ、電線はものすごい唸り声を上げており、「大地が避けて、飲みこまれるんじゃないか」と恐ろしくて堪りませんでした。地震がおさまった後、家の中に入り、何か壊れているものがないかと、点検のために2階に上りました。被害が少なかったもので、ちょっと片付け、これから避難しようとしたら「津波が来たぞー」と叫ぶ声が聞こえました。窓から下を見ると、車がものすごいスピードで流れ、泥水とガレキが押し寄せてきました。「もう避難どころじゃない。でも2階までは上らないだろう」と高をくくった途端、床下からぐんぐん浸水し、アッと思う間に身体が浮き上り、机の上に乗ったけど、それも束の間。足は机から離れ、頭部は天井に着き、水は口元まで来たのです。もう駄目だと死を覚悟し、釜石を離れている2人の子供たちにサヨウナラ、せめて遺体だけでもこの部屋で見つかるようにと念じました。

その後、水はそれ以上増えないで、どんどん引き始めたのです。この間、数分でしょうか。助かったとホッとしたものの、「第2波、第3波が来るんじゃないか。今より高いのが来たら助かりようがない。早く逃げなくちゃ」と思い、家具や備品などが散乱してる中を何とか階段まで行きました。しかし、その下はものすごいガレキの山。「とても危険で素足では歩けない。誰か助けに来るまではここを動けない。運を天に任せるほかはない」と、壁に立てかかったベッドに登り、ずぶぬれで寒さで歯をガチガチ鳴らしながら、第2波、第3波が押し寄せるのを見ていました。幸い、第1波より大きくなかったので助かることができました。

どのくらい時間が過ぎたのか、安否を確かめる男性の声が下から聞こえ、履き物を持ってきてもらい、ガレキを乗り越えて、避難所に行くことができました。

ちなみに夫も波に飲まれましたが、弛んでいた電線をたぐりながら電柱にすがることができ、助かりました。山が近いのにすぐ逃げなかったことが悔やまれます。

2911-01 嬉石町 女性 70歳代

- ・避難時の様子（自宅、避難呼び掛け、避難）
- ・被災の感想（家族が被災）

私は夫と二男と地震発生時に一緒にいました。地震後、集団で避難する人が家のそばを通っていました。夫は私に「その人たちの後について行け」と言って、自分は前の家の方へ行っていました。それでも三人一緒に避難したいので待っていたのですが、そこへ友人が通りかかって、「一緒ににげましょう」と言ってくださったので、同行して高台へ上って行きました。数分後、津波がすぐそばまで来ました。それから市営交流センターへ行き、その日は体育館に一晩お世話になりました。

13日の夜、三男が迎えにきてくれて、私の姉の家で3か月間お世話になりました。

二男は2週間後にガレキの下ですぐ近くで見付かりました。夫は58日目ようやく、2丁目の住んでいないお宅の玄関先で見つかりました。その後、二人の葬儀をやっと行うことができました。

1980-01 嬉石町 男性 60歳代

- ・避難時の様子（自宅、津波想起、避難呼び掛け、屋内避難）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）

釜石市は平成21年から22年にかけて、災害時要援護者計画に基づいて「地域支え合いマップづくりモデル事業」として、要援護者及び支援者の登録申請を受け付けて、とりまとめをしていたはずですが、その事業の進捗状況がどうなっているのか不明のまま、今回の地震・津波の災害が発生しました。私も支援者として、登録申請書を出していたはずですが、その後、市からは何の連絡もなかったもので心配していたところでした。今回それが生かされていなかったことが非常に残念に思います。地震の時、私は市営A P 3階の自宅にいましたので、地震がおさまったあと、「多少でも津波が来る」と思ったので、同じA Pの住民（35戸）に避難を呼び掛けて歩きました。しかし、高齢者で足腰の弱い方や、「3階・4階にいれば大丈夫」と考えて避難しなかった方々が10名ほどいたので、その方々を3階と4階に避難をさせて、私も一緒に残り、海の様子を見ていました。津波の来襲は1波がゆっくりと来たかと思ったら、たちまち防波堤を越えて、分厚く高い水の塊となって町中を襲い、流していききました。

水はA Pの3階まで到達しましたが、全員無事でした。しかし、A P周辺の水はなかなか引かず、避難しようにも一歩も歩けない状態で孤立してしまいました。夜9時過ぎにやっと水が引いたので、歩けない人も連れて、協力しあい避難所へ向かいました。しかし、途中でガレキの山に会い、進むことができず、またA Pに戻りました。助けを求める連絡方法もなく、暗くて寒い中、食料も少々の菓子類だけで、ロウソクの灯りと石油ストーブで暖を取って一夜を過ごしました。翌日、道を歩いていた人に助けを借りながら、全員が避難所に入ったのが正午頃でした。

この事を振り返ってみても、前述した支援者登録制度が活用されていれば、複数の支援者で津波の来襲前に確認しあい、何処に何人が残っているのか把握確認されて、もう少し早く避難所に救出されていたのではないかと考えられます。今後も災害は必ず来ると思われますので、災害時要援護者支援制度を1日も早く確立することを望むものであります。

2277-01 嬉石町 男性 50歳代

- ・避難時の様子（自宅、経済被害経験、避難呼び掛け、屋内避難）

平成23年3月11日（金）、私は出社前で、入浴中でした。突然、大きな揺れとともに浴槽の中の湯が左右に揺れて、湯が五分の一しか残ってなかったですね。今までに体験したことがない長い長い揺れだったと思います。ガスも停止、慌てて浴室から出ました。「これは、ただごとではない」と感じました。頭にすぐ津波が来ると直感しました。

周りでは叫び声、3階の私は踊り場から下を見ると、避難する車で渋滞しておりました。私たちのアパートの1階の方、3階の方、足の不自由な方々、避難できないような感じでウロウロしているような感じがしました。だんだんと大きな叫び声が私たち（私と妻）の耳に広がってきました。私たちはこのまま車で逃げないで、おじいさん、おばあさん、心臓の悪い方、歩けない方々をどうにかするべきと思い、私たちの車2台を釜石飼料の奥の方に置いてくることに決めました。途中で釜石湾口事務所（国交省）の方が、屋上に5～6人おまして、「早くここの屋上に上がれ」と青い表情で私に何回も言っていたのを覚えています。しかし、海を見ながら戻りましたので、自分では「あと10分くらいは時間がある」と直感しました。意外にも津波がゆっくりだなーと感じたからです。

周りの家に人がいるか確認しました。津波が来るまで、周りの人たちに「津波だ、逃げろ！ 逃げろ！」と言いましたが、皆の恐怖の叫び声で、聞こえなかったみたいです。次に、私は車を置いて、ある家を回ってドアを叩き、「いますか、いますか」と声をかけたが、返事がなかったので、避難したと信じておりました（今でも元気でいることを祈っております）。その後、私たち7人で市営アパート3階まで避難しましたが、津波の高さを見ると、4階まで来るような感じでした。すぐ4階の踊り場に避難しました。次に逃げるとすれば4階の屋根しかない。どうやって屋根まで登るか。（おじいちゃん・おばあちゃん・身体の不自由な方）

15時36分、第一波はじわじわと蛇のように黒い水の塊が来ました（波ではなかった）。第二波は第一波より約70cmくらい高かったと思います。第三波は第一波と同じくらいだったと思います。第四波はいつもの状態に戻ったと感じました。

次にとった行動は、潮の動きを見ながら、3階の知人の部屋が、部分的に濡れてない所があったので、そこに7人で避難した。反射式ストーブが一台だけ動いたので、暖を取った。私は常時2リットルの水を5箱（2L×6本×5箱＝60L）は準備しておりましたので、役に立った。食べ物は、知人宅にあった団子、餅、お菓子が食事となった。最初は30分くらいの間隔で潮を見ていましたが、潮が安定してきましたので、1時間くらいの間隔で潮を見ていました。「早く朝がきてくれ、続いて津波く

るな」、そういう思いでした。

3月12日朝、周りを見て言葉が出ませんでした。

0299-01 嬉石町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（自宅、車避難、渋滞）
- ・被災後の様子（避難生活）

あの日、母と隣人の二人を乗せて車で近所の避難所に避難した途中、R45の渋滞に巻きこまれたが、救急車のおかげで道が開け、救急車よりも先に高台を目指した。あの時、救急車が来なかったら、渋滞していた車もろとも津波に流されていたと思う。

避難所では私たち動ける者が協力して、町内の人たちで組織作りをし、避難所での半年にも及ぶ生活を少しでも快適に過ごせるよう苦心した。皆、それぞれ仮設に移っていったが、野原と化した我が町に戻りたいと思う。やはり、同じ町内の仲間とともに暮らしたいと願う。津波は嫌だが、海は良い。嬉石の海を眺めながら生活をしたい。

また、88歳になる母は避難所で体調を崩した。停電のため、ロウソクの明かりの中、トイレに行くのを少しでも少なくしようと水や食物を我慢したようでした。急速（きゅうきょ）、東京にいる妹たちに頼んで、夜行バスで東京に連れて行ってもらった。やはり、向こうの病院での検査で病気を見つけ、手術を受け、やっと10月に入り少しずつ体調が良くなってきたようだ。釜石の病院だったらどうなっていたかのかと思う。母は津波のことを余り話さないし、釜石の映像も見たくないと言っている。落ち着いたら仮設に戻って来ると思うが、暖かくなるまでもう少し向こうで暮らして、元気になったら、少しは復興した釜石を見に帰ってきてと願う。

0541-02 嬉石町 男性 60歳代

- ・避難時の様子（外出先、津波想起、車帰宅、避難、渋滞、流された、救助）
- ・被災の感想（3m安心）

あの日の午後、私は小川の父母（妻方）の世話をし、茶の間でパソコンで作業しているときに地震に遭いました。間違いなく嬉石の家には津波が来ると思いました。私が小学生の頃は、情報も発達していなかったので、大きな地震が来たときはすぐに避難したものです。避難場所は今も変わっていません。市交流センター（当時は白山小学校）です。大地震がおさまったと同時に、嬉石に一人でいる父を迎えに車で走りました。漁師一筋で現役を引退した後、特殊な職業の影響もあるのでしょうか。足腰が極端に弱ってしまい、5mも自力では歩けなくなっていました。向かう時は車の渋滞もなく進みました。その時点で川の水は引けていましたので、時間がないことは察しがつきました。玄関先で2階に上がろうかとウロウロしていた父がいて、そこにいてよかったと思いました。すぐ車に乗せて、交流センターを目指そうとしましたが、渋滞が始まっていて、車は入ることができません。そのためバックして松原方面へ向かいました。やはり嬉石方面へは進めず一瞬ですが、駅方面の道があきました。私は避難場所の小川の家へとハンドルを右に切りました。

ガス会社の道路が高くなった場所まで辿り着いた時には、気持ちにもゆとりができ、逆流する川を見ていました。「大津波が来ます。避難して下さい」と放送がされていましたが、緊迫した内容には聞こえませんでした。また、ラジオ放送でも到達する津波予想が3m～4mと頭にあり、今、川を逆流している津波がまさにそれなのだなと思っていました。どうして釜石製鉄所の東門を通さないのだろう。反対車線を走ってでも行きたかったのですが、我慢して一番前に行ったら通してもらおうつもりでいました。あと5台です。一気に橋桁を越すような高さの波がやってきました。「このままでは助からない」と思い、車を追い越してでも東門へ入ろうとしましたが、間にあいませんでした。エンジンは止まり、隣の車にぶつかったおかげかもしれません。駅方向へ流された。左右の歩道柵にぶつかり、交差点の排水装置前の排水溝から泥水がものすごい勢いで吹き上げている。車がそこに向かって流れていく。ハンドルにしがみつき目をつぶった。「乗ったら横転だな、父を助けることが出来るかな…終わりかもな」泥水は車の横に当たり、反対方向へ流されて行き止まった。

しばし啞然としていたが、ドアを開けて流れこんでくる水の中、父を引っ張り出す。高い所はシーブラザしかないので抱えて向かった。その時、製鉄所の構内から大きな声で叫ぶのが聞こえた。「こっちに来い」「車から出て早く逃げろ」そして何人かの方が水の中に。父を私と製鉄所の方で抱えてロープで下から二人で構内の中に引き上げていただく。金網の塀を切断して事務主が暖かいお茶と着替えを差し出してくれた。ようやく安堵のため息。小川に妻方の実家があるので送っていただけないかお願いする。しばらくして製鉄記念病院へ行く車があり、送っていただいた。本当に感謝の気持ちで一杯でした。本当にありがとうございました。

その後は庭で火をおこしお湯を沸かし、自転車で買出しの生活がしばらく続く。避難場所以外には支援物資も届かない状況でした。1か月も過ぎた頃に、地区の生活相談の方が訪ねてきて、2回ほど支援を受けることができましたね。嬉石は環境住宅整備事業で代替地として市から購入したところですが、あそこまで無惨に破壊されるとは思っていなかった。ガレキが整備されて見に行って「やはりな」と諦めるしかありませんでしたね。

その時は、その判断しかありませんでしたが、湾口防がなければ私と父の運命は別だったと思っています。余りにも情報が発達しすぎて、また直近での津波でも情報以下の津波しか来ていなかったため、3mの情報を過信して自分の目で確かめず、家でテレビ・ラジオで情報をもらっていた人たちが犠牲になったような気がします。避難場所も高台だけでなく、町中にいたときはその状況に合わせて何箇所も想定しておかないと駄目だなと感じました。防災放送もマニュアルどおりの放送でなく、釜石湾を映していたカメラでも湾口を越えてくる波が確認できたはずです。逃げろ・逃げろの連呼の方が市民にも伝わったように思います。防災センターは高台に海の状況を見て放送ができるようにする。沿岸道路、バイパスを高架橋にして嬉石トンネルまでつなぎ、川には水門をつける。製鉄所の裏山、スラグ（エンクラ山）を崩して嬉石、松原地区を埋め立てる。ガレキを燃やしたスラグも埋め立てて住宅地を増やす。

7019-01 嬉石町 女性 80歳代

- ・被災前の意識（訓練参加）
- ・避難時の様子（自宅、屋内避難、流された）
- ・被災後の様子（当日の避難所の様子）

私のアパートでは9名の方が亡くなりましたが、83歳の私が助かったのは、町内会の訓練に参加していたからだと思います。

そして、交流センターで町内会長さんや他の皆様によくしてもらったことに感謝しております。センター長さんもよくしてくださいました。毎日のミーティングも1日の生活に効果がありました。

避難所までは遠いので、アパートの3階まで上った方が良いと、私は2階から3階に上がりました。3階にも真黒い水がきました。友達が「あなたの姿が見えなくなったよ」と言っていました。黒い水を2回ほど飲みました。「もうダメ、死んだな」と思っていましたら、水がスーッと引き始め、「ああ助かった」と思いました。

それからが大変でした。道路はガレキの山、水も流れております。暗い夜、道を数人で、杉山を手探りで1時間も歩きました。センターに着いたら、座ることもできないほど、たくさんの人がおりました。着替えもなく、ガタガタ震えながら一夜を過ごしました。皆から一枚ずつ衣類をもらい、助かりました。

2982-02 嬉石町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（自宅、避難、要援護者支援）
- ・被災時の様子（周辺住民の様子）

あの日あの時、私はベッドに横になっていた。あの大きな揺れと「バンバンバンバン」という大きな音で、ビックリしてベッドから起きて、すぐ上着を着て、2、3日前に地震がおきたときに用意していたリュックを背負って、玄関に出ようとした。

戸が開かなくなっており、杖で茶の間の部屋の戸を30回ぐらい叩いて、ようやく開いた。仏様の位牌を持って、兄と二人で近くの会館へ。私は足が悪いので、シルバーカーを押していき、近所の階段では手すりに掴まって上の道路に上がり、シルバーカーは兄が上に運んでくれた。そして交流センターの下の道路までシルバーカーを押していったら、後ろから軽自動車が停まって「どうぞ乗ってください」と言われた。思わず「乗せてください」と言った。私の兄は「いいべか」と言って、喜んで乗せてもらいました。兄はこの軽自動車がこなかったら、どうやって交流センターに私を連れて行ったらいいか考えていたそうです。皆さんの親切で無事センターに乗せていってもらって助かりました。本当にありがとうございました。

地震が起きてから近所の高台へ上るまで15分～20分くらいでした。自分の家の方から表通に向って軽自動車が流れてきたのを見て、びっくりして震えがとまらなかったです。とにかくすぐ高台に上ったことで助かったのだと思いました。

後日、よその家の話を聞いたら、おばあさんを嫁さんが連れて逃げようとしたら、おばあさんが「私は逃げない」と言ったので、よその人たちに手伝ってもらっておばあさんを連れて行ってもらおうとしたら、波に飲まれて、助けに来た人が亡くなったそうです。とにかく急いで高台へ逃げるに限ります。命を大切にしたいものです。

2696-01 嬉石町 男性 50歳代**・避難時の様子（外出先、家族の様子見、車、渋滞）**

私は、地震発生時、大町にいました。強い地震の後、15分くらいして、嬉石の自宅に行くか、定内の入院先の母の病院に行くか考えましたが、定内の母の病院へ行くことにしました。しかし、駅前までの道路は渋滞して、大渡川は津波で溢れそうでした。東門に無理やり入り、助かりました。その後、津波は道路を越え、駅前まで浸水しました。地震の後、嬉石、松原、駅前の道路が渋滞していたので、東門に入れてくれれば少しは被害も少なく、死者、車の流失も少なかったと思います。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (3) 嬉石・松原・大平地区

[B. 松原町]

1) 補足調査における証言

（八幡徹也さん、柴田渥さん、斉藤靖子さん、多田智恵子さん、藤倉志都子さん、及川美代子さん、伊藤由広さん、大久保榮夫さん、菊池ヤス子さん、菊池悦彦さん、佐藤金光さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・地震後、近隣で声をかけあいながら避難した。町内の国道が渋滞したことから、町内の高台方向に車を誘導する住民の方がいた。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・津波が渋滞中の車を襲い、車内に留まった方が流された。
- ・避難を住民に最後まで呼びかけた方が亡くなった。
- ・体が不自由な方が、自宅から避難できずに流された。
- ・3mという情報を聞いて、避難せずに自宅に留まり流された。
- ・避難後に、低体温症で亡くなった。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・地震後、町内の各所では、近隣の方が寄り集まり、周囲の様子を見ていた。海岸付近に住む3丁目の住民は、比較的早く町内の高台に徒歩・車で避難を始めた。
- ・地震後、松原公園より高台に住む一部の住民は、周辺の片付けをした後、周りの様子を見るため、避難所である松原消防コミュニティセンターまで下がってきた。
- ・避難者輸送のためか、頻繁に町内を車で行き来している住民もいた。
- ・津波で流される車内から脱出し、船に乗り移り一命を取り留めた方もいた。
- ・国道方向から、高台に向かう町内の道路は、車で避難した車で一杯になった。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・過去、町内で土砂崩れ災害があったことから、住民の防災意識は高かった。消防団も参加した自主防災組織を設置し、救護班、情報伝達、交通誘導等の役割を決めていた。
- ・3月3日の避難訓練では、指定避難所の松原公園、松原神社の階段付近に集まっていた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

- ・土砂災害の経験が、住民の意識の中に安全な所に避難する心がけが生まれた。
- ・日頃の町内会、自主防災活動の成果が、避難後の地域ぐるみの救援活動を可能にした。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・防災無線では、津波の高さは3mと何度も放送していた。サイレンも鳴っていた。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など）

- ・今まで体験したことのないような大きな揺れだったので、土砂崩れが起こるか、外壁が崩れるのではないかと懸念を感じていた。
- ・過去の津波が、地域に襲ってきたのは聞いていた。湾口防波堤も完成したので、津波が来ても床上程度だと思っていた。

2) 地域懇談会における証言

菊池秀子 さん

- ・松原川（松原町3丁目）あたりで堤防が壊れて、津波が上陸した。松原町1丁目まで津波が来て、流されて来たガレキや畳が詰まって通れなくなっていたのを見た。

野館アイ さん

- ・津波が来るなんて思っていなくて自宅にいたが、若い方たちが高台まで避難していく姿を見て、つられて上がっていった。
- ・水深が浅くても重いものを持ち上がっているのを見て、水の力はすごいと思った。

野館幸子 さん

- ・地震発生時には自宅にいた。大きな揺れだったので、津波が来ることを直感し、すぐに高い所へ避難した。そのとき一人で中妻町方面へ自動車ですべて避難をした。幸い、行動するのが早かったため、渋滞に巻き込まれることなく中妻まで行けた。少し遅かったら、渋滞に巻き込まれて流されていたろう。

柴田渥 さん

- ・松原町会の以前の取り組みとして、避難訓練や防災学習を毎年実施していた。避難訓練を充実させるためにタンカーやリアカーを使った避難訓練を行っていた。土砂災害に遭った地域であったので、訓練については関心の高い方たちが多い地域であったと思う。
- ・松原町のなかで高台から比較的遠い方たち（3丁目）は、高台に近い方たち（1丁目や2丁目）よりも早くに避難していた。海に近いことを意識していたからこそであるし、意識を向上させるためにも避難訓練の重要性を改めて感じた。

横山幸雄 さん

- ・今までの避難訓練は、津波が来ることをそこまで現実感をもって考えることができていなかったと思う。
- ・過去の津波災害（十勝沖地震津波等）の経験から津波は引き波があつてからやってくると思ってい、周辺住民の避難支援を優先して危険な経験をした。

今入光子 さん

- ・小さい頃から「地震があつたときは川や海に近づくな、とにかく逃げろ」と母から家訓のように言い聞かされてきた。
- ・遠野から嫁いできた兄嫁にもそのことを教えていたが、地震があつたときは兄嫁一人だったらしく気が動転して避難ができなかったらしい。本当に残念でならない。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

2436-01 松原町 男性 70歳代

- ・被災前の意識（先人からの伝承）
- ・避難時の様子（外出先、帰宅、避難呼び掛け、避難）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき）

私は松原町に生まれ、7才から港町に住んでいたの、海（津波）の恐さは身に染みていました。もちろん、父からも常々言い聞かせられていました。かつて昭和35年のチリ地震など、何度も地震や津波の経験もありましたが、あんな大きな地震は初めてです。

あの時、自分は港町の公共埠頭の入口近くをウォーキング中でした。地面が海面のように波打っているように見え、立っていることができませんでした。頭の中は真白でした。とにかく家に帰り、停電の中でポケットラジオの電源を入れたその時、「第一波が来襲している」との情報。妻と隣りのオバサンの手を取り、一目散に避難所へと逃げるだけでした。この間、どれだけの時間が経ったのか、自分がやったことの正確な記憶は残っていません。

今になって父から耳にタコができるほど聞かされていた「地震が起きたら、まず逃げろ」が、まさに的を射た一言だと思います。今後とも海の近くに津波の心配のある所に住んでいる間は「まず逃げろ」を家訓に、残り少ない人生を精一杯楽しいものにして行こうと思っています。

2551-01 松原町 男性 70歳代

- ・被災前の意識（ここまで来ない、ハザードマップ浸水域外）
- ・避難時の様子（自宅、家族の様子見、避難呼び掛け、屋内避難、流された）

ここまでの津波が来るとは思っていなかった。なぜなら、ハザードマップでは自宅は外側すれすれだったと記憶している。また港防、川の堤防のかさ上げ工事も終わっていた。幾度か津波を経験していたが、「自宅まで津波が来たら、市内（東側）は全滅」との固定観念があった。

隣に住む兄の所に駆けこむと、外で義姉が「今日はデイサービス」と近所の人たちと話をしていた。その時点ではふだんと変わらない様子だったので、家に戻った。1、2分後、近所の人から「津波が来る」と声をかけられた。妻に避難を促されたが信じられなかった。妻は外へ出た。すぐに水が玄関まできたので、逃げるタイミングを失った。戸を閉め、鍵をかけ、妻が用意していたコートとバックを持ち、2階へ飛び上がった。窓を開けると、既に隣の家は1メートルの水位だった。その後、玄関横の窓から津波が押寄せると同時に家が浮き、ガレキを巻きこみながら家ごと流された。20～30度くらい傾きながら流さ、止まったときにはガレキの上だった。窓から外へ脱出すると、6、70メートル先で妻が手を振っていた。そこに辿り着くまで25分くらいかかったが、合流することができた。

2551-02 松原町 女性 70歳代

- ・避難時の様子（自宅、津波想起せず、避難呼び掛け、津波確認後避難、九死一生）
- ・被災の感想（反省、ここまで来ない）

地震発生時は、津波から避難することは思い浮かばず、夫に促され、玄関の戸を開けて台所の入口に立っていた。横揺れ縦揺れ、家の中がミックスされた感じがした。家具は倒れはしなかったが、台所はメチャメチャだった。夫と自分の薬、身の回りの物をカバンと手提げ袋に手当たり次第に詰めた。

「津波だ」という向いに住む住民の声が聞こえた。夫は兄の所から戻ってきて、数分経ったか経たないかだった。「外の様子は変わっていない」と言う夫に、「逃げよう」と促しても信じてもらえず、言いあいになる。私はバックと薬袋を両手に持ち、家を出た。50メートル先の2階建ての家が、スローモーションを見ているかのように斜めに曲がり、道路の方へ動いていた。家の前の水路を見ると、隣の橋の所までゆっくりひたひた黒い水が押し寄せていた。余り大きくはない石ころは逆流していた。

足の悪いのも忘れ、後ろを振り向かず（母から言われていたことを思い出す）、途中で横の方へ行こうと立ち止まったが、そのまますすぐに逃げた。気付くと多くの人たちがいた。近所の人たちから夫のことを聞かれて、振り向くと家がない。夫は家の中だったので、亡くなったと思った。咄嗟に「息子に知らせないと」と思ったとき、職場の人に気付く、状態を説明し、伝えてもらえるようお願いした。その後、ガレキの先端まで戻り、家の方向を見ていると、何か動いている人影が見えた。茶のコート、中に着ていた服、間違いない夫の姿だった。まさに命でんでんこでした。安心と同時に涙も出ず、ただ何回か身体の下からワァーと大声が出た。

その後、義妹の家、息子の所へ避難し、現在仮設住宅で暮らしている。先々のことを考えると不安ではあるが、1日1日を大事に暮らしていこうと思う。

私たち夫婦は反省組。そのときの判断、ラジオなどで慌てずに情報を得ること。「ここまで……」とか、想定内・外などの固定観念を捨て、地震→津波→高台へ避難（海拔30メートル以上へ）写真（DVD）を参考に3.11東日本大震災、体験したことを孫たちへ後世に伝えるよう願っています。また、今回多くの人たちにお世話になりました。徳島県からのボランティアさんとの交流、安南市室田小学校、生徒の皆さんからのメッセージ、感謝の気持ちでいっぱいです。

9918-00 松原町 男性 60歳代

- ・避難時の様子（外出先、車帰宅、片付け、避難呼び掛け、避難）

地震発生時、私は釜石市民体育館で卓球を楽しんでおりました。体験したことのないような強い揺れを感じ、外に出て揺れのおさまるのを待って、体育館から車で自宅のある松原町に向かった。道路は信号が消えており、事故を起こさないよう走行中は細心の注意を払って運転し、何事もなく自宅に着いた。家の中を見ると、洗面台等が倒れており、後片付けを行っていたが、消防団の方の「水が来たぞ、逃げろ」の一声で、慌てて外に出て、何も取らずに、長靴で妻と愛犬と一緒に高台に向かって避難した。

防災無線が流れていたのか全然聞こえていなかった。

2487-02 松原町 女性 70 歳代

- ・避難時の様子（外出先、帰宅、ここまで来ない、屋内避難、流された）
- ・被災の感想（家族が被災）

あの日、私は大渡町の集まりに参加しておりました。主人も 2 時半頃から出かけて行く用事があったので、家は留守だったけど、余りの揺れに「もしかしたら」と思い、裏通りを一直線に自宅に向いました。ふと矢の浦橋の下を見ると、水がグングン引いていくではないですか。急いで車を松原コミュニティにおいて、「もしかしたら主人が自宅にいるかも」と思い、自宅に下っていきました。案の定、主人が私を探していました。

「急いでコミュニティに行こう」という私に、主人はいつもの口癖で「この家は大丈夫だから」と言って、逃げようとしないので、何度言っても無理と思い、「じゃ 2 階に上りましょう」と一度は 2 階に上りました。時間に余裕があったので、2 階に食べ物やコンロなどを持ち、1 階と 2 階を上ったり下がったり何度も繰り返していました。川の水が引いているのを思い出し、もう 2 階に上がろうとしたとき、大きな音とともに、横の扉が破壊されました。何が起きたのかと二人で顔を見合わせたとき、一瞬で真っ黒い水が、2 階に上ろうとした主人の首の辺りまで来ました。次の水が主人を飲みこんでしまいました。私は泥水の中を手すりに掴まり、2 階に上っていきました。すると、2 階の窓の半分以上に水が来ていたので、上の小窓を開け、やっと通れるくらいの所を這い上がって屋上の階段に掴まりました。やっとの思いで屋上に辿り着くと、ガレキが、屋根が、そして布団が目の前を流れていきました。船で酔っているようで気分が悪かったです。

一人屋上で津波がおさまるのを待って、2 階に下った時は天井まで水の跡がありました。階段にはガレキがあり、一人では下りることもできませんでした。仕方なくびしょ濡れの布団を引っぱり出して、一夜をブルブル震えながら過ごしました。

何が何でも逃げるのが一番だと反省しています。辛い辛い一日の出来事でした。目の前で流される主人を悔いる毎日です。一人はやっぱり寂しい。寂しすぎる。

2680-02 松原町 女性 50 歳代

- ・避難時の様子（自宅、避難呼び掛け、避難）

3 月 11 日の地震直後、自宅にいて、大きな揺れで玄関先へ出ましたら、消防車が矢の浦橋から来て大津波警報を聞きました。以前の警報と違って緊急を感じて、鍵をかけて貴重品を持って歩いて避難先へ向かいました。15 分ほどしてから、松原コミュニティ防災センターへ行く道路の途中までガレキが来て、まさかと思いました。翌々日、自宅を見に行ったら基礎しかなく、放送のおかげで助かったのではないかと思います。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.1 東部地区 (3) 嬉石・松原・大平地区

[C. 大平町]

1) 補足調査における証言

（紺野武司さん、岩渕善吉さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・海岸部の鉄工団地地区では、従業員を率先して高台へ誘導していた。
- ・望洋ヶ丘町内会では高台へ避難した従業員を集会所に受け入れ、町内会で備蓄していた水や食料等を提供した。
- ・指定避難場所への災害弱者（身体障がい者、高齢者等）の搬送手段（人員確保、車両等）の検討が必要である。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・勤務先から自宅へ車で向かう途中で津波に遭い、流された。
- ・災害弱者を避難させようとして、自ら避難できずに流された方もいた。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・多くの住民は高台の地域に居住しているため、避難しなかった。一部の住民は、海の様子が見える場所に集まった。
- ・鉄工団地地区の事業所では迅速な避難行動が見られた。津波経験がない多くの外国人従業員は、車で高台に避難した。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・平成16年7月に自主防災組織を設置した。火災防火等の取り組みを主体としており、特に津波避難についての取り組みはなかった。また、高台の地域のため、3月3日の避難訓練には参加していなかった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

- ・日頃の町内会活動の積み重ねにより、各住民がお互いに安否確認をしあうなどの結束が見られた。
- ・町内会で備蓄していた水や食料等を活用することができた。
- ・少数の若者や高齢者に対する避難訓練への参加の促しが必要である。また、高齢化への対処が必要である。
- ・発災時における近隣町内会との連携の在り方について、事前の協議が重要である。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・音が聞こえているという認識はあったが、パニック状態のため内容がよく理解できなかった。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など）

- ・津波襲来の前、国道45号線は車で渋滞した。矢の浦橋付近では、平田方面に向かう道路は空いていたが、市街方面の国道や道路は渋滞していた。
- ・水門は2か所を閉鎖した。嬉石町の管轄下であったことから嬉石町消防団が対応した。
- ・傾斜地であることから、土砂崩れなどの二次災害の危険性も懸念されていた。
- ・望洋ヶ丘の地域では西風が強く、数年前には民家の屋根が飛ばされたこともあった。

2) 地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

0318-01 大平町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（外出先、車帰社）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）

3月11日は、仕事で準夜勤務の日でした。午前中、大槌で買い物し、鶴住居の友達に電話をしたら家にいないようなので、そのまま釜石に帰ってきましたが、家に帰るには時間が中途半端になると思い、公共埠頭で仮眠していたら地震が来ました。目の前は海、夢中で逃げました。信号は止まり、街の店の棚からは物が落ちすごいことになっていました。夜間用の駐車場に車を止め、病院へ向かったら、玄関では役所の方が「早く上に上がって」と言っておりました。着替えて、5階に上がった時に津波が押し寄せてきました。

電気も暖房、トイレも使用できない。1階の給食も被害に遭っているの、患者さんに食事を出せない。隣のお薬師さんに避難した方々も病院の方へ避難してきたので、廊下も避難してきた方々で一杯。雪も降ってきましたし、割れたガラスからは容赦なく風が入ってきて寒さはピーク。廊下に避難した方々はダンボールを敷いたり、かけるものがないので、病室のカーテンをとってかけてやったりしましたが、それでも足りませんでした。

次の日、夜が明けて病院の窓から見た景色は、とんでもないものでした。家族も連絡ができない。他県に住んでいる母・妹・子どもたち・親族はどんなに心配していたことか。連絡がついてからは、どうにかガソリンを手に入れ、駆けつけてくれました。これほど人のありがたみを感じたことがあるのかと思うほどの経験でした。警察の方々、自衛隊の方々、本当にご苦労様でした。そして心からありがとございました。

私も大切な友人を亡くしました。午前中に大槌に行った帰りに電話を入れた鶴住居の方です。第二の人生を一緒に職場で働くことになっていた方です。とにかく大きな地震が来たら逃げることです。今でも毎日通る松原・嬉石を通ると怖い。でも一日一日少しずつ変わってきています。時間がかかるかも知れませんが、住みよい町になってほしいです。そして、将来を担う子どもたちがこんな悲しい目に遭わないように！

3391-02 大平町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（外出先、津波想起せず、車帰宅）
- ・被災時の様子（家族が被災した様子）

あの日、私は釜石市場前の喫茶紅でコーヒーを飲んでいて。突然の揺れ、全くおさまらない激しい揺れ、「日本が沈没する。何か大事が起こる」と感じたが、大津波は思いも及ばなかった。地震の続く中、車に飛び乗り、大平の自宅を目指した。信号は止まり、車は全く走っていなかった中、全速力で走り助かった！あと5分遅かったらとても家に辿り着けず、今頃は太平洋の藻屑となっていただろう。結果として助かることができたが、判断、決断が命を左右したのではないと思う。嬉石町にある実家は流され、一人暮らしの母は交流センターに逃げていた。87歳の母である。まさか大津波が来るとは思わず、家にいた息子を母を探させに嬉石に向かわせ、その何分か後にあの津波。私の心はどんなだったか……。息子を私の身勝手に殺したと思った。高台にある家から嬉石に向かって「ウォー」と叫んでいた。泣きに泣き、泣き疲れた時に息子が帰ってきた。もう抱きつき泣いた。夫は地震からすぐに自分の3.5トンの船を沖に出し、1晩戻らず、これもまた心を痛め、2日目に戻ったときはまたすがって泣いた。

今の私は体調を崩し、点滴を受け良くなり、また悪くなり、体の変化が激しく、鬱になりそう。辛うじて時間が解決してくれるのだろうかと思いながら、好きなバレーボールの練習にも行けない。いつになったら……と思いつつ、毎日を送っています。体調を戻すことを考えながら、87才になる母を引き取り、5人の生活を送っています。私より大正生まれの母の方が元気でピンピンです。1日も早く釜石が元に戻るよう、心から願っています。

3635-01 大平町 男性 80歳代

- ・避難時の様子（外出先、車帰社、社員の様子見、避難、九死一生）
- ・被災の感想（反省）

仕事の外出先（大槌）で地震に遭い、すぐに工場に戻ろうとしたが、既に海水面は異常に下り、津波の危険は十分察知することができた。しかし、工場にいる者たちの安否が気にかかり、国道から海のそばの工場へ降りていった。工場内で無人を確認すると、すぐUターンして、防波堤から溢れ流れる海水を蹴散らすようにして、危機一髪で高台の国道に戻った。

国道に避難している人たちの中に工場にいたはずの者たちの顔が見当たらなかったのが非常に不安で、どうしても確認したかったのだが、今思えば無謀な行為だった。絶対やってはいけない行為であると反省している。

0529-02 大平町 男性 30 歳代

・避難時の様子（仕事中、車帰宅、津波想起せず、渋滞、車乗捨て、避難、九死一生）

仕事先で地震が発生し、職場の人全員で外に飛び出した。その後、解散ということになったので、会社の車で家に戻ろうと思った。海の近くの道路を通るのだが、あんな津波が来るとは思っていなかったもので、別に何とも思わなかった。途中で渋滞に巻きこまれたときに、いつもと様子が違うことに気づき、咄嗟に近くの駐車場に車を置いて、走って反対方向に逃げた。

もしあのまま進んでいたら今生きていたかどうか……考えるだけでも怖いと思った。

3244-03 大平町 30 歳代

・避難時の様子（仕事中、車帰宅、九死一生）

山田町内の幼稚園で仕事中に被災しました。当時、数人の園児を預かり、一回目の地震後に迎えに来た父兄に引き渡しましたが、その方たちの安否が確認できたのは、4月に入った頃だったと思います。幸い、園の職員の方々と一緒に避難できたので、土地勘も事前の知識もありませんでした。何とか過ごせました。それでも周りの方の行動に付いていくしかなく、釜石を含め津波被害（地震も）がどこまでなのか情報もなく、不安でした。

釜石のことは分かりませんが、私がいた場所では津波警報は全く聞こえませんでした。「2日前の地震よりも大きな揺れだったのに」と思いましたが、数十分経っても注意報すら出なかったのも、「震源地などの違いで津波は来ないのだろう」と思い、車で帰宅しようと思いました。エンジンをかけ、出ようとしたときにサイレンや警報が聞こえ、海の方を見ると茶色い煙が広範囲に広がり、「地震で火事か？」と思いました。その後、すぐに波や建物、車が押し流されるのが分かり、もの凄い津波だと分かりました。電線が縄跳びのように揺れ、ものすごい状態でした。私がいた所から 100m もない所でガレキが押し寄せていて、間もなく火災が発生しました。「もしあと数十秒早くに車を発進させていたら」と思うと、怖くなりました。

それから4日目まで、避難所を移動しながら過ごしました。いつか津波が来るとは知っていましたが、「自分が自宅以外にいたときに」ということは想定していなかったのも、それからは車にも上着から水、食料を載せています。

3338-02 大平町 女性 50 歳代

・避難時の様子（仕事中、避難呼び掛け、車帰宅）

会社（只越町）にいたときに地震が来ました。余りの揺れに、社内にいた全員で外に出ました。ブロック塀が倒れ、水が出ていました。近所の人「そこは昔、井戸だった所。これは津波が来る」という話を聞いて、揺れている中、車で自宅に向かいました。途中信号機は消え、道路はデコボコになっておりました。何とか家に辿り着くことができました。

「津波が来る」という話を聞かなかったら、もしかして片付けをしたりして取り返しのつかないことになっていたかもしれません。2階にあった会社の建物は全て流されました。今後は自宅に帰ることをせず、まず避難することを家族（夫）と話しあいました。

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.2 平田地区 (1) 平田地区 (大字平田第 3～6 地割)

1) 補足調査における証言

(前川輝夫さん、福田博さん、佐々木剛さん、赤崎哲さん、小野寺民子さん、前川耕一さん、川向真吾さん、村越進さん、前川かなさん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・消防団員の一部は、水門閉鎖後、軽トラックで避難の途中、高齢者等の要援護者を荷台に乗せて、避難先の平田幼稚園に移動した。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・自宅に留まり逃げなかった。逃げ遅れた。
- ・体の不自由な方を安全と思われる場所まで車椅子で移動させたが、その場所が浸水して流された。
- ・一度避難したが、ペットが気になり自宅に戻って流された。
- ・避難の準備に手間取り流された。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・地震後、町内各所で数人の住民が集まり、周りの様子をうかがっていた。
- ・海岸付近に居住する住民は、津波避難に関する意識が高く、比較的早くから最寄りの高台等に避難した。また、住民同士で協力しあい、怪我人や車椅子の利用者等、体が不自由な方の避難を補助し、旧釜石商業高校等の避難場所への移送を繰り返した。
- ・自宅の屋根に上って、一命を取り留めた方もいた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・自宅の場所により、概ねの避難場所は各自で定めていた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・消防屯所に保管してあった合羽、半纏、毛布類は被災せず、避難場所で利用された。
- ・無線等は整備保管していたが、保管場所が浸水してしまった。
- ・今後、避難を呼びかけるためのハンドマイクが必要だと思われる。

C. その他

(1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)

- ・聞こえたが、耳に入らなかった。聞き取れなかった。余裕がなかった。
- ・防災無線が津波襲来後の救護活動の連絡等に重要な役割を果たした。

(2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など)

- (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など)
- ・水門は、訓練どおり閉鎖された。

2) 地域懇談会における証言

祝田由美子 さん (平田幼稚園園長)

- ・地震が発生したときは、平田幼稚園にいた。その日は午前保育の日で、預かり保育として4名の園児を預かっていた。揺れがおさまったら、その子たちを連れて園庭に出た。園庭で寒さ対策としてシートで風除けを作ったりして待機をしていたが、その後、旧商業高校へ移動した。
- ・迎えに来た保護者と一緒に移動した。大震災以前に引渡しの取決めは行っていなかった。

佐藤美智子 さん

- ・地震が発生したときは、漁村センターで打合せをしていた。自身を含め3名でいたが、すぐさま避難を促されて、それぞれ車で自宅に戻った。その後、近くの平田幼稚園の園庭に移動した。更に高い所にある旧商業高校へ避難した。その時、「津波のときには、川沿いには行ってはいけない」と言われていたので、浪竹山の林道を通して移動した。

及川正人 さん

- ・地震が発生したときは、自宅にいた。自宅は津波の心配のない高い所にあったが、夜になって旧商業高校に移動した。

小松政由 さん

- ・地震が発生したときは、甲子町の会社にいた。自宅に戻るのは無理だと思ったので、2日間会社に泊まって、3日目の朝一番に三陸鉄道を渡って自宅を目指した。会社の中で防災対応のメンバーになっていたのもので、また会社に戻った。

福田博 さん

- ・地震が発生したときは、ウォーキングの途中で海沿いにいた。揺れがおさまるまで近くの柵に掴まって様子を見ていた。その時、海沿いの崖で2回地すべりがあって、海に落ちていくのが見えた。
- ・地震がおさまったあと、車が通れるように落ちている石をどかしながら移動した。移動の途中、ふだんはきれいな沢の水が泥水になっていた。
- ・平田幼稚園まで来たら、園庭で子どもたちの寒さしのぎの手伝いをしていたが、消防団から「第1波が来た」と聞いて、自宅(旧商業高校のグラウンド脇)を目指した。
- ・自主防災会は機能しなかったため、漁協の方たちが中心となり、毎朝、体育館(避難所)の前でそれぞれの役割分担を支持して動いていた。遺体の別の体育館(第1体育館)に運びこんだり、津波で壊れた家屋の廃材を軽トラックで燃やして暖をとったりした。

小野寺民子 さん

- ・地震が発生した時は、自宅にいたときに地震に遭った。ブレーカーを落としておいたり、ガスの元栓を締めたりするように決めていたので、それらの行動をしてから、国道沿いに逃げた。
- ・周辺には津波に流されてしまい、海水をたくさん飲んでしまったり、怪我をしまったりした方が数名いたため、近くの歯科医院の待合室や治療室を借りて手当てをした。

久保修 さん

- ・地震が発生したときは、遠野の会社にいた。情報がなくて分からなかったが、釜石まで戻ってきた。そのとき、新仙人峠道路が通行止めになっていたため、旧仙人峠を通ってきた。奥さんがせいてつ記念病院に勤務しているので、奥さんの安否を確認した。大津波が解除になるまでの2日間、滞在した。3日目に東門から出て、周辺の様子を確認しに行った。その後、飲料水や食料が自宅に備蓄してあったので、ギリギリ浸水しなかった自宅で過ごした。

猪又安子 さん

- ・地震が発生したときは、車で自宅に帰宅途中で、そのまま自宅を目指した。自宅に到着後、館山神社に移動したが、津波が見えたので、さらに高台の夏山という所まで移動した。
- ・明治16生まれと明治19年生まれのお祖母から、「地震が揺れたら、二回揺れ返しが来たら、津波が来ると思え」「逃げるときは、竹の根で地割れしないから竹藪に逃げろ」と教えられてきた。

前川輝夫 さん

- ・地震が発生した時は、製鉄所の火力発電の点検工事のためのプレハブ作りをしていた。
地震で製鉄のタービンが自動停止して、蒸気が吹き上がった。そのとき、プレハブ建設のための吊り上げていたクレーンを下げさせたり、上層階に上がっていた従業員の方たちには降りないように指示したりした。
- ・津波襲来前は、国道が東門から松原まで渋滞していた。第一波襲来後には、松原のガスの電柱が倒れたり、葬儀屋の所にはガレキが溜まったりしていた。

- ・15時半頃に釜石駅に行ったら、津波が来てプールのように水が溜まっていた。そこで溺れている方がいたので、飛び込んで助け上げた。ほかにもガード下で溺れている方が見えたため、上がらずに泳いで3人助けて、三鉄の線路の上に上がった。その後、第二波で線路まで津波が来ていたので、そのままそこにいたら死んでいたと思う。
- ・震災前の取り組みとして、避難所は平田集会所と決めていた。また、21年度に整えた防災組織は、当日皆平田地区がおらずバラバラであったことと、商業高校で防災訓練をやっていたものの、慣れていなかったり経験がなかったりしたために、機能しなかった。
- ・いままではチリ地震津波のように津波到達まで時間があると思い、自宅に物資を取りに戻ったりした方が多かった。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

3206-11 平田 40歳代

- ・被災前の意識(先人からの伝承)
- ・避難時の様子(外出先、すぐ避難、避難呼び掛け、3m安心、九死一生)
- ・被災の感想(後世に伝えるべき)

私は子供の頃から明治生まれの祖母に釜石の歴史や津波の話を聞き育ちました。小学の頃は昆勇郎さんの書いた本を読み、地震津波について興味を持ち調べて今に至ります。今思うと、3月9日の地震後、同じ部分で小さな地震が多くあり、自分の中では3月9日の地震が余震だったら、大きい地震が来ると思って、周りの人には話をしていました。祖母の話の中に、津波の前には、「いわしの大漁」、「沖合いからドドンと共鳴する発破のような音」などがありました。思い返せば、発破のような音は1月頃から頻繁にありました。例えば悪いですが、「近隣国でミサイルでも発射しているんじゃないか」とよく思っていました。1年前くらいには「いわしの大漁」もあったなと思っています。私が生きているのは、先人の人たちの実話や教えを守ったからだと思います。

その教えの中で

- ・何もとらずにまず高台へ逃げろ
 - ・寝床のそばに着替えを置いて、揺れが長い時は大きくても小さくても大津波が来ると思え
 - ・津波は20～30分で来るから、揺れが大きい時は瓦などが落ちてくるので少し弱まったらすぐ逃げろ(座布団で頭を守る等)
 - ・日常の生活の中で虫、動物の行動が変だなと思う時は気を付けろ
- など、多大にあります。

私は市内で被災しました。揺れは大きく今まで体験したこともない長い揺れでした。私は2階にいたので、倒壊しても屋根を破って逃げられる押入付近にいました。揺れが弱くなって今しかないと思い、道路に出て車も全て置いて、付近の人に「逃げろ」と伝えて高台に逃げました。避難場所は「海拔6mあるので大丈夫です」と説明があり、「3mの津波なら大丈夫だな」と思っていました。しかしケータイでTVを見て、サワケンが飲まれるのを見た瞬間、サンルートとベイシティホテル前を、荒れ狂う水龍と水虎のような水の塊が走り抜けました。全てをぶち壊し、ものすごい早さでした。私は終わったと思い、力を失いました。その波は私たちの方にも向かってきて、無我夢中で走って、更に高台に逃げました。

今思えば、実際の波は私が思っていた洪水のような水ではなかったこと。明治、昭和の津波の画の意味が分かりました。映像で見る津波とその場の目線の津波の恐ろしさは言葉では表すことができません。もし、ばっばが話を聞かせてくれなかったら、車で逃げて流されたと思います。自然の力にはかなわない。堤防は逃げる時間を作る物。高台に逃げる。戻らないこと。車で逃げないこと。最短で高台に逃げる道を知ること。後世に伝えるのが生きた人たちの務めだと思います。

2532-01 平田 男性 60歳代

- ・避難時の様子(仕事、車帰宅、渋滞)
- ・被災の感想(反省)

私はその時仕事で、市内西部地区(野田)で働いておりました。今までも何度か地震には遭っていましたが、これほどの揺れはもちろん初めてでしたし、「ただごとではない」と思いました。すぐに仕事を止め、家に帰る準備をしました。そのときは津波の大きさよりも、自宅にいる家族(妻、母、孫)を思い、「とにかく帰らなくては」と思いました。

すぐに車を走らせましたが、駅以東方面は渋滞がひどく、釜石駅前に着いた時は、既に第一波が来た後のようでした。地震後30分ほど経過していたと思います。車の時計が3:20を指しておりました。当然交通制限があり、そこから先へは進めませんでした。

それからは西部地区へ戻り、甲子川付近で津波の来襲を見守っておりました。この時は既に電話などが不通で、確実な情報など、町の様子などは全く分かりませんでした。車のラジオなどでも詳しい情報ではなく、大雑把な情報ばかりです。ますます市街地、自宅などがどうなっているのか不安になってきました。携帯電話が不通なのはがっかりでした。その後、夕方までは御所(鈴子地区)前で暖を取りながら情報を得ていましたが、何一つ入ってきませんでした。とにかく平田(自宅)へは帰れない、ということだけは分かりました。その晩は友人宅へ泊まり、事なきを得ました。

今思い返してみると、危険な行動をとっていたと思います。それは自宅までの岐路を辿ってみますと、駅以東、松原・嬉石地区は海岸より数十メートルの地区で、車の渋滞がひどく、何人もの人が犠牲になったと聞いております。それを思いますと、やはり「地震後、冷静さを欠いていたのかな」と思い、数分早ければ自分もどうなっていたか、思い起こすと恐ろしくなってきます。

0270-11 平田 女性 60歳代

・避難時の様子(仕事中、帰宅)

地震の時、私は仕事中でしたが、たまたま自宅付近に同僚の女性と一緒に来ておりました。なぜかすぐに会社に戻る気になれずに、とりあえず自宅に立ち寄り、主人の安否と家の様子を見てから会社に戻ろうとしました。その途中、ガレキが道を塞いでいるのを発見し、津波が来たことを知りました。何人かの人が海を見ていましたが、慌てる様子もなく異常に静かな光景だったのを覚えています。

夜になってラジオからどこもかしこも壊滅状態であることを知り、信じられませんでした。後日、同僚の男性が一人、病弱な奥さんを心配して自宅に帰る途中、車の渋滞に遭い、津波に流されて亡くなったことを知りました。逃げ場のない一本道路でのことなので今でも悔しくてなりません。釜石は海岸沿いに道路が一本しかなく、何があってもなかなか迂回できません。今でも車で走っていると、「ここで津波が来たらどうしようか」と心配になります。避難道の整備が早急だと思います。

2732-11 平田 女性 70歳代

・避難時の様子(外出先、津波想起、車帰宅)

あの日、私は鶴住居地区防災センターの2階ホールで、仲間7、8名と卓球を楽しんでいました。汗を流している最中でした。突然、ドドド……という地鳴りというか地響きとともに、激しい揺れに立っていることもできず、しゃがみこみ、卓球台の下にもぐり、脚にしがみつきました。長い時間だったような気がします。ただただ、恐怖と闘っていました。少し揺れが落ち着いた時、「これはただごとじゃない、地震だ!」と思いました。卓球台を片付けようとしている仲間に、「そんなことをしている場合じゃない! 構わないで、とにかく早くここから出て、帰って」と大きな声をかけながら、私も「モタモタしていたら、上平田のアパートまで帰れなくなるかもしれない」と思った。この時、私は「大きな津波が来るかもしれない」と思いました。

とにかく早く車を動かさねばと思い、この地震なら両石を通って帰るのは危険と察し、一週間ほど前に開通した釜石山田道路の入り口、片岸口から入って平田に向かいました。早い行動だったせいか、自動車道はそんなに混雑していませんでした。トンネルを通過し、低地にある松原、嬉石地区を難なく走り、観音像が見える高地の道路にさしかかったとき、沖合の方から横一直線になった白波が、襲いかかってくるように押し寄せてくるのが目に入りました。「津波だ! 津波だ! 津波……」と呪文のごとく独り言を口にしながら、低地に位置する平田まで下り、道路から左側の平田港湾方面から襲ってくるであろう津波を恐れながら、上平田に向かって右折し、海を背にして自宅アパートまで辿り着きました。津波の来襲は私が通過した4、5分後だったようです。

迅速に避難行動を起こすことが第一であると思つづく思いました。

3624-01 平田 男性 50歳代

・避難時の様子(仕事中、車帰宅)

地震発生時、仕事で大船渡市三陸町の漁港の船内で、同僚と3人でエンジンの整備をしていました。今までに経験したことのない揺れだったので、取るものにとらず、すぐに船から上り、それぞれが車3台で防波堤から離れました。船主の倉庫へ、トラック1台と道具を返しているうちにも大きな余震が続くので、すぐに釜石への帰路に着きました。

幸いにも、スムーズに国道に出ることができました。高所にある道路なので安全だと思いました。そして「行ける所まで走ろう」と思いました。唐丹の堤防を波が越えているのを脇目に走り続け、平田まで来たところで水とガレキで通れなくなり、そこで避難している住民と一緒に津波の様子を見ていました。その波の大きさと勢いに声も出ないほど、ただただ驚くばかりでした。我が家の屋根も見えないので、何とも言えない気持ちでした。携帯電話が繋がらなかったのも、私たちよりも5分くらい先に走り始めた同僚の安否が心配でした。

一緒にいた同僚は大槌の人だったので、「暗くなり始めたので、避難所へ行こう」と誘ったのですが、「家のことが心配だ」ということで、歩いて帰りました。私は地元だったので、避難所へ行くと、体育館の中はすごい人数でした。その晩は寒い一夜でしたが、建物の中で過ごせただけでも良かったと思いました。

1378-02 平田 女性 60歳代

・避難時の様子(外出先、車帰宅、避難、避難呼び掛け、九死一生)

当日は、ベイシティホテルで会議があり、席に着いたところだった。二度の揺れで動くこともできず、これは尋常ではないと思い、「すみません。帰ります」と言って、ホテルを飛び出していった。国道45号線沿いにある自宅兼店舗が心配だった。車で港町の海岸沿いを走ると、妙に車が少なくなること首を傾げながら、信号も止まった道をひた走った。ラジオのスイッチを入れる考えも思い浮かばなかった。途中の道路は亀裂が入り、ガタガタしていたが、まだ津波という感覚はなかった。

10分もかからず自宅に帰り着いたが、店の自動ドアは動かず、中もメチャメチャだった。スタッフに声をかけながら玄関から中に入ったが、夫も飼っている犬もいなかったのも、皆逃げたと思いホッとした。靴のまま店まで行き、買ったばかりのリュックにバックの中身を詰め替え、通帳と印鑑を入れ、いつも玄関に置いてあった防災グッズを手にとった。咄嗟に「帰れない! 寒い!」と思い、散歩用のジャンパーを手にし、靴をスニーカーに履き替えて外に走り出した。「玄関の鍵?」と思ったが、かけない方がよいと思った。

国道45号線を横断しようとしたが、その時には車の流れも多く、誰も止まってくれなかった。ちょうど、駐在さんが気付いてくれて渡ることができた。後から考えると、国道を平田球場の方に歩いていけばよかったのだが、避難場所は平田小学校校庭とインプットされていたので、いつもの訓練どおりに行動をとっていた。逃げる途中、まだ家の前でうろうろしている人がいたので「何してるの! 逃げて!」「早く逃げてよ!」と叫びながら校庭に走った。すると、三陸鉄道の駅の方から「来たぞー! 逃げろー! 戻るな! 戻るなー!」と叫ぶ大勢の声が聞こえた。安心する間もなく三鉄の土手を助けを借りながら駅まで上がった。目にしたのはガレキと屋根が流されているところ。沖の方に目を移すと、水平線が真黒い壁になって迫っている。上の方では微かに白波が立っていた。現実とは思えなかった。

9906-00 平田 男性 70歳代

・被災前の意識(備えていた)

・避難時の様子(自宅、すぐ避難、避難先から家族の様子見)

◆3月11日 巨大津波に関する私見

私の自宅は平田小学校近くにあり、日常大切な物は二人分サックに入れ保管し、災害に備えていました。地震後は、配電盤の電源をOFFにし、またはプロパンガス2本を閉弁して急いで近くの高台に避難。それから約25分くらい過ぎ、遠方の海上から白く霧のような物を発見。すぐに津波であると思いました。その後、海岸に向け、大津波が。満ち潮時は家や物は浮かび、引き潮時は沖に流され、異常な光景が頭の中に残っています。

妻の姉が一人で住んでいるため、引き潮時に、道は30cmくらいの海水があったが、高い場所を通って様子を見に行きました。姉の家の100mくらいの所に消防員の人があり、姉の様子を聞いたら、高台に避難させたとのこと。消防員の人に厚くお礼申し上げます。姉の所に行くと、3月11日は寒さが厳しかったため、若い人のコートを借りて着ており、私も安心いたしました。貸してくださった方に、書面にて厚く感謝申し上げます。

家に無事に帰ると、地震にて各戸が開弁して皿及びグラス等が破損して、歩く場所がありませんでした。妻は割物の整理をしており、私も手伝いました。余震が1回目、2回目、3回目と同じことを繰り返していました。今思いますと、津波が小学校まで来たのに、私たちの行動は普通でなく余震・津波は何回となく繰り返しています。私どもと同じことをした人もおられると思いますが、巨大津波は1回でなく、何回も繰り返してやってくるので、急いで安全な高台に避難することが一番大切であると考えます。

◆未来の釜石私見

被災後、今日この頃まで不思議に思い、先生の力添えをお願いいたしたく、釜石製鉄所平田の埋め立て地の石炭の件です。私も前仕事のために、船にて中国の大連にて同じ石炭を何回となく運搬致しましたが、積荷終了後、比重が軽い為に船の左右(サイド)通路に約10cmくらい残ります。このように同じ石炭が(絵)このような型にシートで囲ってあります。何箇所も埋め立て地にあり、3月11日津波来襲後、99%くらい被害がないと私は思いました。釜石沖の防波堤の件ですが、テレビにて破損の原因を公開いたしました。(絵)全部陸方に原因はないかと……。囲の防波堤の骨子発表することにより、未来に向け頑張ることが出来るのではないかと。

現在、釜石は全員で復旧・復興を頑張っていますが、人口減少対策も大切と考えます。私たちの出来ることは他県に先駆け結婚・子どもの生まれた家庭に部落でその時において、若干募金も必要でないかと今日考えるこの頃です。

2218-01 平田 男性 70歳代

- ・避難時の様子(自宅、津波想起、海の様子見)
- ・被災の感想(後世に伝えるべき)

私の住宅は、津波避難所の地域内にあります。あの日、妻と2人で家の中にいた時、突然ドドンとした地球の底から突き上げる感じに、「いつもの地震と違う、これは大地震になる」と思い、咄嗟に戸を開けおさまるのを待った。生まれて78年こんな大地震は初めてである。向かいの家の屋根瓦がガラガラと落ちていた。今出れば危険と感じ、家の中で耐えた。家が潰れると思った。しばらくしてやっと大きいのが止まったので外に出た。まもなく余震が来た。「これは絶対にとんでもない大津波が来る」と直感しました。ふだんは「私たちの住宅地は津波の来る場所ではない」と考えていたが、この大地震と、三陸沖の津波は78年もの長い期間来ていないことも考え、「この場所も絶対に大丈夫という保証はない」と思い、近所の人たちと一緒に避難準備をして、いつでも高い場所に上げられるように待機しました。私たちが待機している場所からは湾口防波堤の北側がよく見えるので注視していたら、湾口防波堤一面滝になり、それはどんどん大滝になりました。これは大変な大津波が来る、何処かに連絡しようにも電話も不通。しばらくすると、滝は短くなり湾口防波堤が完全に見えなくなり、湾内が膨れ上がったように見えた。その時、向かいの釜鉄の埋め立て地付近ですごい勢いで土煙が上がった。「凄い大津波だ、大変なことになった」と思いました。それから激しい引き波が始まりました。湾口防波堤が破壊され、歯こぼれしたように現れました。30年の年月をかけ完成した湾口防波堤が、一瞬にして破壊されたのを見た時、釜石市民を守ろうとした傷跡に感謝するとともに、悲しくなりました。

夕方、津波で襲われた町内を見た時、近代社会になっても最も大きな大災害だと思いました。私たちは近所6世帯くらいで、炊き出しを始めました。自分の家は津波で被災しなかったが、この状態ではライフラインの復帰は長期になると覚悟して頑張ろうと、妻と語りあいました。

- ・三陸沿岸で居住して生活する以上、いつかは津波が来ることを念頭に起き、危機管理を持つ事。
- ・大地震が来たら、緊急放送を待つより高い所に避難する。
- ・自分の住宅の位置は、海からの距離より高さ(海拔)を重視する。

0679-01 平田 女性 40歳代

- ・避難時の様子(唐丹小学校教員)

一関地方から平成22年4月に唐丹小に転勤してきました。津波は洪水よりも激しかったです。

唐丹小学校の隣には堤防があったので、「越えても床下数十センチのことだろう」と思っていたら、そのままの勢いで校舎に襲いかかり、とても驚きました。地震がまだおさまらないうちに避難を開始しましたが、気持ちは「とりあえず」だったので、物品の持ち出しなど考えずに行動しました。結果、それが早く高台に辿り着き、全員無事だったのだと思います。停電・断水で情報が得られない、トイレの通常使用ができない、手も顔も洗えないということが苦しかったです。

1629-01 平田 男性 50歳代

- ・避難時の様子(工作中、避難呼び掛け、避難)
- ・被災後の様子(当日から翌日の様子)

あの日、私は新日鐵構内で作業しておりました。まず、感じたのは、「自宅が倒れ、家内が下敷きになったのでは」と思いました。そのうちに、大きな津波が来るぞと連絡が入り、構内の裏山に避難しました。少しして沖の方を見ると、釜石湾口防波堤を越えた白い波が見えました。そのうちに、公共埠頭では車が海に流されておりました。しばらくして、新日鐵構内近くの大渡川を逆流した津波が、ガレキと共にバリバリと音を立てて押し寄せ、新日鐵構内も浸水しました。

この日は、津波が何度も川を逆流していたので、車で待機しようと思いましたが、どうしても自宅と家内が心配で、無理して夜中の11時過ぎに懐中電灯一つで自宅に向かいました。釜石ガスから釜石警察署までの間は、高さ3mくらいのガレキの山で埋まっており、足を取られながらも自宅に向かいました。川の方ではまだ津波が何度も押し寄せているようでした。私も「このまま津波に流されるのでは」と思いながらも、何とか平田の自宅まで5kmの距離を辿り着くことができました。

家の中は物が落ち、散乱していました。それから、避難場所の旧釜商高校体育館に向かい、家内の無事を確認して、安心しました。その後、平田町の被災状況を聞いて、改めて、震災の甚大さを感じ取りました。今回の体験を後世に伝えていきたいと思います。

2582-01 平田 男性 60歳代

- ・避難時の様子(外出先、車帰宅、避難、避難先から帰宅)
- ・被災時の様子(救助できず)
- ・被災の感想(反省)

あの日、14時30分に警察署生活安全課長が転勤の挨拶に来るというので待っていたら、14時すぎに職員二人と来ました。少し話をし、吉里吉里に行くというので帰って行きました。それが最後でした。

自分は鈴子のケースデンキに行き、平田のガソリンスタンドで給油しているときにあの大きな地震があり、スタンドの向かいの屋根の瓦が飛ぶのを見ました。「これはやばい」と思い、すぐ家に行き、油を小屋に入れ、歩いて国道に上がりました。多くの人たちが避難していました。自分は沖の方を見ましたが、湾口防波堤が見えないような気がしたので、軽い気持ちで家に戻りました。カメラを持って再度国道に上がり、家の周りを見ると波が来ていました。1枚目の写真は3時23分でした。それから何もできません。ただただ何が起きているのか分からず、大勢の人たちの声「ああ、何だ、何だ」という声だけだったと思います。

その中で国道の下の家から、「母さんを助けてけろ」と波の中から聞こえました。何度か水の上がり下がりがあった後、国道から下がり、声のあった方に行くと、男性がずぶ濡れになりながら、その母親の横にいました。近所の人と一緒に助けようとしたのですが、駄目でした。釜石で最初の亡くなった人ではないでしょうか。それから一緒にいた人たちと戸板に乗って、その方の実家まで運びました。

自分は妻や孫たちと別々に避難したので、連絡が取れませんでした。とりあえず旧釜商に行き、町内の人たちと朝まで一睡もせず、体育館の人たちを心配しながら、グラウンドで火を焚いていました。

1回避難した人が、何かの理由で家に戻ったために、多くの方が亡くなったと聞きました。自分もカメラを取りに家に戻ったことを反省しています。妻や孫たちも自分と別々に避難したのが良かったと思います。岩手月報の津波でんでんこではないが、「自分の命は自分で守る」を少年指導員として、パトロールしながら子供たちと話す機会があれば、話をしたいなあと思う。

3790-02 平田 女性 70歳代

- ・避難時の様子(自宅、家族の迎え、車避難)

地震が発生した時は家でテレビを見ていました。主人は午前中、海に若布を見に行き、お昼を食べた後、床屋(近くの)に行っている時でした。家の中でテレビを手で押さえながら、余りに激しく揺れるので、「お父さん、助けて」と言いながら、外に出ました。昔の人が、よく「地震がなったら、外に出れるように戸を開けるもんだ」と言っていたことが頭をよぎり、戸を開けたら開いたので、外に出て、屋根から瓦が落ちてこないのを確かめて、地震がおさまるのを待っていました。

主人が床屋から帰ってくるのを待っていると、息子が車で来て(家の近くで工場を持って働いている)、「ラジオで津波が来た所があるって言っていたから、何も持たなくても良いからすぐに車に乗れ」と言われた。でも「何か持ちたい」と思い、家の中に入りました。中は真っ暗で、物は落ち、玄関の窓やサッシはガラスが割れ、戸も外れていました。貴重品の入ったタンスの引き出しの鍵を開けようとしたのですが、開けることができませんでした。物を持つのは諦めて、「寒いだろう」と思い、海に着ていくジャンパーとズボンだけ持ちました。その後、今までにない大きな地震だったので、1分1秒も待ってられず、車に乗りこみました。主人が帰ってきたら、すぐに車を出せるようにしておき、帰ってきたら、すぐに逃げました。その時、家の中が散々だったので、「帰って来てから大変だろうなあ」とだけ考えていました。

2670-02 平田 女性 80歳代

- ・避難時の様子(自宅、とりあえず避難)
- ・被災の感想(すぐに避難すべき)

あの時、地震がおさまると同時に、ただ漠然と家の中にいられないと思い、すぐ裏の45号線の上の墓地へ避難しました。家の中は減茶苦茶になっていたが、そのまま歩くのに邪魔になるものだけよけて、財布1つを持っただけでした。しばらくして「アレアレ」という声をした方を見ると、防波堤を乗り越えて真黒な何かが見えた。それから「津波だ、津波だ」という声。たちまち目の前まで家やら材木やらが流れてきて、行ったり来たりしているのを見ていた。墓地の下の畑にも海水が流れてきたのでびっくり、その時やっと現実には怖さを感じました。

夕方になり、国道に戻り家が見える所で大勢の人々がワイワイとしていたが、高校へと向かいました。道路はガレキの山で通れないので、畑のほりなどを通して、商工高校の体育館へ辿り着きました。もう体育館は一杯でした。何も持たずに出たので、寒くて震えながら一夜を過ごしました。

今思うことは、防災袋は用意してあったのに、慌てて持たなかったことが悔やまれました。持ってくれば、寒さも、ひもじい思いもすることがなかったはずですから。幸いにして家は被災していなかったのですが、古い建物なので外回り、壁が傷み、柱時計が落ちるやら、買ったばかりのテレビがひっくり返って穴が開くやら、皿や井が崩れて家の中がガレキの山、目も当てられないくらいでした。日頃用意していても、持って出なければ役に立たないので、まず一番に慌てず、命を守る。海岸に住んでいるので、高台に逃げる。平田の場合、小学校が避難所になっていたが、家は小学校より高台にあるので、すぐ裏の国道45号線より上の墓地。電気もない暗闇の中で、一夜を過ごすことになりましたが、隣に娘親子、次男夫婦、隣家の母子の顔も見えてほっとした思いでした。

日が経つにつれて、いろいろと話が聞こえてきます。親戚の人たちを避難させ、愛猫が車から飛び出したのを助けようと波に飲まれて自分が命を落としたとか、互いに相手を探して波に押されて怪我したとか。やっぱり高台へ避難するのが一番と思います。昭和20年7月14日の艦砲では丸焼けになったけど、食糧はもちろん衣料品だって何一つ救援物資もなかったのに、今回の災害時にはすぐにいろいろな至れり尽くせりの手が差し伸べられ何と幸せなことか。感謝が絶えません。ありがとうございました。

0193-02 平田 男性 35歳代

- ・避難時の様子(外出先、避難呼び掛け、津波確認後避難)
- ・被災後の様子(当日の避難所の様子)

あの日、私は親友である鶴住居の歯科医夫婦の所で診察の時間を待っていました。長い地震に「これはただごとではない」と思いました。地震が落ち着き次第、ラジオを探すも見当たらず、自家用車のラジオを聞きながら、次に出る手段を考えつつ、近所の高齢者に避難を促しておりました。川がすごい勢いで逆流しているのを目視し、「もうリミットだ」と思い、開通したばかりの道路に逃げました。外気の寒さ、流れる水の強さなども考慮し、「絶対濡れてはいけない」と思いつつ、これから自分ができることは何かを考えていました。そのとき、新しい道路から下の景色を見ると、言葉では表せないほどの阿鼻叫喚が眼下に広がっていたのです。今、思い出しても色あせることなく、ありありと思いつけるのは、それほどショックが大きかったからだと思います。

その後、被災を免れたお宅を拠点に、地域住民の方々と協力し合い、救助に出向いたり、怪我人の手当てをしたり、他の方が鍵を付けて置いてくれた車のラジオから情報収集し、避難した方々に伝えたり、自分たちが生存していることを知らせるため、カレンダーの裏紙に名前を記入し、釜石一中に届けてもらったりしました。今までアウトドア好きでいろいろと経験してきたことが役立ちました。今後も備品の補充と知識の更新を行っていきたいと思います。

2377-01 平田 女性 70歳代

- ・被災前の意識(先人からの伝承)
- ・避難時の様子(自宅、避難)

昔、いつもおばあちゃんから、津波が来たときのことを話に聞いていました。「強い地震によって、海の方で音がしたら、津波が来るから逃げるように」と聞いていました。3月11日の地震の時も、海の方で「ドガン」という音を3回聞きましたので、「津波が来るなぁ」と思って逃げました。

1743-03 平田 男性 20歳代**・避難時の様子(仕事中、屋内避難、九死一生)**

私が地震を体感したのは、職場である岩手県水産技術センターの2階研究室でした。地震を感じ、ただごとではないことを頭では理解しているものの、どのような行動を取ることが最善の策なのか分かりませんでした。ただその時、一緒にいた同僚と部屋から飛び出し、窓ガラスがズラリと並ぶ廊下でしゃがみこみ、地震がおさまることを待っていることしかできませんでした。数分後、若干地震が弱まったので、「外に出て車で逃げないか」と、一緒にいた上司の方に相談していた最中、目の前に見える屋上へ通じる階段を駆け上がる他の部の人たちが見えました。自分たちもそれに倣(なら)い、避難することにしました。屋上へ上ると、先に避難している人が数名おり、その後ぞくぞくと避難してくる様子が見えました。そのときはまだ、巨大な津波が押し寄せ、あのような光景を目の当たりにするとは思っていませんでした。

屋上へ避難し、約15分後、見る見る平田湾の海水が引いているのが見えました。その頃になると、どこからか聞こえるサイレンの音が耳に入らず、次第に恐怖の2文字が頭に刻まれるようになりました。もうそのときには外に逃げ出すこともできず、ただただ神に祈ることしかできませんでした。そうこうしている間もなく、とうとうあの悪夢の時間になりました。それは驚くほどあっという間の出来事でした。正直、何がどうなったのか、一分一秒までであった光景が、気付いた時には一瞬のうちに一面海で囲われていました。天を見上げ、正直、死を考えました。逃げ出すこともできず、「あー、これで終わりか」と。何だか恐怖か悔しさなのか分かりませんでしたが、震えていました。どのくらいの時間が経ったのか、そしてその津波がどうおさまっていったのかは、今となっては記憶に残っていません。それから大津波警報が継続する中、命からがら近くの避難所に避難をすることができました。そこで両親とも再会することができ、やっと自分は助かったのだと思うことができました。

あれから早8か月が経ち、気持ちの方もだいぶ落ち着いてきました。今思うことは、自分は特別な人間ではなく、皆と同じ人間だということ。今までは普通に生活をして、長生きすることが当たり前だと思っていました。しかしそれは決して当たり前のことではなく、いつ自分自身の身に災難が降りかかってもおかしくはないんだなと思いました。その中で今できること、やりたいことを精一杯頑張ることが、今後の自分たちに課せられた使命だと思います。人は必死に生き抜くことしかできないし、後悔しても遅いものだから……。最後に、この度の震災によってお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りするとともに、釜石の早期復興を期待したいと思います。

1283-01 平田 男性 70歳代**・避難時の様子(仕事中、避難呼び掛け、避難、避難先から帰社、避難)**

一人で勤務している時に、地震が発生した。テレビもラジオもなかったのも、大家さんに言われて避難しましたが、年度末に配送する書類が山積みされてあったので、その片付けのために一旦戻りました。しかし、地震がおさまらずともなく、また津波も想定されていたので、外に出ようとしたのですが、自動ドアが開かなくて一瞬迷いました。運よく指が2、3本入るくらいの隙間があったので、全身の力をこめたら開いたので、釜石小学校に避難しました。部屋割をするために全員校庭に集合させられ、ミーティング中に「津波だ!」の声で大渡川を見下ろしたら、ガレキの山が時速40kmくらいのスピードで、川を登っていきました。あれは生涯忘れられません。

「あの時、大家さんに声をかけられてなかったり、ドアが開かなかつたら」女房、仕事で中国に出張中の息子、7人の孫たちに、自分勝手な行動がどんなに大きな悲しみと永久に続く不幸の重荷を背負わせることになったのか、と心が凍る思いがします。人生命あつての物語、何より大事なものは命、暖かい人間同士のこの世だと思います。

2226-01 平田 男性 60歳代**・被災前の意識(先人からの伝承、危機意識低かった)****・避難時の様子(外出先、帰宅、避難、避難先から帰宅)**

午後2時に、小佐野せいてつ記念病院に長男を連れて行き、家に帰って来て、コースの途中で水産試験所に来た時に、地震に遭いました。地鳴りがあったかと思ったら、大きな揺れに変わり、「これはただごとではない」と思いました。すぐに水門まで戻り、家に入ったら、家の中がめちゃめちゃで、母と妻が呆然としていました。津波が来るから、早く避難しないと大変なことになると思い、親戚宅に連れて行きました。

その後、車を取りに戻り、避難所になっている所に車を置いて、皆で話をしていました。この時まで津波が来るとは思っていなかったし、また津波の怖さを身に感じていなかった。でも父さんが、「大小の地震でも1分30秒以上あったら、高台に逃げろ」とよく言っていた。この話を子どもたちによく

していたから、皆無事でした。

1814-02 平田 女性 60 歳代

- ・被災前の意識 (先人からの教訓、津波経験あり)
- ・避難時の様子 (自宅、すぐ避難)
- ・被災後の様子 (後世に伝えるべき)

私は小 4 の時にチリ津波も見してきました。その時は地震もなく、朝寝しているときに母が波の音で目を覚まし、「津波だ一、起きろ」という声で起こされました。私の家は高台なので、小さいながらも津波の様子は覚えています。大船渡の町がちょうど真向かいで、セメント工場に大きな船が上がっていくのとか、馬が流されていくのとか。そういう思いをしているので、母から「地震のときはすぐ高台に避難」と言われていました。これは、これからの人たちにも教訓として教えていった方がいいと思います。

今度の地震にも、私は家の中にいれなくて、89 歳になるおばあさんを裸足で連れて逃げました。津波はちょうど家の下まで来て、家の中には入りませんでした。漁業という生活の糧を全部さらわれて、困っています。被災者でないのに、物資もなく、義援金もなく、やはり困ります。これからの人たちにも、「この津波を何年経っても忘れず、高台に家を建て、避難は忘れずに」と伝えていった方がよいと思います。

1184-01 平田 男性 60 歳代

- ・避難時の様子 (仕事中、避難の呼び掛け、避難)

3 月 11 日、会社 (平田) で一人で仕事をしていました。大きな地震で外に出て茫然としていました。(避難するような放送もあったそうですが) 津波直前、車で通った漁民が「津波が来るぞ! 早く逃げろ」と大きな声で怒鳴られました。その声で、我に返り、逃げることができました。自然の猛威にただ避難することしかできないことを、よくよく知らされました。

1270-01 平田 男性 60 歳代

- ・避難時の様子 (仕事中、避難誘導、避難、避難呼び掛け、九死一生)

私は仕事中に震災に遭いました。車の整備の仕事です。まず先に、奥さんに車で山の方へ逃げてもらって、次にお客さんの車を少し上の方に全部上げました。従業員の安否を確認した後、津波がすぐそこまで来ているのを見て、上に逃げました。そのとき道路は渋滞していて、その中に会社の事務員を見つけました。「車を捨てて逃げろ」と言い、私と女の子二人の三人で釜石ガスのタンク (5 m くらい) の上へ逃げて、どうにか助かりました。

波が引いて下に降りると、4～5 人くらいの方が「助けてくれ」と屋根の上から叫んでいて、近くにロープがあったので、それで助けました。

2749-02 平田 50 歳代

- ・避難時の様子 (外出先、車帰宅、渋滞、家族様子見、避難呼び掛け、流された)
- ・被災の感想 (てんでんこ)

あの日、私は釜石市内で地震に遭遇しました。揺れがおさまって、すぐに家に帰ろうと思い、軽トラックを走らせました。しかし、嬉石町内の交差点 (パチンコクエスト前) にさしかかったところで渋滞に巻きこまれました。そのとき、嬉石町内に住んでいる嫁の父親の耳が不自由な事を思い出し、急遽 (きゅうきょ) 立ち寄り、父親を逃がしました。時間はおよそ 15 時頃だったと思います。

その後、近所に住んでいるお年寄りを助手席に乘坐、「嬉石集会所」まで避難しました。15:10 頃だと思っています。「まだ 3～4 名のお年寄りが残っています。助けてください」との女性の要請があり、行ってみると、地元の嬉石の二部長が指示誘導をしていました。私はその指示に従い、一人の寝たきりのおばあさんとその関係者数名を軽トラックに乘坐、避難しようと車を走らせた時、津波に飲み込まれました。15:15～17 頃だったと思います。私は助かりました。軽トラックの中から脱出し、津波に飲み込まれながらも、近くにあった、流されない家の 2 階の雨どいに必死に掴まりながら助かりました。軽トラックの荷台に乗っていたおばあさんと関係者一人 (若者)、そして指示誘導していた嬉石の三分団二部長は、残念ながら津波に流され、亡くなりました。責任感の強い彼は、最後まで逃げないで職務に当たっていました。結局、私は彼に助けられたと思っています。

「命でんでんこ」という言葉があります。私も、その意味はよくわかります。しかし、状況によっては、それができなくなる場合もあります。「助けてください」と言われて、「おら、知らねえ」という消防団員は一人もいません。何らかのアクションを起こします。そういう中途半端な立場にあるのが、消防団員の立場であります。まさに、嬉石の部長はそういう立場の犠牲者なのです。彼の無念を

4.2 平田地区 (1) 平田地区(大字平田第3～6地割)

思うと、助かった者として、慟哭を抑えることができません。彼の残された遺族の方々の心情を思うと、言葉がありません。助かった者、助からなかった人の差は、紙一重なのです。残された者、助かった者、生かされた者として、これから何をすべきか、日々感じて生きております。

4.2 平田地区 (1) 平田地区 (大字平田第 3～6 地割)

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.2 平田地区 (2) 尾崎白浜地区 (大字平田第 7～8 地割)

1) 補足調査における証言

(本間公人さん、佐々木正寿さん、中村敏彦さん、伊東正さん)

A. 住民の避難行動

- (1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)
 - ・消防団や住民が互いに協力しあい、水門の上から車避難者に迂回を呼びかけた。
- (2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)
 - ・体の不自由な方(高齢者ではない)が介護者とともに流された。
 - ・周りが声がけしたが、家に留まり、逃げなかった方もいた。
- (3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)
 - ・多くの住民は地震と同時に家から出て、周りの様子を見ていた。高台に集まり、海の様子を見ていた住民もいた。船の様子も見ていた方もいた。

B. 震災以前の備え

- (1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。
(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)
 - ・平成 22 年 10 月に自主防災組織を町内会で設置した。
 - ・震災前、要援護者の避難支援の担当者を決めていた。地区での自主的な訓練を計画していたが、その前に震災に見舞われた。震災当日は地域での組織的な避難誘導まで頭が回らなかった。
- (2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)
 - ・大部分の住民が避難できたことから、これまでの避難訓練は無駄ではなかったと感じる。
 - ・3 月 3 日の避難訓練は形式的・表面的になってしまい、重要であるという認識が薄れていた。
 - ・海岸近くの消防屯所の 2 階には毛布等を備蓄していたが、津波で流出した。

C. その他

- (1) 防災無線(聞こえ方・課題など)
 - ・防災無線は波高に関する情報のみ聞こえた。サイレンなども鳴らなかった。
 - ・3 m という情報が安心感につながり、まさか津波は来ないだろうと判断してしまった。
- (2) その他(避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など)
 - ・50～60 歳代の住民は古老から津波の話を聞いていた。近年、甚大な被害をもたらした津波がなかったことから、徐々に低い土地にも家ができてしまった。若い世代に伝承することが必要と感じる。
 - ・明治三陸津波で高台に避難したという話を先祖から聞いたことがあり、津波が来たら、とにかく高い所へ逃げろという意識はあった。
 - ・水門は 3 か所ある。消防団員のほか、地域で協力して閉鎖した。
 - ・当日、海岸ではカキの解体、若布の間引き作業をしていた。船で沖に出ている方もいた。
 - ・夜間にも何度か大きな津波が襲来したと聞いた。

2) 地域懇談会における証言

佐々木淳子 さん

- ・地震発生時は平田漁協で、鶴住居に住む両親の介護に向おうと車に乗るところだった。揺れが強かったので、道路沿いの組合の作業小屋のサッシが壊れていたり、山を見渡せばスギ花粉が飛んでそこから中が黄色に見えたりしていて、津波が来ることを直感した。そのため、両親の様子を見に行こうとしたが、組合の職員に「海の近くには戻るな」と言われた。家や家族が心配だったので連絡を取ろうとしたが、つながらなかった。そこで、自宅(尾崎白浜)まで車で戻った。そのとき渋滞はなかった。その後、自宅周辺で待機した。

本間晋平 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。その後、余りに地震が大きかったので、尾崎神社まで移動して海を見ていた。この周辺に住む方たちは皆集まってきた。

中村勝雄 さん

- ・地震発生時には平田にある会社にいた。自宅に戻りたかったが、平田地区からの移動が難しく、一晚浸水被害のなかった会社にいた。
- ・震災以前の取り組みとして、避難訓練は実施していた。参加者数は 90～100 名。避難場所は尾崎小学校校庭。

佐々木栄一 さん

- ・地震発生時には、中妻にある会社にいた。17 時頃まで会社で対応に追われていた。18～19 時頃には避難所（双葉小学校）に移動した。その後、大町に住む姉のことが心配になったので、様子を見に行ったが、ガレキで途中までしか行くことができず、釜石小学校で一晩過ごした。翌日、5 時に釜石小学校を出て、歩いて 9 時頃に尾崎白浜の自宅まで帰ってきた。尾崎白浜地区の避難所（尾崎小学校）で打合せをして、釜石へ様子を見に戻った。
- ・震災の少し前に、自主防災の組織図をつくって割り当てを決めていたが、それを確認する訓練等はしたことはなかった。

本間公人 さん

- ・地震発生時には漁協の前あたりにいたはずなのだが、車に乗っていたため、揺れに気が付かなかった。漁協の建物から人が出てきたので気がついた。消防の屯所の前で、奥さんを下ろして高台の自宅に帰した。その後、弟の様子を見に行き、一緒に高台に移動したが、津波の白波が上がった様子を見て、「津波の写真を撮らなきゃ」と思い、カメラをとりに自宅に帰った。そのとき通った道は結果的に浸水しており、何分か遅かったら、ダメだった。
- ・チリ津波のあと、海沿いの自宅を高台に移転した（今回の津波で被災しなかった）。
- ・佐須に住む先代から「大津波のときは山が鳴る」と聞いていた。今回も山が鳴った。

佐々木剛 さん

- ・地震発生時には、奥さんと二人で自宅にいた。地震が大きいのので、必ず津波が来ると思って、奥さんを先に尾崎神社に向わせて、自身は自宅周辺の様子を見てから尾崎神社に移動した。山の中の畑の農道を通して、1 時間ほど待機した。津波がおさまった後、浸水しなかった自宅に戻って家族で相談して、その晩は叔父の家ですごした。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

3649-01 平田 男性 60 歳代

・避難時の様子（仕事、車帰宅、渋滞、九死一生）

あの日、若布の間引き作業を終え、買物のために市内に行く途中、駒木町を走行中に、異常にハンドルが揺れ、妻が「地震だよ、止まって」と言った。車のラジオ、カーナビのテレビを付けた。「釜石は 3～5 m の津波」とのことだったが、自分はそんなもんじゃないと思い、妻に「今日こそ、命てんでんこだぞ」と言い、車を尾崎白浜の自宅に向け、U ターンした。

停電で渋滞していたため、車の走っていない道路をあっちへこっちへと移動し、何とか矢の浦橋付近まで行ったが、公共埠頭から避難する車で渋滞していた。「もう少し、あと 5 分で第一波が来る」と、ラジオで放送していたため、「中番庫へ避難しよう」と思い右折しようとしたが、バイパスから下る車で曲がれず、無理やり橋へ直進した。橋の上で 2 回渋滞にあった。大渡川は引き潮で速かった。「これで終わりか」と思い、シートベルトを外し窓を開け、妻に「沖に白波が見えたら、どこでも高い所へ避難しろ、命てんでんこ」と言って、車が動き出すのを喉がカラカラになりながら、待った。運が良いのか、一旦走り出すと、後は止まることなく走りました。嬉石のトンネルを抜けたときは助かったとガッツポーズ、後は覚えていない。

3649-02 平田 女性 60 歳代**・避難時の様子 (外出先、車帰宅、渋滞)**

私たち夫婦は車で買物に、釜石の町まで出かけているときに地震に遭いました。夫は大津波が来ることを直感し、急いで自宅に戻るよう車を走らせたのですが、国道は混乱し、なかなかスムーズに行きませんでした。どうにか尾崎に着きましたが、その間、家に残した、87 歳の母、長男の嫁、孫（四年生、二年生、二歳）の計 5 人の安否が分からず、心配でなりません。車は尾崎の入口まででストップだったので、山を走って（どのように来たか分かりません）、家に着いたら、皆、尾崎小学校に避難していました。声をかけあい、抱きあい泣きました。

9087-11 平田 男性 80 歳代**・被災前の意識 (津波経験あり、先人からの伝承)****・避難時の様子 (仕事中、車避難)****・被災の感想 (後世に伝えるべき)**

5 歳のときに、昭和 8 年の津波を経験した。夜、自宅近くの畠で焚き火して暖を取っているところに、着物を濡らせて逃げてきた大人を薄々記憶している。父親からは「津波は 3、40 年周期で来襲してくる」と聞かされていた。今回の大津波までの周期は長く、昨年頃から何となく予感し、海岸倉庫に置いていたウニ、アワビの道具を家屋に運び、整理しているところでの出来事となった。

いつもは歩いて行っているが、3.11 は倉庫まで自動車で行き、そこで作業中に大地震発生。外に出ると、岸の海水がビシビシと音を立て、渦を巻きながら引いていく激しさに驚き、「漁協建屋崩壊では」と車に乗ることもできなかった。多少静まりかけてから海岸から脱出。自宅付近の畠の高台にて、大防波堤を破壊してやってくる大津波にはがく然としました。今回の惨事は昼間でしたが、夜の出来事であったら、と考えるとぞっとします。

この大地震を体験して思うことは、海岸永住の集落の人は、常に津波の恐ろしさを伝承し、油断しない。市の配布する防災マップをいつでも見られる所に貼り付けておく。発生時には声をかけあい高台に避難、生命を守ることが第一と存じます。災害予防としては、なるべく官公舎、住宅は高台施設とし、避難道路の拡張整備により安全を守る。なお、集落までの関連道路の拡幅が急務と思います。

0437-03 平田 男性 10 歳代**・避難時の様子 (自宅、津波想起、海の様子見)**

あの時、私は自宅にいたのだが、揺れが大きくなっていくのを感じ、すぐ屋上へ出た。屋外に出ても揺れはおさまらず、大きくなる一方で立っていられないほどで、とても恐かったのを今でもしっかり覚えている。揺れている間、「大きな津波が来る」と思った。しかし、その間も揺れは続いて「怖い、恐い」という思いばかりだった。津波が来るとは思ったものの、釜石の町があんなに被害に遭うなんて想像していなかった。屋外から一度家に戻り、TV の電源を入れたが入らず、停電になってしまったんだと思った。それから恐くてどうすることもできずに、外に出て海を見ていると、消防が「大津波 3 m」と放送していて、海岸付近に住む人たちが避難してきていたのを覚えている。それから海を見ていたら「ザー」と白波とともに音がして、「あれ？ 津波？」と思った。そうしていたら、家がぶかぶか動いているのが見えて「嘘でしょ」と思い、信じられなかった。その時、はじめて釜石の町や友達・家族大丈夫かなとか、町も被害あってどうなっているんだろうと思った。携帯も圏外になり、電気も水もすべてストップしてしまい、周りの人たちの安否も分からない生活が続いて不安で仕方なかった。ずっとラジオを聞いていても、いまいち被害の状況が掴めず、何がどの範囲で起きているのかさっぱりわからなかった。夜は余震で全然寝られなかった。今でも、あの日見た光景をハッキリ覚えています。

またいつか 3.11 のようなことが起こったとき、どのように対処すべきか、非常用に用意しておくべき物など、前々から準備が大切だと思った。そして、国内外からたくさんの物資・ボランティアをしてもらい、人の温かさを感じました。

4.2 平田地区 (2) 尾崎白浜地区 (大字平田第 7～8 地割)

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.2 平田地区 (3) 佐須地区 (大字平田第9地割)

1) 補足調査における証言

(佐々木廣さん、佐々木俊介さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・消防団が中心となり、避難を呼びかけ、佐須集会所へ誘導した。
- ・沖へ船を出そうとした方、あるいは沖から自宅へ戻ろうとした方の中には、危ない状況にあった方もいたが、消防団員の誘導で回避した。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・人的被害はなかった。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・地震発生後、大部分の住民は佐須集会所に集まった。集会場付近にも津波が到達したことから、更に高台の民家に車、徒歩で移動、高齢者を車へ乗せて佐須トンネル付近へ避難した。消防団員の避難誘導により、佐須集会所からスムーズに短時間で避難できた。(約20分程度)
- ・津波に流された方、怪我をした方が数名おり、佐須トンネルの広場まで移動させた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・平成22年8月に自主防災組織を設置した。
- ・毎年、3月に行われる避難訓練には約50~70名の方が参加した。各自で参加を心がけていた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・明治、昭和の津波で家を流されたり、亡くなった方がいたことを聞いていたため、津波避難の備えを意識しており、震災時にも役立った。

C. その他

(1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)

- ・海岸付近では聞こえない場所があるため、今後の対策が必要である。

(2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など)

(避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など)

- ・祖父母から津波のことを聞かされたように、今回の津波のことを後世に伝えていかなければならないと感じた。
- ・各自で出来るだけ高い場所へ避難するべきである。高い場所へ逃げても、更に高い場所へ避難する習慣を身に付けることも必要である。
- ・水門は、訓練どおり短時間(約10分)で閉鎖した。
- ・水門閉鎖後、夜間に沖から戻った方を避難させるため、門扉を開けざるを得ない状況があった。消防団員の水門操作は、常に危険が伴う作業だと感じた。
- ・今後の課題として、佐須集会所が一時的な避難所としての機能を果たしたとしても、長期間の避難に適した避難所であるかどうか、再考が必要である。
- ・人間は自然に逆らうことができないということを感じた。

2) 地域懇談会における証言

佐々木孝明 さん

- ・自宅横の作業小屋にいた。揺れが長かったので、地区の避難所になっている集会所の前に移動して、周りの方を誘導していた。集会所の中に何人かいたが、寒かったので、薪ストーブのある高台の納屋に誘導した。

- ・高台の納屋にいたが、津波警報の3mの情報を信じて、第1波が引いたあと軽トラックの後ろに3人載せて、墓地（海拔20mぐらい）まで海の様子を見に行った。その後、第2波がやってきて、墓地の下道路に停めておいた軽トラックは流されてしまった。
- ・第2波が大きかった。

佐々木勇一さん

- ・倉庫で若布の準備をしていたときに地震が発生したが、避難所になっている集会所の鍵を預かっているので、すぐに集会所に行って開けた。その後、寒さをしのぐために薪ストーブのある高台の納屋に避難してきた方を誘導した。
- ・その後、自分自身は集会所まで下りてきて海の様子を見ていたが、防風林の所まで津波が来たのが見えたので、納屋にいる方たちに更に上のトンネルまで逃げるように誘導した。
- ・佐須地区では、死者は出なかったが、2名が流された。一人は、自宅にいて逃げ遅れて流されたが、柱に掴まったため助かった。もう一人は、避難の途中で川に流されたが、助かった。また、地区内には、地震発生後に津波が襲来するまでの間に、釜石から佐須まで帰ってきた方が3人いた。
- ・被災前も避難訓練をしていた。当初、トンネル周辺が避難場所であったが、避難訓練を重ねるたびに地域住民が参加しやすいように、高台の納屋、集会所と、避難場所が下がって来てしまった。
- ・津波は明治・昭和津波と同じくらいの所まで来た。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.3 鵜住居地区 (1) 鵜住居地区（鵜住居町第1～19地割）

1) 補足調査における証言

（上町内会：会長 吉永隆志さん、川原町内会：民生委員 沖寿雄さん、消防団第6部第1部 前川智克さん、新川原町内会：民生委員 小野寺喜代子さん、鵜住居まちづくり協議会事務局：佐々木一正さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

【上町】

- ・周囲の高齢者等に声をかけあいながら避難した。声をかけても避難しない（動かない）住民もいた。座り込んでいる高齢者等には、避難場所に移動するよう呼びかけた。

【川原】

- ・声をかけながら避難した。体が不自由な方がいたので、地域で助けあって搬送避難した。
- ・消防団員が、消防車で巡回中、家にいた方、車内にいた方にマイクで避難を呼びかけたが、直ちに避難行動をとる方は少なかった。

【新川原】

- ・近隣の高齢者、事業所等に声をかけながら避難した。声をかけたが、家族とともに逃げるため、自宅に留まり待つ方もいた。率先して避難した方につられて避難した高齢者もいた。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

【上町】

- ・住民と一緒に逃げようと声がけしたが、家に留まりそのまま流された。
- ・車で他地域へ避難中、車ごと流された。
- ・高齢者、一人暮らしの方が流された。

【川原】

- ・高齢者が流された。健康な方も含まれていた。防災マップの浸水シミュレーションでは、津波が来ても、せいぜい長内橋付近までだと思っていた。まさかここまで来るとは予想できなかったのではないかな。
- ・渋滞中の車を津波が襲い、車ごと流された。

【新川原】

- ・寝たきりの方の避難に手間取り、それを手助けした方もともに流された。
- ・高齢の家族を背負って避難した家族がともに流された。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

【上町】

- ・地震後、多くの住民は、家の前に立って周囲の状況をうかがっていた。地震の揺れが只事ではなかったことから、比較的早い時期からリュックサックを背負い、避難場所に避難した方もいた。避難すべきかどうか、迷っているように感じる方もいた。
- ・地域の住民は、概ね常楽寺境内及び防災センターに避難した。仲町の住民は防災センターに避難したと考える。
- ・常楽寺境内に避難後、津波が襲ってきたので、車に相乗りするなどして、更に高台に避難した。一部の高齢者は這いつくばって避難した。

【川原】

- ・地震が大きかったことから、一部の住民は、比較的早く避難した。避難の途中、「津波が来る、来ない、来たとしても少しだろう」などと話しあっていた住民もいた。
- ・一部の消防団員は、高齢者を背負うなどして避難を支援した。

【新川原】

- ・新川原では、地震直後、多くの住民が高台に逃げようとした。大きな揺れだったため、外に出なければいけないと思ったが、まさかここまで津波が襲来するという意識はなかった。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

【上町】

- ・防災センターが設置される以前は、常楽寺を避難場所として訓練していた。避難訓練時、常楽寺を利用した回数は多かったが、震災のほぼ 1 年前に防災センターが完成したことから、「避難所」としての印象が強かった。防災センターでは、救急措置等屋内で行う訓練を行っていた。防災センターには鍋、釜又は食糧等の防災備蓄品があり、多くの住民はここに避難すれば大丈夫と感じていた。
- ・町内会では、地域の防災意識、避難訓練の参加率を高めるため、救急担架の搬送、消火訓練を想定したバケツリレーなどを取り入れた防災運動会、町内会主催の避難訓練を実施したことがある。

【新川原】

- ・町内会では震災以前、災害時の炊事班、救護班等の役割を決めた防災訓練を実施する予定だったが、台風が重なって中止となったため、実施に至らなかった。
- ・通常の避難訓練では、本行寺の避難場所に集まっていた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

【上町】

- ・避難訓練を実施していたことにより、どこが避難場所であるかなどは周知できていたと思う。
- ・「訓練が重要である」との思いが欠けていた。訓練が形式的になっており、ただ参加するだけでよいと思っていた。「体が動かない」という理由で、訓練に参加しない高齢者も多くいた。今にして思えば、訓練が重要であるという強い思いを伝えておきたかった。

【川原】

- ・鵜住神社に乾パン、ロープなどの防災備品が備蓄されており、今回の災害でも有効に活用された。
- ・避難訓練に参加していた方は、日頃から避難場所を理解していたと感じる。ただし、これまでの避難訓練の参加率は低かった。

【新川原】

- ・懐中電灯とラジオを持って避難しろという取り決めがあった。
- ・災害時要援護者の名簿を作成していたが、今回の津波では、緊急に各自で避難することが必要だったので、十分に活用されなかった。
- ・津波が来るかどうか分からなかったが、避難訓練のとおり行動した。このことが結果的に良かった。
- ・通常の 3 月 3 日の避難訓練には、約 10 名程度の参加に留まっていた。3 月 3 日の訓練は、寒い時期の早朝に実施することから、出勤者や高齢者等は大変であった。訓練日を休日に変更するよう何度か要望したこともあった。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

【上町】

- ・内容は、よく聞き取れなかった。サイレンが鳴るのは聞こえた。

【川原】

- ・気が動転していて、聞こえたかどうか分からない。
- ・聞こえた。

【新川原】

- ・大津波警報の放送を聞いた記憶はある。これほどの津波が来るとは予想できなかった。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の開鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など）

【上町】

- ・過去の津波（チリ地震）では、みのすけ沼付近まで浸水したと聞いた。今回の地震では、多くの住民は、まさかここまで来るとは思わなかった。
- ・常楽寺の境内広場付近は、避難した車で一杯だったが、津波で流された。
- ・最初、津波は海の方に霧が立ちただかるように見えた。
- ・家ごと流されている屋根の上に避難した方が、引き波、寄せ波で行き来していたが、なすすべがなかった。

【川原】

- ・まさか、JR の線路より西側まで、津波が来るとは思わなかった。来たとしても、長内川の鉄橋付近で止まると思っていた。

【新川原】

- ・釜石市街地に津波が襲来したことをラジオで知ったが、その時点で鵜住居地区に津波は押し寄せていなかった。
- ・まさかここまで津波が来るとは考えられなかった。避難後すぐに帰宅できと思っていた。

2) 地域懇談会における証言

両川吉信 さん（鵜住居町仲町内会長）

- ・地震が発生したときは自宅にいた。地震の大きな揺れが5分ぐらい続いてパニックになったが、先人たちからの教えを思い出せたので津波が来ると思った。津波が来るまで30分ぐらいあると聞いていたので、まず海の様子を確認するために自宅（3階建て鉄骨造）の屋上に上がって、そこで写真を撮った。その後、下りて写真を撮った。既に20分ぐらい経っていたので、遠くの山まで行って駆け上がるのにかかる時間はなく、3階建ての自宅屋上に上がる方が安全と考えて自宅屋上に上がった。自宅3階まで浸水したり、地域全体が津波に浸かってしまったりしたが、無事助かった。
- ・周辺には指定の避難場所がないために、避難訓練の時には鵜住居防災センターを訓練用として集合場所としていた。震災の時もそこに行けばよいと認識していた方もいたけれど、鵜住居防災センターはあくまでも訓練用であるから、近くの山の上の寺社を目指して駆け上がるということを認識していた方もいた。

小野寺喜代子 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。片田教授のお話（講演やNHKのテレビ番組）で聞いていたことを思い出して津波が来ると思い、すぐに高台をめざした。しかし、そのとき息子が片付けを始めていたので避難を促した。避難の途中で、工場の従業員たち（鵜住居の住民ではない若い方たち）が茫然としていた方がいたので避難を促したが、そのまま動かなかった。民生委員であることや勉強してきた津波のことを伝えたら、納得して避難しはじめてくれた。その結果、自身を含めて、工場の従業員たちも助かった。後から聞いた話によると、工場の従業員たちの多くは自宅に帰ろうとしていたらしい。
- ・民生委員を任されており、地域の災害時要援護者の方の住んでいる場所を把握していたが、自分自身が逃げることを考えるので精一杯だった。
- ・高台に避難したら、遠くに砂煙が上がっているのが見えたのと一緒に津波で家が流れているのが見えた。そして、2回目の大きな津波が来そうになったときに、町の中に子ども（4歳）とおじさんが一緒に逃げているのが見えた。遠くまで避難していたら間にあわないと思い、皆で「1、2の3、上がれ！」と近くの建物に上がるように指示した。二人は、鍵のかかっていないアパートを見つけて駆け上がって運よく助かった。後から聞いた話によると、その二人は親類ではなかったらしい。
- ・瓦が落ちていたりして道路を塞いでいて、昼間だったから乗り越えて避難できたけれど、足元がよく見えない夜では被害が拡大していたと思う。

三浦チヨ さん

- ・地震が発生したときは自宅（アパート）にいた。そのとき、咄嗟にトイレに逃げこんだ。浸水被害はなく、夜になるまで閉じこもっていた。

大町元晴 さん

- ・地震が発生したときは水海地区にいた。津波が来ると考えていたけれど、全くどこに逃げようとは考えておらず、とにかく両親の安否と自宅の被害状況を確認のために自宅へ戻ってきた。小中学生たちがやまぎきデイサービス（やまぎき機能訓練デイサービスホーム）に向っている列を横目に見ながら、車を停めて自宅に入った。自宅に入ったら、津波警報が聞こえないし、周辺は見えないし、状況が全く分からなかった。2階から遠くに津波が来ているのが見えたが、あっという間に自宅2階まで水位が上がってきて流されてしまった。そして、流されたときに意識を失ってしまったのだが、運よく引っかかって引き上げられて助けてもらった。
- ・ふだん、両親の介護をしてくれている方がいるが、私の車があったので高台を目指して無事に避難できたと聞いている。

佐々木尋貴 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。揺れがおさまったあと、鵜住居防災センターにいた奥さんが自宅に帰ってきて、すぐに一緒に神社へ逃げた。そのとき、周辺の方に声をかけながら逃げた。避難先には、結果的に 160 人くらい逃げてきた。

沖寿雄 さん

- ・地震が発生したときは、釜石マイヤにいた。揺れがおさまったあと、車で自宅に帰ってきた。
- ・小中学校が避難してきたので、途中で車に停めて歩いて帰った。
- ・周りの方が声をかけてくれた。「津波が来た」と言われて、沢を駆け上がった。

二本松誠 さん（元消防団員）

- ・地震が発生したときは自宅にいた。消防団なので鵜住居防災センターまですぐに駆けつけて来たがそのとき全然人がいなかった。多くの住民は、情報がとれなくて判断が鈍って逃げ遅れていたのだと思っている。そのあと根浜の水門を閉めに行ったり、指示を受けて学校に行って消防団員として「逃げろ」と避難を促して避難させたりしていた。

佐々木憲一郎 さん（歯科医師）

- ・海の近くにいたらすぐに逃げたと思うが、震災以前からハザードマップで浸水範囲や避難場所を確認していた。しかし、ハザードマップに記載されている浸水範囲から 1.8km ほど離れていたの、ここまで来ないと思いこんでいた。そのため、余震を心配して皆で建物の外に出ていた。ラジオから聞こえてくる情報から状況把握に努めていたが、「釜石に 4 メートルの津波」が来たというのを聞いた矢先に、家や車を巻きこんだ津波が迫ってくるのが見えた。津波というと水のイメージが強かったが、砂煙が上がったり、パキパキと音を立てたりして土石流のような印象を受けた。ものすごい速さだったので、目前に津波が迫ってきてからの避難になってしまった。避難しているときには、足元が浸水していたり、フェンスをよじ登ったりして避難しているような切羽詰った状態で、避難支援に戻ってはい自身の避難が間にあわないと思い、避難の呼び掛けしかすることができなかった。とにかくそばにいたスタッフを助けるために手を引っ張って避難して、何とか助かった。
- ・自身が避難するよりも先にスタッフを山の方面へ避難させていたが、そのスタッフのうち最後まで避難支援をしていた一人の若いスタッフは、波に飲まれてしまった。しかし、波と波とがぶつかった拍子に浮き上がったときに、近くの家屋の雨どいに掴まって屋根まで上がることができて運よく助かった。
- ・避難した先の三陸縦貫自動車道の広場に 70 名くらいいた。車で避難して、三陸道に入れないでいた方もいて車が 20 台ほど停まっていた。
- ・母は「山田線に上がって高い方に逃げろ」と教えられていたと聞いた。
- ・気象庁が発表した津波警報は、予想高さが段階的に上がっていくが、初期段階で停電となり、結果として唯一得ることができた「大はずれた地震直後の津波警報」が被害を拡大させた要因だと思う。情報ありきの行動ではなく、津波警報が出る前に避難して、津波が来なかったから「来なくてよかった」と思えるようにしなければならない。今回の津波の経験から、最近改善された気象庁からの津波警報の内容で「巨大な～」という情報を受け取ったら、10 メートル以上という認識を持つようになった。

佐々木孝子 さん（歯科助手）

- ・三陸自動車道が封鎖されてしまっていたため、三陸道に入る手前の広場が避難先となった。結果的に助かったからよいものの、地震のみしか考慮していない対応であったため、場所によっては津波からの避難先は限られた所もあるので、三陸道等でも有事の際には誰でも入れるようにする対応も必要だと思った。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

2951-02 鵜住居町 女性 60歳代

- ・避難時の様子（外出先、車帰宅）
- ・被災時の様子（家族が被災した様子）

平成23年3月11日は、私の67歳の誕生日であり、地震津波で2人の大事な命が消えてしまった日です。

その日、私と主人は鵜住居へ出かけていった。2時に医者へ、その後スーパーに買物へ。強い地震で本当に大変でした。主人の一声で誰よりも早く自動車に乗って、家に帰ってきたのが良かったと思います。私は内陸育ち。津波の体験も何もなかった。逃げるが勝ちでした。

二男の嫁が幼子2人を車にのせて、神ノ沢から逃げて来た。「誰かが『逃げろ』と叫ぶ声がして、見ると、水が近くまで流れてきた。準備してたので、迷わずじいさんの家へと向った。途中、日ノ神橋で津波を写真を撮る車の間をくぐりぬけて来た」とのこと。家は浸水してしまった。早く逃げてきたのが良かったと思います。

我が家にも一大事が起きてしまった。長男の嫁と2人の孫が箱崎へ行ってる時、母（嫁）と下の子が逃げ遅れてしまった。運良く上の子（姉）は木の枝に引っかかり、ガレキの中にいたところを救出してもらった。津波の後、地元の人たちが見回りしてるときに、泣き声があるので行ってみると、びしょ濡れの無傷の6才の子どもがいたとのこと。住所、名前もしっかりしていたと聞いております。ばんじょうかごに入って、民家へ運び、女の人たちに2日間お世話になったことをありがたく感謝しております。13日早朝、おにぎり7人分とサラシー反をリュックに入れ、山道を歩いて子供探しに行った父親が、皆様のおかげで愛娘を背負ってこれました。3月18日、遺体と対面。二人の顔と手を握り、お別れしました。

現実を認めるしかなかった今、こうして書いてると涙が出て止まりません。箱崎の3人の家族も家も流されてしまいました。合掌

2644-01 鵜住居町 女性 50歳代

- ・避難時の様子（自宅、家族の様子見、避難呼び掛け、九死一生）

隣町の大槌町に出かけようとしたとき、犬2匹が足にまとわりつき、吠えまくり、なだめてもおさまらなかったので「変だな」と思っていたら、揺れ始めました。平成15年の震度6の揺れ方とは明らかに違いました、一旦避難したのですが、死亡者の集中した鵜住居駅の近くに叔母が一人で住んでいたもので、様子を見に行こうと車で向かっていたら、父親と偶然会い、「大津波が来るから行くな」と言われた。しかし、津波が来るのが信じられなくて行こうかなと思っていたら、避難先に行こうとしている人にも止められたので、引き返しました。それから5分も経たないうちに、海岸から5km離れた自宅を津波は越えて行きました。

今、父親と会わなければ、また、言葉を無視してれば完全に私は生きてないと思うとゾッとします。

1529-02 鵜住居町 女性 50歳代

- ・被災前の意識（津波経験あり、避難していた）
- ・避難時の様子（工作中、車帰宅、ここまで来ない、避難呼び掛け、九死一生）
- ・被災の感想（反省）

チリ地震や十勝沖地震の経験があり、子どもの頃から地震が起きると常に高台に逃げていた。

今回も地震発生と同時に大事な物は全てバッグに入れ、片岸町の会社から車で鵜住居町の自宅へ逃げた。主人から「ここには津波が来ない」と言われ、一旦、自宅に入ったが何となくまた外に出たら2台トラックが来て、津波が直ぐそこまで来ているので、荷台に乗って逃げるように言われた。驚いて川を見たら、逆流して今にも溢れそうになっていた。すぐ自家用車で逃げ、津波の被害に遭わなかったが、今でもあの時のことを考えると背筋が寒くなる。想定外の事を考え、まずは高台に逃げるべきと深く反省している。

避難した栗林小学校では、先生たちや地元の方々に非常に良くしていただき、感謝の念で一杯です。

2752-03 鵜住居町 男性 10歳代**・避難時の様子(鵜住居小児童)**

あの時、僕は学校にいました。僕は鵜住居小学校の3階にいました。この頃は、6年生の卒業式の練習をやっていました。その練習が終わった後、あの大きな地震が来ました。僕たちは、今まで避難訓練をたくさんしてきました。でも、あの地震の後の避難は、皆どうしたらよいかが全く分からなかったと思います。必死に皆逃げました。近所の人たちも、消防署の人たちもたくさんいました。この時は、大きな津波が鵜住居を飲みこむとは思いませんでした。最初に逃げたのは「ございしょの里」です。僕はまだ安心できませんでした。「ここで本当に大丈夫かなあ」とずっと思っていました。この時に、鵜小と東中の先生たちで、その上にある老人ホームに行くという事になりました。そして行って見て、「ここなら安心だなあ」と思っていた時に、もう津波はそこの下まで来ていました。皆パニックになって、上へ上へとよじのぼって行きました。

その日の夜は、旧釜石中学校の体育館で一日を過ごしました。その日は雪も降り、すごく厳しい寒さでした。夕食はたまごボーロー一つだけでした。とても悲しくて、辛かったです。それに、学校はいつからやるのか、そんなことは考える気にもなれないくらい言葉に表せないほどの悲しさでした。もう絶望しかないのかなあとも思いました。

2157-02 鵜住居町 女性 74歳**・避難時の様子(外出先、避難呼び掛け、車帰宅、片付け)
・被災後の様子(当日の避難所の様子)**

3月11日、私は鵜住居の音楽教室にいました。突然の激しい揺れに、仲間4人で教室の床にしゃがみ込みました。揺れが収まって、階段を降りながら「津波来るよ」と言いあって、それぞれ帰宅しました。私も駐車場から車に乗り、6分後には帰宅しました。家に入ると、廊下、台所、部屋の物の崩れ落ちた片付けに夢中になり、津波のことは頭から抜けていました。そのうち、外が騒がしくなり出てみると、県道の向こうの川を家や車が逆流して、すぐ下の家がない、電柱が倒れる、その光景に門前で立ちすくみました。自宅が高台であったため、命拾いしましたが、もし自宅が下であれば、家と一緒に流されたと思っています。

夕方5時頃、薄暗くなり小雪もちらついていたため、高台に残った12～13軒に、山に避難してきた方を1軒につき20～30人ずつ入ってもらうことになりました。我が家にも7歳～90歳の方が20人入りました。波に追いかけられ、ガレキの下から抜け出し怪我をしている人に、私や主人の衣類を出して、衣類を取り替えてもらう。寒い。20人を温めたい。毛布や掛布団を出し、カイロを貼ってもらう。温かい飲み物がほしい。水もなく、電気もない。プロパンガスがあり、ボトルのウーロン茶を沸かして茶飲みで半分ずつあげる。子どもに牛乳を沸かして、私は昼食もなしで、皆も夕食も何も出してあげられなかった。水がない……。トイレは風呂の水を利用して、懐中電灯2個で何とか使う。朝薄明るくなり、りんごの皮むき、水分補給と腹ごしらえにと。何とか21人で一夜過ごしました。

翌朝8時前だと思いますが、全員で栗林小学校に避難することになり、私も一緒に行きました。飲料水があれば、皆さんを温めてあげられ、気持ちも楽にしてやれたと、今、悔やみます。常に飲料水は確保しておくべきである。

3436-02 鵜住居町 女性 60歳代**・避難時の様子(自宅、片付け、避難呼び掛け、避難、九死一生)
・被災後の様子(当日から翌日の様子)
・被災の感想(すぐに避難すべき)**

夫が腰痛で寝こんでいましたが、地震と共に飛び起き、治った様子。その時、夫が「この地震で津波が来るかもしれないから、大事な物は玄関に置いておくように」と指示。それから、壊れた物の片付けをしていたところ、木の倒れ方や川の音で「津波が来た、逃げろ!」と孫を抱き、走った。孫の手を取り、高台に行く。坂を水に追いかけられながら、とにかく走りました。孫たちの母親は学校へ長女を迎えに行ったので、津波に飲みこまれたと思っていたら、途中周囲の異変に気づき、高台へ走って助かり、翌日会えてほっとしました。

山は余震が続き、揺れがひどくて、崩れてきそうで怖かった。雪が降り、焚き火で暖を取りながら、現状をどう感じて、これからどうして行けばよいのか。想像もつきませんでした。とても寒くて、そのうち暗くなってきて、近所のお宅で一夜過ごさせていただき、とてもありがたかった。翌日、栗林小学校体育館へ移動、本当に地域の方々の支援には頭が下がる思いで感謝しております。

まさか鵜住居の自宅が津波で流されるとは思ってもいなかった。だから家の中にいて、津波に気付くのが遅れた近所の方々は、家とともに流されたと思います。今回思った事は、「地震が来たらまず逃

げる」、「情報は常に耳に入れておく」。広報のアナウンスでは「3 m以上の津波が来る」とは聞きましたが、想像できませんでした。鵜住居は特に電波状況が悪く、ラジオが良く聞こえません。そのため、地域の団結、避難道路、案内板の整備は大切だと思います。住宅、学校、防災施設は高台に。

3377-02 鵜住居町 女性 30歳代

- ・避難時の様子(自宅、家族の迎え、九死一生)
- ・被災後の様子(当日から翌日の様子)

地震が起きた後、家にいた年長の息子とすぐ外に出ました。すぐに揺れがおさまらないので、2人で車にしがみついていた。その後、隣の私の実家で昼寝していてビックリして起きていた2才の娘を連れて来て3人で余震が弱まるのを待っていました。私だけ家の中に入り、子供達や私のジャンパーを取り、家の中の状況を見ました。2階は本が倒れていて、1階では棚の窓が途中まで開いていて、食器がその中で傾いていました。何を思ったか貴重品の一部を車の中に入れました。

その後、悩みましたが、小学校に通う1年生の娘を迎えに歩いて行きました。人はまばらで片岸方面から常楽寺に避難しようと歩いている10人くらいの人を見ました。途中で私の同級生に会い、「子供を迎えに行くなら農道ではなく県道を歩いて行った方がいいよ!」と言われ、沼崎金物店辺りまで歩いていたとき、「ふっ」と何だか人も車も見かけず不気味に思ったのと、何だか学校まで歩いて行く気になれず、家に帰ってから車で行こうと戻っている途中、「三木コーヒー」辺りで路地から何かが流れてくるのが見えました。中年の男性が「津波だ!」と叫びながら、山の方へ走っていくので、私も後ろを振り向かず山に向かって走りました。既に山に逃げていた方に手を引っ張られどうにか助かりました。その時に逃げて来た方を見たら、大津波でたくさんの家がぶつかりながら流れていくのを見て、2人の子供、私の両親、弟は「死んだ」と思いました。一緒にいた男性が「もう少し上に上がっていかないと津波がここまで来るぞ」と言うので、ひたすら上がりました。しばらく震えが止まりませんでした。

その夜は高校生男2人、中年男性4人、お年寄り1人の7人で「水道山」という場所で過ごしました。昔の避難場所だったようです。コンクリートだったので、そこで焚き火をしようと暗くなる前に皆で枝を集めました。余震も続き、雪も降りとても寒く、皆で身体をくっつけるようにして寒さをしのぎました。夕方から何度か自衛隊のヘリのようなものが飛んでいたのも、気付いてもらうために、皆で手を振り続けていました。夕方、映電社の方から山に逃げたという消防士と会ったので、小学校の安否を尋ねたところ、「逃げたようだ」と言っていたので少し安心してました。本当に夜は寒く死んでしまうのではないかと思いました。高校生がワンセグを見せてくれて、その時に大津波の悲惨な状況を知る事となりました。

朝、明るくなってから皆で叫び、誰かに助けを求め続けました。しばらくしてから警察官1人と消防団1人が助けに来てくれて、誘導されながら常楽寺の方に歩いて行きました。お墓の上の方では老人ホームの方や消防団の方々が焚き火をしていました。そこで、子供、自分の親がいるかを聞いたら、近くの家でお世話になっていることを聞き、案内され、そこで会うことができ、涙が止まりませんでした。その後、仕事で田老町に行っていた主人が遠野回りで車で来てくれ、会うことができました。2日後には小学校の娘にも会えました。

あの時、すぐ津波が来ると思っていれば、近所の方も助かったと思います。

0845-01 鵜住居町 女性 60歳代

- ・避難時の様子(自宅、避難呼び掛け、とりあえず避難)
- ・被災時の様子(周辺住民の様子)
- ・被災の感想(家族が犠牲、てんでんこ)

その時、私は自宅にいました。母の病院からの帰り、のんびりとテレビを見ていました。そんな時、大きな地震が起きました。私はお勝手の食器棚を食器が落ちないように押さえていました。地震は長く、止みません。そこに主人がアルバイト先から帰ってきました。「お前、何をしているんだ。食器はどうでもいいから外に出ろ」と、主人に怒られました。すぐに二度目の地震です。主人に「避難するから、隣のおばちゃん達に、車にするか、歩くか聞いてくるように」と言われ、聞きに行き、歩いていくことになりました。私は壊れて困るものは棚から下ろして下に置き、「帰ってから片付けよう」と言って、うちの中を歩きながら、主人と私の防寒服を取り、リュックに水2本と、財布を持って避難しました。私たちの避難場所は常楽寺前の広場です。

主人は近所の方々と先に避難所へ移動です。私は後ろのお友達宅に寄り、「まだ避難していないの?」と聞いたら、「今、主人がトイレなので、出たら行くから先に言って」と言われ、「お先にね」と移動しました。ニコニコしながら出会った近所の「○○さんどうして戻るの?」と聞いたら、「忘れ物を

したから、取りに行くの」、「じゃあ先に行くね」との会話でした。多くの方が避難していました。一度目のT字路に来たとき、側溝から水が出てきていました。「津波が来ている」と思い、まっすぐ進まないで近道を行こうと曲がって進みました。道中に外で会話をしながら、避難を迷っている方々もいました。「津波が来るよ」と言いました。「じゃあ避難するか」と、何とものんびりしていました。山岸の側溝に登った途端に、後ろの方でバリバリと大きな音がしました。振り返ってみると、はるか向こうから土煙を上げて電信柱を倒しながら、津波が来るではありませんか。

その時、私はテレビで見た、あの「スマトラの津波だ」と思いました。スマトラの津波だから避難所ではなくここの山に登ろうと、皆で山に登りました。山に登っても、津波はどんどん追いかけてきます。その時「お父さんお父さん」と叫んでいるので、振り返ってみると、近所の知り合いの方々です。私は戻って三人を引っ張り上げることができました(私は心の中で、このようなときに私も流されるのではと思った)。どんどん家々が壊され、お寺の前に、折り重なってガレキの山でした。お寺の本堂も傾き、「何だこれは、何が起きた」、私たち三十人くらいは山のおかげで助かりました。その山から我が家が見えるのです。まだ我が家は残っていると思ったのも束の間、大きな建物が渦を巻きながら流れて来て、ぶつかって壊していくではありませんか。「あっ、家が壊れる」と言いながら見ていました。ただただぼーとしながら眺めていました。そのような中に逃げ遅れた人々が、屋根とかベランダ上で渦を巻く波に乗ってくるのですが、何にもすることができないのです。やがて家は傾き、海の中に落ちていくのです。今でも、その情景が鮮明に浮かび思い出されます。

私たちのグループに90歳の△△さんがいました。△△さんは息子さんと二人暮らしです。もちろん息子さんは仕事です。「自分の家を見に行ってくる」と言うのです。「今は津波で全部海になっているからいけないよ。明日になれば行けるようになるかも、今日は行けない」と山から現状を見て説明するものの、また10分ぐらいうると、「家を見に行く」というのです。△△さんと「一緒に行ったり来たり」の山越えをしながら、夕方になってやっと町内会の方が避難しているお寺の高台の墓地に辿り着きました。集合している所に来てみると、主人は来ていませんでした。どうしたのかと不思議でした。一緒に避難した方は全員無事でした。何度も一緒にお茶をしている主人の友達も来ていないのです。二人は一緒かと思っていました。町内会長さんが「△△さん、誰と来たの」と聞いたら、「娘と来た」というのです。私はその時から△△さんの娘です。その夜は雪も降り、とても寒い夜でした。男性の方々は、山から木を運んで焚火で暖を取りました。町内会長さん始め、多くの方々の努力下、津波に遭わない高台のお宅に、病人と老人を家の中に入れていただきました。私は救護の役をいたしましたが、皆さんばらばらなので、現実には訓練が生かされませんでした。

主人は帰らず、八日目で遺体が見つかりました。また私の弟が23日ぶりに遺体で確認され、主人のお茶友達はいまだに遺体が見つかりません。そして、後ろのご夫婦も死亡し、〇〇さんも死亡し、私の身内で12名の方が亡くなりました。多くの大事な友人、知人をこの震災で亡くしました。二度とこのようなことがないように念じます。

※自分の行動で反省すること

非常持出は常に準備していた。避難訓練の時は背負って訓練していたのに慌てて考えも気づきもしなかった。何のための準備していたのか反省です。

※今後は「津波でんでんこ」で、とにかく高台に逃げて生きることしかない。

3237-02 鵜住居町 女性 60歳代

・避難時の様子(自宅、近所の様子見、避難呼び掛け、ここまで津波来ない、とりあえず避難、避難先から帰宅、九死一生)

東京の学校に行っていた娘に送る書類があったため、その荷物の中にお菓子でも入れてあげようと思い、近所のドラッグストアに買物に行った(レジ時間……12:58 レシート)。その後、地元の銀行に振込みに行き、その領収書を荷物に同封するため自宅に戻り、段ボールに書類、食料を入れ、郵便局にてゆうパックを発送(13:55…レシート)、約5分後、自宅に戻る。髪を染める予定があったので、お風呂にお湯を溜め、髪を染めた。寒かったので先に温まるつもりで浴槽に片足を入れた途端、揺れを感じた。おさまるかと思いその場にいたが、恐ろしい揺れに変わり、慌てて服を着ようとしたが立ってられず、焦りまくった。どうにか服を着たが、あちこちでガシャンガシャンと物が落ちたり割れたりする音……。やがて揺れがおさまり、染めっぱなしの頭をどうにかしなければと洗面所で染料を流し、タオルを巻き帽子を被った。そして、棚から落ちた花の土を片付け始めた。そうこうしているうちに強い余震。熱帯魚の水槽から飛び散る水を見ながら、水槽を押さえた。

揺れがおさまったとき、体の不自由な隣の奥さんのことが頭をよぎり、様子を見に行った。無事を確認し自宅に戻ったら、2軒隣の奥さんが「とりあえず避難しよう」と誘いに来た。それまで避難することが頭になかった。やがて、外では大津波警報の放送が流れた。それでも「ここまでは来るこ

とはない」と思っていた。誘ってくれた奥さんを待たせ、身支度を整え、家にあった2リットル入りのペットボトルの飲み物をバッグに入れ、二人で避難場所に向かった。しかし、「とりあえずの避難、また家に戻る」と思っていた私たちは、隣の体の不自由な奥さんを連れて行く頭がなかった。

神社に向う途中、誘ってくれた奥さんが「ガスの元栓を閉めてきたか」と私に聞いたので、閉めていなかった私は一人で家に戻った。そこで義妹に会い、義妹の家がある方が安全だからと誘われ、そのつもりで元栓を閉めに家に入った。そして再び外に出た私の目の前に見えたものは、川を逆流してきた津波であった。驚いた私は隣家に（ご主人が戻っていた）「大変だ、水が来た、早く逃げてえ」と声をかけ、義妹の家には向かわず、避難場所に指定されている神社に走った。前の方を見ることもなく足元だけを見ながら、もつれる足で神社に向った。私には見えていなかったが、多分海からの津波も駅の辺りまで来ていたのかもしれない。神社にやっとの思いで上った私は、先に避難していた町内の人たちと一緒に境内から神社の方に向かってくる津波と家々、ガレキを見た。現実感のない茫然自失の状態で見ているだけだった。泣き叫ぶ人もいなかった。神社の石段の上近くまで家が倒れて来ている。「これよりも大きいのが来るかもしれないから」と周りの人たちと、更に山の上に上がったが、暗くなる前に境内に降りました。

男性たちがガレキの中から燃える物を探し、火を燃やした。真暗な中、山を越えてくる人たちもいて、怪我をされた方、お年寄りを助けるために若い男の人たちが山に入った。神社の中で過ごす人、外で火を絶やさず暖を取るために頑張ってくれた方々、繰り返す余震の中、皆落ち着いて過ごせたことが安心感につながった。翌朝、目の前にはガレキと化した鵜住居がありました。一緒に逃げるのができなかったお隣のご夫婦のことが悔やまれてなりません。

3622-01 鵜住居町 男性 70歳代

- ・避難時の様子（自宅、津波想起、川の様子見、避難せず、救助、九死一生）
- ・被災後の様子（家族が犠牲）

あの地震の時は妻と家にいた。余りにも長い地震なので、家が倒壊すると思い、津波が来ることを覚悟しながら、茶の間の障子に挟まっていた。地震が止んだ時点で、妻を家の裏山の高台に避難させた。自分は、そのまま茶の間から長内川を見ていたら、20分前後して津波に破壊された家が川上に何軒も流されていくのを見ました。家の前の駐車場には、間もなく川上からの海水が逆らって押し寄せてきて、50cm くらいの水位となった。海水が引けるのを待って、「これで津波も終わり」と勝手に判断し、外に出たら河川に20軒程の家が並んでいて、道路にも破損した家とそのガレキの山で歩くこともできませんでした。川に流されてきた家に向かって、「誰かいるか、声を出せ」と何度も叫んでいたが、「助けて～」と叫ぶ人がいた。近くにいた近所の人と、二人で助けようと、その屋根に渡ろうとしたところ、私は誤って川に転落して、雪の舞うときでもありすごく冷たかったです。一刻も早く川から脱出ししないと自分も危ないので、助けを求めたら手を引き上げてくれる人がいて、一命を取り留めました。

一旦着替えようとして家に戻ったが、途中で海水が1m以上もあり、前に進めなかった。やっと家に着いた時は、その寒さも忘れ、びしょ濡れのまま、あの助けを求めている人の声が頭から離れず、小屋から金棒を持ち出し、再び川に行きました。すると、転落した時の家が、50m も川上に流されていたので、第二波が来たことをそのときに知りました。海水も引け時で、人もボツボツ道路に出て来たので、皆様の手を借りて助けを求めている屋根の三角部分の外壁を破り、60歳くらいの女性を無事救出した。まだ周りの家にも救助を求める人がいると思ったが、救助したくてもガレキが多く、危険で近づくこともできず諦めたことがすごく残念でした。何日か後に分かったことですが、川に転落したときは、第二波が来る直前で「あと30秒逃げるのが遅れていたら、あなたの命が危なかった」と聞かされた時は、それも私の運命だったのかと思いましたね。

震災発生から一週間ほどしてから、ガレキで釜石、大槌にも行けなかったが、親戚からの知らせで、私の兄、妻の姉さん、その姉さんの次男夫婦計4人と、私の同年の友人1人が津波に流されたことを知り、愕然としたものです。津波の恐ろしさは初めての体験でしたが、何年も時間が過ぎると、その怖さを忘れていく傾向があります。今は何でもある時代で、ビデオ、パソコン、雑誌などたくさんあるので後世には残るでしょうが、毎朝、訓練を厳しく徹底することが大切です。

3652-01 鵜住居町 女性 60歳代

- ・避難時の様子(自宅、津波想起、避難呼び掛け、避難)
- ・被災の感想(片田先生、東中の活動のおかげ)

あの日、3月11日午後2時46分、近所の人とお茶を飲んでいました。突然、今まで経験したことのない大きな揺れ、いち早く外に出て家の前にある松の木に2人で掴まり、地震がおさまるように、ずっと唱えていました。「津波が来るかもしれない」、近所の人たちに大声で裏の高い山に逃げるように叫びながら行くと、ほとんどの日向の人たちは避難していました。家の前の川には、下の方から家、ガレキ、車、その他どんどん流れて来て、2階からは助けを求めている人の声、山の下あたり一面津波で、映像では何回か見っていますが、初めての光景にただ恐ろしく、呆然としました。

今回私が早く避難できた理由は、2つあると思います。

1つ目は、群馬大学の片田教授の防災教育、また中学校のボランティアスト安否札、チラシ配布に参加できたこと。「とにかく逃げるのがまず大事」

2つ目は、近所に住む83歳の〇さん。いつもの会話は地震と津波の「逃げる場所をしっかりと決めておく」地震の後、腰も膝も痛いのを忘れて、すぐ押車を押して恋の峠に向かった。その夜はトラックに乗せてもらって、釜石小学校に向かった。その日の夜、私は外山に行ったが、外山にも40～50人が避難していました。朝までおにぎり作りをしたりして、3日目で家に帰りました。3日目で娘と孫に会い、道路で大声で泣きました。

1842-02 鵜住居町 女性 60歳代

- ・避難時の様子(自宅、避難、避難の呼び掛け)
- ・被災時の様子(津波襲来時の様子)
- ・被災後の様子(当日の避難所の様子)
- ・被災の感想(家族が被災)

3月11日午後2時46分、地獄の幕開けでした。愛の鐘で津波警報を聞きながら、近所のお年寄りに声をかけ、自宅の裏山に登り、落石を気にしながら、表を見ていました。何度も目をこすりました。目の前の景色が変わったのです。2階建ての家と、家との間から見える景色が一変したのです。「何なんだろう、何？」茶色のモコモコしたようなものが、上の方に進み「あれ!」と思いきや、赤い屋根がまるで映画でも見ているように動いているのです。津波とも知らず、山から駆け下り、表に出たら地獄絵図でした。水のない長内川がガレキの山なのです。道路はもちろん、歩ける状態ではないのです。これは津波なのだと思います、昔、母が「日向に津波が来れば、鵜住居は全滅だ!」と言っていたことが思い出されました。でも、その時は信じられませんでした。私は、その地獄絵図は夢なのだと思います、涙も出ません。その時点で、主人や近所の人たちが、「オーイ、人が居るぞ、手を貸せ〜! こっちだこっちだ、あぶねえぞ! 水に気をつけろ〜タバコ吸うなよ、ガスくせえぞ!」、すごくガスが臭うのです。「火事出すなよー」その時から、涙が止まりませんでした。

現場は男の人たちに任せ、私たちは炊き出しをすることにし、日向のアパートに集まり、二本松商店からお茶をいただき、外で火を燃やし、お茶を煮ることにし、“おにぎり”作りです。どんどん集会所に避難者が増え、入りきることができず、外山の集会所に行くようお願いしました。一段落した夜中2時か3時頃、鵜住神社から山を越えてきたという青年が、おにぎりを頼むということで、冷たくとも温かくとも、何十個握ったか定かではありませんが、何十人という人が避難しているとのこと、あの寒気の中、衣服が濡れてる様子……朝、また来るように伝え、見送りました。それから2班に別れ、長内集会所でもガレキを片付けてもらい、炊き出しを始めました。市役所から物資が届き、自衛隊からも物資が届けられ、安否確認しながら、一件一件物資を各班長さんたちの協力で届けることができました。

私事ですが、娘が織笠(山田)に嫁いでいましたが、その娘が孫と一緒に流されたことを知ったのは、その最中です。でも、私はすぐには行けませんでした。認めたくない気持ちと、私だけでなく、安否確認できず、泣きたい自分の心と戦っている仲間が大半だったのです。自分だけがという気持ち、本当に皆それぞれが、家族より今日の前にいる同志(?)で寄り添って生きていたかのようです。正直、2、3日間の記憶が余りないのです。昨今寒くなり、またあの時のことが何となく思い出されて来て、悔しさ、哀しさ、辛い時間が自分を責めて、日に何度涙を流す事か……。日々、あの時のことを忘れず、とにかく地震が来たら“逃げる”をモットーに! 悲しい思いはもうたくさんです。

2215-11 鵜住居町 男性 80歳代**・避難時の様子(自宅、川の様子見、津波確認後避難)**

津波が来る2、3分前まで自宅前の堤防にいました。その前に電気が消えたので、外に出た後に堤防に上り、川を見ていたら急に空が暗く黒くなり、150mくらい先を見たら黒く高い波が川を上ってきたのです。川の中には、高さ14～20mくらいの木々が生えていたのですが、それが全然見えず、木の上を黒い波が海水が立ったまま上ってきたように私には見えました。

今でも目を開けるとあの時のことを思わない日はないのです。50年かけて築いた地域があっという間に消える。あの日以来、全国の皆様世界の方々より、心身ともに支援いただき、やっとの思いで当時を思い、これから短い人生かもしれませんが、明日に向かって仮設で頑張り抜こうと思っています。これからもご支援お願い申し上げます。

0674-01 鵜住居町 男性 70歳代**・避難時の様子(自宅、すぐ避難、避難呼び掛け)****・被災後の様子(救出)**

地震発生時、家内と二人で家について、「今までの地震と違うようだ」と家内に叫んで、地震が終わるのを待って、早く避難場所に行こうと着ている物にジャンパーを羽織って、近所の家に「避難しよう」と叫んで出かける。「また戻ればいいかな？」と思っていた。

常楽寺境内に着いたら、上地区の人たちは少なかった。学校の先生が車で来て、どこかのお爺さんを乗せていたので(歩けなくて見かねて乗せて来たと言っていた)、降ろすのを手伝ったりした。八幡神社の山に上がってみると、鵜住居の町は一面海になっていて腰が抜けたようになり、啞然として言葉も出なかった。その間に家内が上に行こうとする途中で波に飲まれてしまい、ガレキの中で足を挟まれて仰向けにぶら下がっていた。タイル屋さんが助けようとしていたところに、私も駆けつけて助け出した。私も家内を探して歩いて来た途中で、ガレキの中からどこかのおばさんを助けて来たが、良く助かったと思う。波に飲まれた人たちは、夜になって寒くてガタガタ震えていた。でも、お墓の上で火を焚いて、火にあたり乾かしてやっと人心が付いたようだ。早朝、別の避難所を目指し、山中を歩き、足の弱い人たちを励ましながら、神沢地区まで歩いた。車のある人たちにピストン輸送してもらい、栗林小学校に辿り着いた。

1540-01 鵜住居町 女性 50歳代**・被災前の意識(避難していた)****・避難時の様子(自宅、車避難)****・被災の感想(すぐに避難すべき)**

私は震災前からよく津波のことを話題にしていました。家族や知人たちと避難の相談もしていました。けれども、この津波は今までの津波と余りにも違い過ぎました。以前は30cmとか50cmくらいの津波でした。私は恐がりなので、それでもいつも車で山の上とか海から離れた陸の方とかに子供を連れて逃げていました。そして帰ってくると、「ここまで来るわけないよ」と笑われていました。前の年の2月の大きな地震の時も、避難場所となっている常楽寺の裏山に孫2人を連れて車で行き、更に一番上の車で行ける場所まで逃げて、お墓の上まで行って沖の方を見ていました。その時も結果は30cmほどの津波でした。何時間もテレビと睨めっこしては避難していました。でも、30cmくらいの潮位の変化でした。

そして今度の3月11日の地震です。いつもの地震よりは大きかったけれど、まさかこれほど、恐ろしい津波が来るとは誰が想像したでしょうか。いつものように私は大只越の山の上まで車で避難しました。そして沖を眺めていました。大きなクレーン車みたいな船が行ったり来たりゆっくり揺れているように見えたのですが、遠くなのでハッキリは分かりません。下の方で家が流れていったと話を聞いて耳を疑いました。山の上にいたので波は全く見えなかったからです。辺りは暗くなり、山の上に避難したまま余震に震えながら夜を過ごしました。親切な方の家に泊めていただいて横になって休むこともできました。翌日、町の様子を見て、現実のこのように感じるできませんでした。また、いつこのようなことが起こるか分かりません。油断して家の中にいた多くの方が流されたと聞きます。とにかく高い所に逃げるしか助かる道はないと、後世にも伝えたいです。

3203-02 鵜住居町 女性 60 歳代**・避難時の様子（外出先、車帰宅、避難先から帰宅、流された）**

地震が来たらすぐ高い所に避難すること

あの時、駅のサンフィッシュにいました。友達と 4 人でいて、1 人の人が「早く家に帰らないと」と言うので、車で急いで帰りました。運転している私は気がつかなかったのですが、乗っていた友達の話では、表通りを私は突っ走って止まることもなく帰りましたが、四方八方から車が入ろうとして、大変だったそうです。

日向に 1 人下ろして、自宅に帰りました。途中、両石の海は底が見えていました。それでもこれほどとは思いませんでした。出かけるので隣の家に預けていた犬を受け取りに行ったら避難札があり、神社だと思って犬を受けとりに神社に行ったら家に戻って、2 階に上った途端に頭の上までどぼっと水がきて、気がついたら日向の川の上流に流されていました。家から出て屋根をつたい、流されない人の家の 2 階で 1 晩あかしました。

2313-02 鵜住居町 女性 70 歳代**・被災前の意識（訓練不参加）****・避難時の様子（自宅、片付け、津波確認後避難、九死一生）**

長内川の川岸に住んでいました。揺れがおさまり、外に出て隣人と話した後、家の中で片付けをしていたら、外の方から今までに聞いたことのない音がした。窓を開けて見たら、ふだん水のない長内川で、水が溢れそうになっていた。「これが津波か」と驚いて、裏口から飛び出し、避難所となっている鵜住神社に向かった。神社に着いて間もなく、あの津波が家々を飲みこんで迫ってきた。余りの恐ろしさに目を閉じ、下を向いたままとなりました。

避難訓練には今まで一度も参加したことがなかったせいか、逃げる途中で痛めた膝が今でも痛む。津波の侵入が、住宅地よりも川への遡上が早かったことにより、川岸にある自宅からそのことを早く発見することができたことが、私の命を救ったと思います。

0881-02 鵜住居町 女性 80 歳代**・被災前の意識（訓練参加、備えていた）****・避難時の様子（外出先、車帰宅、片付け、車避難、渋滞、要援護者支援、九死一生）**

私の家は海から約 1 km くらいの所で、長内川の川縁にありました。いつも津波避難訓練には、私が一人で参加していましたが、主人は障害一級で、とても神社の階段を上ることは不可能ですので、私が車で一緒に避難しなければならないと考えておりました。日頃から、テレビや新聞で、大地震が来る可能性を再三聞いておりました。貴重品入りのリュックサック、ラジオ、ヘッドランプなどなど所定の位置に。車椅子は車の中に用意していました。

あの日は、昼から防災センターの 2 階にサークルで行っておりました。14 時 46 分、大きな地震で机の下にもぐりこみ、地震の止むのを待ちました。静まってすぐ「お先に」と言い、階段を駆け下り、車に飛び乗り、家まで夢中で走りました。3 分くらいで家に着き、車庫に入らず、すぐ逃げられるように車の向きを変え、家に入りました。良いことに主人は転ばず、机に掴まっておりました。趣味で作っていた DVD が床一面に滑り落ち、片付けようとした主人に、「早くしないと津波が来る」と言い、足に装具を付け、毛布・ラジオ・ヘッドランプを持ち、急いで車を発車させました。まだその時、川には水がありませんでした。50 m も走ると、もう車が停滞して先に進まなくなり、仕方なく道路脇に車を寄せ、車椅子を下ろして主人を乗せ、やまざきデイサービスを目指して走りました。坂道が急なため、ホームから 10 m くらいの所で止まってしまいました。すると、上の方から若いお母さんが走って来て手伝ってくださいました。

ホームに入って北側の窓より外を見ると、はるかかなたに一直線に白い煙のような津波が堤防を越えてくるのが見えました。川縁の私の家は、川を逆流した津波のせいか動いていくのが見え、びっくりしました。津波だと皆が騒ぎ、もっと上の方にと道幅一杯になり走りました。疲れて車椅子を押すことが大変でした。その時、若い男の方が（多分先生だと思います）「私が押します」と頂上まで押してくださいました。まだまだ、たくさんの方よりお力を貸していただきました。

ただいまは仮設住宅に入っておりますが、主人ともども元気で恩返しできるようにと願って毎日過ごしております。

2616-01 鵜住居町 男性 70歳代

- ・避難時の様子(自宅、避難、避難呼び掛け、九死一生)
- ・被災後の様子(当日の避難所の様子)

2011年3月11日午後2時46分、自宅居間で家内とくつろいでいました。すると突然不気味な地鳴りとともに激しい揺れの地震、棚上やサイドボード上の置物等が落下。そのあと一時静まり、片付け始めたが、再度激震、NHKのテレビが「大津波発生!」(私はこう聞いた)と三回連呼したところで、バシッと停電。なかなか激しい揺れはおさまりません。私は直感的に「これが以前から警告されている三陸沖地震か」と察し、即避難しようと非常時用リュックに預金通帳、健康保険証、印鑑、それに前日処方された薬(30日分)などを詰め、玄関を出た。

家内が足を病んでいるので、当初車を出したが、既に道路は車が渋滞していたので、すぐに諦め、徒歩で避難開始。10mばかり歩いた所で、隣のお爺さんが呑気そうに自宅の前に立ち、「津波はここまで来ねえか」と呼び掛けられた。左側の川を覗くと、津波の先頭の小さな波が勢いよく川上を通り過ぎていく。私が「津波はここまで来ている」と叫ぶと、その方も驚き、そのご夫婦も一緒に避難。そばの橋を渡り、我が家の方を振り向くと、自宅前に置いた車が、堤防を越えた津波に流され始めていた。車は舟のように浮き、自宅の建物にぶつかって、台所の窓ガラスを壊す。その後方には河川敷に立っていた胡桃らしい10m以上もある大木が、梢と根を上下に回転しながらすごい勢いで押し寄せて来る。私は咄嗟に「大津波が来たぞ、逃げろ!」と叫んだ。と同時に、私らも避難所に向かった。しかし、避難所まではまだ3、400mはある。巨大津波の押し寄せるスピードは速く、避難所まではとても行けないと判断し、ちょうど左側に以前、キノコ採りに行った山道があることを思い出し、「山へ上られっ」と、そこへ向かうように後方から叫びました。津波はすぐ後ろまで迫ってくる、その山に上がるのに一步一步足を進めるが足元の土が柔らかく、思うように上がれない。やっとのことで、足場のしっかりした場所に逃れることが出来た。安全を確保し、市街地へ目をやると、家、車、大木、そして多量のカレキ、その上には茶色の霧らしいものが舞い、巨大津波が寄せたり引いたり、地獄の絵図はこれだなと思った。

そこで、夕方津波がおさまるまで待ち、やがて市道に下がって自宅の方を見ると、風量はがらりと変わり、我が家もほんの一部を残し全壊流失されていた。見晴らしが良くなった。その夜は近所の知人宅(この家も2階の床上まで浸水したが、辛うじて建物は残った)で過ごした。カレキを取除きながら2階へ上がり、濡れている床にブルーシートやダンボールなどを敷き、頻繁に起きる余震、厳しい寒さと戦いながら夜明けを待った。私たちは6人でいたが、屋根がある場所だったので、おかげで風邪も引かずに過ごせ、感謝している。翌日、他の場所に避難していた人たちと焚き火をし、暖を取っていたところへ消防団の方が来られ、避難所へ連れて行ってもらえた。この大地震で家を始め家や家財をなくしたが、命だけはこうして元気に生かされた事、本当によかったと思っています。深く感謝しています。今回の大地震の教訓は、とにかく巨大地震が起きたら、それまでの想定は度外視して近場の山場へ上がる事、非常用防災品は常備しておくことを強く感じた。それに防災訓練も必要だ、参加した時に自然的に起きるコミュニケーションがすごく有効だ。

1965-01 鵜住居町 男性 60歳代

- ・避難時の様子(外出先、車帰宅、避難呼び掛け、避難、九死一生)
- ・被災の感想(後悔)

箱崎町白浜から車で帰りの道、根室の宝来館を少し過ぎた時、大きな強く長い地震が続き、車が止まり嫌な予感がした。地震が止み、車が走り出し、根室の急カーブを曲ったら、山から大きな石が崩れ落ち散乱していた。その石をうまく避けて通り抜けると、運転手の友人が「自分の家が心配なので寄って行く」と言うので、寄ったら釜石東中学校の生徒たちが小走りで避難中でした。友人の家は釜石東中学校と鵜住居小学校の間にありました。数分後か数十秒後、友人の家を出発し、橋を渡り、目に飛びこんで来たのが、鮭ふ化場の高い所にある水槽タンクから滝のように流れ落ちる水でした。その後、防災センターに寄りましたが、誰も避難していませんでした。その後、自分の車で自宅に帰ろうと思い、車で走ると両側ビルのモルタルが剥がれ落ちていて、地震の激しさを物語っていた。

やがて鵜住居保育園前まで来たときに、車が渋滞していた。急いで車を降りて、走って先頭を見に行くと、釜石東中学校の生徒たちがございしよの里にいたので、走って自分の車に戻り、渋滞の右側を走行して自宅に帰った。その後、隣の人たちと「鬼瓦が落ちるくらい、大きな地震だ」とかいろいろと話をしていたが、生徒たちが心配になり、ございしよの里を見に行ったら、小学生も加わり、座って先生の話を聞いていた。その後、自宅に戻り、近所の人たちと雑談していると、友人の運転手の隣の奥さんが孫を抱いて逃げて来たと言うので、隣(友人の妻)の様子を聞くと、「一緒に逃げよう」と誘ったけれど、「旦那が迎えに来るから」と言って断られたとのことでした。「足が少し悪く、長距

離の歩行が困難な状況なので……」と言っていたかもしれない。それから間もなく、避難先のごさいしょの里から中学生たちに連れられた小学生たちが小走りで我が家の前を通り、より高いやまざきデイサービスに避難していった。全員が避難を終えた頃、遠くから白い煙が立ち上がり少しずつ近付いて来た。最初は火事かなあと思っていたが、そのうち「津波だあー」という声が出て、妻や隣の人たち、また近所の人たちと一緒に近くの山に逃げこみました。

今、仮設住宅に入りましたが、冷静に考えると、何故あの時、箱崎町白浜仮宿の帰りに、大きな地震後、「家が心配だから寄って行く」と言った友人に「一緒に逃げよう」と言わなかったのか、心残りです。それまでは防災センターから友人も家に帰り、妻と一緒に逃げたと思っていた。しかし数日後、友人の夫婦は遺体で発見されました。

3036-01 鵜住居町 男性 70 歳代

・避難時の様子（自宅、ここまで来ない、避難呼び掛け、とりあえず避難、九死一生）

1 回目の地震がおさまリ、屋内で倒れた物や落下した物の整理をしていると、再度揺れだし、外出先から戻った妻が「危ないから外に出るように」と叫んだので、庭先に出た。電線の音がすごかった。しばらく隣人と 3 人で様子を伺っていると、人々が道路を高台に向かって行くのが見え、妻が「津波が来る、皆が逃げているので避難しよう」と言ったが、「馬鹿、ここまで来る津波があるか」と逃げようとしなかった。

しかし妻に強く言われ、警報が解除されれば、すぐに戻れるものと思い、何も持たずに逃げた。背後遠く海岸方面に黄色い煙のような大きなものが上るのが見えました。30 秒も遅れたら、津波に巻きこまれたことでしょう。

2501-02 鵜住居町 女性 60 歳代

・避難時の様子（外出先、帰宅、片付け、ここまで来ない、避難呼び掛け、避難、九死一生）

あの時、私は近くのアルバイト先から帰る途中大地震に遭い、揺れがおさまってから急いで家に帰りました。家の中にはいろんな物が落ち、食器も散乱して足の踏み場もありませんでした。靴を履いたまま片付けをしている時、「3 m の津波が来る」と放送がありましたが、「家までは来ないだろう」と思っていました。

余震が来る度、外に飛び出していましたが、近所の男の人が「水が来たぞー」と叫ぶ声がしました。そういえば、「津波は川を上ってくる」と聞いていたので、すぐ線路に駆け上がりました。川を見たら、すぐに溢れて自分の家がバリバリと壊れ始め、慌てて線路を走って逃げました。近くの夫婦が家から出てきたので、「早く線路に上がって」と叫びましたが、もう足まで水が来ているのに全然私の方も見えないし、急ぎもしませんでした。私が逃げた後の人たちも、叫んでも同じように動かずに、その夫婦は流されて亡くなりました。私は夢中でした。

避難場所に行ったら、もう海になっていて、東中学校の生徒さんたちはもっと上の国道 45 号、恋の峠に行っていました。生徒の中では気分が悪くなり、吐いている子もいたり、またお互いに助かって抱きあう人、叫んでいる人などいろいろでした。

主人は釜石で地震に遭い、駒木の道路から国道 45 号に上がり、水海から 3 月 5 日に開通した高速道に上がった所で津波が来たのを見て、鵜住居の町を見たら全部海になっていたそうです。高速道路から恋の峠におりてきた主人と会うことができ、本当に良かった。2 人も助かって良かった。

3428-04 鵜住居町 匿名 10 歳代

・避難時の様子（鵜住居小児童）

あの時、私は津波が来ることを考えていなくて「大丈夫、大丈夫。来るはずなんてない。来たとしても学校の 3 階までは来ない」と思って安心していました。中学生が避難しているのを見て、先生方の指示どおりに避難しました。大津波警報が出ていたのだけれども、「こっちまで来ない」と考えていました。私の家は海から遠く、「こっちまで来ない」と思って、家族の皆も無事だと思いました。第一避難所にされていたごさいしょの里へ最初に避難しました。高い所だったので、「来ない」とここでも思いました。ごさいしょの里の裏に山があって、岩もありました。ごさいしょの里の人たちが「岩が崩れる。ここは危ない」と言いました。津波も近くまで迫っていて、すぐに元第一避難所のやまざきデイサービスの所まで逃げました。煙が山の近くから見えたので、「火事？」「山崩れ？」皆そんな話をしていました。「ザブン」大きな音が聞こえ「何？」と思って立ったら、黒い波が見え「津波だ！」先生方が「逃げろ、走れ！ 並ばずにバラバラで！」大きな声で言った。声のとおり皆逃げて、転んだりしました。怖くて泣いていた人たちも、一生懸命逃げて皆無事でした。山で、声が聞こえろと思ったら、山の方に逃げていた人が一杯いました。「どうなるの？ 戻れないの？ ここで一晩過ごす

の？」その時はまだ寒かったので、そこで寝るのは無理だったので、甲子小、釜石小……いろんな所に避難しました。(バラバラで)「寒い、寒い」皆で寄り添いながら寝ました。寝る前にも、震度2、3くらいの余震が続き、怖くて眠れませんでした。とっても×100000 怖かったです。もし、あの一日前に戻れるなら、死に至る人がいるわけがなく、皆、皆無事だったはずなのに。皆無事だったはずなのに……。悲しくて、悲しくて。私のいた釜石市立鵜住居小学校で生徒が二名、公務員が一名、計三名が帰らぬ人となりました。校長先生などの先生方も何名か逃げ遅れました。無事だった人もいますが……思い出すと辛いです。

◆未来の釜石市民の皆さんへ。

初めまして、私はあの「東日本大震災」の経験者です。今だからいろいろなことが言えますが、皆さんは、津波注意報でも逃げて下さいね。亡くなった人の多くは2日前の地震で騙されたらしく、それで逃げなかったみたいなのです。幾ら津波注意報でも、来る可能性はあります。なのでなので……。それにまた、多くの死者を出したくありません。私が通っていた塾の先生も……。思い出したくない。あの、あの。思い出すだけでも……。あー津波、何で来たのでしょうかね。地震だけならいいのだけれど、津波は絶対×10000に嫌です。

もうね、あの、お願いみたいなのですが、大きくて、立派で、頑丈で絶対に壊れなくて、もうあんなようにならないような、防波堤を作ってください。そして、元どおりの鵜住居にしてください。元どおりに。これなら津波で亡くなった人も天国から私のことを見守ってくれると思います。私も、私もそれが叶う日を楽しみにしています。

あの、私の学校で東日本大震災のことを劇にしたのですがけれども、内容は未来人という、50年後の人たちが今の人たちと喧嘩？ みたいなのをしていて、未来の鵜住居みたいな劇なんです。劇の中では、鵜住居が立ち入り禁止区域でここには住んではいけない！ という感じなんですけど、そんな風にはならないですよ？ 大丈夫ですよ？ 私、期待しています。いつもの優しさに包まれた美しい町に戻ることを、自然に囲まれた町に戻ることを、一人ではできないことがあっても皆で力を合わせれば何だってできるのです。ゆっくりでも一步一步前に向かって進んで行けば、元の鵜住居に戻ると思います。きっと応援してくれる人がたくさんいるはずですよ。喧嘩などしないで、仲良くやって下さい。そして、津波で避難する際にまとまって逃げて下さい。そして食料、懐中電灯、貴重品を必ず持って逃げて下さい。必ずです。そして一緒に頑張ろう!!!

逃げる時のアドバイスだけれど、車で逃げるのにこだわらないで下さい。皆が車で逃げようとするので渋滞してしまって逆に危ないです。なので逃げる時は走るとか歩くなどして下さい。車の中にいた場合は、隅の方に車を止めて逃げるか、車に乗って逃げるかにして下さい。車にいた場合は仕方ありませんので、「ここまで来ない」など考えないで下さい。そっちの方が危ないです。いいですか？

遠くても近くても、津波注意報、警報が出たら逃げて下さい。避難所とかは、元から知っててください。道も一回だけでなく、二回、三回も歩くなどして道を覚えると、避難する時に楽で良いです。覚えていないと損をします。その自分の家の場所が危険性が高い、低いも知っているといいです。

私たちの手で、もうこんなふうにならないように、私たちの鵜住居は私たちの手で取り戻すんだ！ だから、私たちがこうして生きていることを感謝しなくてはならない。

1150-1 鵜住居町 女性 60歳代

・被災後の様子(訓練不参加者が被災、当日から翌日の様子)

鵜小と東中生が、山崎デイサービス前で「点呼」を取り始めた時、山田線沿に津波が来て一斉に恋の峠に向かって逃げました。私はその時、一人線路上で泣いて動けなくなっている中学生の女子生徒の肩を抱き、「大丈夫だから」と声をかけながら歩いていきました。その後、TVで元気に合唱している姿を見ました。(あー、3年生だったんだ！ と思いました)

夜が明け、隣の自宅3階で動けなくていたお婆ちゃんを息子さんとともに探しに行き、見つけた時は涙がこぼれて仕方ありませんでした。多くの人たちと一夜を過ごした晩、皆に誰が「いないか調べて」と言われた。その最中に「あの時、そのまま線路上に上がれば助かったのに～」とか「訓練に出てこなかったもん、ふだんから……」という声があり、私は地区会長として、もっともっと声を大にして、日頃の呼び掛けをすべきだったと思いました。

3月12日の昼頃、高校生4人が「友人を探して平田から線路沿いに歩いてきました」見つからないとガックリしていた。避難所で一休みした後、「大槌を目指して探しに行く」と言っていました。その後、あの子たちはどうしただろうか。

避難所にいる人たちの食料・水を探して歩き回り、山で薪を集めたり。消防車が1台あって、その荷台に飲料が積んであったので、年輩の方々が譲り受けに行ったら、「これは我々のだ」と断られて戻

ってきました。何も全員がほしいと言ったわけでもなかったのに。「せめて、お年寄りの方にも」と遠くから願っていたのに、とても残念で悲しい光景でした。

恋の峠から三陸道にロープで施設の方々(車椅子の人もあり)をあげてやる作業は大変でした。これも男の人たちが皆で協力して、何度も何度も働いていました。やっとそれも終り、今夜はどう過ごすか考えていたら「ここには今夜から何の援助も支援もないから移動してください。残る人は責任持って下さい」と言われました。それから主人が三陸道に車を置いていたので、近所の人々とピストン輸送して旧一中体育館へ。恋の峠から、やまざきデイサービスから、山田線上で見た我が鵜住居の町や私の家は、跡形もなく悲しい現実でした。まさか、まさか……ここまで。やるせない気持ち、自然の恐ろしさ、それでも私は家族全員が無事だったのだから。亡くなった方々を思うと、そして、いろんな声、映像を見ると泣いてしまう自分ですが、こうして生きた分、何とかしなければと思うこの頃です。

3246-01 鵜住居町 女性 30歳代

- ・避難時の様子(外出先、車帰宅、車乗捨て、九死一生)
- ・被災後の様子(当日の避難所の様子)

地震直後、その場所にいれば安全でしたが、子供たちや家の様子が心配で車を走らせました。釜石高架橋の上で大きな余震があり、その時に「死にたくない」と思いました。両石のカーブにきた時、津波が船とともに堤防を乗り越えようとしている瞬間を見てUターンし、三陸道へ乗りました。泣きながら子供たちの名前を叫びながら運転しました。片岸に来た時、茶色い壁のような津波がそこまで来ていました。もう車では逃げられないと感じ、山際に車を停めて山の上へ上へと登りました。ブーツでは登りづらく、裸足になりました。上まで登りついて目にした光景は二度と忘れられないです。生まれ育った大切な自分の町、友達の家、皆流されていました。屋根の上に逃げた人が橋にぶつかって落ちていく。空は鳥がたくさん飛び、爆発音と津波の音だけが響いていました。地獄のようでした。私は泣きながら、ただ自分の町がなくなっていくのを見続けていました。何度も引いては押し寄せて、少しずつ波の勢いは弱まりました。

途方に暮れていた頃、消防団員が現れて、恋の峠に1,000人ほど避難していると聞きました。小中学生もいると聞いて本当に安心しました。片岸から恋の峠へ移動し、子供たちに会えたのはもう夜になってからでした。長男だけは大腿にいたので、赤く燃える大腿の空を見てどうにもならない辛さ、悔しさを感じました。心配でしたが、釜石一中体育館へ移動することにしました。子供たちを車に乗せようとしたのですが「皆と一緒に歩く」と言われ、歩道を歩くお年寄りなどを乗せて、釜石一中体育館へと移動しました。体育館は一杯で入れなかったのも、車の中で寝泊りしました。ガソリンが少ないので、なるべく外の焚き火で過ごしました。もう何もかも終わりだ。そんな気持ちでした。

何日後に長男にも会え、その後しばらくしてから内陸の兄弟宅へと避難しました。遠野から別世界で何事もなかったかのようにでした。私はもう鵜住居へは帰りたくなくて、津波が恐くて、もう海も見たくはなかったのですが、高校生の長男も「ここで内陸に来たらただの被災者で終わる」と言いました。この津波を乗り越えるには、復興まで見届けることしかないと思いました。手を取りあって逃げた子供たちだからこそ、できることがあるのかもしれないと思いました。

私たちは今でも鵜住居仮設に住んでいます。何もなくなった鵜住居。優しかった人たち、大切な友達、いとこ……。今でもたまに泣いてしまっていますが、それでもここに残ったのは間違いではないと思います。鵜住居の再生を見届けたいと思っています。

2691-03 鵜住居町 女性 60歳代

- ・避難時の様子(自宅、避難呼び掛け、避難)
- ・被災後の様子(当日の避難所の様子)

地震直後、防災無線から「3mの大津波警報」と聞いて、家でリュックに薬とか必要な物を詰めておりました。寒いのでジャンパーを着て外に出たら、近所の方が「釜石から両石を通ってくる途中、両石の海に異変があったので、津波が来るから避難した方がよい」と声をかけてくれました。すぐに家のそばの高台にある山田線に上りました。その時には、既にやまざきデイサービスから東中学生が避難してきて、線路上に上ってきていました。私も線路上に上り後を振り返ると、鵜住居駅付近の家々が流れ、白い津波のしぶきが目に入りました。とても現実とは思えず、少しパニックになりましたが、東中学生(男性)が私のリュックを持ってくれたので、一緒に恋の峠まで逃げました。私たちの避難所はやまざきデイサービスでしたが、それより高台に逃げました。山田線の線路が、鵜住居町25地割の13軒にとっては堤防となり、家は床上が残り、現在修復して住んでおります。東中学生は訓練をしていたためか、とても冷静に行動していましたので、住民にとってはとても心強かったです。彼らと

一緒に、恋の峠に暗くなるまでおりましたが、その後新両石トンネルを歩いていき、途中で山田の方のワゴン車に拾われ、旧一中体育館まで避難できました。感謝です。その夜は、新聞紙で暖を取り、寒さに耐えました。翌朝、甲子小学校に移動いたしました。旧一中体育館ではトイレが大変でしたが、甲子小学校はとても助かり、ほっとしました。私は恵まれていた方です。

この度の震災で気付いたことは

- ①正しい情報の伝え方、伝わり方(噂に惑わされないこと)
- ②避難場所時の名前記入後の移動先の徹底記入
- ③毛布、水、食料など備品の備え、トイレ!
- ④高台の避難場所の確保(第一、第二、第三と明記して欲しいです)
- ⑤近所で声をかけあって孤立しないこと(てんでんことは言うけれど)
- ⑥正しい判断で高台に逃げる
- ⑦恋の峠の避難場所建立 通信網、通信メモ、伝言板の作成

3793-01 鵜住居町 女性 80歳代

- ・避難時の様子(外出先、避難呼び掛け、避難)
- ・被災の感想(すぐに避難すべき、反省)

自然の怖さ、突然の出来事、あの怖さを忘れることはないでしょう。

当日、私は午後のバスで釜石に行きました。知人の家に行き、お茶をいただいていたら、電気が消えて大地震が来たのが14時46分。静まって電気が点いたので辺りを見渡したら、ストーブがひっくり返っていた。でも津波が来ると思わないでいたら、息子さんがとんできて「大きな津波が来るぞ、店の物はそのままにしてすぐ逃げろ」と言われました。私たちは皆でお薬師の階段を上がっていたら、知人の奥様が車で来て「すぐに乗って」と言われ、車に乗せていただき、法華様に登って行きました。その時に下を見たら、水が来ていたとのことで怖い思いをしました。この間、30分くらいはあったと思います。その晩は、お寺さんで休み、朝を迎えました。

次の日、鵜住居がほとんど波にさらわれ、家やたくさんの方が流された話を聞き、驚きました。避難所に入った人たちはほとんど全員が流されたとのこと。「地震が来たら津波が来るので、とにかくすぐに高い所に行くこと」、「『堤防があるから』と油断してはいけないこと」、「子供たちにも迎えに行けないからと話しておくこと」、「たくさんの方が迎えに行ったら流されたり、忘れ物を取りに行ったら流されたので、救急袋を持ってすぐ逃げる」、「経験した人たちの話をよく聞くこと」、「何時も避難の練習をしておくこと」など反省点がたくさんでした。サイレンの音を高くして聞こえるようにしていただきたいと思います。油断はいつでもいけないこと、心を締めていなければと反省だらけでした。

2959-01 鵜住居町 男性 70歳代

- ・避難時の様子(鵜住居地区の詳細な様子)

大津波の3か月前に、市の木造住宅耐震補強工事助成事業で我が家の改修工事を終えていた。それでも11日の地震の地鳴りと揺れはいつもと違った。「必ず大きな津波が来る」と確信した。玄関の扉を半開きにして、ラジオ(サイレン付)を肩に持場の津波避難所(やまざきデイサービスセンター)に向かう。防災無線が「3mの津波が来る」との警報をもって「ブツッ」と鋭い音とともに切れた。

早々に避難所には近所の住人に混じって、鵜住居保育園の職員に導かれ、訓練どおりリヤカーに乗せられた園児が駆けこんでくる。続いて、浜登先生を先頭に患者たちがかばわれるように駆けこんできた。辺りは学校の子供を気遣う車で、往来が激しくなる。海の方を見ると、東中と鵜小の生徒がデイサービスホーム「ございしょの里」付近でうろうろしているのが見えた。長内川の近くでもあり、手持ちのサイレンを鳴らし、高台の津波避難所へジェスチャーで誘導した。小中学校の児童生徒が、兄弟のように手をつなぎながら列をなし、避難所に集合したが、最後尾が入った時には白霧の波間を破るように、黒い帯状の津波が迫ってきていた。避難誘導中の第六分団第一部の団員とともに、更に近くの山に登るように率先した。「木にすがって、皆しゃがんでろよ」と声がけしながら……。我が家の3人も同じように、更にバラ藪を払って駆け上がる。津波は生き物のように盛り上がり、建物を回し転がしながら「ギーギー」と息苦しい音を立て、押し潰しながら突き迫る。長内川を乗り越えた急流がJRのガード下を走り、更に勢いを増すように薬王堂前を押し進む。構造物を粉々にし、車はのたうちながら飲みこまれて行く。どこまで広がるのか。「なぜにこんなことに」と信じられない。まさに生き地獄である。

津波は高台の避難所までは来なかった。第1波の後、集まった人たちと救出劇が始まる。腰まで浸かって動くと沈む人はロープで引き上げ、歩行困難の人はおぶる。辺りはプロパンガスの臭い。火事がおっかないので「皆、タバコを吸うなよ」と声をかける。流されてきた屋根の上で助けを待ってい

る人には、畳や板を渡ししながら助ける。第2波では線路のレールが折れ曲がり、既にその時には大槌の山から黒煙が見える。箱崎半島はじめ、各避難所は全て孤立した。大人数を収容する所もない。連絡手段は消防無線のみとあって、旧釜石一中体育館に移動避難することになったのは夜になってしまった。幸いに三陸縦断自動車先行区間が3月4日に開通していたので、恋の峠から路肩をよじ登る。工事用道路から入った自家用車に分乗させてもらいながらも、多くは真暗い中、鳥谷坂トンネルを手探りでつたいながらの夜逃行であった。「どうして鵜住居の子は爪が黒いの」と不思議がられた所以である。冷えた体を新聞紙で暖をとり、体を寄せあって夜をあかした。たくましい子供たちである。

残留部隊は、鵜住居の要衝の避難所でもあるので死守することにする。夜明けとともに箱崎、白浜から山越えし、鵜住神社からもガレキをまたぎ山を下り、関所のように情報を交換しながら通りすぎる。食べ物は集め寄り、通行不能の保冷車から鮮魚をもらい、水は沢水で自活そのものであった。小雪の舞う中でも火を消すことなく、10日間の野営場の始まりとなった。以上

1578-01 鵜住居町 男性 60歳代

- ・避難時の様子（工作中、周辺の様子見、帰宅、流された）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき、反省）

自宅の近くの屋根工事をしていました。大きな地震の時、屋上には4人が働いていましたが、「すぐに仕事を止め、自宅に帰るように」と言い、皆を帰しました。私は近くの親戚の家の屋根の瓦が大分落ちたのを近所の人たちと眺めていると、「水だ」と言う声を聞きました。そこで、工事の設計図を取りに家に戻ると、津波に追いつけられ、自宅の2階の小さいタンスを窓から出し、それを台にして屋根に登り、やっと水から逃れました。周囲の家が、あつという間に流されて行くのを見て、恐ろしくなりました。「もしこの家が流され倒れたら、あの木まで泳いで行こう」と次の目標を決め、そのとおりにしました。倒れた家や、物の間を泳いで山まで行き、助かりました。

その晩は真っ暗で、窓も壊れた親戚の2階（1階の天井まで浸水）に泊めてもらいました。家族を捜すため、遠くまであっちこっちを歩き回りました。妻は無事でしたが、一緒に働いていた兄を亡くし、次の日から兄探しをしました。

私の家では、自宅と物置小屋、車庫、貸家1軒、この全てを流されましたが、家族は無事で3か月後には住んでいた所から遠い仮設に決まり、現在住んでいます。

自分の反省として助かったから良かったけれど、品物を取りに戻らない事。すぐ高台に逃げる事です。

1809-01 鵜住居町 女性 60歳代

- ・被災前の意識（片田先生の講演）
- ・避難時の様子（自宅、すぐ避難、避難呼び掛け）

一昨年、旧生活改善センターで片田教授の講演を聞いた者です。津波子ども避難の家の説明会をした時です。あの時、教授が「近い将来、必ず10m以上の大津波が襲ってくる」と何度も話をされました。「両石の堤防なんて何にもならないくらい大津波が襲ってくる」と何度も話をされました。「沖で5mと5mの波がぶつかったら10mになる」とも……あの場において話を聞いた人たちの約90%は、「そんな話は信じられない」と思ったはずです。私も「まさかァ」と思った方です。すみません。

本当に教授の話したとおりのことが起きました。今となっては手遅れですが、あの教授の話を聞いて、本当にそんな津波が来ると信じて動いていたら、あの場所にそのような防災センターを造ることはなかったのではないのでしょうか。とても残念なことになりました。教授は今、どんな思いをされているのでしょうか。あの日、あの時、今まで体験したことのないような大地震発生があった時、「大津波警報」が発表されて、私はすぐ片田教授の話を思い出して、避難場所へ行きました。避難する途中、近所の住人や工場に働きに来ていた人たちが大勢が右往左往しており、その人たちを集めて教授から聞いていた話のことを説明して、皆を誘導し、新しく開通した道路の橋の上へと上りました。

橋の上でラジオを聞いていたら、「釜石の町の中を車が流れて行きます」と放送がされていました。その数分後、根浜から長内川を遡って津波が襲ってきました。その後、川の岸辺から山の方に、ものすごい水煙のようなしぶきが上がりました。私は、信じられない光景をずっと見ていました。我が家の屋根の上に白い車が乗っているのが見えました。初めに赤い屋根の家が流され、次々とたくさんの家や車が流されて来て、浮かんだり沈んだりして、さっきまで自分たちのいた所がみるみるガレキの山となりました。その時、一緒に逃げて来た人たちが、目の前の出来事を見て、「あなたのお陰で助かった」と口々に言いました。「車に乗って帰ろうかな」とか「歩いて帰ろうかな」とか迷っていたそうです。数日後にも、数か月後にも、たくさんの人から感謝の言葉やお礼を言われました。今思うと、あの教授の話を聞いていて本当に良かったと思っています。ありがとうございました。

2158-02 鵜住居町 女性 60 歳代

- ・避難時の様子（外出先、津波想起せず、避難呼び掛け、屋内避難）
- ・被災後の様子（当日の避難所の様子）

あの日、私は偶然にも、主人と二人で大町の保健福祉センター（通称のぞみ病院）の 8 階に用事があって行っておりました。あんなに大きな地震なのに、私の頭には津波ということは全然浮かばなかったのです。ただ家に帰らなければということだけでした。

そして、私たちに第 2 の偶然が起きました。8 階から階段を降りて、いざ車の鍵と思ったら、主人が鍵を 8 階の机の上に置き忘れたことに気がきました。そのため、8 階まで人とすれ違いながら登っていき、鍵を見つけて、また階段を下がっていきました。ようやく車で降りてきたら、守衛さんに「行ったら駄目だ」と止められたおかげで、波に飲まれることもなく、のぞみ病院内に帰ることができました。私たちの帰ろうとした道路は、津波で家や車が流され、消防車の上にクロネコの車が乗っていたほど、すごい波の来た所でした。人が流されたり、家が流されたり、波に追いかけられたりした経験を実際に見ることはなかったので、恐怖心や不安も、家がどうなったかも、余り思わなかったことは、主人と一緒にいたためだったのかなと感謝しております。

その日からのぞみ病院 4 階の廊下が私たちの避難場所になり、避難生活が始まりました。避難所に指定されている所ではないので、毛布も食糧も乏しく、一枚の食パンを 4 人で分けあい、毛布も 2 人で 1 枚の毛布にくるまって寝る生活でした。しかし、別にお腹が空いたとか寒くて寝れないとか思わず、ただ電気、水がないということが、こんなに大変なことなのかと実感しました。

避難所生活は 5 日、弟の家に 5 日。その後、息子が来たので、7 月 30 日まで滝沢の息子たちの所で生活しました。その間、主人の兄妹たち、友達、私の兄妹たち、同級生、本当に皆の親切が身に染みました。それに付けても、世界中の人たちが日本のことをこんなにも支援してくれるなんて本当に感謝です。いろいろな地方からいろいろの方が支援に来てくださって感謝感謝、幾ら言っても足りないくらいだと思います。家もなくなり、今は仮設生活を送っております。これからは甘えすぎないようにガンバって行きたいと思っております。

0376-01 鵜住居町 男性 60 歳代

- ・被災前の意識（ここまで来ない）
- ・避難時の様子（自宅、片付け、避難呼び掛け、津波確認後避難、九死一生）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき、反省）

今まで経験したことのない大地震だったのに、自宅は海から 2 km くらい離れ、周辺の家屋よりも 2 m くらい高い所に位置し、絶対に津波が来る所ではないと、頭の中で太鼓判を押していた。近所の方々とも天災の話になると、「何かあったら、あんたの所に逃げるからよろしく頼むよ」、これが日常の会話でした。

外出先から帰った妻と、家の中で転倒した物品の整理、片付け中に「津波だ!」と大声で叫ぶ隣の若者の声で外に出たときは、遠方から家の屋根を越える高さの「水しぶき」なのか「煙なのか」これは何か大変な事態が起きたと実感。家の中で片付け中の妻に「長靴を履いて早く逃げろ」と叫び、足元に水が近づいて来たところを、近所の方々と隣接する山（高台）に避難し、助かりました。家は 1.8 m くらい浸水し、「中にいたら」と思うとぞっとしました。この出来事は「本当なのか? 夢でも、見ているのか」、しばらく現実を受け入れることが出来ず、ただただ茫然としていました。

津波が来襲中に体の不自由な老人、肉親を家に置いて自分だけ避難することができず、一緒に亡くなった方々が多くいます。津波の“一日前に戻れるなら”このような天災時、自力で避難できない老人や体の不自由な方は高台のいろいろな施設に入所させます。今までに経験したことのない天災の異常があったら、一刻も早く高い所へ指定の避難場所以外の所でもいいから逃げる。災害の状況が見える所が良い。家族とは待ちあわせる場所を事前に決めておく。「水が一番大切ということを実感」。飲料水だけは最低限非常持出品として備えておくこと。そして「絶対ありえない」と決め付けない。「あるかも、あるのだ、ある」。自分の考え方を变える。物事を予知する訓練が必要。

大地震→次は何が起こる→そのための行動、備えは→その行動は大丈夫か?→次に何かが起こるかも?→その時は。以上、私の反省です。

2425-01 鵜住居町 男性 50 歳代**・避難時の様子（外出先、津波想起せず、車帰宅）**

あの日、大槌町のマストの隣にあるガソリンスタンドへ行こうとしていましたが、本屋へ寄り、雑誌を見ていました。そこで大きな地震が起き、「表へ出て」と言われ外に出ると、大勢の人が不安げに様子を見ていました。「自宅が壊れたのでは」と心配になり、ガソリンを入れてからと思い、スタンドへ行きました。しかし、「停電のため入れられない」と言われ、仕方がないので自宅へ向いました。途中、片岸の車屋へ寄りましたが、道路を走る車はなく、まもなく家へ着き無事でした。川を見ているとギシギシと音がして、川下の方から家が流されて上って来ました。ここも流されるかと思ひまして不安でしたが、幸い自分の所は無事でした。

2536-01 鵜住居町 女性 40 歳代**・避難時の様子（保育園児の詳細な様子）**

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、どこかに掴まっていなくて立ってられないほどの大地震。保育園の子供たちはお昼寝から起きたばかりでパジャマ姿だった。「先生の側に集まって！ 大丈夫、怖くないからね」と園内放送するも、揺れは収まるどころか段々大きく激しく長く揺れていました。各部屋を回ってみると、子供たちは既に防災頭巾を被り、パジャマの上にジャンパーを着ていました。先生方の迅速な対応でした。そのうち停電になり、園庭も地割れしていたため、「これはただごとではない！」と思った。その時、「大津波警報が発令されました」と防災無線。でもサイレンが鳴るわけもなく、そんな中、「準備が出来たクラスから逃げてー！」と叫びました。“津波のときはバイパスローソン”と決めて、避難訓練（シークレット）をしていたので、皆泣かずに避難しました。避難車、おんぶ、赤ちゃん組も必死に……。

バイパスローソンや国道は、今まで見たこともないような車の数で大渋滞でした。ローソンでは余震が何度も起き、「ここからどうしよう」と思っていた時、町から走って逃げて来る人の群れ。ローソンは大丈夫と思っていたのに、誰もローソンには入らず、皆通り過ぎていく。すると「あれ？ 火事？」、ふと町の方を見ると水門付近が茶色い砂煙で変色していた。「あっ！ 電信柱が倒れてる！」よく見ると明らかにローソンと平行して高い電信柱がゆっくりとこちらに向かって倒れてくる。「ここもダメかもしれない！ 津波だ！」波は見えないが急に不安になり、「ここよりもっと高い所に行こう！」と子供たちを連れ、また更に高い古廟坂トンネル方面へ向かうことを指示。ローソンを出て歩道を必死で走っていると“ますとの湯”方向から津波が！ ゴ～！ バキバキバキ～！ 車や家屋を飲みこんだ津波が一気に流れこんできた。「先生～！ こわ～い！」一瞬で飲みこまれてしまうのではないかなと思うほどの勢いは、想像を絶するものだった。「この子たちを何とかして助けなきゃ！ 山に登る！」走りながらそう決断し、避難していた人たちに助けを求めた。国道沿いの急斜面を無我夢中でよじ登る。山頂を見上げるとかなり高い所まで人が登っていた。「あそこまで登らないとダメなの？」とにかく必死に上へ上へ。山頂から見た光景は、さっきまでいたローソン、保育園は既に津波に襲われ、園舎は屋根だけになっていた。

大槌の町は津波だけではなく、その後の火災で壊滅的な被害を受け、まるで戦場のようだった。今まで当たり前だったことが、一瞬にして当たり前ではなくなると誰が想像できたのでしょうか。朝まで一緒だった昨日まで話をしていた家族や友人、大切な大切な子供たちの命を奪って行ってしまった。悲しみは一生消えることはない……。

1404-01 鵜住居町 女性 60 歳代**・避難時の様子（外出先、津波想起せず、片付け、避難呼び掛け、避難、九死一生）**

あの日、鵜住居の娘の所に行き、間もなく地震があった。1 回は外に出たけれど、家の中で落した物の片付けなどをしていました。

津波の考えなど全然分からず、「逃げる」ということも頭になく、でも何回か外には出ました。しかし最後のあのものすごいゴーと鳴ってきた音と、山の方から「上れ、上れ」という声に気づき、娘に「津波ではないか」と言って、手をつなぎ、どこを走ったやら、バラや藪の中、ここでいいと思って、道路に上ったら足元まで水が来てびっくり。振り向いたら家も、車も、渦巻きになり流れていき、もう一步遅かったら命もなかった。そう思うと、生きた心地はしなかったです。

でも今は娘たち（孫たち）も、皆様の支援をいただき元気でいます。ありがとうございました。

2686-03 鵜住居町 男性 30歳代

- ・避難時の様子（仕事中、車帰宅、渋滞、避難、九死一生）
- ・被災の感想（反省）

地震時、仕事で配達中だったため、地震がおさまった後に、大槌の配達先から自宅のある鵜住居日向地区に車で大急ぎで戻った。道路は全て信号が止まっていたので渋滞だったが、何とか自宅に辿り着いた。家から、避難先の集会所に行った直後に、川を逆流して、津波が他の家を巻きこんで襲ってきた。

今思えば、自宅に戻るよりもすぐに高い所に避難していれば、もっと安全に逃げていれば良かったと思う。

1548-02 鵜住居町 30歳代

- ・避難時の様子（仕事中、家族の迎え、避難）

あの大きな地震後、職場から保育園に迎えに行き、鵜住居の中学校の子供と一緒に、栗林に避難しようと思っていました。中学校の子供たちが小学生の子供1人1人が手をつないで避難が終わり、点呼が終わり次第、解散ということで待っているときに、大きな津波に遭いました。もし早く解散していれば、子供2人と私の今はありません。子供のことで頭一杯で、信号も機能していないのに、子供2人と一緒に避難することができたことは奇跡だと思っています。

2687-11 鵜住居町

- ・避難時の様子（自宅、車避難）
- ・被災後の様子（当日の避難所の様子）

午前10時過ぎに日課である散歩から帰宅後、昼食を済ませ、テレビゲームを楽しんでいた最中に、地震の発生と同時にテレビの電源が切れた。即座に屋外に出て、家屋の揺れを確認した。「これはただごとではない」と、自分なりに大事だと判断して、避難準備（履物をシューズに替え、防寒着を着用）を整え、車で（家族3人）常楽寺駐車場へと行った。車から下車して状況を見ていたら、二本松ガソリンスタンド付近に、第一波が到来。凄い爆発音と同時に土煙（黄色というか土色）があがった。市の広報で、津波放送があったそうだが、聞き取ることはできなかった。常楽寺参道にも津波が入って来たのを見て、八幡神社を目掛けて一目散に登った。五葉寮の屋根より高い町が一望出来る場所で登ると、常楽寺前まで津波が既に到達していた。何て速いこと、ぼやぼやしていたら波に飲まれていたかもしれないと思い、ぞっとした。

津波に流された家屋の屋根の上で、助けを求め駆け回る人影、何と悲惨なことでしょう。津波の中で屋根の見える建物には鵜小、東中、郵便局、ポンプ場、防災センター、早崎歯科医院などだけであり、その他は水面下の様相であった。何たる有様でしょう。

夕方、寒さがますます厳しくなってきた。若い衆の活躍で、焚き火の準備も良く、たちまち良い火になり、何十人を寒さから守ってくれた。中には水に浸り、びしょ濡れの方が何人かいて、着ている着物を一枚一枚交互に乾かすなど、暖かくしていただいた。本当に若衆には、ありがたく感謝しています。民家での一夜、五葉寮の職員さんの活動、人数は把握していませんが、私たちは3人で毛布1枚、隣は4人で何もなくて足を寄せあって震えていました。寒かった。その中で職員さんたちに寝ずの番。何せ避難者は皆高齢者ぞろいなので、トイレが近い。その度に職員さんたちは闇の中、手を引いて用を足させ、お世話をしてくださいました。本当にご苦労様でした。一夜が明け避難所である栗林小学校へ移動した。

4.3 鵜住居地区 (1) 鵜住居地区 (鵜住居町第 1～19 地割)

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

3.3 鵜住居地区 (2) 根浜地区 (鵜住居町第 20～22 地割)

1) 補足調査における証言

(前川昭七さん、前川良子さん、古川サツさん、佐々木ナツさん、佐々木幸一さん、佐々木利子さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・住民同士で声がけしながら、それぞれ近くの高台に避難した。
- ・津波の騒音で、避難を呼びかける声が聞こえなかった。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・一度避難したが、物を取ろうと家に戻り、流された方もいた。
- ・他の住民に避難誘導の声がけをして、流された方もいた。
- ・避難訓練に参加しない人の多くが亡くなった。避難せず家の中にいた。
- ・過去の津波を経験した高齢者が亡くなった。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・東の沢周辺は地形的に海の状況を確認できる場所なので、海の様子を見ながら避難することができた。
- ・高齢者はチリ地震津波等の経験にとらわれてしまい、今回のような大きな津波は来ないという思い込みがあった。
- ・地震発生後、持ち船を心配し、海岸に下がった方もいた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・平成 15 年 1 月に自主防災組織を設置し、津波に対する様々な取り組みを実施した。
- ・震災の 5～6 年前から、避難訓練の際には一時避難場所へ避難していたものの、実際に避難する時は各自近くの高台へ逃げるということを徹底した。その後、避難場所へ集まるということを地域で取り決めていた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・非常用持出袋が各世帯に配布されていたが、持ち出す暇もなく流出してしまい、活用することができなかった。

C. その他

(1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)

- ・一度も聞こえなかった。記憶がない。

(2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など)

- ・水門：12 月から 3 月の冬季期間、大部分の水門はあらかじめ閉めている。水門は第 6 分団が管轄していたが、震度 4 以上の場合については町内会で自主的に閉鎖する場合もあった。
- ・津波でんでんこの言い伝えは知っており、てんでばらばらに高台に避難することを徹底した。
- ・片岸・箱崎方面等、多方向から跳ね返りの波が襲来したため、被害が大きくなった。

2) 地域懇談会における証言

前川昭七さん (根浜親交会長)

- ・地震が発生したときは箱崎にいた。その後、自宅に戻ってきて、近くの水門を閉めたり (15 時半頃) 船を比較的安全な場所に移動させたりしてから、所有している車を高台へ移動したりした。津波が来るまでに 15 分間ぐらいあるだろうし、ここまで移動すれば大丈夫だろうという高台も認識して被害軽減行動をしていた。そのため、地震から 15 分経った時点で、所有している車の 2 台のうち 1 台は高台へ移動できたが、2 台目は諦めて、避難をした。地域住民皆が集まっていると思われる指定避難場所へ移動する時には、既に津波が到達していて、津波が怖かったので、ふだんより大回りに安全な道を通って移動した。その後、指定避難所よりも高い安全な基地を目指して、再び移動した (16 時半頃)。

- ・墓地には 50 人ぐらい避難していた。
- ・避難の途中、動けないお年寄りがいたので、一緒にいた方たちとお年寄りを抱えて、藪の中を歩いた。
- ・震度 3 以上の地震が発生したら、津波が来ると思っている。そして、すぐに船を比較的安全な場所に移動させるようにしている。

前川良子 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。その後、周辺住民を民宿裏の畑に集めた。そのときに、すぐに高台への避難をせず何分か時間があつたときに、高齢の女性が自宅に戻ってしまい犠牲になってしまった。集まった畑からの見晴らしがよく、海の様子が確認できた。堤防を越えたのを見てから、一斉に指定避難所へ移動した。
- ・畑にいる時点で、赤ちゃんのいる方や車のある方は、できるだけ車にものを積みこんで、指定避難所に車を移動させた。助かったものの、もっと高い所に車を移動できたのに、指定避難所だからと安心をしていたので、より高い所に行こうと思わなかった。
- ・お父さんから「津波は 3 倍で来る」と聞いていたので、当日には「津波警報が 3 メートルと聞いたら、9 メートル来るぞ」と皆で話しあっていた。
- ・指定避難所はあつたが、そこは危険と認識していて、近場の高台（裏山）に上がると話しあっていた。

佐々木ナツ さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。津波警報が 3 メートルと聞いたが、自宅の海拔が 10 メートル程度だったので、大丈夫と思って安心して避難せずにいた。その後、友人からの避難の声がけがあつて、指定避難場所まで移動した。自宅まで 20～30 メートルしかなく、避難しやすい場所だった。

佐々木虎男 さん

- ・地震が発生したときは鵜住居の高速道路あたりにいた。その後、車で自宅に帰った。妻が自宅にいたので、すぐに避難するように促した。そして、自身も避難しようと車に乗りこんだが、山を上がって行く道が地震で塞がれているかもしれないと思い、宝来館に向かった。宝来館は海拔 10 メートルぐらいで高いので、宝来館前に移動して、車を停めてしばらく海の様子を見ていた。浜辺近くに小島があるのだが、そこまで歩いて行けるぐらい海が引いていた。津波が押し寄せてきたのが見えたので、避難を促すために宝来館の中に入って、半鐘を叩きながら海の様子を見ていたのだが、第 1 波が 5 メートルの防潮堤を越えてしまったのが見えた。さらに、第 2 波が重なりあいどんどん高くなっていくのが見えたので、宝来館 4 階まで上がった。片岸側から来た波と箱崎側から来た波とが重なって高くなっているのが見えていなかったら、逃げ遅れていた。最初から一番高い所に上がっておくべきだと思った。
- ・震災前の 5 年ぐらい前から、比較的平地が続いている地区（第 20 地割）では、指定避難所が遠いので、近くの裏山に駆け上がると決めていた。

佐々木雄治 さん

- ・地震が発生したときは出張で盛岡市にいた。
- ・昭和 8 年当時、父方の家が津波で流されて被害が大きかったので、その津波で浸水しなかった場所に家を建てた。その引っ越した後に、チリ津波が襲来したが、2 階に上がれば安全を確保できていた。
- ・根浜の方たちは、海の状態を見ながら、高い所高い所へ移動する、「海を見ることが重要」と認識していた。
- ・「津波は第 1 波で引くわけではない」、「第 1 波が襲来して引ききる前に第 2 波が襲来した」という状況であった。過去の被災と同じ状況とは限らないことが分かった。
- ・想定外のものが来るかもしれないという前提を持って、高い所に逃げて様子を見て何ともなかったから下りてくればよいという考えを持つべき。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

1816-02 鵜住居町 女性 20 歳代

- ・被災前の意識 (先人からの伝承、ここまで来ない)
- ・避難時の様子 (外出先、車帰宅、避難呼び掛け、避難、九死一生)
- ・被災後の様子 (当日の避難所の様子)

私の家は根浜で、海も近く、それでも「家周辺の土地は高くなっているので大丈夫だ」と聞いていました。交通量も少なく、自然の中で子どもたちの環境はとっても良かったと思います。

震災当日、鵜住居幼稚園は午前保育に入っていて、お友達と午後 2 時頃から鵜住居保育園のセンターの方で遊んでいました。そこにすごい揺れの地震が襲いました。泣いて怖がる子どもたちをなだめながら、「これはヤバイんじゃないか……」と思いました。揺れが少しおさまったところで、先生たちに「急いで家に帰った方が良い。津波が来るかもしれないよ」と言われ、私は子どもたちを車に乗せて、自宅に向かいました(今思えば、海の方に向かったのですから、恐ろしい)。

近所のおばあちゃんたちも「家の中がめちゃくちゃだから」と外に出ていました。そこへお父さんが来たので、少し安心しました。お父さんは「おばあちゃんを見てくるから」と車で家まで行きました。でも、すぐ戻ってきました。そこに見知らぬ男の人が「津波だ!」と叫んで、近くの高台へ走っていきました。私たちも慌てて、高台へ移動しました。海岸の方を見ると、岸壁の上を越えたのが分かりました。どんどん波が奥まで上がってきたのを見て、山に登りました。子どもたちやお父さんも先に山に登っていたので、あとは自分……と思いました。まだ近所のおばあちゃんたちが登っていませんでした。満ちてくる波をただ見ている、声が聞こえていないようなので、「山に登りましょう!」と叫びました。そして私が山に登り、おばあちゃんたちが動き出した瞬間、おばあちゃんたちは津波にさらわれてしまいました。

お父さんが戻ってきてくれて、波にはまって動けなくなっている 2 人の女性を助け、できる限り山の上に登りました。不気味に静か。サイレンの音も何も聞こえず、ただ「バキバキ……ドカーン」と音が聞こえてきました。私は「大変な事になった……」と思いました。そして、集落の生き残りの人たちが山の中の基地に集まり、暖を取りました。雪が降ってとっても寒く、食べ物もなかった中、誰かが子どもたちに、海苔と牛乳をくれました。「お腹が減った～」という子たちを「今日は我慢してね」となだめ寝かしつけましたが、一晩、いろんなことが頭の中を巡り巡り、外からの爆発の様な音も気になって、自分は眠れませんでした。次の朝、変わり果てた根浜を見て息が止まりました。泥で滑る道を歩いて、宝来館まで避難しました。不安な気持ちで一杯になりました。(皆生きているのか、これからの事……)

4.3 鵜住居地区 (2) 根浜地区 (鵜住居町第 20～22 地割)

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.3 鵜住居地区 (3) 両石地区 (両石町第1～3地割)

1) 補足調査における証言

(瀬戸元さん、洞博夫さん、久保秀悦さん、荒井芙美子さん、松本ミサヲさん、澤口節子さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・消防団は屯所に参集し、それぞれ率先避難をした。
- ・町内会役員の男性は、旧両石保育園で要援護者を軽トラックに乗せ、搬送救護した。
- ・町内会長が5名の要援護者を見守った時には、造成2号地の実家へ避難する準備ができている方や、指定避難場所であるあさひ公園への避難が済んでいた。
- ・町内会長が漁村センターへ向かう途中、四軒町地区の主婦数名と会った際に、海が動いたため津波が来ることを伝え、同町の避難場所である千島墓地前広場への避難を誘導した。
- ・あさひ公園から駐車場へ戻り車を移動しようとした方で、戻るなど喝を入れられ、一命を取り留めた方もいた。
- ・町内会長があさひ公園へ出向き、自主防災用の大型ハンドスピーカーで津波襲来の様子を住民に伝え、早急に避難するよう呼びかけた。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・避難行動をせずに亡くなった方が22名で、最も多かった。次いで、避難途中で犠牲になった方が12名であった。避難先で犠牲になった方が6名(内5名は2号地にある実家や親戚のもとへ避難し、犠牲となった。他1名については鵜住居地区防災センターへ避難して犠牲となった)であった。大津波警報3m以上という防災無線の情報を信じて、避難場所から駐車場へ戻って車で移動したり、会社や所用先から自宅へ戻るなどの行動をとり、犠牲になった方が5名であった。
- ・「避難後、絶対に戻ってはいけない」という先人の教訓を守らなかったことが逃げ遅れた原因として挙げられる。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・大津波警報3m以上(くらい)との防災放送により、過去の津波のことから命の危険性はないと判断し逃げ遅れた方は数名いたものの、近所の呼びかけや率先避難により地震発生後、25分前には99%避難した。
- ・明治・昭和三陸大津波後に造成された場所(2号地から4号地まで)の住民は自宅が高台にあるため、津波を甘く見ていた部分があった。また、国道沿いや海岸付近の住民のうち約30名が2号地にある実家や親戚のもとへ避難し、犠牲となった。
- ・第1波が想定内の規模であったことにより、第2波以降の津波に対する油断があった。
- ・漁村センターから海岸付近までの地域は迅速に避難したが、センターの上にある地域はしばらく避難しなかった。
- ・町内会では避難訓練を通じて、命てんでんこにおける率先避難及び早期避難の重要性を伝えてきたため、多くの住民が危機感を持ち、率先して避難に徹することができた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・平成22年12月に自主防災組織を設置した。
- ・市が実施する津波避難訓練への参加率は20%前後であったが、平成23年3月3日の避難訓練は早朝であること、また避難訓練の機運が高まっていたもあり、99名もの住民が参加した。ただし、高校生以下の参加率が低かった。
- ・敬老会、明治三陸大津波100回忌慰霊式典等を実施することで、先人の教訓や津波避難の重要性を学び、率先避難・早期避難に徹するという避難意識の醸成を図ってきた。また、「両石の津波を語る会」を発足させ、地区の小・中学校の防災学習に寄与してきた。
- ・軽トラックを利用した救助作戦「15分ルール」の取り決めに計画しており、大震災が発生する1か月前の2月に回覧板による周知を行った。そして、3月11日には要援護者を救護避難したが、残念ながら5名の方が犠牲になってしまった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・あらゆるものが流出したことにより、物理的な「備え」は役に立たなかった。しかし、地震後の避難率が高いことから、これまでの啓蒙活動は役に立った。また、今後の課題として、集落が壊滅状態にもかかわらず、至急の支援がなく孤立した。

C. その他

(1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)

- ・放送していたことは理解できたものの、災害時に周囲の騒音に消されたり、走り回っていて内容が分からないことがあった。また、パニック状態から屋内では聞こえないことがあった。
- ・巨大津波が襲来しているときに3 mから6 mへ情報の訂正があり、迷惑だった。車のラジオで情報を知った方が多かった。

(2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など)

- ・消防団は午後3時前に防潮堤の閉門を完了した。また、今後の課題として、消防団にかかわらず、住民が対応できるような操作研修の必要性が挙げられる。
- ・地域で言い伝えられてきた命てんでんこの教えを守り、率先して避難するように心がけた。
- ・車で避難しようとした方は犠牲になり、車で避難しなかった方が助かる傾向にあった。
- ・厳島神社では年2回菓子を配る慣習があり、たまたま食糧の備蓄があった。
- ・第1波は自動車整備工場付近まで襲来し、その後は高架橋の下まで到達した。

2) 地域懇談会における証言

阿部弘 さん

- ・地震が発生したとき自宅にいて、すぐに避難した。海拔20 mくらいの所にある5 mの石垣の半分までの高さ津波が来ていた。

澤口介洋 さん

- ・地震が発生したとき自宅にいて、すぐに避難した。

荒井英美子 さん

- ・地震が発生したとき自宅にいて、すぐに避難した。

瀬戸元 さん

- ・震災前の指定避難場所は、旧両石保育園、あさひ公園、月読神社、千島墓地前広場の4箇所
- ・両石には、明治・昭和三陸津波を受けて、昭和10年に造成された高台があるが、第1波は到達しなかったが、第2波で到達してしまった。その高台で流された方が多かった。山の影で海が見えなかったことも被害が出てしまった要因だと思う。
- ・避難路があったので、両石駅に上がった方もいた。避難路の整備しているのは重要で、整備をしていない神社では、足腰の悪い方が上がれないこともあった。
- ・毎年の避難訓練には、町内の600名くらいのうち150名くらいが参加していた。
- ・漁業関係者には、漁業組合の支所に皆集まって、養殖の施設が流されてきたので、沖出しを諦めて避難した。
- ・防災無線の3 mの津波高の情報を信じて、判断が鈍った。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

0923-01 鵜住居町 女性 70歳代

- ・避難時の様子 (自宅、ここまで来ない、避難先から帰宅、避難呼び掛け、九死一生)
- ・被災の感想 (家族が被災)

私の家は両石町の中心地の高台にありました。昭和三陸津波の時に移住した高台に建てられた所だと聞いています。3月11日午後2時46分から、この世の中は変わってしまいました。

あの日あの時の大地震発生から、まさかの夢を見ているような日でした。1回目の地震の後、釜石の放送ははっきり聞こえず、その間に低地に住んでいるお年寄りや体の不自由な方たちが車で隣近所に避難してきました。また空き地には自家用車が次々と避難してきたため、私は水が止まると思い、水用ポリ缶2缶と大きなやかん、そして風呂にも水を溜めて用意した。2回目の地震の強さで外に出て低地の方に目を向けたら、大きなイカ釣り舟が横になって押し流され、また家とか屋根が押し流されている様子を見てびっくりした。家の中にいた夫を呼び、二人で15mくらいの登り坂の所まで行ってみた。その時なぜか逃げるということは頭に浮かびませんでした。「今の情景をカメラにおさめておこう」と家に帰ろうかと思った。夫に聞くと、「昭和の津波にはここまで来ていないから大丈夫」と言うので、私はカメラを取りに走り始めた。

そのとき、男の人が「津波が来たぞー」と叫んで、上へと走って行った。それを聞いて、私は玄関の所まで行き、入口でカバンと上着だけ持って戸を閉めようとしたが、その時には、もう波が見えた。坂なので言うように道幅一杯もくもくと見え、夫の姿は見えず、私は「ごめん」と言って、波に追われ高い山の方へと走り逃げ、登っても走っても波は足下まで来て、もう駄目かと思った。でも、助かるかと思い、最後の力を振り絞って急な坂道を山へと走った(つもり)。

もう力もなく、気力もなく、心臓はドキドキ、膝はガクガク、息はハーハー、もう動けない状態で急斜の山へ登り5mくらいの所で伏せて動けなかった。津波は山の1mくらいまで登って来た。海面から見ると20mくらいは越えたと思った。家も2階の屋根を越え、隣近所の段々と立っている両側20軒余りが土台だけ残して全部流され、また山のふもとには軽自動車が2段重ねになって波に押されてきました。町全体がガレキの山。1軒も残らず、きれいに町全体が見回せ明るく広く、この光景は何だろうと、あの一瞬の出来事が夢と現実の区別がつかず、ただ果然と元の家の屋根の前に立ちすくむ有様でした。

その時は夕暮れ時だったと思います。寒さを感じなく、また夫もいない。今晩はどうしようかと思ひ、寂しく家の跡地の前に立ちすくみ、頭の中は真っ白、何も浮かんできませんでした。しばらくしてから、その晩は高台にある神社で泊まることとし、そこへ向かって歩き始めた。ガレキの山を越えながら、一步一步釘を踏まないよう気をつけながら神社へと登った。登り付いた時はもう暗く、でも焚火の灯りを見てほっとした。そこには30～40人くらいの人たちが避難していました。

いつもの地震だったら、いち早く高台に行くのに、なぜ今回はそれができなかったのか、不思議なくらい悔しい思いをしました。夫は2回目の津波で流されたようです。いまだに行方不明です。どこにいるのか、寒さが厳しくなるのに、今も「もしや」と思う日々です。

0097-01 鵜住居町 男性 80歳代

- ・被災前の意識(津波経験者)
- ・避難時の様子(自宅、避難)
- ・被災の感想(ここまで来ない、湾口防安心)

地震発生時、在宅であったことが幸いしたと思う。もし不在であったら、高台にあった我が家の前庭に避難してきた近隣の3人と共に歩行力の弱い妻は、おそらく「予想」を超える津波から避難しなかったであろう。当日は、1933年昭和津波によって家屋全壊の被災経験者である私は、それ以上の高波の来襲を考えず、山道を歩いて裏山(高台)に一行を導いた。身の安全を確保したら、そこから低地の集落の津波を目視する算段であった。結果は、3波、4波と足下まで来襲した高波に息をのんだ。

私は上衣を着ないでオーバーを羽織り、裏山へ登るので、妻にはズック靴を履かせただけの軽装で避難してしまった。「我が家まで津波は来ない」、防波堤、防潮堤への過信があった。もし、前日に想定が可能であったなら、次のことを用意したであろう。①防寒の服装、山中避難用の寝具(老弱の妻用→2日後救急入院)、マッチ、ロウソク、預貯金証書、健康保険証、ライター、袋、避難食料②携帯(津波前所持していなかった)

日本の大津波の予知機能の低弱を素直に認識することが、今回の最大の教訓。日本列島は別名地震列島、津波列島。500年、1,000年後に責任のない復旧対策を国も地方も講じようとしていることを知るべきである。少なくとも、防波堤、防潮堤、生活団地は3.11の水位を基準にすること。津波防備施設、津波に耐える沿岸自治体づくりが21世紀の課題。想定しないで「想定外」とうそぶく言葉は二度と使わせてはならない。

2265-01 鵜住居町 男性 70歳代

- ・避難時の様子(自宅、すぐ避難)
- ・被災時の様子(津波襲来時の様子)

あの日は今年初めての養殖若布を沖に行って取って来ました。午前10時頃、妻と2人で海岸で塩造しました。「これから1か月頑張るぞー」と思い、作業を終え、家に帰って、お昼を食べ、少し休んでいたところへ、強い地震を感じました。「これはただならぬ事態が起こる」ことを感じ、すぐ高台に上りました。高台から海の様子を見たら、もう海の水が沖まで引いていて、それから間もなくして、黒々とした高い波が押し寄せて来ました。自分の船も2隻ともすぐ波に飲まれ、また自分の家も私の目の前でみるみるうちに、波に連れていかれました。声も涙も出ません。これは何なのか、余りの津波のすごさ、一瞬にして船も、町も、なくなりました。おまけに、人の命も何十人も飲んでいった。私が見ているだけで、大きな津波は6回も押し寄せました。

77歳にもなったし、これからはゆっくりと余生を過ごしたいと考えている矢先の出来事、本当に夢ではないかと信じられませんでした。でも何とか、月日が経つにつれ、どうにか国や県、皆様全国の皆様にいろいろ支えられて、頑張っていくという気になってまいりました。77歳まで生きて、今回のような出来事に遭うなんて、全く想像もしなかったことです。全国の皆様に、何よりありがとうの言葉を伝えたいです。これからも頑張って、元気で皆様のお世話になりながら生きていきたいと思います。

2753-02 鵜住居町 女性 50歳代

- ・避難時の様子(自宅、避難呼び掛け、避難)

地震発生時、自宅にいた。病院から帰宅したばかりで疲れてぼーとしていた時だった。外からゴゴゴッと岩がぶつかる音が聞こえてきたが、家は岩盤の上に建っているので、揺れはそれほどではなかった。

主人から14時50分に「地震、津波が来るから逃げろー!」と電話があり、外に出てみたら、立ってられないほどの揺れだった。親戚のおばあさんを連れて高台に避難した。途中、海の方を見たら、海面が恐ろしく高い高く迫ってきた。腰が砕けるほど恐かった。高台から海を見ていたとき、道路に自動車は何台も続いているのが見えた。その時、津波が車を飲みこんだのを見た。すごく近くに見えたような気がした。あの光景が今も夢に出てくる。辛いです。

防災無線放送で、「津波の高さ、3mくらい」と放送されたが、海の近くは通行止めにするべきだったと思う。

3552-02 鵜住居町 女性 60歳代

- ・避難時の様子(仕事、避難、家族の迎え、車避難)
- ・被災の感想(戻ってはいけない)

地震発生時、職場である○郵便局に、いつも一緒にの代行者と二人でいました。異常なまでの大きな地震の揺れに、二人同時に「避難しましょう」と声を上げ、代行者は局の近くの○駅(高台)へ避難しました。私は一瞬、局から3分ほどの所にある自宅へ、大事なものを取りに行こうと5、6歩歩きかけましたが、それよりも孫の方が先と思い、車で隣の鵜住居保育園へ急ぎました。保育園に着くと、先生方は、子供たちをいち早く避難場所へ誘導しており、最後に3歳の孫が先生に手を引かれて出てきました。受け取った孫を車に乗せ、また両石方面に向かいましたが、自宅には戻らず、両石と鵜住居の境にある恋の峠に車を止めて、孫と二人、シーンと静まり返った峠に不安な気持ちで避難していました。余りの静けさに両石に戻ろうか、どうしようかと車を前進させたり、また戻っては「ダメ、ダメ」という何かに抑えられ、そこに残りました。その時間10分から15分くらいだったと思います。

すると間もなく、恋の峠の下にある避難場所に避難していた保育園、小学校、中学校の子供たちが必死に恋の峠に駆け上がってきました。津波が、保育園も小学校も中学校も飲みこんでしまったのです。根浜・片岸からの津波が、鵜住居の町をおもちゃを壊すように破壊していきました。ただ恐ろしく、涙も出ませんでした。私の生まれ育った両石は、峠からは見ることはできなかったのですが、海の近い両石は一溜まりもなかったようです。後から、もしも両石に戻っていたら私と孫はきっと助からなかっただろうと思いました。生きていることに感謝です。家族一人も欠けることなく、全員3月11日の6時近く、恋の峠で会うことができ、皆抱きあい無事を喜びました。

今回の津波で感じたことは、まず最初、自宅に大事なものを取りに行こうと思ったけど、たぶん大事なものを1つ2つだけ持ち出すつもりが、あれもこれもと持ち出そうと時間がかかったかも知れないので、「自宅に戻らなくてよかった」ということと、「恋の峠から両石に(下りることになる)戻ら

なくて正解だった」ということです。やはり、高い所に避難すべきです。津波はまだ来ないだろうと、自宅や職場に出たり、入ったり、戻るとは絶対しないことです。3月11日から、9か月になりますが、あの津波直後の辛さ、不安、たくさんの方が、私達にますますのしかかってきています。早く津波前の生活ができることを願って、日々努力しています。震災に遭った人々、皆幸せになりますように。

3552-01 鶴住居町 男性 70歳代

- ・避難時の様子(工作中、避難誘導、経済被害経験、ここまで来ない、とりあえず避難)
- ・被災時の様子(周辺住民の様子)

私は自営業(大手誘致企業の下請け)を営んでおり、大槌町と釜石市両石町に小さな工場を持っています。当日は、両石工場で機械の調整をしていました。大きな地震があり、積んであった荷が崩れ、またすぐ二度目の大きな地震がありました。間もなく大津波警報が放送され、従業員を高台にある両石駅に避難させました。運転手も避難してしまったので、二台あった会社の車を私が少し小高い場所にあった私の自宅まで移動させました。この間に「3mの津波が来る」と放送されたのを記憶しています。「両石港の防波堤は10m近くあるので、大丈夫だろう」と思ったが、万一に備えて指定の朝日公園に登りました。途中デジカメを取りに自宅に戻りましたが、「3mの津波」と言うので、警報解除になれば自宅に戻れると思い、何も持ち出さず、作業着のまま、避難場所に行きました(これが災いし、被災後に体育館の避難所で寒さのため一睡もできなかった)。

避難場所の朝日公園に着いたのは遅い方だったのではないかと思います。町内会長が「津波の第一波が来ました」と上の方で叫んでいました。隣の主人と「歳をとると坂道を上るのが大変だ」と話しながら登りました。この方は、津波がおさまったあと、脇を見たらいない。どこに行ったのかなと思っていたが、とうとう現れず、自宅に戻って津波に流されたようです。公園で見ていると、海が大きく膨れ上がり、防波堤を乗り越えてどんどん高台の方に迫り、自宅も1階、2階と見る間に水没。屋根が見えていたが引き波で持って行かれ、防波堤が10mの落差の大きな滝となり、水に浮いていた全てを破壊していった。余りのすさまじさにデジカメのシャッターも押せず、呆然と眺めていた。

海水が去った午後4時過ぎ、それぞれの仕事で別々の場所にいた家族を捜して、恋の峠の方に歩いた。峠の空き地で避難していた人たちの中に家族全員無事でいたのを見つけ、抱きあって喜んだ。大槌町の工場、両石町の工場二つとも全部流出しましたが、津波警報発令と同時に全従業員を避難させたので、皆無事でした。

2351-11 両石町 60歳代

- ・避難時の様子(自宅、3m安心、家族の様子見、とりあえず避難)
- ・被災の感想(今後の生活不安)

私には何も残してはくれなかった。津波が全部、私の幸せも持って行ってしまいました。元々大して大きな幸せではなかったのかもしれませんが、でも、辛うじてつながっていた糸が切られてしまった様です。

今度の大地震と大津波はふだんからよく「今度地震が来ると大きいよ」という話は聞いていました。揺れも今まで経験したことがないほど、大きかった。一週間前に避難訓練をしたばかりだったから、逃げることはもちろん頭にありました。だけど最初「3mほどの津波」という放送があり、「じゃあ、大きくても、また戻って来れるから、とりあえず大事な物だけ」という軽い気持ちで避難することにして、自宅より海に近い所にある親戚のおばさんを連れて、高台にある別の親戚に行きました。その後、私は高台の公園に海を見に行ったら、その時はもう沖から波が寄せて来るのが見えました。「寄せる」というより「盛り上がり」と言った方がよいかもしれません。あれよあれよという間に堤防がどこだったか分からないくらいに盛り上がりました。もの凄い恐怖で涙が流れてました。その後も、波は次から次と今まであんなに高い堤防と思ってたのが嘘みたいに越えて、町の中にどんどん入って行きました。本当に次から次へと。自宅を振り返ったらない。もうどこかに流されてしまったのか見当たらなかった。本当にどこを見ても影も形もない。こんなことが実際にあるのだろうか。「夢ならどうか早く覚めて」とって何度思ったことか。

自宅も思い出も流されてしまうのは、大津波ですからしょうがないです。誰が悪いと言うことではありません。だけど人はそれだけでは終わらないのです。どんなに頑張っても、人に認めてもらえないって人生はすごく悲しいことですね。今まではどんなことがあろうと、これが自分の人生だって思い頑張ってきたんです。だけど今になって今までの糸が切れてしまったみたいに毎日が不安で、だけどそれを他人に見せるわけにはいけないので、逆に明るく人と接してきました。しかし、それはそれで見る人にとっては変に見えるとか見えなかったとか。震災に遭って今まで見えなかった他人の

4.3 鵜住居地区 (3) 両石地区 (両石町第1～3地割)

部分が見えたりもしました。やっぱり震災は悪魔です。津波そのものより、これからの過ごし方というか生き方が最悪かもしれません。それを乗り越えて行くには余程の心構えが必要かもしれません。私自身もっと強くなりたいと思っています。それにしても一日も早い復興を祈って毎日暮らしている私たちをどうか忘れないで下さい。

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.3 鵜住居地区 (4) 水海地区 (両石町第4地割)

1) 補足調査における証言

(福浦正一さん、坂下幸吉さん、川畑光正さん、川畑政吉さん、沼内繁さん、蛸名力チ子さん、小澤スイさん、星野牧子さん、小深田今朝男さん、沼内迪子さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・住民が各自で避難した。高台へ車で避難していた一部の住民が、徒歩避難者を同乗させて、避難した。それぞれが避難するのに精一杯であった。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・人的被害はなかった。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・地震発生後、速やかに両石インターの高台方面へ避難する住民もいた。地震後、数人で集まり、様子を見ていた方もいた。多数の住民は、屋外で水海川を遡上する津波を見て、それから各自で高台に率先避難した。避難の途中、津波で足が浸された方等はいなかった。
- ・地域の指定避難所は、海岸の水海公園の高台にあり、海水浴客等を主に対象としていた。集落の住家付近に指定避難場所がないため、近くの高台や女遊部方面へ車で避難した方もいた。
- ・地域にある事業者は、地震後の比較的早い時間に、工事中の三陸道路の高台等に車で避難した。
- ・各自、一時的に裏山や高台等に避難した後、女遊部の集会所や被災を免れた住家等に集まった。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・津波が襲来するという意識もなく、避難場所も決まっていなかったため、3月3日の避難訓練には参加していなかった。御在所沢の上流を避難場所として指定するように、これまで市とも協議した経緯があった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

C. その他

(1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)

- ・「3 m」という波高の情報は聞いたが、その後は記憶にない。

(2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など)

- ・明治の津波の際に、地域に住家が約 100 戸あった中で僅かしか助からなかったという話を先祖から聞いたことがあった。
- ・過去の津波は、この地域まで上がって来たことは聞いたことがある。ただし、防潮堤のほか、国道、鉄道等の盛土があることから、まさか津波がここまで来るとは思わなかった。来たとしても、川をチョロチョロ上がってくる程度だと思っていた。

2) 地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.3 鵜住居地区 (5) 片岸地区 (片岸町第 1～9 地割)

1) 補足調査における証言

(山崎長也さん、干場俊夫さん、柏崎龍太郎さん、山崎元市さん、紺野光夫さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・消防団は水門、スライド式ゲート 3 か所を閉鎖後、消防ポンプ車で周辺に避難を呼びかけた。その後、危険が迫ってきたため、道地沢団地に避難した。
- ・地域で組織的な避難誘導の実践はなかったが、住民同士が互いに声をかけあい、国道 45 号の通行者、周辺企業の従業員にも避難を促し、人命救助を行った。
- ・避難先の高台から津波の襲来が視認できたため、下の車列に急いで避難するように呼びかけたが、声が届かなかった。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・障がい者の介護のため、一旦自宅に戻り、避難が遅れた。
- ・買い物や用事のために出かけ、車で帰る途中で津波に流された。
- ・外出先から避難する際に指定避難所に直行せず、自宅に立ち寄って逃げ遅れた。
- ・家の中に留まっていたり、2 階へ避難して流された。
- ・避難場所から一旦自宅に戻ったため、逃げ遅れた。
- ・津波の状況確認のため、海岸に出かけた。
- ・指定避難所以外の場所に避難し、そこが浸水したため犠牲となった。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・地震直後、多くの方が指定避難場所へ避難した。津波浸水直前に危険を予知し、更に高台に移動した。
- ・車で避難した方もおり、犠牲になった方が多かった。
- ・迅速に避難した徒歩避難者の多くは、夕方には帰宅できるという思いがあったため、非常持出品の携行も少なく、着の身着のままで避難した。
- ・自動車学校の受講者や周辺企業の従業員は避難先を熟知していなかったように思われる。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・平成 16 年 4 月に自主防災組織を設置した。あらかじめ役割分担を明確にした組織体制が構築されていたが、地域独自の実践的な訓練は実施していなかった。
- ・市の実施による定例的な避難訓練には積極的に協力し、参加した。
- ・県のモデル防災会に指定された際には、防災マップ作成ばかりでなく総合的な研修を実施した。
- ・避難訓練時には、指定避難所ごとに集合し、話しあいの機会になった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・非常持出品の準備は充分でなかった。
- ・海で作業していた方にとって、堤防のソーラーは波が上下する度に点灯するので、便利だった。
- ・今後はトランシーバーやハンドマイクなどの備品が検討されるべきである。

C. その他

(1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)

- ・大津波警報の数値をかさ上げた後の放送は道地沢団地周辺が聞いていたが、その時に既に 10m 近くの津波が襲来し、集落全体がプール状態になっていた。
- ・消防車の鳴らすサイレンと重なり、防災無線が聞こえづらい場面もあった。
- ・初期の段階で無線の非常用バッテリーも含めて使用不能となった。

(2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の開鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など)

- ・各一時避難場所への避難者は、大槌町の山林火災の延焼危機にさらされることとなり、退避の呼びかけが始まった。町内会と消防団で調整し、上栗林集会所の使用が可能と判明したため、13 日夜、上栗林集会所に移動を開始し、自宅避難者にも退避を促した。当初、30 名ほどの移動が考えられたが、最

大ピーク時には 70 世帯、153 名が第 2 次避難所で避難生活を送ることとなった。これを契機に市内外の親戚へ避難することを選択する家族も増え、片岸町内の半数が上栗林集会所に入る結果となった。

- ・ 3 月 12 日から生存者の捜索が地元消防団の手で始まった。未使用の道地沢団地の建物に遺体安置所を設け、計 5 体を収容した。消防団屯所は流出し、機材も消失している状況下で、山火事対策にも参画するという困難な活動であった。

2) 地域懇談会における証言

柏崎龍太郎 さん

- ・ 地震が発生したときは自宅にいて、貴重品を持ってすぐに館稲荷神社に逃げた。
- ・ これまでの津波（昭和三陸津波やチリ津波）で、堤防の決壊場所が同じで、その都度高くしていたのだが、そこだけに注意していた。震災当時には 6.4m の高さの堤防に仕上がっていて、過去の記録の残っている津波は 5.4m と聞いていたので、安心してた。さらに、津波警報で 3m という情報で安心しきっていた。高い津波が来たことも想定外であったが、決壊する場所も想定外の場所が決壊した。第 3 波で決壊し、第 3 波、第 4 波と押し寄せるたびにドンドン水位が上がった。
- ・ 避難誘導や通行車両を制止するような消防団といった人がいない時間帯（高齢者しかいない時間帯）であった。
- ・ 震災前から、片岸地区では 5 箇所の避難場所があった。海が見える避難場所では、海から津波が来るのが見えただけ戻った方はいなかったが、海が見えない避難場所では「まだ来ないだろう」と思い戻った方が何人もいた。
- ・ 自宅にいなかった方、外出先から自宅に戻ったために犠牲になってしまったという話をよく聞いた。
- ・ 災害時要援護者の避難支援の仕組みをつくることができれば、人がいるという観点からすると夜は大丈夫だ。
- ・ 明治 29 年と比べて、高い頑丈な堤防が整備されているなど防災体制が大きく異なるため、津波てんでんこの扱いが難しい。

山崎長栄 さん

- ・ 妻は避難していながら、まだ時間があつた私の薬を忘れてしまっていたため、取りに行ってしまった。そのとき、津波第 1 波が来ているのが見えて、国道 45 号で自動車がどんどん下に下っていくのを制止しようとしたが、無視されてしまったが、バスが停まってくれたから、そのあとに続く車も停まることとなったので、被害を小さくできた。
- ・ 何人かには避難行動を事前に説明していたが、最初から稲荷神社に避難していた方は少なかった。
- ・ 水門に亀裂が入っていたのを知っていて注意喚起していたのだが、対処できずに震災を迎えてしまった。そして、津波でそこがやられてしまったので、柏崎龍太郎さんの発言にある想定外の場所であったのだと思う。厚さ 4 cm ぐらいの鉄板を曲げるほどの威力だった。
- ・ 片岸の消防団は地区の 3 か所の水門を閉めることもしなければならなかったが、ほかの場所に人員を割かなければならなかったり、昼間のため人員が余りいなかったりした。避難誘導や通行車両の通行制限は、警察が行うべきだと思う。
- ・ 浸水はしなかったものの、近くまで津波が迫った場所だったので、3.11 後、場所をより高い場所に変更した。
- ・ 震災以前に指定されていた避難場所のうち、階段が急すぎて避難場所として不適切と思い、そういった場所は外した。地域住民だけではなく、近辺の住民の生活道路の一つが通る地域だったら、地域住民ではない方でも避難場所が分かるようにするといった、地域の実状に合った避難場所の指定をするべき。
- ・ 訪問介護で来ていた新人職員（勤め始めたばかり）は体の不自由な方を見捨てられずに犠牲になったという話を聞いた。
- ・ 明治三陸地震では震度としては大きくはなかったけれど、津波によって大きな被害があったので、震度の大きな地震だけでなく震度が小さい地震でも避難できるような姿勢が大事だと思う。
- ・ 「津波てんでんこ」は、確かに津波文化だけれど、命をつなぐためのとても非情な掟であると考えているので、教訓としてそんなにきれいな言葉として書くべきではない。浜辺人の掟である。

伊勢啓子 さん

- ・地元民ではない大槌の方は、避難所の看板を見て、車を捨てて神社への階段を駆け上がり避難した。
- ・地震が発生したときは免許センターにいたが、海沿いは通ることできなかったため山中を通る三陸自動車道を回ってきて自宅まで帰って来た。その後、着替えを持ったり、お手洗いを済ませたり、戸締りをしてから上に上がった。その後、自宅で要を済ませてから避難場所に向かった。

山崎よね さん

- ・地震が発生したときは、パーマ屋さんにいた。その最中であつたが、とにかく逃げなきゃと考えて、そのままの格好で避難した。

鈴木匠 さん

- ・「津波てんでんこ」は一人歩きしがち。そういった言葉を使わずに、シンプルに信頼関係の話だけでもよいと思う。どうしたら助けられるか、とても難しい課題だけれど、教訓案で用いられている言葉としては、“お作法”は適切ではないと思う。気を使いすぎで上品な言葉でおさめすぎだと思う。

山崎ハル子 さん

- ・災害時要援護者の避難支援のために、避難が遅れて犠牲になった方がいる。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

1978-11 片岸町

- ・被災時の様子 (津波襲来時の様子)
- ・被災後の様子 (当日の避難所の様子)

地震が起きた時はストーブを消し、そのままTVを見ようと思いましたが、すぐ切って外に出ました。家がガタガタと音を立てるので「壊れるんじゃないか」と思いながら、いつまでも続いてました。空で「パシッ」という音が鳴り、「津波は？」と見に行ったら、その時は変わらないように見えました。人が上って来るのが見え、車も次々と登ってきたため、上の広場は満杯になり、坂道も渋滞でストップしてました。しかし、ちょうど空地があり、坂道の車も停める事ができました。そのうち、皆が前の方へ走っていくので見に行ったら、津波が堤防を全部隠すところでした。自動車学校のコース内をゆっくり流れ、「どこまで来るんだろう」と思っていたら、下の方でしぶきが立ったので、「ここまで登ってくるんじゃないか」と恐かったです。

アパートの3階か4階まであった波も引き、道路が見えると、橋の上にいた3～4人の中の1人は、水に入りながら山に登ってきました。残りの人たちが立ち止まっていると、そのうち再び波が来たので、橋に戻って行きました。

その後、暗くなってきたので家に戻りました。母は炊き出しの手伝いに行きました。100人以上いたので、次の日は小さいおにぎり1個しかだせませんでした。灯油がなかったので、一斗缶に穴を開け、湯を沸かし、湯たんぽで暖を取りました。

13日に、隣町からの山火事で避難することになり、ちょうど、様子を見に来た兄の車で宮城に10日余り行っていました。灯油はあるけどストーブがないと言うので、家から持って行きました。こちらも電気、水道、電話など駄目でした。山火事は、どうなったのか分からないので心配で帰って来ました。釜石の方もどうなってるのか、道は通れるのか、全然情報が分からず、困りました。

1625-02 片岸町 女性 30歳代

- ・避難時の様子 (自宅、避難呼び掛け、川の様子見、津波確認後避難、九死一生)
- ・被災の感想 (ここまで来ない)

14時30分、4歳の息子が幼稚園から帰宅し、着替えをさせ、自宅で2歳の娘と三人でテレビを見てくつろいでいました。その10分後、地震があり、急いで玄関を開け、子供たちと外へ出ました。今までの地震よりも明らかに大きく、びっくりする子供たちと体を寄せていました。少し落ち着いたので、一度自宅へ入ると、携帯の緊急地震速報のアラームが鳴っていました。すると二度目の地震。近所の方が一緒にいてくれ、子ども二人を真ん中に大人三人で守るように地震が止むのを待ちました。そして、その方に「津波が来るから逃げて」と言われ、車に子供のオムツ、着替えなど持てる物を詰めこみ、義母の元へ向かいました。途中、近所のおじさん(50代)、子供たちをととても可愛がってくれた女性(30代)の方がまだ家にいたので、「逃げてくださいね」と声をかけましたが、そのまま残っていたようで、亡くなったそうです。もっと話していればと後悔が残ります。そして義母の元へ行

くと、家の中で割れたガラスを片付けていました。何度も地震が来るので、私と子供たちは車の中でドアを開けて、もしものために子供たちに厚着をさせていました。しばらくして川の様子を見ていた近所の方が「川の水があふれてきた、逃げろ」と叫び、急いで近くの神社へ逃げました。神社に行くと、すぐそばを家やいろいろな物が流れてきます。家に残された人、屋根の上に登った人、橋にぶつかり激しい川の中に落ち、流されて行くのを何度も見ました。「助けて」と叫びますが、どうすることもできません。やっぱり自分の命が大事。子供たちも守らなければと。あの光景は8か月経った今でも忘れられません。

いろんな方にお世話になりました。当日、私と子供、義母他の方を迎え入れ、温かい場所、食べ物など本当に感謝してもしきれません。私は少し簡単に考えていました。自宅での地震時、落ち着いたらまた自宅へ入ろうと思いました。「津波は来ないだろう」と。しかし、近所の方の「逃げて」の一言に救われました。もし、その近所の方がいなければ……と考えるとぞっとします。

2544-03 片岸町 女性 30 歳代

- ・避難時の様子 (自宅、車避難)
- ・被災後の様子 (当日の避難所の様子)

3月11日は仕事が休みで、母と2人で家にいました。揺れがおさまってすぐに、車で避難場所の道地沢高台に避難しました。本来なら歩いて避難しなくてはいけなかったのだと思いますが、「車で夜を明かすことになるかもしれない」と考え、車を使いました。避難している最中に、警報が鳴っているのには気がきましたが、「とにかく逃げなくては」と焦っていたので、警報の内容に耳を傾ける余裕はありませんでした。津波が堤防を越えてきたのは15時15分頃だったと思います。その時、高台には50人くらいが避難していましたが、誰かが「ここまで波が来るかもしれないから、もっと高い所に逃げた方がいい」と叫んだので、皆で裏山に登りました。その後は、波がどこまで来たのかは木で見えず、かといって山を降りるのも怖かったので、17時00分頃まで裏山にいました。その後、「避難している人の名前を確認するので下りて来てください」という声の下から聞こえてきたので、その場にいた人たちと一緒に山を降りましたが、特に名前の確認はありませんでした。介護施設あお空が場所を開放して下さったので、寒い思いをせず泊まらせてもらうことができました。

我が家は海から近く、低い位置にあったので、「津波が堤防を越えたら流されてしまう」という意識があったため、地震の後すぐに避難しましたが、海から離れた所や少し高い位置に住んでいた人は「まさかここまで津波は来ないだろう」という思い込みがあって、かえって避難が遅れたのではないかと思います。

7016-01 片岸町 男性 40 歳代

- ・避難時の様子 (仕事中、流された)
- ・被災の感想 (すぐに避難すべき)

勤務先の宮古市向町の路上で津波に遭遇。波に乗って浮き上がった車と車に右足を挟まれ、激痛を耐えた。幸い、波に押されて挟まれた右足は解放されたが、波に飲みこまれ、黒い海水を飲みこみながら転がされた。足の痛みでなかなか立てず、流れに身を任せ、しばらく仰向けに流された。痛みを我慢して立ち上がり、路地に入りこみ、そばの病院の2階へ逃げこんで助かった。病院には地元の人々が避難していた。

ふだんから避難の持ち出し品を用意し、すぐに高台へ逃げる。荷造りや選別の時間はない。今回の教訓である。

3360-01 片岸町 男性 60 歳代

- ・避難時の様子 (仕事中、車帰宅、家族の様子見、要援護者支援、避難、九死一生)
- ・被災後の様子 (当日の避難所の様子)

大槌町の製材所にいるときに地震に遭った。余りにも大きな地震だったので、「とにかく逃げなければ」と揺れがおさまらないうちに、猛スピードでダンプを走らせて帰ってきた。トンネル内は電気も消え、気持ち悪かったし、途中で伯母の家の屋根が壊れているのを見たものだから、家族には指示をして、すぐバイクで伯母を助けに走った。伯母は兄貴が車椅子で避難させていた。避難所に到着してすぐに「波が大きいから避難場所から逃げろ」とのことで、参道へ皆一目散に駆け上がった。最後の方2、3人が水をかぶただけで済んだ。危機一髪だった。伯母は兄貴と二人で車椅子ごと運び上げた。助かって良かった。津波の余りの大きさに、今度は我が家の者がやられたかと思った。山を越えて帰る途中、胸が張り裂けそうだったが、無事だった。

余りに寒かったので、乗用車に伯母と伯母の友達2人を乗せ、ヒーターやホッカイロの様子を見ま

した。家屋を流出した人たちが、上の方にたくさん避難してきました。夕方、様子を見に下がると、我が家の一軒先まで津波が来たとのこと。そして嫁さんがやられたらしく、名前を呼びながら捜していました。夜中にまた手伝って捜したけど、見つかりませんでした。炊き出しの準備（米、鍋、食器など持ち寄り）ご飯を煮て持って行って、おにぎりを作ってもらったりしました。我が家には、避難者

- ①老人（オムツ使用、歩行不能）
- ②大人（付添）
- ③老人（伯母。脳梗塞、歩行困難）
- ④⑤老人（伯母の友達）

を受け入れていました。皆さんそれぞれに避難して助かった人たちでした。私もすぐ逃げてきたから助かったけど、もたもたしてたら津波にやられたかもしれない。そして兄貴と伯母もどうなったか分からない。間にあったから良かったけど……。

大地震、とにかく逃げる。自分の命は自分で守ること。そして津波を予期して高台へ避難しなければならない……とつくづく身をもって感じました。

3643-01 片岸町 男性 50歳代

- ・避難時の様子（仕事中、津波想起、水門閉鎖、避難誘導、避難）
- ・被災後の様子（救出できず）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき）

当日、私は海岸の作業小屋で作業をしていました。地震発生時は直感で大きな津波が来ると思いました。消防団でもあり、すぐに水門の閉鎖を行い、一緒に水門を閉鎖した人にすぐに高台へ避難するように指示しました。その後、住民に避難を促すために、消防団員にポンプ車で町内を巡回するようにお願いして、自分も避難誘導して避難しました。目前で2名の行方が分からなくなるのを見て、何も声に出ず、ただ茫然としていた。あの時の海の色は忘れられない。その時の1人の方の長男も同じ所で見えていて、自分の親を見て何もできない状況は、とても耐えられない気持ちでした。津波が何度も来て、家が流されていくのを見て、涙も出ませんでした。津波後の町の中は音が全くなく、怪我人すらいませんでした。

私は部落の副会長もしておりますが、自分の家族の心配より部落の人たちが心配で、避難所に行くのに山の道なき所を、30分くらい歩いて観音神社の避難所、一本松公園とその他2か所を回り、人員の確認に歩きました。そして一本松公園の避難所で一人の死亡と、二人の行方不明を知り、愕然としました。一本松の津波避難所では水位が2mくらいあり、家が6戸か7戸くらい固まっているのにびっくりしました。部落の方々は60人くらいの安全確認はしましたが、「誰と誰の行方がわからない」と聞くと、心配でなりません。当日は電話はもちろん、携帯電話も使えず、連絡方法は消防団の消防無線だけでした。

11日の夜から大槌町内での火災発生から、風の方で山を越すのではないかと、心配がありましたので、部落の皆を緊急に避難させる必要がありましたが、観音神社からの移動は大変でした。ある人はサンダル履き、車椅子の人、年配で歩けない人などを山の道路のない所を2時間くらいかけて移動させました。その後の避難先での病人の移動は大変でした。部落内はガレキで、身動きのできない状態でしたので、消防団員を5～6名にお願いして移動はしましたが、救急車の手配にも大変でした。手配したのですが、道路が寸断されて、救急車までの搬送もまた大変で、片岸まで行くのに1時間以上の時間を要しました。救急車に辿り着いた時には既に帰らぬ人となっていました。

また当日の夜、海の方から助けを求める声が聞こえました。海は暗く、波の音の合間に「助けて下さい」という声が聞こえてきました。声は沖の方から海岸近くまで来るのですが、暗くて何も見えませんでした。潮の流れは室浜の海岸から鵜住居川の河口の方へ流れていました。「もしかしてこのままいくと海岸のそばまで来る」と思い、声を頼りに海岸の近くまで行きました。岸から30mくらいだと思いますが、暗くて何も見えませんでした。消防団員3名と海の近くまで行き、女の人に名前と状態を聞きました。女の方は38歳で流れた家の屋根の上にいるとのことでした。声が本当に近くまで来たので、ロープ等投げて、助けようと思って「泳げますか？」と聞くと「泳げません」と返ってきた。「めがねがなく見えません」と返ってきました。消防団員の1人が、「俺が泳いでいきます」と海へ入ろうとしたが、私は二次災害が起きてはならないと止めました。私は消防の人が人の命を助けなければいけないけれど、目の前で二次災害を起こすことを思い、「行くな」と言って止めました。その後も女の方の声はだんだん遠くなり、かすかに聞こえるようになりました。今でもあの時のことを思うと「それで良かったのか」と思います。

震災から3日間くらいは、自分の家族のことを気にすることはなく、部落のこと、行方不明の人達のことだけ考えていたような気がします。妻の安否の確認は4日後で、妹の行方不明のことは1週間後くらいだと思います。

今後の被害を軽減するには「地震が来れば津波があると思え」「津波が来る時は海より遠く逃げずに、近くの1mでも高い所に逃げよ」「一旦避難したら戻るな」です。今回の震災では、避難等でも被害が出ているので、避難所の海拔の高さ表示が必要ではないかと思います。また、我々消防団員は地震の発生と同時に一般人と反対の行動を行い、海岸の水門閉鎖等で海岸に行かなければなりません。今後は、防波堤を作るならば水門のない防波堤の設置等、水門の遠隔操作には電気も使用しない方法で、水門を開める方法を考えてほしいと思います。また、通信網の確立も必要だと思います。

2345-01 片岸町 女性 60歳代

・避難時の様子 (外出先、避難呼び掛け、車渋滞、ここまで来ない、帰宅、避難)

あの時、私は免許センターにいました。全てが終わり、1階で椅子に座り、免許証の配布待ちをしてました。するとドドンと強く揺れて、なかなかおさまりません。皆で騒いだり、手を握りあったりしました。天井からは何かが落ち、係の人はテレビを手で押さえていた。少し弱くなって来て「危ないから外に出てください」と言われ、外に出ました。すると「国道の方に避難してください」と言われたので、「えっ？ そんな所に避難するのなら帰ります」と言うと、隣の人が「免許証をもらわなければ」と言って、順番に呼ばれるのを気が気でなく待ち、中頃やっと呼ばれ、免許をもらいました。

その後、車で走ると、交差点で左折の車が渋滞していました。私は2番目で止まり、前の車は左折で動けなく、私は右折のウインカーを出し、早く早くと思っていたら誘導している人が出てくるように合図してくれました。港町のバイパスに乗り、そのまま新しくできた高速を通り、自宅まで帰りました。バイパスから自宅までの間は混んでいませんでした。津波が来るのは充分分かっていましたけど、家まで持って行く(被災する)とは思いませんでした。山(避難場所)に上がれば、寒いのは分かっていたので、厚いジャンパーに着替え、脱いだ物は炬燵の上とか高所に片付け、車には何も積んでなかったの、そのまま持っていけばよいのに、置いていきました。茶の間の物は落ちていませんでした。トイレを済ませ、鍵をかけ、車に乗ろうとしてたらパトカーが「早く逃げなさい。津波が来ます」と叫びながら走って行きました。家の前のスタンドには従業員が2人、いまだにいました。

車で団地に登ろうとしたとき、ラジオで「釜石魚市場の辺りで津波がありました。車が沢山走ってます。その車も家も流されています」と放送していました。坂を登って行ったら、人々が縦に行列を作って、下の方を見ていました。私は一瞬「登ってはダメなのか？」と頭をかすめたが、後で考えると、その時、皆は波の来るのを見ていたのでしょう。車を上の方に止め、山の下の方の皆のいる所に行って下を見たら、私たちの家も何もなくて、満面海でした。「ええー」と思い、ただただ茫然として見てました。だから私は怖い思いはしていません。スタンドの2人も上から「津波が来てる。早く逃げろ」と皆で呼んでくれて、それが耳に入り逃げたそうです。「もう足元まで水がきて、いがた、皆のお陰で命拾いました」と言っていました。その晩は寒くて、私たちは10数人で山小屋の中で古いけど丸いストーブで暖を取りましたが、男の人たち、若い人たちは外で木を集めて、火を燃やしていたけど、寒かったと思います。

私の子どもたちは県内ですが、それぞれに暮らしており、寂しい思いをしないで過ごしています。

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.3 鵜住居地区 (6) 室浜地区 (片岸町第 10 地割)

1) 補足調査における証言

(佐々哲男さん、佐々幸雄さん、佐々正弘さん、山崎正人さん、山崎勝好さん、佐々金一さん、佐々猛夫さん、佐々新一さん、佐々光規さん、佐々栄さん、佐々毅さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

・水門閉鎖後、消防団は避難誘導のためポンプ車で集落内を 3 回程度回り、高台への避難を呼びかけた。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・犠牲になった方の多くは家の中にいて、流された。
- ・避難先である指定避難場所が浸水してしまい、流された。
- ・身体の不自由な方が車で避難しようとして流された。
- ・一度避難したが、自宅へ戻ってしまい、流された。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・多くの住民が、地震直後に指定避難場所へ避難したが、津波浸水を受け、一部の避難者はより高台へ逃れた。
- ・海側の地区では迅速に避難しているが、比較的高台の地区では、ここまで津波は来ないと考え、避難しなかった場合もあった。
- ・車で避難した方も数名いた。一本松公園まで車で逃げて流された方もいた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・平成 22 年 7 月に自主防災組織を設置した。救護係等の担当も決めていた。同年 11 月には、鵜住居の消防に協力してもらい、避難訓練や消火訓練を実施した。
- ・訓練の時には、主に公民館前(観世音神社の階段下)、室浜稲荷神社、一本松公園の 3 か所に集合していた。高齢者の方たちが参加しやすいように、地区の中心にある公民館を避難場所としていた。
- ・避難訓練では指定避難場所への避難よりも、とにかく高い所に逃げる訓練をしていた。その際、高台の住民は海側へ下がってはいけない、また海側の住民は高台へ声がけをして避難するように決めていた。
- ・町内会では避難時、高齢者に声がけする担当を決めていたが、震災が平日であったため、担当者が不在であった。そのため、休日のみならず平日の場合を想定した取り組みが必要と感じた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・公民館に備蓄していた防災資機材等は全部流された。一か所に備品を保管することは問題がある。今後、各世帯への配布の検討も必要である。
- ・今後の取り組みとして、体が不自由な方をどう援護するかを検討すべきである。

C. その他

(1) 防災無線(聞こえ方・課題など)

- ・予想される津波の高さが 3 m であるという大津波警報の情報は聞こえたが、内容については余り記憶がない。地域に無線は 1 か所しかなく、日頃から無線が聞こえづらい場所があった。

(2) その他(避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など)

- ・3 か所全ての水門を閉鎖した。
- ・チリ津波の経験から、室浜公民館まで浸水するとは想定できなかった。
- ・震災の 1 年前に鰯が大量に捕れた。明治三陸津波の際にも、襲来前に大漁の日が続いたという逸話があった。
- ・3 月 11 日は大漁で、多くの漁師が午前中に自宅に帰っていた。沖に出ていた船は一艘もなかった。
- ・波は海底からブクブクと盛り上がってくるように見えた。

2) 地域懇談会における証言

佐々幸雄 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。電気ブレーカーを落として、ガスの元栓を閉めて、自宅周辺を確認してから避難場所を目指した。消防の水門を閉めに下がって、閉めていて消防車の広報が聞こえてきた。地震発生から 20～30 分後には観世音神社にいた。観世音神社の鳥居まで行けば大丈夫と、祖父母から聞いていた。
- ・この地域の犠牲者の多くは家の中にいた。家の中にいて情報を得られないから逃げられなかったのではないと思う。すぐに外に出て様子を確認して、何か情報を聞いたらすぐに高台に上がっていただろう。
- ・訓練のときは、公民館前（観世音神社の階段下）、室浜稲荷神社、一本松公園の 3 か所に集合していた。
- ・震災の前年（2010 年）の秋に、自主防災会を設立して、11 月には避難訓練を実施した。鵜住居の消防に協力してもらい、避難訓練のほかに消火訓練も実施した。

佐々光規 さん

- ・海沿いにある作業小屋で地震を感じて、水門を閉鎖して（3人で）、一旦自宅に戻った。ハンテンとヘルメットを取ってから、車に乗って避難を呼びかけながら、県道に逃げた。
- ・室浜ではすぐ裏手に山があるので、「地震が来たら遠くに行くのではなく高い所に駆け上がる」と聞いていたし、話をしていた。
- ・避難訓練では、指定の避難所は上のほうにあるため、高齢者の方たちも参加しやすいように地区の中心で参加者が多くなるように公民館にしていた。

山崎ユリ子 さん

- ・地震が発生したとき、岩手県立釜石病院で診察待ちをしていた。そのときは自宅に戻ろうと考えたので、自宅に戻ろうとしたが、停電で信号機が消えていたりして釜石駅前で警察官の誘導に従い、シープラザに避難した。そのため、しばらく室浜に戻れなかった。

佐々哲男 さん

- ・地震が発生したとき、鵜住居の川で仕事だった。その時、川がブクブクと気泡を発生していた。その後、時間がまだあると思ったので、車で自宅に帰ってきて高台にある法冠神社に避難した。しかし、津波がまだ来ないと思ったので、高台から下りて、近所の災害時要援護者のお宅を訪問した。そこで、自宅に残っていないことを確認したので、また避難所に向かった。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

9910.00 片岸町 女性 70 歳代

- ・被災前の意識（先人からの伝承、ここまで来ない）
- ・避難時の様子（自宅、近所の様子見、ここまで来ない、流された）
- ・被災後の様子（当日から翌日の様子）

私の家は幾らか高い場所に建っていましたので、「津波はここまで来たことはない」と両親から聞いていました。

私は地震の時、主人と 2人でテレビを見ていました。時間ははっきり覚えていませんが、2時は過ぎていたと思います。大きな揺れと同時に主人と 2人で外に出ました。隣に 80 過ぎのおばあさんが居るので、その家に裸足で駆けて行きました。おばあさんは私に「今まで何度か津波を経験しているけど、ここまで来たことがないので、ここには来ないから炬燵に入って」と話しているうちに、下を見たら大きな家が流れるのを見ました。その時、主人は外で、下から上に避難しようとしている人に手を差し伸べたところまで私は見たけれど、その瞬間、私とおばあさんは、おばあさんの家の中で波に飲まれ、おばあさんは奥の方に流されました。私は咄嗟に手が動き、「ここで死んではいけない」と思い、大声で叫びながら泳いで助かることができました。

外に出たら室浜一面ガレキの山でした。私は大声で主人を呼びましたが、家も主人も波に飲まれ、何もなくなっていました。「また大きな津波が来たら」と思い、上の畑に行き、うずくまっていた。高い所に避難していた弟夫婦と近所の親子の方が来て、濡れた服を着替えさせてくれました。夕方、雪が降ってきたので、屋根だけ残ったおばあさんの家に入り、おばあさんを着替えさせ、一緒に5人で夜を過ごしました。とても寒かったです。

兄が室浜から15分離れた所に住んでいましたので、津波に遭いませんでした。次の日私たちを迎えに来てくれ、兄の所で3月12日から6月13日の仮設に入居するまで避難所としてお世話になりました。主人はまだ見つかっておりません。地方の方からいろいろな物品を送っていただき、感謝の気持ちで一杯です。自衛隊の方々には本当にお世話になりました。ありがとうございます。

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.3 鵜住居地区 (7) 箱崎白浜地区 (箱崎町第 1～3 地割)

1) 補足調査における証言

(佐々木孝郎さん、浦島富司さん、佐々木啓一さん、市川淳子さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・住民が互いに声をかけあい、高台へ逃げるように誘導した。高齢者の中には避難を呼びかけても応じない方もいた。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・体の不自由な方が自宅で動くことができず、流された。
- ・一度避難したが、再び海側に下がってしまい、流された。
- ・消防団員が住民への避難誘導の呼びかけに時間を要してしまい、流された。避難誘導にすぐに応じなかった方も逃げ遅れて流された。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・地形上、海の様子が各自宅から見えるので、大部分の住民は自宅におり、津波襲来の寸前まで避難しなかった方が多かった。
- ・海岸部で作業をしていた方は、防潮堤の上で海の様子を見るのが習慣化していた。津波が襲来したのを見てから、急いで車で高台に移動した。偶然にも命を取り留めた方もいたが、車ごと流されて犠牲になった方も多くいた。
- ・海岸部の住民の多くは車で避難し、高台の住民は徒歩で避難した方が多かった。
- ・海の状態が気になり、海側へ下がる方もいた。津波に対する危機感がなかった。
- ・明治三陸津波や昭和三陸津波の浸水被害を基準として考えていたため、まさか津波がこれほど早く来るとは思わなかったという方が多くいた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・平成 14 年 8 月に自主防災組織を設置した。消火、炊き出しの訓練を過去に行ったことがある。
- ・3 月 3 日の避難訓練には全面的に協力していた。要援護者の聞き取り調査をしていた。しかし、具体的な支援方法についての取決めはなかった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・白浜小学校に発電機、ヒーター、毛布等の資機材を備蓄していたので、発災後も活用することができた。毛布はあっても下に敷くものがないという声も出ていたので、今後は発砲スチロール等の備蓄も必要である。
- ・今後の課題として、高齢者用の音響機器の普及、避難所への無線設備の導入、離乳食やおむつの備蓄、太陽光による蓄電等の対策が必要である。

C. その他

(1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)

- ・3 m、あるいは 6 m の波高に関する情報は聞こえた。ただ、無線が聞きにくい地域もあった。

(2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など)

- ・当地域は地形上、傾斜地に家屋等が立地し、それぞれに石垣の段差があるが、勢いのある高い波が石垣を一気に乗り越えて襲ってきた。
- ・チリ津波では津波襲来中に漁師が鮑をとったという逸話があった。
- ・第 1 波は防潮堤の手前で留まったが、津波の第 2 波で家屋の多くが破壊された。
- ・水門は全部で 4 か所ある。消防団は 10 分以内には訓練どおり閉鎖することができた。その他に閉鎖を手伝う住民もいた。
- ・町の至る所でガスの臭いがしており、ガス漏れではないかと不安になった。

2) 地域懇談会における証言

佐々木淑子 さん

- ・地震が発生したときは自宅にいた。揺れが収まってから海沿いの倉庫から若布をとりに行ったら夫は消防団だったので水門を閉めに行った。若布漁に行くことになっていたのですが、箱崎白浜の方たちの多くは海沿いの倉庫にいた。その時、津波警報が3メートルという情報と海の様子が少し上がっている程度だったので、皆こんなに大きな津波になるとは思っておらず、倉庫前の避難道路で海の様子を見ていた。そして、波が静かに上がってきたので、近くにいた方に車に乗せてもらって高い所に行こうとしたら、渋滞に巻きこまれて流されてしまったが、結果的に運よく引き上げてもらえた。流されている最中に、若布漁のロープに足首が引っかかってしまいどんどん波に引っ張られてしまったが、長靴だったために脱ぎ捨てることでロープから抜け出すことができた。運よく引き上げてもらうまで、浮き玉に掴まろうとしたけれど、滑ってしまい掴むことができなかった。
- ・箱崎白浜地域の避難場所は、被災前には4か所あった。そのうち、一つはより高い所に変更した。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

2539-01 箱崎町 男性 60歳代

- ・避難時の様子 (仕事中、津波想起、車帰宅、避難呼び掛け)
- ・被災の感想 (家族が犠牲、すぐに避難すべき)

3月11日午後2時46分、私の生命のある限り、忘れることはできないでしょう。

養殖若布生産期を迎え、養殖用作業漁船を下架し、磯漁用の小型漁船を上架し終わったとき、私はこれまで人生で体験したことのない巨大地震に遭遇したのです。地震が終わるまで仲間数人と船に掴まっていました。護岸に亀裂が走りました。「これはただごとではない、大きな津波が来るのでは」と思いました。そのうち釜石市の防災無線で「津波警報が発令、3mくらいの津波が来る」と放送がありました。避難の準備をしているうちに、次に「津波が6mくらいまで来る」との放送になりました。直ちに軽トラックで護岸から逃げたのです。

私は白浜地区の町内会長、自主防災の責任者であるため、避難施設の旧白浜小学校体育館を開放するため、自宅から鍵を持って、高台の体育館に軽トラックで行きました。海岸から自宅に向かったとき、地区の漁業者の方々は、まだ海岸の作業所にいる者、防潮堤の上にいる者もありましたので、「おーい津波が来るぞー、早く逃げろよ」と声をかけてやりましたが、果たしてどこまでその人たちに届いたのか。この方々から多くの犠牲者が出たのです。115世帯、270人のうち、死亡者41名（消防団員3名、漁協職員2名、流失居宅の中で8名、海岸避難中28名）、12月1日現在、行方不明者17人。このように、白浜発祥の歴史上で最大級の大津波となったようです。

私の両親も自宅にいて、父親(97歳)は津波で流され、母親(88歳)は部屋でガレキと畳との間で挟まり、九死に一生で命を取り留めました。地震後、避難所開放に向かったとき、一緒に連れて逃げれば助かったのにと思いましたが……。これまで私たちが長老たちから言い聞かされてきた津波来襲の様子とは全く比較にされない大津波となったのですから……。

※教訓：津波警報発令の時は、直ちに直近の高台、避難場所へ避難すること。このことが一番大事だと神事、伝承に努める。

2318-02 箱崎町 女性 60歳代

- ・避難時の様子 (自宅、津波確認後避難、要援護者支援、九死一生)

あの日は若布採取作業が始まる前日でした。浜は朝早いから海岸の倉庫に準備に行こうとしました。その時、自宅の玄関先で大地震に襲われました。今まで経験のしたことのない地震でした。家の中は棚から落ちた物で散らかっていたけど、余震が怖いので、近所の方と外に出て様子を見ていました。そのうち防災無線で「3メートルの津波だ」と聞き、夫は「大丈夫だから海岸に行ってくる」と車で行きました。

20分くらい待っていましたが、なかなか帰ってこないで、家の2階から海の様子を見たら、湾の中に海水がなくなり、底が黒くなっていたのを見て、「これは大津波が来るんだ」と思い、すぐに避難しました。私の家は石垣の高い所ですので、道路に下りると流されてしまうと思い、近所の高いところに逃げようと走っていたら、裏道路の100mくらいで屋根が2つ並んで波と一緒に私の方に向かってきました。その時、ショックを受けて足が進まなくなり、諦めていたとき、目の前を体の不自由な方

が足を引きずりながら一生懸命走っていました。それを見て、「私も頑張らなきゃ」と思い、その年老いた不自由な方と声をかけあいながら高台へと走り、難を逃れました。もし、あの不自由な方を見なかったら私は「どうなったのかな～」と思うと、あの方に助けられたと感謝しています。

3775-04 箱崎町 女性 40歳代

- ・被災前の意識 (先人からの伝承)
- ・避難時の様子 (自宅、避難、避難先から帰宅、九死一生)
- ・被災の感想 (てんでんこ)

「想定外の大津波だった」と言われている震災でしたが、私の家では宮城県沖地震が必ず来るだろうということで常に津波の話はしていました。子供たちは学校で「てんでんこ」を学び、私は父から昔の津波の話を聞いていました。例えば、「チリ津波の時はどこまで波が来た」とか「海は勿論のこと、川を逆流するから川に近付くな」とか。だから今回の地震は異様に感じ、「津波は必ず来る」と思いました。だけどまさか、こんなに大きなものとは思ってもいなかったし、ましてや高台にある我が家まで津波が上ってくるとは……それこそ「想定外」でした。

地震の直後、庭に地割れができたので危険だと思い、何も持たずに後ろの畑へ行くと、近所のおばさんたちも集まって来た。寒くなったのでジャンパーを取りに家に戻ったら、海の真ん中で大きな渦が巻き、船がぶつかり転覆し、漁協に波がぶつかり建物より高い水しぶき、横の家は道路まで波に押されて逆流した。驚いて裏の畑へ上った途端に向かいの家へ波が流れこむ。余りの光景に夢じゃないかという思い。「もっと高い所へ」と小高い丘へ上った時、反対側の地区は家が3軒しか残っていなかった。それからどのくらい経ったのか、何度となく波が押し寄せ、全てを飲みこんで行く引き波を見ながら向かいの大槌に白波を立てていく様子を見て、体の力が抜けて行くようだった。

夕方になって、今夜はとりあえず保育園に近所の人たちと避難するということになった時、「中学生、小学生は無事に避難した」と聞いて、ほっと安心した。「もしかしたらダメかもしれない」と半分諦めかけていたから。だって、河口のすぐそばの釜石東中学校だから、避難場所はかなり遠い場所。上手く逃げ切れればよいけど、もしかしたらって思っていたから。「釜石の奇跡」って言われたらしいけど、やっぱり先生方の指導があったから無事に逃げ切れたと思います。感謝の気持ちで一杯です。2日間離ればなれだったけど生きて会えて良かったと思った。やっぱり「てんでんこ」は大事だと改めて思います。現在ではいろいろな事情で家族は離れ離れで暮らしています。また、元のように家族全員で暮らせる日はいつになるか、それまでは心を一つに私が中心となって頑張っていきたいと思います。

2919-01 箱崎町 男性 60歳代

- ・避難時の様子 (仕事、車帰宅、避難)
- ・被災後の様子 (当日の避難所の様子)
- ・被災の感想 (反省)

あの日、私は午前中に海岸で若布収穫の準備をしました。午後は組合(本所)で会議があったので出席。会議終了後、雑談に入って間もなく、カタカタもなくグラグラと建物を揺れ始めました。そのとき誰かが「これはただ事でねえぞ!」と言いました。そのうち、そっちからもこっちからも「だめだ、逃げろ」と言う叫び声! 私も2階から駆け下り、靴を持ったまま車に! ドアを開け車に入ろうとしたがなかなか……。エンジンを駆け、走ろうとして前を見たら、電柱が左右に揺れて、倒れてくるようで一時は戸惑いました。「どうしても家に戻らなければならない」という思いで走り逃げました。私が先に走ったので、とばそうと思ったが、「路上に石や地割れでもあったら」と頭を遮るものがあって、とばせなかった。

家に付いたら、妻が祖母と避難していたので安心! 友人と海岸を見ながら話をしていたら、何か白い物が見えました。「何だ、波じゃねえか」と言って、海に見える高台に走り、海を見たらもう堤防が波で見えなくなるところでした。自分の船もひっくり返りそうになり、「ああ、蛸船が行った」と叫んでいるうちに「ああ、山さも波が上った」と言っていたら、家が一軒沖に流れて出ていったんです。「ああ、家が流れていった」と話していたら、戻り戻ったかと思ったら、また5、6軒が流されていったんです。

私は「これでは避難所を」と思い、錠が開いていなければバリーで戸を外して開けようと、隣からバリーを借り、車で向かいました。そしたら錠は開いており、避難者も何人か来ていました。後から聞いたけど、会長が開けていたそうです。それから自主防災でもらっていた物資、ストーブ、発電機、毛布、ラジオ、その他いろいろ準備はしたけど、油、乾電池等がなく、それぞれが持ち寄りました。その晩、男たちは庭に火を焚いて暖を取り、一夜を明かしました。

4.3 鵜住居地区 (7) 箱崎白浜地区(箱崎町第1～3地割)

私も午前中から仕事を続けていれば危なかったと思います。なぜならこんな大きい津波が来るとも思わないし、また「準備していた道具を波に流されてはもったいない」という思いが頭にあって、車に積むか、また2階に上げるかで、のんきをしていたでしょう。これからは津波警報が出たら、海岸から上る、下らないで行きたいと思っております。今は反省しています。

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.3 鵜住居地区 (8) 仮宿地区 (箱崎町第 4 地割)

1) 補足調査における証言

(高静子さん、高一男さん、株屋たまきさん、畠中みよ子さん、佐々木智子さん)

A. 住民の避難行動

- (1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)
 - ・軽トラックで高台に避難する途中、徒歩で避難する方を荷台に乗せながら逃げた。
- (2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)
 - ・避難せずに自宅に留まっており、そのまま流された。
 - ・避難の途中で家に引き返してしまい、流された。
 - ・船に乗っていた方が流された。
- (3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)
 - ・地震後、住民の多くは自宅にいた。あるいは近所の家に数人で集まった。
 - ・海岸部に近い住民は、比較的早く高台へ避難した。
 - ・ふだんから地震が来ても海の様子が気になり、海岸部に下がってしまうという習慣があった。高台へ避難する際にも、海岸を眺めながら避難していた。
 - ・車で避難した方が多かった。

B. 震災以前の備え

- (1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。
(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)
 - ・平成 22 年 10 月に自主防災組織を設置した。
 - ・市が実施した 3 月 3 日の避難訓練に参加していたほか、町内会、消防団で自主的に避難訓練をしていた。
 - ・他地域に比べて人口の少なく、高齢者の多い集落であるため、隣近所で支えあうコミュニティが築かれていた。
- (2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)
 - ・備えているものは特になかった。
 - ・夜に電気がなかったのが困ったので、今後の課題としては電気の備えが必要である。

C. その他

- (1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)
 - ・地震発生時、スピーカーからザーっという異常音が出て、他に何も聞こえなかった。
 - ・震災前から放送が聞こえづらい場所があった。
 - ・地域の漁業無線放送についても故障していた。
- (2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など)
 - ・過去の津波 (主にチリ地震津波) では、潮が引いた後にウニを取り、津波が襲来してからゆっくり避難することができたという逸話があった。そのため、津波に対して油断していたところがあった。
 - ・海岸部では若布を採る準備作業をしていた。
 - ・高台に家があっても油断しては駄目だ。地震があったらすぐに逃げる必要があると感じた。

2) 地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.3 鵜住居地区 (9) 箱崎地区 (箱崎町第 5～12 地割)

1) 補足調査における証言

(高橋道夫さん、岩井金吾さん、森古勝典さん、高橋姫子さん、小林健さん、小林ミサさん、佐々木茂行さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・消防団は、水門を閉鎖した後、消防車で町内を巡回し、住民への避難誘導を行った。
- ・避難場所では、津波を見て危険を察知し、皆で更なる高台避難を呼びかけあった。
- ・隣近所に声をかけて連れ立って避難した。身近にいた方の安否を気遣い、ともに被災した。残しては逃げられなかった。
- ・民生委員は、高齢者(寝たきり)の避難を呼びかけたが、全員とまでは行かなかった。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・寝たきりの高齢者の方が避難できずに流された。
- ・津波避難場所ではなく、親類・知人宅に避難したため津波に流された。
- ・親類のもとに避難を呼びかけに行った方が流された。
- ・家族の救助又は物を取りに自宅に戻った方が流された。
- ・海の様子を見に行ったり、海の様子に見に行った家族を呼びに行き流された。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・地震直後、地区の一部の住民は、屋外や路上に出て、相互に声をかけあい、高齢者等の避難を補助しつつ、高台・親類宅へ避難した。
- ・海岸部で働いていた住民も多数あったが、地震直後に一斉に避難せず、自宅等に戻ったりしていた。
- ・多くの住民は「津波はすぐ来ない」、「ここまでは来ない」という意識が強く、高台だけでなく、海側でも避難しない、避難が遅れるケースが多数あった。
- ・児童館の児童又は先生は、迅速に避難した。
- ・馬場前地域の一部、上前地域の一部では避難場所に避難したものの、それ以上の津波高さで更に上に避難した。
- ・事前に家族内で話しあい、発災時には裏山の高台に避難するように決めていた方もいた。
- ・震災で家屋等流失した方は、地元に残った親類や知人宅を頼りに、そこで一夜を過ごした。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・平成 22 年 7 月に自主防災組織を設置し、組織図を総会で確認していた。発電機やテントなどの必要な備品について整備計画を立てていた。
- ・避難訓練は、3 月 3 日の市が実施している避難訓練のみで、町内独自の訓練は実施していなかった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・震災以前より、津波襲来時、高台避難と呼びかけているのに、なぜ高台に居住している方が下の避難場所に集合しなければならないのか。避難場所である森屋根へ避難する道路が整備されていないことや、平地がないとの意見もあった。
- ・震災以前より、町内会の防災本部の設置場所が漁村センターで大丈夫かという声があった。さらに、高台に備蓄する場所を要望してはどうかという意見もあった。
- ・防災備蓄を兼ねた集会施設を高台に設置するなど、震災時に住民が避難できる安全な場所が必要と考える。

C. その他

(1) 防災無線(聞こえ方・課題など)

- ・地震直後、避難勧告の放送は当初聞こえたが、その後聞こえなくなった。以前から天候次第で、聞こえる場所と聞こえない場所があった。

- (2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関する地域の主な施設など)
 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関する地域の主な施設など)
 ・先輩や親からは、「大きい地震が来たら逃げろ」「明治・昭和の津波はここまで襲来した」という言い
 伝えを聞いていた。

2) 地域懇談会における証言

山崎三男 さん

- ・地震が発生したときは軽トラックで移動中だった。引越しの最中で、14 時半に釜石に向けて出発していたが、通りにいたおばさんが地震で腰を抜かして動けずいたのを見つけて桑の浜まで送り届けた。その後、軽トラックを片岸の方から借りていたので、片岸まで行って軽トラックを返して、釜石のトンネルの所で津波に遭った。片岸から釜石に向かう時には、三陸縦貫自動車道 (釜石山田道路) を通っていたので、渋滞に巻きこまれずに助かった。

臺久美子さん

- ・地震が発生した時は、自宅にいた。海岸にいた夫が危ないと思い上がってきて、「庵寺まで逃げろ」と言ったので逃げ始めたが、薬を忘れたので、取りに自宅に戻ってから車で箱崎庵寺まで移動してお墓まで上がった。

小林ミト さん

- ・震災当日は、鎌倉にいた。箱崎まで戻ってくることができたのは、3 月末だった。

橋本安見 さん

- ・地震が発生したときは、親戚の家でいた。自宅に戻っていたら津波が来たので、山に逃げた。

三浦紘子 さん

- ・地震が発生したときは、自宅にいた。地震の揺れがおさまってから、すぐに孫のいる保育園に行った。その時、保育園の若い先生たちはおろおろとしていたので、高い所に逃げるように指示をした。その後、自宅に戻ってきて隣のおばあさんに避難の声がけをしたが、「ここまで津波は来ないから」と言って逃げようとしなかった。周辺の住民と説得してどうにか車に乗せて山を上った。
- ・津波が来るまで、集落全体が不気味なくらい静まり返っていた。津波が来たのを確認できるまで周辺の住民は逃げなかったの、ここまで津波が来るとは住民皆思っていなかったのだと思う。

小林伸行 さん

- ・地震が発生した時は盛岡市内にいた。震災当日に箱崎を目指して移動してきたが、中妻までしか戻って来ることができなかった。

高橋道夫 さん

- ・地震が発生した時は、釜石で工作中だった。防災無線等から情報が流れてくるのを耳にした。震災当日は会社で宿をとってもらって一晩過ごした。翌朝に山田線を歩いて自宅まで戻ってきた。
- ・家を建てる時 (平成 7 年)、義父母から「ここまで津波は来たことがない」と言われていたが、日ごろから地震がきたときは裏山の氏社で会おうと決めていた。妻はそのとおりに避難をして、そのときラジオを聞いていた方が騒いでいたので、それで更に高い所に逃げたと聞いている。箱崎では防災無線の電源が喪失したらしく、情報が流れてこなかったらしい。
- ・自主防災組織は震災のあった年の 2 月に発足したばかりだったので、どんな行動をとった方がいいのか分からなかった。
- ・箱崎地域の避難場所は、震災前には 4 箇所 (屋外広場 3 箇所と箱崎庵寺) あったが、震災後に屋外広場はより高い所に変更した。避難訓練は年に 1 回、3 月に実施するだけだった (参加者 70～80 名)。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

1462-02 箱崎町 女性 50 歳代

- ・避難時の様子 (外出先、車帰宅、避難呼び掛け、避難)
- ・被災の感想 (当日から翌日の様子)

3月11日は、マストからの帰りで、ちょうど宝来館の辺りで車の運転中に地震が発生しました。最初は車がパンクしているのかと思いましたが、前の車が止まり、箱崎方面から来た車も止まりました。しばらく車の中におりましたが、揺れが激しかったので、車から降りて、地震が小さくなるまで待って、それから箱崎方面に運転して行きました。

家についても、余震が大きく、なかなか家に入れませんでした。主人は地元の消防団員なので、海岸方面に行ってしまいました。そのうち、隣の夫婦が帰ってきて、隣の旦那さんが2階から海を見て、「駄目だ逃げろ」と言って、犬を引っ張って近隣宅の小高山に避難し、小高山のふもとまで家が次々と押し寄せてきました。流れてきた家々は、引き波にも流されず、そのまま何軒も重なった状態でした。私たちはその小高山で火を燃やしながら、大槌方面に赤々と燃える灯りとプロパンガスの爆発の音、海から聞こえるガレキとガレキがぶつかる軋む音、夜ほど暗くて長い時間を過ごしました。

私は、家が被害を受けていない住人が一言声をかけてくだされば（確か親戚の方は良かった）、暖房がなくても、家の中で寒さをしのげたはずです。12日は、友人宅で一晩お世話になり、次の日は全員自衛隊のヘリコプターでの釜石小川体育館まで、そして大松小学校と避難しました。うちの主人は箱崎に残り、人捜し、道路づくりとガレキの整理と家の中の片付け、掃除にと頑張りました。私たちは40日ぶりに再会し、家を直して、現在に至っています。

私が市にお願いしたい事は、停電になっても、防災無線が途中で切れないように工夫してもらいたいです。3月11日以前から、音量が悪くて、聞きとれませんでした。やはりその日もです。ようやく聞こえたのは、「3mの津波が来る」という内容だけでした。それと、私は家を直して住んでいますが、家電も流され、衣類なども流されました。仮設に入居している人たちと比べれば同じように待遇されてもいいんじゃないでしょうか？ 10月10日の市の社保の箱崎での物資の時も、仮設にいる人だけが米とかトイレトペーパー、コーヒーなどをもらってるようですが、家を直して住んでいる私にはもらえませんでした。

7026-01 箱崎町 女性 50 歳代

- ・被災前の意識 (津波経験あり、危機意識あった)
- ・避難時の様子 (外出先、車帰宅、九死一生)
- ・被災後の様子 (当日の避難所の様子)

私は小学校3年の時にチリ津波、高校生の時に十勝沖、大人になって宮城県沖(S50年代)、そして度々小さい50cm程度の津波を経験してきた。長年漁協で働いていたため、津波は30～50cm程度でも、養殖施設には大きな被害があるので、津波の恐ろしさは十分認識していました。地震イコール津波と覚えていて、体が避難します。でも、こんなに巨大な大津波が来るとは予想だにしていなかった。

あの日、3月11日14時56分、私はドライブ中、大槌町吉里吉里トンネルの中で地震を感じ、トンネルから出ると山の木はワサワサと揺れ、道はグラグラ。とても運転できる状態ではなく、ハザードをつけ車を停めた。ラジオは「巨大な津波が来ます、海に近づかないでください」と叫んでいた。すぐにUターンし、15km離れた自宅へまっしぐら。今振り返ると、あと5分遅かったら、私も津波に飲まれていたと思う。片岸、鶴住居、根浜、箱崎は甚大な被害があったから。

私の自宅は海拔40m以上の所にあり、指定された避難場所(30m)よりも高台だった。高台より津波を傍観、呆然、阿鼻叫喚、何もできず震えながら、ただ眺めているだけだった。空いていた畑に薪を焚き、輪になって暖を取る。火の灯は体も心も少し温かくしてくれたが、雪が降り始め、暗くなってきたので、家を失った人たちは、残った家に避難した。沢水で米を研ぎ、プロパンガスで鍋でご飯を炊いて、おにぎりの炊き出しを幼稚園児にする。石油ストーブ、プロパンガス、沢水があったから、支援食料が来るまで皆と協力しやってこられたと思う。私は一人暮らしなので、特に町内会の皆様にはお世話になりました。津波後の1週間は、兄弟とも連絡が取れず、不安で不安で夜も眠れなかった。心細かった。愛犬を抱きしめていました。

1815-05 箱崎町 女性 10 歳代**・避難時の様子(釜石東中学校生徒)**

私は、地震が発生した時、津波が来た時に中学校にいました。そのため、津波がたくさん物や人を飲みこみ、町を襲う様子を見ていました。しかし、この光景が現実なのかを信じるできませんでした。私たちが最初に避難した場所は、完全に水に飲まれていました。次に避難した先で町を襲う津波を見たとき、「私たちはここで死ぬのかもしれない」と考えてしまいましたが、すぐに「死にたくない。逃げなきゃ」と思い、気がついたら高い所を目指し走っていました。

その日の夜は、最初道路に座り、点呼を取ったり、親が迎えに来たりしていました。そんな光景を、ただ眺めるように見ていました。少ししてから、元釜石第一中の体育館に移動することになり、歩いていました。歩いている時、雪が降ってきて寒かったし、星がきれいだと思って見ていました。体育館に行く途中、トラックに乗せてくれるという、優しい人に会いました。そのトラックの運転手さんは大槌の人で、「自分の家はもうないと思うから役に立てて良かった」と、後で言っていました。体育館に着くと、たくさんの方が避難してきていました。その間も止まらない余震、次いつ来るかわからない津波への恐怖に耐えていました。

次の日、甲子中学校に行ったら、お父さんに会いました。お父さんから、家族も家も無事ということを知ったら、泣いてしまいました。震災から3日後、叔父さんの家に行って過ごしました。新聞の死亡欄を見ると、私の知っている人がたくさん亡くなっていました。

今でもあの日のことを思い出すと怖くなります。しかし、また来ると言われている宮城県沖地震に備えて、より多くの人の命が助かるように、私が体験したことをたくさんの人に伝えて行きたいです。「地震が起こったら、津波が来る」ということを常に考え、高台に逃げるのが大切です。最後になりますが、自分の命は自分で守れるようにしましょう。津波でんでんを忘れずに、これから生活したいです。

1815-02 箱崎町 40 歳代**・避難時の様子(工作中、車帰宅、九死一生)****・被災の感想(てんでんこ)**

3月11日、私はクリーニング配達とメール配達の仕事をしていました。すごく天気が良く、海もきれいで、3月とは思えないくらい暖かな日差しだったことを覚えています。まさか、巨大地震と大津波が来るなんて、思いもしませんでした。メール配達を終え、クリーニング店に向かう途中、小中学校を過ぎた橋の上で、携帯の緊急地震警報が鳴り、橋の袂に車を止め、地震を感じました。今までにない揺れに恐ろしさを感じました。目の前にある電柱が倒れ、建物の屋上からパイプが外れ水が噴き出し、まるで地獄絵のような風景でした。

地震がおさまり、私はクリーニング店に向かいましたが、ラジオから「大津波警報発令」と聞こえてきました。私はすぐ「家に戻らなきゃ」と車をUターンさせました。鶴住居から箱崎へは約10分。小中学校にいる娘と息子のことを「連れて帰ろうか……」と、一瞬迷いましたが、「逃げてね」と心の中で叫びながら家へ向かいました。途中、根浜では崖崩れが起き、大きな石が転がっていました。でも、海はまだ静かでした。家には、娘と寝たきりの義父と義母がいました。3人とも怪我なく無事でした。そしてまた大きな地震が……。次の瞬間、津波が箱崎の町を一瞬にして飲みこんでしまいました。家や車がまるでおもちゃのように流され、「あー」という叫び声が出ました。次の瞬間、寝たきりの義父をどうやって逃がそうか、現実に戻りました。3人の力ではどうにもならず、オロオロしているだけでした。幸い自宅までは津波が来なかったので助かりました。津波が来てたらと思うと、今でもゾッとします。その後、義父母はヘリコプターで花巻の病院へ避難しましたが、義父は体調を崩し、亡くなりました。悔しさが残っています。

今回の経験で、自宅に寝たきりの人や障害者がいる場合、置いて逃げることはできないと思います。それが人間だと思います。しかし、助けにいて亡くなった人がいることも事実です。何が正しくて、何が間違いなのか、今でも分かりません。一方で、子どもたちが生きてくれたのは、「てんでんこ」の教えのおかげです。その時その時で、自分で判断し行動することが大切なのだと思います。これから先、子供たちや孫たちへ語り伝えていくことが私たちの使命だと思っています。

3425-01 箱崎町 女性 50 歳代

- ・避難時の様子 (外出先、車帰宅、九死一生)
- ・被災後の様子 (当日から翌日の様子)

3月11日、午後2時頃、毎週金曜日に、箱崎に泊まりにくる孫2人を迎えに中妻の八雲小学校に向かった。3時15分頃、学校近くで車を止め下校する孫を待っていたところ、今までにない強い地震の揺れを感じた。家で留守番をしているペットの犬が心配で、孫は学校に預け、家に向かった。

運転している間も揺れはすごく、それでも車を走らせた。ちょうど駅前を通過し、大渡方面と松原方面に向かう信号の所で、何やら騒がしく手招きをしている人が見えた。何を言っているのかわからなかったで、ちょっと止まって窓を開けたら「車を置いて逃げろ！」との声。それでも前の車は大渡方面に走って行った。また、隣の車線に停まっていた車には、若いお母さんと、後ろの座席に小さな1歳にならないくらいの子どもがチャイルドシートに座っていた。そのお母さんは、携帯を持って電話していたようだ。その時は通話できていたのだろうか？ 私の携帯はつながらなかった。その若いお母さんは車を松原方面に走らせていった。その後、1分経たないうちに、松原方面から黒い絨毯のような波が、這ってきたように見えた。それが津波の第一波だったようだ。車を降り、シーブラザ方向に走った。靴がヒールだったので思うように走れず、後ろを振り向きながら、気持ちだけが焦っていたのが思い出される。その後、二波が来て、教育センターまで水が来た。でもその時は「ああ、津波か！」と思っただけで、町の様子が分かるわけもなく、教育センターの中に入った。教育センターの中は、1階から上の階までたくさんの人で溢れていた。次から次と体を濡らした人たちも入ってきた。波に流されたという人たちだ。

それから何時間経った頃、携帯のテレビを見た。津波の様子が映し出され、今までにない衝撃を受けた。「息子は私の前に車で家に向かった！ 大丈夫だろうか？」家は、兄弟は、ペットの飼い犬のころろのことが心配で、一夜を過ごした。「あの大渡方面に向かった車は？ あのを若い松原方面に向かった親子は？ 子どもは男の子だったような気がする」頭の中から8か月過ぎた今でも、離れない。その後、息子は津波に襲われ、両石のスタンド付近から恋の峠の山で一夜を過ごしたとのことで、3日後に会えた。親戚・知人・友達、多くの人が亡くなった。自分は無事だったことに感謝し、亡くなった人たちの無念な気持ちがとても堪らない。会う人会う人との話は、すぐ津波の話になる。いつになったら笑える話ができるのだろう。11月17日、我が家が撤去解体された。家を見上げ、これが父・母・兄弟の育った家の最後と思い、カメラを覗く自分に涙が出た。今回の津波は想定外、想定外、と何度も耳にタコができるほど聞く。私はその想定外という言葉が嫌で堪らない。何で？ とと言われると言いやうがないけど、誰のせいでも誰が悪いわけでもないけど、「想定外のせいにするな！」「もう少し正しい想定ができたのでは？」「そうすれば亡くなる人も少しで済んだのでは。助かる命がもっとあったのでは」と思ってしまう。

未来の釜石は、子どもたち、孫たち、これから生きていく人たちが安全で住み良い、笑いの絶えない町になってほしい。亡くなった多くの人たちの無念な思いを受け継ぎ、無駄にならないように忘れることなく、次の世代に話し継がれ、命を大切にしてほしいです。私の今の心情ははっきり言って先が見えません。これから先の生活、表向きは笑顔で「どうにかなる」と人に言い、心の中はいつも心配事やらで絶えません。早く安心出来る生活が見えてくれればと思います。

2038-02 箱崎町 女性 60 歳代

- ・避難時の様子 (自宅、近所の様子見、避難呼び掛け、避難)

大地震の後、言いようのない不安感に襲われました。家の庭にいた私たちは、作業を止め、主人は海の近くの一人暮らしのお宅へ車で走りました。私は日頃声をかけに行っている、体の不自由な人たちの家へ向かいました。最初のお宅は、玄関の戸が開かなくなっていて、窓越しに元気な様子をみて、声をかけあいました。窓から入った親戚の人が車椅子を探しているとき、私は、次の近くの家へ行きました。二、三軒回って、不在の人もありました。元の所の近くに戻った時、家も何もかもが壊されて流れていく不気味な恐ろしい音が聞こえてきて、「来たぞう」と叫ぶ声がしました。恐くなって、少しでも上の方へと走りました。

誰かの助けを待っている要援護者という弱い立場の人が、震災時に少しでも安心できるよう、行政の取り組みが前に進んで行ってほしいと思います。全てを流されて絶望の時に、親戚の人にありがたい声をかけてもらって何日かを過ごすことができました。近所の家々にもそれぞれに身を寄せてもらっている人たちがたくさんいました。この海辺の町にこそ、今までのような避難場所ではなく、屋内の避難場所があればいいと強く思いました。

1413-01 箱崎町 男性 60 歳代

- ・被災前の意識 (被災経験から油断)
- ・避難時の様子 (外出先、3m 安心、避難呼び掛け、避難、流された)

これまで何回も地震に見舞われたが、その度の津波も 50 cm～1 m と続きだった。今回は強烈な地震であったが、その来襲が 30 分後だったりして、あのような大津波が来ることは想定していなかった。また、第一報が約 3 m と聞き、5 m の防潮堤が守ってくれるものと思い、すぐに避難も想定していなかった。「津波が来た」との声で郵便局から避難し一目散で庵寺に向かったが、途中で波で足をすくわれ、引き波で水中に引きこまれ、「だめか」と思ったが運良く水面に上ったため、避難していた人に引き上げられ、九死に一生を得た。

教訓：物事は甘く見るな。

1413-02 箱崎町 女性 50 歳代

- ・避難時の様子 (仕事中、津波想起せず、避難呼び掛け、避難、九死一生)

箱崎郵便局に勤務中、地震に遭うが、「津波は来ないものだ」と思いこんでいたため、予震の度に外に出て、体感を少しでも感じないようにしていた。直後に娘 (大阪在住) より電話が入ったが、余り気にもせず、「連絡だけはしてね」と言われ、携帯電話だけ制服のポケットに入れ、ロビーを掃除中、ガラス越しに走っている人の「津波だ」という声に急いで外へ。振り返った時には、バリバリという音とともに、白い煙 (家のこわれた土ぼこりだったようだ) が見え、走って高い所へ逃げた。

ひと息ついてふり返ったら、局は屋根を残し、水のすごい勢いで両側から飲まれていた。その後、高い所へもっともって登って、避難していた人と合流、高台にある避難を免れた家で世話になった。

9090-11 箱崎町 30 歳代

- ・避難時の様子 (外出先、家族の迎え、車帰宅、ここまで来ない、避難、九死一生)
- ・被災の感想 (家族が被災)

14 時過ぎに、箱崎児童館へ長女 (5 才) を迎えに行きたくてリビングをうろうろしていた。14 時 45 分頃、家を出る (いつもは 15 時のお迎え)。途中、車がギシギシ音を立てる。車が壊れたと思ったが、箱崎郵便局の看板が大きく揺れているのに気付く。揺れのおさまるのを待って、児童館へ行くと、サッシはすべてはずれて壊れ、ガラスは割れていた。園の中の本棚も倒れていた。先生、児童に声をかけると、しばらくしてホールから出てきた。上靴のまま逃げるところだったので、外靴をすべてわたす。他の母親たちも来たため、私は長女を連れ車に乗り自宅に戻った [母と祖父 (92 才) が心配だったから]。

明治、チリの津波が来ない所に家を建てていたが、外に出るかどうかが迷いながら、母 (59) と長女 (5) に厚着させ、祖父にも逃げるようにと外から声をかけた。しかし、「ここに津波は来たことがないから、おまえたちも家の中に入れ」と言い、布団をかぶりベッドに横になる。「何でよ……！」と思いながら振り返ると、室浜の山が波で半分隠れていた。「大変だ」と思い、近くに集まっていた人たちに「上れ、上れ」と声を出し、私たち 3 人は裏山に逃げた。途中、母がなかなか山を登れず、声をかけるために振り返ると、箱崎のトンネルは津波に隠れていた。自分の知っている山の高い所まで上がり助かった。途中、長男の名前を呼びながら逃げた (鶴小 1 年生)。怖いというより、どうなっていくのかという不安の方が大きかった。祖父を亡くすとは思ってもいなかった。申し訳ない思いで一杯。

釜石は 30 年に 1 度、こうなっていると言われた。津波に関しては人間が高い山に移り住まなくては同じことになると思う。どんなにきれいな町をつくっても、低い所にいては同じ。こんなに山があるのに……。高い所に道路を通し、公共施設を作ってしまうば周りに人が住んでいくようになると思う。助かった命、救えなかった命を思うと……。間違った復興をしないでほしいと思います。特に子供たちの顔を見ているとつくづく思います。山に移る代わりに低い所に木々を植えればいいのに (動植物のため)。

0161-01 箱崎町 女性 60 歳代

- ・被災前の意識 (先人からの伝承、ここまで来ない)
- ・避難時の様子 (自宅、片付け、避難呼び掛け)

私は、昨年 (平成 22 年) 10 月に箱崎に移ってまいりました (母が高齢のため)。実家は高台にあり、「ここに津波が来たらこの村は全滅だよ」と小さい頃から聞かされていたので、あの大きな地震の時も、揺れが少なくなってから倒れた物を直したり、向こう岸の水面の具合を見て、高みの見物をしておりました。

しかし、海面が一気に盛り上がり、防潮堤を越えようというときに、兄の「皆、早くもっと上に登れ」という言葉で、一段高い親戚の家へ。それでもまだ危ないので、その上の山に登って、知人や皆様と 6 人で助かりました。山の上から見た光景は今でも目に焼きついております。

2364-01 箱崎町 女性 60 歳代

- ・避難時の様子 (仕事中、車帰宅)
- ・被災の感想 (家族が被災)

地震が来た時、私は仕事をしていました。でも余りに大きな揺れだったので、仕事を止めて外に逃げました。外に出てみたら、壁が崩れ、蛍光灯は火花を散らしていました。そうしているうちに、また大きな揺れが来ました。運転手さんが「仕事は途中だけど帰る準備をしろ」と言ったので、すぐに車に乗りました。途中でパートさんたちを降ろしながら行き、片岸の海を見たら、津波が来たので山に登りました。山から見えていたら家が壊され、どんどん流されていきました。恐ろしい津波だと思いました。私は生まれて初めて津波を見ました。こんな恐ろしいものだとは思いませんでした。

山で一晩過ごし、次の日、子供や祖母が心配だったので、山つだいに家路を急ぎました。家に近づくにつれ、見るも無残な光景でした。家のそばに行ったら跡形もありませんでした。子供たちが見えないので、近所の人に聞いたら「見ていない」と言われ、家の下にいるかもしれないと思いました。家は他の家と家の間にありました。叫んでも返事はありませんでした。

「子供たちは助からなかった」と諦めなければいけないのか。私はこれから 1 人で生きていかなければならないのか。どう 1 人でいけば良いのか分からない。

1298-02 箱崎町 女性 60 歳代

- ・避難時の様子 (自宅、車避難、避難先から帰宅、九死一生)
- ・被災の感想 (要援護者対策すべき)

地震が発生して、夫から「高台の桑ノ浜トンネル近くまで車に乗って逃げるように」と言われましたが、近所に足が弱く、心臓の悪いおばあさんが自宅から出てきたので、車に乗せて、トンネルへ逃げる途中、「近くの高台がいい」と言われたので、そこに避難しました。「夜、寒くなるな」と思い、おばあさんのために、私は自宅に戻って、布団を取りに行きました。布団を持って車に戻って来たとき、「津波が来たぞ、逃げろ」と大声で何度も何度も叫んでいる人がいました。悪い思いながらも、おばあさんを車に乗せたまま、私は笹藪の山の笹を掴みながら、前の見えない山を津波に後ろから追われながら、無我夢中で登り上がり助かりました。おばあさんは津波に車に乗ってそのまま海へ流されて行きました。

3 か月後、車は海の底から上がりましたが、おばあさんは今も行方不明です。手を差し伸べた方が良かったのか、見逃した方が良かったのか、命を相手を手付けられたことが、今でも心が痛む毎日です。おばあさんの家族はどう思っているのでしょうか。津波での命は自分自身のことだから、相手を思いあって逃げることは無理だと思っています。

3205-01 箱崎町 男性 70 歳代

- ・避難時の様子 (外出先、津波想起、車帰宅、避難)
- ・被災後の様子 (当日から翌日の様子)

平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分頃、私は釜石市中島町昭和園クラブハウスにて、趣味の会の会合中に地震に遭った。室内の状況を見て津波の危険を感じ、車に乗りこみ自宅のある箱崎町に走り出した。道路は停電により、信号無視。裏道路付近の人たちは外に出て空を見ているようでした。交通渋滞もなく、根浜海岸の箱崎、旧道と箱崎トンネル方向につながる交差点に差し掛かったとき、海面が引いていったので、「津波が来る」と感じて、旧道に車を走らせた。箱崎町を望む高台に来てみると、津波一波が終わらないうちに、二波が強さを増して一波を押し上げていった。自宅の屋根が波に浮かんだのが見えて、2 階建ての箱崎小学校校舎にぶつかり、全壊した状況を確認し、声が出なかった。三波も二波と同時のような感があった。その時、時計をみると 3 時 40 分を過ぎていた。

津波がおさまって、妻の生存を確認するために、山を越えて決めていた避難所「森古宅前」に行き、高台にいる所を確認し、安堵しました。避難所には怪我人やずぶ濡れの人たち数人で、焚き火で暖を取り一夜を過ごした。夜明けとともに、それぞれ倒壊していない家庭にお世話になりました。自分たちは 8 帖間の室に 8 名でした。4 日間お世話になり、その後、自衛隊のヘリコプターにより釜石へ避難。大町小学校、甲子中学校、花巻市温泉にお世話になり、7 月 12 日から仮設団地に居住することになり、頑張っております。

3646-02 箱崎町 女性 60 歳代**・避難時の様子 (外出先、車帰宅、九死一生)**

私は入院していたおばあさんの様子を見に大槌病院に行く途中でマストに寄り、買物をしているときに地震に遭いました。余りの大きさにビックリというか慌てて、病院には行かず、家に帰ろうとしました。車で片岸の農道を走り、東中学校の後ろの道路を走っている時、川を見たら水が全然なく、「これは絶対津波が来る」と思い、トンネルを通ろうかと迷ったが、旧道に上がったので助かった。旧道で津波が箱崎の町を、家、建物、全部壊しながら暴れるのを見て、「あー、私は一足間違えば、あの波にやられたな」と思い、腰が抜けました。

一晩、山道に雪が降る中泊まって、夜の明けのを待ちました。次の朝、ガレキの中を白浜に帰るため歩き、山を越えて、家に向かいました。

3455-02 箱崎町 不明 50 歳代**・避難時の様子 (外出先、車帰宅、避難呼び掛け、車乗捨て、避難、九死一生)****・被災の感想 (反省)**

地震発生時、私は車の運転中でした。家に残した家族が心配で、地震が落ち着いたところで、自宅まで車で急いで帰り、家族の無事を確認し、一安心しました。余震を怖がりながら、避難しなければならぬのに、行動がなかなか進みませんでした。そうしているうちに、「津波が向かって来たから早く逃げろー！」という人の声が耳に入り、車で避難しようとしたのですが、変更して「足で上がろう」と自分に言い聞かせ、家族と一緒に高台に向かいました。私たちは周りの人たちに後ろから押し上げられるように、助かった気がします。

駆け上がりながら後ろを振り向いたとき、黒い山みみたいなものが覆いかぶさるように迫って来ていました。「地震直後、余震を怖がらず、すぐ避難すべきだった」と後悔しています。「何も持たずに…」と言いますが、もし持てたら薬を。危険な状態だったら何も持たずに高い所に逃げる。とにかくすぐ高い所に逃げるということを思いました。

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.3 鵜住居地区 (10) 桑の浜地区 (箱崎町第 13 地割)

1) 補足調査における証言

(萬豊さん、萬和久さん、植田孝彦さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・地震後、地域でお互いに声がけし、「逃げろ」と叫びながら避難した。海に見える位置から、下方の方に津波の襲来を知らせる方もいた。防波堤が高く、海の様子が分からなかった。
- ・要介護者宅を巡回して、避難を呼びかけた方もいた。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・体が不自由な方が逃げ遅れた。
- ・夜に救助された後、低体温症で亡くなった。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・地震発生時、浜では若布施設の復旧作業をしていた。一部の建物が傾くなど尋常な揺れではないことから、津波の襲来を予想した。水門を閉鎖後、地域の全住民は水門外の高台方向にいた。一部の住民は、地震直後から、指定避難場所のほか、それぞれ住家のある沢の高台に避難した。防潮堤から津波が溢れ出る状況により、徐々に高台に避難する住民もいた。
- ・指定避難場所も津波の危険が迫ったため、更にトンネル方向の高台に避難した。
- ・一時高台に避難したものの、逃げ遅れた方の確認、救助のため海岸方向に下る住民もいた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・3月3日の避難訓練には、地域で通常15~16名参加する程度で、同じ顔ぶれが多かった。
- ・災害発生時、消防団とともに、炊き出しなどの役割を決める動きがあったが、今回の震災時には具体化できなかった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・避難訓練時、桑の浜高台等に避難していたことが、今回の震災時にもある程度活かされたと感じる。

C. その他

(1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)

- ・震災の数日前から無線は故障していた。サイレンは鳴らなかった。車のラジオで「津波3m」の情報を知った。

(2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など)

(避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など)

- ・水門は、訓練どおり閉鎖した。
- ・チリ、十勝沖地震では、養殖施設が被害を受けた程度だった。津波が来ることは完全に予想したが、防潮堤もあったので、多少油断していた。
- ・1波目は防潮堤の半分程度まで来た。防潮堤を越えたのは2波目だった。3波目の威力が最も大きく、一瞬で潮が引いて、高波となって襲来した。

2) 地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.4 唐丹地区 (1) 花露辺地区

1) 補足調査における証言

（下村恵寿さん、鳥居雄三さん、佐々木清幸さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・避難訓練の際にはお互いに声をかけあい、迅速に高台へ避難した。
- ・地震直後に屋外へ出て、避難している高齢者を補助した住民もいた。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・高齢で体の不自由な方が流された。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・震災時、海岸では「若布の芯抜き」作業をしていた。地震後、お互いに声をかけあって、軽トラックの荷台に乗りあうなどして、高台や避難場所である漁村センターに移動した。
- ・昭和8年の津波後にできた個人宅3軒を「復興地」と呼んでいる。この向かい側には昔の消防屯所があり、ここまで逃げれば安全だろうという意識があった。避難の際にも、造成地より上へ避難すれば安全であるという認識があった。
- ・家の周辺の細い通路や田畑等を通して、迅速に高台へ避難した。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・自主防災組織の設置はなかった。3月3日に実施した市の避難訓練に参加していた。訓練時、在宅している住民の避難率は高かった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

- ・ソーラー発電の街路灯が役立った。
- ・日頃の地域のつながりが強く、当日以降も道路確保のための共同作業を実施するなど復興も早かった。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・防災無線では大津波警報の放送しか聞こえなかった。予想される津波の高さが3mだという情報を聞いた記憶があるが、それ以外は記憶にない。
- ・防災無線が倒壊し、スピーカーが壊れた。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など）

- ・震災の翌日、陸に未確認の船が打ち上げられていた。夜間にも地鳴りのような音がしていたため、大きな津波が襲来したと思われる。
- ・この復興地の上方には昭和三陸津波で被災した海側の住民が移動しており、自宅を再建した方がいた。

2) 地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

0315-02 唐丹町花露辺 女性 70歳代

- ・避難時の様子（自宅、津波想起、すぐ避難、避難呼び掛け）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき、持出品用意すべき）

地震の大きさで「津波だ」とすぐに分かった。戻れるなら戻りたい。高い所に避難すること。幸い花露辺では、漁村センターが高い所にあって何よりだった。

経験のない大きな地震だったので、倉庫のストーブを消して、夫婦二人で道路に飛び出したら、近所の人たちも皆出てきた。すぐ口々に「大きな津波だぞ」と言っていた。地震がおさまらないうちに、

内側の堤防の波が引いて行くのが見えたので、女性は皆、漁村センターに向けて避難した。

やはり津波だとわかったら高い所に避難する以外に安心は得られないと思う。今回、家は無事だったから良かったが、非常用品の用意をしていなかった。後でつくづく必要だったんだなと思いました。それ以来、リュックはいつでも持ち出せるようにしています。懐中電灯も枕元にあります。

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.4 唐丹地区 (2) 本郷地区 (本郷・大曾根)

[A. 本郷]

1) 補足調査における証言

(小池直太郎さん、佐藤清さん、千葉茂さん、三浦政人さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・消防団は、津波が襲来したので、消防車でサイレンを鳴らして避難を呼びかけた。
- ・住民の多くが家の外に出て、高齢者等に大声で避難を呼びかけた。
- ・津波で足をすくわれ、溺れていた方を泳いで助けた方がいた。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・車で海側へ向かった方を、周りの住民が呼び止めたが、引き返さずに流された。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・多くの住民が地震直後に迅速に避難した。特に昭和の津波後、高台に整備された造成地より下の住民は、指定避難場所等に比較的早く、車や徒歩で避難した。海側の地区では高台等に車、徒歩で避難した。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・3月3日の避難訓練に参加していた。自主防災組織は設置されていないが、町内会がその役割を果たしていた。津波災害に対する地域の意識は比較的高かった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・各自、大きな地震が起これば、すぐに高台に逃げるという意識は高かった。
- ・災害物資の備えはなかったが、震災後にいち早く炊き出しを行った。婦人会がガス釜で米を炊いたり、各自物資や食糧を持ち寄り、被災者同士で分けあった。

C. その他

(1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)

- ・無線は聞こえたが、内容を確認できなかった。パニック状態にあった。

(2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など)

- ・明治、昭和の津波について、先祖から聞いていたが、防潮堤が完成していたので、まさか津波は来ないと油断していた。
- ・水門(2箇所)は、消防団員が通常どおり閉鎖した。

2) 地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.4 唐丹地区 (2) 本郷地区 (本郷・大曾根)

[B. 大曾根]

1) 補足調査における証言

2) 地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

1401-02 唐丹町大曾根 女性 60歳代

- ・被災前の意識 (先人からの伝承、危機意識あった)
- ・避難時の様子 (自宅、3m 安心、避難)
- ・被災後の様子 (当日の避難所の様子)

昭和8年の津波の話はよく聞いてた。散歩している時も、他の沿岸の町に行っても、「どこに避難すればよいのか」をいつも感じ、考えていた。

3月11日の地震では、家にいて、「3メートルの津波がある」という放送を聞いて、家は高台なので安心していましたが、それでも、近くに山に避難した。津波は、家から1メートル下まで来た。予想よりはるかに高い所まで押し寄せた。今後は、とにかく高台。高ければ高い方がいいと思う。電気が消え、テレビもないし、ラジオの感度も悪い地域だから、自分の命を守るのは、自分しかないと思っている。

山の避難先から家に戻ったが、夫と娘は保育園の孫を迎えに出かけていて、一人だったので、皆のいる避難先に行った。そこでは、火を焚いて温かくしてくれたが、更に消防センターの方に移動ということになり、行く途中、流れた家々が重なりあっているのを見た。センターには行ったが、灯油や水もなく、帰ってきた夫が自宅にある灯油と水を運んできた。ストーブを焚いて、一晩中、火の番をしてくれた。婦人会で炊いたおにぎりを1個ずつもらって食べた。夜中に、盛岩寺の和尚さんが果物を持って来てくれた。近所の人が皆一緒に寂しくなかったが、板の間で体が痛かった。朝もおにぎり1個ずつ配られた。

夜が明けてから自宅に戻った。電気・水道は止まったままだが、二日前に用意していたポリ缶の水があったし、当分の米や食料もあった。プロパンガスもあったが、これは最終手段と思い、納屋にあった七輪2個と、れんたん、豆炭、炭を出して、大ナベやかんにお湯を沸かして使った。夕食を過ぎると暗くなるので皆早く眠った。ラジオの感度の悪い所なので、夜に少しだけ聞こえ、昼は全く聞くことができなかった。三日目頃から支援物資が届き、分けながら、食べさせてもらい、感謝だった。一週間目に郵便が来た。郵便ができると思い、知り合いにハガキで無事を知らせた。5日後に届いたそうです。

大槌と陸前高田の親戚が五人亡くなったと知った。たった数十分の出来事が、こんなにも悲しみを置いて行った。辛いけど生きていかなければならない。

1770-11 唐丹町大曾根 女性 70歳代

- ・被災前の意識 (先人からの伝承)
- ・避難時の様子 (自宅、津波想起、避難)

今思い出してもぞっとしますが、避難している時に「ドーン、ドーン、ドーン」と3回爆発したようなものすごい音が、海の沖の方から聞こえてきました。一緒にいた人たちが、「今の音は何だべ」と言っていました。母親から「昭和8年の津波のとき、大きな爆発がした音がした」と聞いていたので、3回も花火を上げる時のような音がしたので、「これは大きな津波が来るかも」と思いました。間もなく「津波が来たぞー」という叫び声。避難している所から道路の下の方を見たら、あんなにあった家が津波に押し流され、向かい山の杉を押し倒し、何ともいえない光景でした。

私の弟の家、甥たちの家は皆、流されました。東前の姉の家も流され、何とか助かったけれど、片

岸小学校辺りに住んでいた姉、義兄が流され死亡。今思うと、小学校があんな所に建っていたから、皆、家を建てて住んでしまった。あんなに高い防波堤があるから安心して建てたのだと思います。

本郷の防波堤は11m80cmとかあると聞いております。16mにかさ上げするそうですが、早く工事をしてください。本郷には消防コミュニティセンターがありますが、今度のような津波が来ると安心して避難してられません。あの時は国道45号線にある(よしや)ラーメン屋さんで泊まったようです。本郷の避難場所に指定されている元青年クラブ跡に避難場所を作ってください。雨、風、寒さがしのげればいいです。本郷で一番高い場所ですから安心して避難できます。早く流れた人たちに家を建てる場所をお願いします。若い人たちは良いけれど、年を取っている人たちは待てません。お願いします。私たちは家が流されないから、こうして自分の家で暮らせるから幸せだと思っています。市も国も大変だと思いますが、よろしくお願いします。

9035-11 唐丹町大曾根 男性 60歳代

・避難時の様子(工作中、車帰宅、避難)

3月11日の強い地震は、今まで経験したことがない揺れ方でした。私は海岸の作業小屋で、若布の箱詰め作業をしていた最中で、慌てて外に出ました。軽トラが踊っているように見えて、海面も波が立っていました。

揺れが収まってすぐに車で家に向って、家の中を見たら、入れるものではありませんでした。「早く実家の母の所に行くぞ」と言って、歩いて避難することにした。歩いているときに、ラジオでは「津波は3m」と言っていました。少し経って「6m以上」になったので、「防波堤を越えて来るぞ」と思い、高い所に避難しました。

2587-01 唐丹町大曾根 男性 70歳代

・避難時の様子(自宅、避難呼び掛け、車避難、九死一生)

・被災の感想(すぐに避難すべき)

あの日、私は家に隣接する納屋で趣味の釣りの仕掛け作りに夢中になっているところでした。会社定年後に勤めたアルバイト先も10年勤め、22年12月で退職し、完全に無職となった。かねてより計画していた船外機船を磯漁に使いやすいように修理改善し、十日ほど前に届いたばかりだった。今年からは勤めもなく好きな釣りと野菜作りを楽しみに、その準備に夢を膨らませていた矢先の地震津波であった。

初めは静かな揺れであったが、次第に揺れが激しくなり、「ただごとではない」と思い、外に飛び出した。同時に、妻と息子も家から庭に飛び出しました。そこに近所の住人も数名加わり、地震の大きさなどについて、あれこれ話をしておりましたが、いつでも避難できるように車のエンジンはかけていた。そこに地域消防団員が津波の来襲を叫び、避難するよう指示があった。私と息子は直ちに避難すべく車を発進させた。車を発進させてすぐ、助手席の息子がミラーを見て津波が後ろに迫っていることを私に告げたことで難を逃れました。妻と隣の婦人は裏山に避難し、無事でありました。津波来襲を知らせてくれた消防団員に感謝しています。

現在、我々家族は自宅1階はガレキが入り、何から手をつけてよいのか途方に暮れるばかりでしたが、幸いに2階までは水が上がりず、大修繕をし、仮設住宅と併用しながら暮らし始めました。家の中には津波の爪痕があちこちに残っておりますが、移転することを選択せずその場に住み続け、後を継ぐ者たちに、津波の怖さ、恐ろしさを語り継いで参りたいと考えております。海岸から自宅まで600メートル離れており、裏は登りやすい山なので、「大きな地震があったらまず逃げる。逃げれば命だけは必ず助かる。しかも逃げるときは一人一人」を言い伝えて行くつもりです。

9022-11 唐丹町大曾根 男性 60歳代

・避難時の様子(工作中、津波想起、すぐ避難)

14時46分頃、私と妻と2人の女工さんの計4名で海から30mの作業所で若布作業中に、突然の地鳴りに始まり、大地震となった。すぐに作業所の外へ出るが、65年の生涯の中で経験のない大地震に「必ず今まで想像も付かない津波が襲ってくる」と感じ、妻と女工たちを車で高台にある避難場所へ走らせ、自分は津波防波堤の所まで避難した。沖が良く見える所で海より10m以上高く、ある程度安心できる所であったが、波が引き始めるがなかなか津波が押寄せて来なかった。

20～30分後、沖が白波となり津波が来たとき、自分の作業所が一瞬の間に飲みこまれた。津波の恐ろしさを目の当たりにし、身の危険を感じ、また20m以上高台の大杉神社へ走って逃げた。高台に登り、下を見ると防潮堤を津波が越え、本郷町内へ流れて行った。高台の下の道路を軽トラックが走っていたが、津波に流され、誰かが運転しているように道路を流れていった。時間の流れも忘れ、津波

が引くまで高台で眺めていた。その後、自宅へ歩いて帰る途中、本郷町内の約 50 軒は見る影もない有様だった。

2918-02 唐丹町大曾根 女性 70 歳代

- ・被災前の意識(先人からの伝承)
- ・避難時の様子(工作中、帰宅、車避難、避難呼び掛け、九死一生)
- ・被災の感想(伝承のおかげ)

あの日、私は海岸の若布作業所にいて、あのとてつもない大きな揺れに、「目の前の舟揚場が 2 つに割れるんじゃないか」とさえ思いました。私は海の動きに異変を感じ、「大津波が来るのでは？」と予感した。大急ぎで家へ戻り、留守番をしていた主人と車で避難所へ急ぎました。近所の人たちも不安そうに大勢集まり、不気味な雰囲気にもたってもいられませんでした。そこへ、消防の人達からすぐ近くまで津波が来たことを大声で知らされ、再び高台へ移動しました。そのとき後ろを振り向いたら、何と大きな山のような黒い波がものすごい勢いで、さくらトンネルから激流となって小舟、漁業資材、ガレキ等一緒に押し流しながら、私の家や周辺を直撃。その最中、私たちは懸命に高台へと逃げました。避難するとき、母親の言葉を思い浮かべながら逃げました。昭和 8 年の津波のときもやはり大きな揺れに、皆、家から飛び出したそうです。地震も落ち着き、寒さに耐えながら不安に思っているところへある長老が来て、「こんな無風晴天、星夜の夜に津波なんか来るものじゃない」と言ったそうです。その言葉に惑わされ、家へ戻った家族はほとんど流されたそうです。だから、「落ち着くまで、絶対家へは戻ってはならない」と言い聞かされておりました。

被害を受けた私たちは行き先を失い、失望のどん底にいるときに親戚から暖かい言葉で迎えてもらい、家族三人で 2 か月もお世話になりました。今は雇用促進住宅の方に住むことができて、ありがたいです。今回の震災で、家族全員無事であったことに感謝し、私たち被災者に支援、救援して下さい皆様、ボランティアの方々に感謝しながら、1 日も早い復興、復旧に期待しながら、残す人生を前向きに生きようと思います。

1401-04 唐丹町大曾根 女性 30 歳代

- ・避難時の様子(自宅、津波確認後避難)

家は高台にある。地震の時は、保育園に行っている子どもの心配をしていた。いつも帰る頃だと思い、外に出て、バスを待っていた。しかし、そのうちに防潮堤を越えて来る津波が見えたので、さらに高い所に上った。下の方の家は流れて、畑は沼のようになった。子どものことを心配したが、2 か月に一度の避難訓練をしているので、先生方を信じていた。津波がおさまリ、途中まで車で送ってもらったが、国道もガレキで通れず、歩いた。避難していると思っていた神社から、荒川の集会所にいと聞き、更に遠くまで行き、子供と会えた。皆、無事だった。狭い所で座ったまま眠っていた。

7002-01 唐丹町大曾根 女性 70 歳代

- ・避難時の様子(自宅、すぐ避難、避難先から帰宅、避難呼び掛け、九死一生)
- ・被災の感想(先人からの伝承、反省)

一回目の地震の時、大きな揺れに慌てて外に出て高台に逃げた。隣の人が、荷物を持ってゆっくりと上にあがってきた。それを見て、何も持たずに逃げたので、「私も」と思い、大切な物を取りに戻った。家の中に入った途端、地鳴りする大きな揺れ、その時「津波が来たぞー！」と大きな声、何も持たずにただ夢中で逃げた。自分にとって一番近い高い所を目指して、草むらを登った。県道に上りフェンスを乗り越えて振り向くと、波のしぶきが山のように見えた。更なる上の杉山に登り、後ろを見ると家は流されていた。ただ、呆然と見ていた。泣くこともできず、そのまましばらく見ていた。

私は津波のことについては少し勉強しているつもりだった。だが実際になると、「考えてもみない行動に出る」「慌てる」、それも私一人のせいもあるだろう。私たちは過去二回も流された土地にいる。岩手大学生が調査に来て、いろいろと話した時があった。その時はまだ主人も元気だった。気にはなったが、身近には考えなかった。5 年くらいしか経ってないと思う。「先代の人が言うことが正しかったんだなー」と思うと、今更と思うのである。主人が死んで 3 年になる。子どもたちは都会暮らし、私は都会に行く気はない。

私の経験は子どもたちに話すつもりだ。「慌てずに一度逃げたら戻らない」。あの日の一日前に戻れたら、高台に納屋に大切な物を入れておけば、何か家財も残るのにと残念である。後の祭りである。ただ、私一人でないということに救われる。同じ思いの人が大勢いる。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.4 唐丹地区 (3) 小白浜地区

1) 補足調査における証言

（佐々木啓二さん、浅田征光さん、水上やす子さん、川原敬さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・海側の住民は高齢者の避難を誘導しながら、ともに高台を目指して避難した。
- ・国道や路上で海を見ている方がいたので、住民が上へ逃げるように呼びかけた。
- ・消防団の呼びかけで、唐丹中学校の生徒・先生が高台にある紡錘工場（旧ラリーバ）へ移動する。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・一部の高齢者は、避難せずに自宅にいたため、津波に流された。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・地域には、昭和8年津波後の造成地があり、造成道を縦断する道路は、地域で「敷地通り」と呼ばれている。この「敷地通り」より下の海岸側に住む住民の多くは、「この敷地通りまで避難すれば安心」という意識があり、今回の震災でも比較的早く「敷地通り」まで避難し、海の様子を見ていた。その後、浸水の危険を感じて、更に高台に移動した。
- ・「敷地通り」より上の住民の多くは、高台のため避難せず、自宅で様子を見ていた。
- ・海岸付近の水産加工場にいた住民・従業員は防潮堤に上がり、海の様子を見ていた。一次避難として防潮堤に上ることは、地域で習慣化していた。その後、海の様子を見ながら更に高台へと避難した。
- ・3mという波高の情報を信じ、125mある防潮堤は安全だと思い、そこへ避難した方が多くいた。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・平成17年10月に、自主防災組織を設立した。3月3日の避難訓練に参加するほか、特に取り組んでいることはなかった。海側の地区では避難訓練への積極的な参加が見られたが、高台の地域では避難訓練の参加者は少なかった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

- ・町内でハンドマイクや毛布等を備えていたが、震災時に取り出す余裕がなかった。食料の備蓄等はない。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・防災無線では大津波警報の放送しか聞こえなかった。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など）

- ・防潮堤が高いため、海の様子が見えない分、不安を感じる住民もいた。
- ・水門が4か所あり、中央の水門については地域の企業の社員が手動で閉鎖していたが、その他は消防団が通常どおり閉鎖した。その後、消防団が防潮堤の上で海の様子を見ていた。
- ・神社に使い古しのロウソクが20本ほどあり、社会福祉法人へ提供した。また、社会福祉法人から毛布を提供してもらうなど、事業所との緊密な連携ができた。

2) 地域懇談会における証言

上村勝利 さん

- ・東日本大震災がたまたま日中であつたからよかったものの、夜間でもすぐに避難して被害を最小限にできるように、就寝時には枕元に靴や着替えを置いておくといった習慣を身につける必要がある。
- ・もし漁船で出ている時に地震があつたら、船を着けることができる所にすぐに着けて、高い所に上るように決めておくといった、漁協での制度やルールを構築する。

- ・第1波で自分の家まで津波が来ていないのが分かっていたとしても、第2波第3波で時間があっても何かを取りに行かないと、小白浜の方たちは分かっていたので、人的被害が意外と小さかった理由だと思う。
- ・防潮堤だけでなく、防災放送で流れてきた「予想津波高“3メートル”」も併せて過信して安心してしまった。

上村年恵 さん

- ・明治・昭和の津波に対応した防潮堤があることで過信をして安心しきっていた。津波の危険が完全になくなったわけではないことを忘れてはいけない。
- ・大津波警報や“3メートル”は聞いていないが、津波が来るんだという頭で逃げたと思うのです。

岩澤ミツ子 さん

- ・若い方が「津波が来たぞ」というのを聞いてパニックになってしまい、わざわざ低い所を通過、余り安全ではない所に行ってしまった。近くには高い所があるのに、避難訓練では低い所を通過して唐丹中学校（避難場所）を目指していたが、自分がその時のいる場所に合った避難場所をふだんから考えておくべきだと思った。
- ・避難場所で夜を過ごすことを考えて、常備薬や衣類等を持ち出し袋に詰めていたが、昼だったので思いつかず持ち出さずに避難してしまった。
- ・スポッと履けるような靴を準備して、すぐに避難できるようにしていた。しかし、準備していたものは長靴だったために、水が浸水してしまった時に移動の妨げになってしまった。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

0122-01 唐丹町小白浜 男性 70歳代

- ・被災前の意識（危機意識あった）
- ・避難時の様子（自宅、津波想起、すぐ避難）

地震の大きさと長さから「津波が絶対に来る」と思い、家の周りに異常がないか見てまわって、すぐに近くの高台の駐車場（今まで津波が来たことがない所）へ避難した。津波が防潮堤を越えて来たので（12m50cm）、「これは大変だ」と思い、更に高い国道45号までかけあがった。今までに見た津波とは全く違った津波の威力に、ただ呆然として見ていた。引き潮で海底が見えたとき、地獄を見たような気がした。

いつも夫婦で避難について話をしていた。「避難場所（唐中校庭）より高台で、自宅に近いトラックステーション（元）か、愛恵会がいい場所だ」とか、「津波の恐ろしさを後世に伝えるためには、実際に見なければ話が出来ない」と思っていることも夫婦で話しあっていた。避難するときに「かあちゃん、慌てるな」と言ったが、やっぱり慌てていた。避難袋は二つあったが、一つだけ持って逃げた。

2939-05 唐丹町小白浜 女性 70歳代

- ・被災前の意識（先人からの伝承、ここまで来ない）
- ・避難時の様子（自宅、ここまで来ない、片付け、避難呼び掛け、流された）
- ・被災の感想（すぐに避難すべき）

あの日、私は雨樋の修復のため大工さんを依頼しており、3時のお茶の案内をするため外に出て、家の中に戻った時に地震が発生しました。揺れも強くて、時間も長かったので、「もしかしたら、津波が来るかもしれない」と思いながらも、「まさかここまで来ないだろう」と店の陳列棚から落ちて散乱した缶ビール等の片付けを始めました。その時、店の前を通る女性の「堤防があぶない、波を被りそうだ！！」と叫ぶ声に、思わず外に出て、隣の脇にある空き地に集まった近所の12～13人と一緒に海を眺めていました。その時、海岸から高台への坂道を茶色の波が立ち上がって、その先を丸めた状態で、私たちの見ている高台に向かってどんどん上って来たのです。「ここもあぶない、逃げろ！！」と叫んで、人々が逃げ去ったその瞬間に足の悪い私は波に飲まれて、ものすごい速さで60mくらい流されて、路地裏に流れこみました。その速さと言ったら、あっ！！という瞬間の出来事でした。自宅の斜め向かいの商店の裏の倉庫の前に流れこみ、流れて来たガレキと一緒にぐるぐると流されながら、浮き沈みを繰り返しました。流れて来た大きな板や樽などに掴まりながら、何とか道路際に辿り着き、土手から路上に這い上がりました。衣服を着替えるため道路を横断しようとしたのですが、散乱する多量のガレキに阻まれて、家に入ることができず、全身ずぶ濡れのまま裸足で裏道を通り避難所に向か

いました。

被災から1か月ほど過ぎて、二男の家で世話になりながら、被災の状況や自分の心境を短歌に詠んで記録を残しております。その一連を取り上げてみます。

- ・一瞬に 津波（なみ）にのまれて ながれつつ 「死んではならぬ」と 声に出したり
- ・ずぶぬれの 着衣ひきずり 裸足で歩めば 三月（やよひ）の風が 骨までしみる
- ・はい上がり 寒さと怖さに 震へつつ 歩めば避難所 はるかに遠し
- ・まさかとふ そのまさかなり のろのろし 坂のぼり来たる 波にのまるる
- ・苦しみは われ一人にて あらざりと 思ふかたへに 悲しみの湧く

私の家は昭和8年の三陸大津波の後、復興地として高台に建てられた小白浜商店街のほぼ中央に位置しております。子供の頃から、「大きな地震が起これば津波が来る」と教えられてきましたが、高い所に住んでいるという安易な考えから、私は「まさかここまでは津波が来ないだろう」と自分勝手に決めこんでいたのです。その「まさか」が見事に打ち破られ、自宅も1階は全部流され、2階も修理不能で解体することになっています。私はこの度の経験から自分勝手な判断ではなく、とにかく大きな地震が起きたら津波が来ると考えて、即時に高い場所に逃げることにしました。それが自分の命を守る第一条件であることを身をもって体験いたしました。自宅の被災状況から判断すると、外に出ていなかったら私は生きていなかったと思います。幸いに命を授かった私は、これからの残された人生をこの度の体験を胸に、一日一日を大切にしっかりと生きていきたいと思っております。

1410-02 唐丹町小白浜 女性 70歳代

- ・避難時の様子（自宅、片付け、避難呼び掛け、海の様子見、津波確認後避難）
- ・被災後の様子（当日の避難所の様子）

あの大地震の後、私は棚から落ちた商品（醤油や酢のびんのかけら）を片付けていました。通りを通る人が「姉さん津波だよ……」と言うので、店より少し低い空き地へ見に行きました。商店の人たちも一杯見えていました。そしたら、防潮堤が破れ、船、車、家がアッと思う間に目の前まで押し寄せてきました。「危ない、ここまで来る」と思い、すぐに避難場所（唐丹中学校校庭）に逃げました。そこでは大勢の人たちがいましたが、「校庭も危ないので裏山に逃げて下さい」と校長先生が何回も何回も大声で呼び掛けていました。

あの日は寒く、子供たちは寒さと怖さで泣いていました。逃げる途中、私の家のすぐ後まで波が来ていました。下通りは全て流されてしまい、泳いでいる人たち、屋根に上がって助けを求める人もいたらしく、後で聞いてびっくりしました。私たちはそれでも何事もなく避難しました。その夜は、中学校体育館で7～8人で寒い夜とおにぎり1個の食事をしました。「〇〇さんが来てませんか」と帰ってこない人たちを捜して訪ねてくる人が大勢いました。眠れぬまま一夜を明かしました。

下はガレキ（家や車、若布、ホタテの資材）が、歩く所もなく、空いている道路や通路を塞いでいました。店には車が突っこんでいて、ストッカー、冷蔵庫、自動販売機、商品も流され、戸、タタミ、テレビ、ファンヒーターも流され、ライフラインも全部ストップ。翌日は、愛恵会に行きましたが、そこでも大勢で泊まる所もないようなので、裏から家に入り、残った2階を片付けて、もらったおにぎりを食べて過ごしました。

13日未明（午前2時頃）、埼玉にいる息子が、「地震の後、何の連絡もつかないので、すぐ来た」と言って駆けつけてくれました。父さんは「何で来た」と言っていたけど、私は息子の姿を見て、ありがたく、トイレに入って大声で泣きました。

70歳を過ぎた年寄りが、この家をどのように片付けたらいいか、手のつけようがないのです。ありとあらゆる道具を持ってきて、道路や店に突っこんだ車を片付け、斜めになった柱を直し、冷蔵庫の線をつなぎ、発電機を借りてきて、隣近所の冷蔵庫の電気を通しました。水は学校の裏山からひっぱり、皆に水を使わせました。洗っても洗っても泥との戦いでした。2か月くらいこんな生活が続きました。それでも私の家は早く片付いたようです。あれから8か月、今はその息子も工務店で働いています。

「まさかここまでは津波がこないだろう」と、甘い考えでした。でも、この町内で津波で亡くなった人は1人、後で亡くなった人が1人だけでした。これも日頃の訓練が行われていたからだだと思います。流されなかった人たちが作ってくれた食事や救援物資、義援金、見舞金も本当にありがたかったです。これからまたこんなことのないよう、訓練には協力して、自分の身を守りたいと思います。

0709-02 唐丹町小白浜 女性 70歳代**・避難時の様子（自宅、海の様子見、避難の呼び掛け、避難）**

家の中にいるときに地震が発生しました。外に出ると、大勢の人がうろついていました。皆、海を見て、あっけにとられていました。特に年寄りたちは駐車場にとどまって海の様子を見ていました。すると、市役所に勤めている友達が「薬と大事な物を持って、逃げてください」とアドバイスしてくれた。家に戻って、リュックに薬と水を入れ、ジャンパー、帽子を着て、裏山の階段を上りました。後ろを振り返ると、駐車場に大きな口をあけて津波が入ってくるのが見えました。「これは本当に大津波が来るのだ」と自分に言い聞かせ、必死に逃げました。国道に上ると、大勢の人がいました。

3177-01 唐丹町小白浜 男性 60歳代**・避難時の様子（仕事中、ここまで来ない、帰社、水門閉鎖、避難、九死一生）**

地震発生時、会社近くの駐車場（港町）でクレーンの整備をしていた。「津波はここまで来ないだろう」と思って、自分の車も多少移動させて、会社に歩いていった。水門を閉めて、事務所に戻っていた同僚と、近くのホテルに避難した。

最初はホテル1階上のベランダで、皆で様子を見守っていました。防潮堤を越えそうなので、急いで屋上に駆け上がりましたが、波が早く、階段で駆け上がる人の中には足が濡れる人もいました。初めから屋上に避難していれば良かったと思います。津波に対する予想の甘さがあった様に思います。

2452-11 唐丹町小白浜 女性 80歳代**・避難時の様子（外出先、帰宅、ここまで来ない、避難呼び掛け、九死一生）****・被災の感想（3m安心）**

私は2時35分に病院に行くため、息子の車に乗った。そのときすごく車が揺れた。息子も消防団員ですので、「これは津波が来る」と言って、息子はすぐ出動した。私の家は昭和8年の津波後の復興地なので安心感があり、廊下で第一波が防波堤を波が越えてきたのを見ていたけど、まさか家まで来るとは思わなかった。娘が「下の防波堤まで津波が来ているようだ」と言って、一緒にバックだけ持って逃げた。釜石の放送は大津波と言わず、3mと言った。これで大分の人が油断したのではないのでしょうか。幸い、我が家の場合、すぐ上に登る石段が近くにあったから助かったものの、釜石の放送は駄目だった。

2452-01 唐丹町小白浜 男性 50歳代**・避難時の様子（3m安心、海の様子見、避難、流された）**

津波警報では3mと言ったので、小白浜の防潮堤は12mなので、その場所に行き、海の様子を眺めていた（消防団員なので）。第一波のときは、海水は引かずに灯台のある防波堤を越えてきて、第二波の時は、灯台の防波堤よりも更に引いたので、「これは大変だ」と思っていると、みるみるうちに波が来て、半身水に浸かり、車は消防の車も自分の車も皆流され、自分自身も危なかった。水門は何度も開閉の手入れはしていたし、小白浜の場合は消防団の者は誰も津波にまきこまれた者はないけど、今後は水門の開閉は自動にしたらいいと思う。

小白浜の場合は消防団に入団する者はなく、退団したくてもできないです。親が消防団員だと子供も入団するけど、親も団員でなかった者はここの言葉でひまだれだと言って、入団する者はいません。今度のような津波は1,000年に一度とか言うけど、これからは大変だと思う。

幸い漁協の定置網に従事しているけど、養殖もできません。今のうちは良いけど、来年のことを考えると大変だと思う。鮭も今はまあまあとれているけど、今年は沖の方を魚が回避しているらしく、網にはとれないです。

1612-03 唐丹町小白浜 女性 30歳代**・避難時の様子（仕事中、津波想起せず、片付け、避難者確認後避難）**

当日、地震前は何の変わりのない穏やかな日だった。大きな揺れが何度も襲ってきたとき、家屋の倒壊は心配したが、津波のことは頭になかった。大町にある会社で、倒れた棚などを皆で片付けたりしていたが、近所の人々が避難しているのを見て、とりあえずのつもりで全員で避難した。

薬師公園に徒歩で向かう際、車で大渋滞していた大通りを抜け、高台から海を見つめていた。松原地区の45号線が車で渋滞しているのが見えたその時、白川ビル付近がプールから溢れた水のような波に飲まれた。家や車が流れて行くのを目にした時、現実感がなくなった。そして、まさか製鉄所の壁を壊し、津波が流れこんでくるとは考えていなかった。渋滞していた車がみるみる流され、何もできず見ただけだった。携帯も地震直後からすぐに使えなくなり、ラジオもなく、防災無線も切れ、町中が静かだった。

3533-02 唐丹町小白浜 女性 50 歳代**・避難時の様子（仕事中、避難、家族の様子見、九死一生）**

地震発生時、私は職場で働いていました。水産加工場で、海が目の前なので、とにかく高台に避難しました。自宅にいる母がとても心配で、車を置いたまま避難したので、何度か車を取りに戻ろうとしましたが、工場長に止められ戻らなかったの、今生きていられると思っています。

2886-01 唐丹町小白浜 女性 60 歳代**・避難時の様子（自宅、3m 安心、片付け、津波確認後避難、九死一生）****・被災の感想（すぐに避難すべき）**

あの時、いつもと違う強い揺れと長さに、家の倒壊が頭をよぎりましたが、それでも倒れて困る物は床に置いたりしてから外へ出ました。道路の真ん中に出たとき、揺れが止まりました。辺りはガラス瓶だらけでしたが、私の身には何も怪我はありませんでした。私の家は旧 45 号線沿いにあり、自分では高台の方と思っていたので、「津波が来てもここまでは」との思いがありました。間もなく、防災無線で 3m の大津波警報が発令されました。でも、「12m の防潮堤があるから大丈夫」と思い、間もなく帰って来るであろう孫たちのために、部屋中にひっくり返っている画鋏を拾っていました。そうしているうちに、今まで聞いたこともない海鳴りの音で、ふと顔を上げると、玄関から続く廊下に沿って水が入ってきました。「何が起きているのだろう」と、最初は水に沿って裏の方へ行きましたが、何となく家にいるのが危険な気がして、水の量も足が隠れるくらいだったので、玄関から高台に向かいました。高台に着いてびっくり。旧 45 号線道路の下は湖になっていました。

繰り返す余震と、繰り返す津波に家の様子は見れず、私は友人宅に避難しました。息子は会社から帰ることができず、孫たちは避難所と眠れない一夜が過ぎました。夜明けを待って家に帰ると、玄関からガレキ、泥の山でした。それからの約 2 か月間は毎日後片付けでした。

今、思うことは、私の家は皆、無事でしたし、家もあります。まだまだ大変な目に遭っている人の事を思うと「頑張らないと！」と思います。「ここまでは津波は来ない」という考えが一番間違っていました。「これからは大きな地震で警報が出たら直ぐ高台に走ろう」と家族で誓っています。

2399-11 唐丹町小白浜 70 歳代**・避難時の様子（自宅、避難呼び掛け、避難）****・被災時の様子（津波襲来時の様子）****・被災後の様子（当日の避難所の様子）**

あの日、主人は午前中に、親戚の法要に行き帰ってきて、午後、リハビリのために釜石整形クリニックへ行って、診察券を出した時にグラッと来たんだそうです。その後、すぐに車で嬉石、大平通って、平田に来たときに沖の方を見たら、白い線みたいのが見えたんだそうです。津波とは知らなかったそうです。「とにかく、平田を飛ばしてきた」と言っていました。その時は、もう小白浜に津波が来ていたらしいです。法要にきていた親戚の奥さんの弟さん夫婦は、釜石から大槌へ帰る途中で津波に飲まれたと聞きました。

そのとき、私は家に一人でいました。地震があった時、すぐ縁側と玄関を開け、テレビをつけたら、消えていてダメでした。おさまるかと思ったら、ますます大きくなって、テレビが揺れるので押さえるのが大変でした。地震がおさまったので外に出ようとしたら、息子から電話が鳴りました。「寒いから暖かくして逃げるように」と言われ、大事な物が入っているリュックと薬の入っているショルダーを持って出たら、近所の人たちが裏山に上がって海の方を見て、「津波だ」と言っていました。

第一波は早く来ましたが、わりかし穏やかな波だったと思います。その時、組合の油タンクが浮きまして、友達の家も海の側でしたので、フワッと浮いて流れ出してしまいました。一波が引くと同時に、第二波は大きな口を開けた様な黒い泥水濁のように来ました。それが家の下まで来たんです。まさかこの高い所まで来るとは夢にも思っていませんでした。そのときに泥水とガレキの中に人が流されてきたのが見えたので、「誰か流されて来たよ」と騒ぎましたら、一緒に津波を見ていた近所の男の人たちが助けに行き、危機一髪でした。これではもしかしたら家までくると思い、リュックを背負って家に鍵をかけて、中学校へ行ったら「ここもダメだからもっと高い所へ」と言われ、国道の下にある姑の実家に避難しました。私ばかりでなく皆も来ていました。

夜は寒くなってくるし、でも練炭ストーブを焚いてくれたり、炬燵に湯たんぽ入れたり、人も多から暖まるわけではないけど、その晩は何も口に入れることはありませんでした。余計に寒さが体に凍みました。でも家族皆、無事で良かった。息子たち家族も中妻にいるから幸いでした。車の中で寝たそうです。水も電気もなく、大変な時を過ごしました。

3309-02 唐丹町小白浜 女性 60歳代

- 被災前の意識（ここまで来ない）
- 避難時の様子（自宅、とりあえず避難、流された、救出）
- 被災後の様子（当日の避難所の様子）

あの時の地震の大きさ、長さは初めての経験でした。「地震の時はトイレは柱が多いので安全」と聞いていたので、一旦逃げこんだのですが、長かったので庭に出て、木にしがみつきました。6才の孫を幼稚園から連れて来て預かっていたので、少し落ち着いてから自宅から30m離れた駐車場の車の中で様子を見ていました。すると、道路の向かいの空地に、下の家が浮いてきました。ビックリして車から出たら、既に車の下まで波が来ていて、孫と2人で膝まで濡らしながら、近所の人に裏の道路に引き上げてもらいました。その後、中学校に行ったら、校長先生から「ここも危険だからもっと上に」と言われて、国道まで上がりました。孫はズボンと靴下、靴を借り、私も靴と靴下を取り替えただけでも随分助かりました。

主人と別々に行動してしまい、後で大いに反省しました。暗くなるまで外でドラム缶に火を焚いてくれた所で暖をとっていましたが、孫と一緒にいたので中学生と一緒に国道沿いの事務所でおにぎりを分けてもらって、1泊しました。自宅は中学校の下で商店をしていて、「ここまでは絶対来ない」と変な自信があったし、家からは海が見えないので、避難するのが遅れてしまいました。波が来て自宅の道路の方へ戻っていたら、流されていたと思います。自宅前の人たちのうち、何人かは自宅の裏の方へ流されましたが、無事でした。

2235-01 唐丹町小白浜 女性 70歳代

- 被災前の意識（避難していた、先人からの伝承）
- 避難時の様子（自宅、津波想起、すぐ避難）
- 被災の感想（後世に伝えるべき）

現在、私の家は海の見える高台にありますが、小さい頃は海の近くに家があったので、地震が来たら裸足で高い所に避難したものです。「津波はおっかない」と言い聞かされてきました。今はテレビ、ラジオなどで情報が分かるけど、昔はなかったので、「地震が来たらすぐ津波が来るもの」と思っていました。

3月11日の地震は今までに経験したことのない大きな揺れだったので、「今度こそ本当に津波が来る」と思いました。第一波で家が流されるのを見て、怖くて更に高い所へ避難しました。下にある家はほとんど流されてしまいましたが、我が家は何とか難を逃れました。

多くの犠牲者を出した地域では何で逃げなかったのか、本当に残念で悔しいです。二度とこのような犠牲者を出さないためにも、未来の子供たちに伝えていかなくてはなりません。地震が来たらすぐ高い所へ逃げると。

1768-01 唐丹町小白浜 女性 60歳代

- 避難時の様子（外出先、海の様子見、避難呼び掛け、避難、流された）
- 被災の感想（すぐに避難すべき）

地震発生時、高台にいたので、外に出て、津波が来るのを見ていました。今思うと大きな地震だったのに、なぜ見ていたのか？まさか津波がここまでくるとは思わなかったので、消防、パトカー、かなりの人が見ていました。その後、津波が防潮堤を越えてくるのを見て、皆が「逃げろ」となり、走りました。すぐ前が高台にまっすぐなので、道路をお寺の山間に逃げる人を見て、付いて行ってしまいました。その時、既にパニックになっていたんだと思います。おかげで津波に飲まれました。今は「何が何でも高台に避難」と思っています。波にのまれた人は15人くらいいたと思いますが、全員助かりました。これからの反省にしたいと思います。

4. 地域の避難実態（根拠資料）

4.4 唐丹地区 (4) 片岸地区

1) 補足調査における証言

（鈴木道孝さん、平岡清貴さん、留畑孝子さん、小澤秀基さん）

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導（どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか）

- ・率先して避難を呼びかける方がいた。消防団では、企業の社員に避難を呼びかけた。
- ・最初、唐丹小の児童・先生は校庭にいた。消防団の呼びかけにより避難先に組織的に移動した。
- ・川目地区では近所の住民に声がけし、安全な場所に誘導する方がいた。

(2) 亡くなった方の避難行動（可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因）

- ・一旦避難所へ逃げたが、ペットが心配になり自宅に戻り犠牲になった。
- ・店の従業員と客が犠牲になった。
- ・駅前の広場付近で5名の高齢者が避難の途中で間にあわず犠牲になった。
- ・市内から自宅に車で戻る途中、流された。
- ・地域外から転居してきたため、津波に対する知識が欠如していたことも考えられる。

(3) 主な避難行動の状況（地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項）

- ・唐丹駅前広場は高台となっており、海の様子も確認できるため、当初、多くの住民が集まった。更に浸水する危険を感じて、高台に避難した。
- ・「海側に行ってはダメだ。」危険な場所を通して指定避難場所に行くより、一旦近くの高台に逃げる必要があるとの認識が地域全体にあった。
- ・山側の川目地区は、水害が多発し、河川の水が氾濫するなど、生活道路も不通となることがある。ふだんから警報が出ると、避難先である片川集会所へ避難することが、習慣化されていた。このことが、今回の災害においても迅速な避難を促した。
- ・震災の1～2年ほど前に、天照御祖神社への避難路を整備したのが功を奏した。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

（自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など）

- ・自主防災組織は設置していなかった。市の実施による避難訓練以外の取り組みはなかった。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。（良かった点・課題 など）

- ・町内会として備蓄している防災物品はなかったが、水やジュースが倉庫に何個かあり、配給することができた。

C. その他

(1) 防災無線（聞こえ方・課題など）

- ・震災時、3mという大津波警報の情報は聞こえたが、その後は記憶にない。パニック状態になっていた。
- ・会社で亡くなった方は、敷地内の騒音で無線の音が聞こえず、犠牲になった。

(2) その他（避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に係る地域の主な施設など）

- ・地震がきたら近くの高台に逃げるという暗黙の了解があり、各自徹底していた。
- ・幼少時、枕元に風呂敷に衣服を畳んだものを置いて就寝していた。地震が来たら、すぐさま戸を開けていた。
- ・地震後、消防団員が手動で水門を閉鎖し、水門の上から海の様子を見ていた。危険を感じたため、国道から駅の方へと避難した。
- ・津波は最初、引き波から始まった。海の底が見え、身の危険を感じた。

2) 地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

4. 地域の避難実態(根拠資料)

4.4 唐丹地区 (5) 荒川地区(荒川・下荒川)

[A. 荒川]

1) 補足調査における証言

(川原清文さん、熊谷久雄さん、津江勝弘さん)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・消防団では水門閉鎖後、海の様子を見ていたが、津波を確認し、住民に避難を呼びかけながら、消防屯所まで避難した。
- ・住民同士が自主的に近所に避難を呼びかけ、一部の要介護者の避難については車を利用したり、背負ったりするなどの支援をした。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・避難を呼びかけたが、避難しなかった。
- ・浸水域にある自宅に戻った。
- ・避難場所が浸水した。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・指定避難場所に避難する経路が低地で、住居が危険である場合には、各自宅近くの高台に避難した。背後地が山であるため、地形的に高台への避難が容易であった。
- ・一旦各自で高台に集まり、それから町内会長、消防、民生委員等の誘導で荒川集会所へ移動した。
- ・国道・県道等の主要道路が被災を免れたため、高台へ車で移動する方が多かった。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・町内会では、自主的に各自宅近くの高台の避難場所8か所を決め、市の指定避難場所から遠い地域の住民でも避難できるようにし、平成22年2月の町内会総会等で周知を図った。
- ・平成22年3月と翌23年3月に実施した避難訓練では、各避難場所に責任者を配置するという取り組みも行った。その結果、避難者数が2倍以上に増えた。
- ・自主防災組織を平成9年2月に設置した。テント、毛布、小型発電機等の防災機資材を備え付けていた。
- ・従来から災害時にはおにぎりなどの炊き出しを行っていた。自主防災部会に給食給水班を設けていた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・毛布等の備蓄があったことや、おにぎりの炊き出しなど緊急の対応が出来た。
- ・備え付けの発電機は使用訓練をしていなかったため初期で使用できなかった。

C. その他

(1) 防災無線(聞こえ方・課題など)

- ・防災無線は聞こえたが、放送内容から避難の緊急性、必要性を感じなかった。
- ・荒川の範囲が広いため、全ての地域には聞こえなかった。

(2) その他(避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など)

- ・過去の津波の浸水域等の言い伝えはあったが、今回はここまで来ないだろうとの思い込みから避難行動を鈍らせる結果となった。
- ・荒川水門が未完成のため、波の襲来が速かった。
- ・被害が甚大で広い地域内での情報伝達が困難であり、活動も制限された。

2) 地域懇談会における証言

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

4. 地域の避難実態(根拠資料)

4.4 唐丹地区 (5) 荒川地区(荒川・下荒川)

[B. 下荒川]

1) 補足調査における証言

2) 地域懇談会における証言

遠藤幸徳さん

- ・昔は“家”というのを大事にしていたから、「家を途絶えさせないために親子であろうとてんでに逃げる」という話(てんでんこ)を聞かされていた。

川原清文さん

- ・「仕方ないな」という気持ちでも、地域懇談会等に参加し、皆の話を聞いて知識を身につけることが、姿勢を身につけることにつながるのではないかなと思う。なので、大勢の方に来てもらえる方法を考えなければならない。
- ・荒川では、東日本大震災の2年前までは2箇所の指定避難場所が設けられていたが、多くの住民にとって遠い場所だったので、東日本大震災の2年前に自治会独自に決めて避難場所を11箇所に増やした。その結果、避難訓練の参加者が倍増したという効果もあった。
- ・自治会独自に整備した避難場所のうち、東日本大震災の津波で浸水した場所もあるけれど、二度逃げできるような場所であったため、人的被害は受けなかった。
- ・避難訓練では、市で指定されている場所だけではないので、自治会が各避難場所に張り付いて参加者を把握していた。

池田盛子さん

- ・自宅前に海拔18mの標識があるが、3メートルや6メートルの警報と聞いていたら、ここまで津波なんて来るはずないと思ってしまう。情報に流されてしまう。
- ・地形によっては津波が回ったり跳ね返ったりして複雑な動きになるため予測が本当に難しい。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

1457-03 唐丹町下荒川 女性 50歳代

- ・避難時の様子(外出先、車帰宅、避難)
- ・被災の感想(すぐに避難すべき)

あの日、私は自宅にいなかった。高齢者と不自由な主人のことを思い、真っ先に車で家に走った。幸い、渋滞にも遭わずに戻れた。自宅は高台にあるので、ちょっとは安心したが、入ってくる波を見た時、恐怖を感じ、すぐ裏の山に4人で避難した。落ち着いて山から降りると、家だけは残っていた。祖母は、消防の方に背負ってもらって集会所へ避難させてもらった。私たちは一晩、山の中で過ごした。

命の分かれ目は、「大丈夫と思った人」と、「高い所へ一刻も早く逃げようと思った人」の意識の違いだと思っています。とにかくも自然を甘く見るのではなく、地震→津波と考えて、高台へ逃げるべきです。絶対に引き返すことのないように。そして持ち出す物を常に備えておくべきだと感じています。

2375-01 唐丹町下荒川 男性 60歳代

- ・被災前の意識(ここまで来ない)
- ・避難時の様子(自宅、津波想起、経済被害軽減、避難、要援護者支援、避難先から帰宅)

明治の津波で津波に流されていない場所に家が建っていたので、こんな大津波が来るとは余り思っていませんでした。

地震の後、「津波が来る」と思い、黒毛和牛5頭を高台に移し、トラクターも高台へ移動した。次に、母親とおじを家の後ろの高台に避難させ、自家用車を高台に移動してから、家に帰ったら、道路上に波が来てました。それから間もなくして、波がどんどん高くなり、家が浮かんで山の方へ流れて行きまし

た。その後、引き波で一部を残して見えなくなりました。牛2頭死亡、農業機械一式流れてしまいました。

4. 地域の避難実態 (根拠資料)

4.4 唐丹地区 (6) 大石地区 (大石・向・屋形)

A. 住民の避難行動

(1) 避難誘導 (どのような方がどのような避難誘導、呼び掛けを行ったのか)

- ・多くの住民が互いに協力しあい、体が不自由な方を車で高台に移動した。車椅子のまま避難したり、あるいは背負って避難した。
- ・地震後、消防団員は消防車を林業センター付近に下ろして、海の様子を見ていた。その後、高台にある消防屯所まで移動した。

(2) 亡くなった方の避難行動 (可能な限り把握できる行動、逃げ遅れた原因)

- ・犠牲者なし。

(3) 主な避難行動の状況 (地域全体の避難行動を踏まえた内容・特徴的な事項)

- ・震災時、漁が休みであったため、海に出て作業している住民はいなかった。漁港では、若布の刈取・ボイル作業を行っており、一部の住民は海の近くにいた。
- ・地域の住家は、海に向かった傾斜地に段々の石垣の上に築かれており、地形上、津波が平地のように急激に襲ってくる状況にはなかった。海の様子を確認しながら避難した。
- ・体が不自由な方で家族と同居していた方がいたが、まさかここまで津波は来ないだろうとの思い込みがあり、避難しなかった。津波が襲来する直前、住民が危機一髪、車で救護した。
- ・高台に駐車場や空地があり、住民の多くは車で避難した。

B. 震災以前の備え

(1) 地震・津波に備え、地域ではどのようなことに取り組んできたのか。

(自主防災組織の設置状況・避難訓練の実施状況・避難する時の取り決め など)

- ・3月3日の避難訓練では消防、町内会を中心に参加を呼びかけ、多くの住民が参加していた。

(2) 今回の震災でこれまでの「備え」は役に立ったのか。(良かった点・課題 など)

- ・備蓄していたものは特になかった。

C. その他

(1) 防災無線 (聞こえ方・課題など)

- ・予想される津波の高さが3mであるという情報で安心してしまい、あらかじめ甚大な被害を予想できなかった。無線は途中で聞こえなくなった。

(2) その他 (避難に関する地域の言い伝え・水門の閉鎖状況・避難行動に関係する地域の主な施設など)

- ・明治三陸津波・昭和三陸津波の話を知っており、津波に対する危機感があった。多くの住民が、少しでも高い場所に逃げるという意識を持っていた。
- ・大きな地震が来れば津波が襲来するという認識はあった。

3) 釜石市民アンケート、未来へのメッセージにおける証言

9907-00 唐丹町向 70歳代

・避難時の様子 (仕事、3m安心、家族様子見、車避難、九死一生)

・被災の感想 (反省)

当日、私は明日の若布刈りの準備をするために海岸に向かっており、岸壁に着いた時に地震を感じました。車を止めても揺れが大きいため海に落ちそうになりました。唐丹湾を見渡すと、岩場から石と土が落ちて土煙が上がっており、今まで見た事のない情景でした。「これはただごとでない」と直感しました。すぐにラジオのスイッチを入れると、大津波警報が出ました。岩手県は3m以上、宮城県は6m以上でした。釜石市の防災無線も「岩手県は3m以上の大津波が来るので避難するように」との放送でした。3m以上の津波と聞いて、一時安心したのは事実です。海岸のトラックを高台にある駐車場に移動してから店に行きました。足の不自由な妻に「大丈夫か？」と声をかけて、「テレビは？」と聞いたら、「停電で映らない」と話しました。その時も防災無線の放送は前と同じく「3m以上の津波が来る」との放送でした。その放送を信じて、幾らかでも自宅が高い所にあるので外に出ました。その時の時刻は15時20分でした。旧避難所に行って海を見ました。大石は唐丹湾の南側にあるため、大きな波にはなりませんでした。水位がぐんぐんと上がってきました。海岸の倉庫が水没した

のを見て、「これは駄目だ」と思って、家に戻りました。妻を乗せて車を発進した時に、店のサッシが壊れる音を耳にしました。

あの時、なぜ中央からの正確な震度と、大きく訂正された 10m 以上の津波が来ると放送されなかったのか、悔しく感じてなりません。今、家を流されて、仮設に入って思うのは、放送を信じて行動をとった自分の浅はかな態度を反省しています。大きな地震が来た時は大切な物を持って、高台に避難するように、子どもたちに伝えたいと思います。この地震(津波)で死亡した甥・友人・知人等のご冥福を心からお祈りします。最後に、防災無線の放送は中央からの正確な声を、早急に正確に市民に伝えてほしいと心から願います。

